

---

# 涙と蝶

桜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

涙と蝶

### 【Nコード】

N9922T

### 【作者名】

桜

### 【あらすじ】

エルケの大切な場所だった村、ゼークトはビューローに滅ぼされてしまった。捕虜として連れて行かれた先から必死に逃げ出したエルケは、死ぬ寸前で訳ありの商人たちと出会う。男装し名前も偽って始めた旅はいつしか、大きな政治の局面を揺るがす事になり、出会った人間と絆を結んで行くのだが……

『人魚は恋をしました 初めての恋でした』

ブログでの連載を転載中です。毎日一話、連続更新中。

恋愛値は4章まで低め、5章から少し増えますが恋愛主導ではありません。

「エルケ、あなたの笑顔にはきつと魔力があるに違いないわ」  
幼い頃、姉が褒めてくれたそんな言葉をエルケは思い出した。

(……最後に笑ったのは、いつだったっけ……?)  
思い出せない程、ずっと昔のことに思えてくる。

エルケは強張ってきた腕や背中を丸め、ふらつく体を立て直そうと奥歯を食い縛った。

足元すら良く見えない。今日は静かで、どこか気味の悪い月夜だ。  
(……逃げなくちゃ……! 逃げ通さなくちゃいけない……!)

強迫にも似たそんな声に急かされながら、エルケは必死に煉瓦造りの街並みを裸足を煉瓦に叩きつけ、駆け抜ける。

雲間に見え隠れする月灯りは、痩せて細くみすばらしいエルケの体を辛うじて隠してくれた。

疲れで今にも立ち止ってしまいそうな足。

そんなエルケの足指付け根に小石の欠片が刺さる。

「くうっ……!」

小さく叫びそうになるのを耐えながらも走る速度を緩めないまま天を仰ぎ、また奥歯を噛み締めた。

涙が右上頬と耳を辿り、一筋後ろに流れてから、下へと零れ落ちていく。

(……苦しい……! 息苦しいよ……!)

五月蠅く胸の奥で何かが騒いでいる。

段々早くなっていく動悸。長時間走ったせいで、脇腹に痛みが来ている。呼吸もままならない。

床を拭く雑巾よりもっとカビで汚れ、汗にまみれた異臭の立ち上る服の心臓辺りをエルケは右手で握り締めようとする。と、途端に痛みが走った。

背中にある傷で引き攣れた皮が引つ張られる嫌な感覚に、エルケ

は眉を寄せる。

一度、二度。三度目か、転びそうになった辺りからエルケはつまりいた数を数えるのは止めた。

もつと早く、もつと遠くへ。焦る心とは裏腹にろくに運動らしい運動をしていない貧弱な足はもつれ、僅かな煉瓦の段差にも爪先を取られてしまうのだ。

「……………」

何とか意地ですつと転ぶのを耐えていたというのに、とうとう煉瓦の割れと僅かな欠けに足を取られ、体が宙を浮く。

(頭と……顔だけは何とか……！)

派手に転がった体でも咄嗟に体を丸まらせて守ると、剥き出しになった膝、肘、肩を強打する。

堅い煉瓦に、思いつきり僅かに出た頬を擦った。

煉瓦が耳を引き摺りながら、通過する嫌な鈍い音を聞く。

頭を下に尻を上にという奇妙な格好となって、民家の壁に当たるとやっと転がり回ったエルケの動きは止まった。

いくら頑丈を誇る煉瓦造りの家とはいえ、これだけ思いつきり壁にぶち当たってしまえば中で眠っているだろう誰かは起きてしまうかもしれない。

そう思ったエルケの反応は素早かった。

(いけない……！ 隠れなくちゃ！)

エルケはその妙な恰好から慌てて飛び上がり、這いながら窓枠の下に近寄った。傷だらけの体をより小さくして息を潜める。

幼い頃に姉とよく遊んだ下手な猫の鳴き真似は無駄な足掻きとなるだろうから、何もせず口を両手の平で押さえた。

指が、体が、震えている。

ただがたがたと体を揺らし、目を硬く瞑り蹲った。

(早くこの街から逃げ切りたい……！)

呼吸を止め、祈った。今現在エルケにとって、この生きている証すらすら邪魔で仕方が無いのだ。

口元を覆ったせいだ。体の中から出てくるとは思えない程、醜悪で鼻を衝く臭いに気付く。

エルケは抱えた膝から流れ出ているどろりとした体液を見て、しやくりあげているかの様な小さい呼吸をってしまった。鼻が犬の様にすすすんと短く二度鳴る。

(……………どうして……………どうしてこんな酷い事になっているんだろ……………?)

エルケが心の中で問い掛けてみても、誰も答えはしないのだから栓無き事だ。

夜の闇は深く、しゃがみ込むエルケを咎める人間はいなかった。それが今のエルケには幸運だった。

壁にぶつかつた激しい衝撃に文句の声は響かず、沈黙は流れる。

気付かなかつたのか、それともこの家の者達は深い眠りについてしまっているのか。

頭上の窓枠からは誰も苦情を申し出る様子も無く、夜も暮れた街中には不審者であるエルケを連行する筈の警備兵もいない。

夜明け寸前の街は花祭りと呼ばれる短い春を祝うささやかな祭りを終えたばかりだ。

浮かれた気分と安い酒の臭いを少し残して、どっぷりと眠りの世界に入ってしまった。いた。

あちこち欠けた煉瓦の敷き詰められた路地には、割れた酒瓶がいくつも転がっている。

その上を似つかわしくな程可憐な花弁がはらはらと散り、申し訳程度に見苦しい酒宴の跡を隠してくれている。

月灯りを見上げてても高い煉瓦造りの家々に囲まれた路地では未だ暗く、ベタ塗りされた闇色の空が見えるだけだった。

「……………よ、かつた……………」

小さく呟き、立ち上がる。

痛むあちこちの体に気付かない振りして、エルケは一步足を前に出した。それでも、体は雄弁だ。みしり、膝などの節々が悲鳴を上

げる。

花咲く春とは言えど、夜明け前の底冷えする。その所為で、エルケの膝から下の感覚は無いに等しい。

寒さがそのまま膝から上を駆け登る。

(この寒さが、体と心の痛みも一緒に消し去ってくれたらいいのに……！)

何もかもを忘れた筈の心にまた火が灯りそうになるのを、エルケは走りだしながら必死に耐える。

踵の痛みでその上書きしてしまうかの様に、剥き出しの踵を強く煉瓦に叩き付けまた夜の中を駆け出した。

これ程走り、どれだけ離れたとしてもまだ足りない様な気がしていた。

馬と兵士が出てきたらすぐに見つけられてしまふに違いない、そんな予感と恐怖が心をどんどん侵していく。

好機はたった今回の一度きりだった。

長い間、屈辱と恥辱に耐え、ただひたすらに待ち続けた好機は突然今日、訪れたのだ。この好機を生かさねば、連れ戻されるどころか次は命すら危ういだろう。エルケは迷わず逃げ出した。

額から鼻を辿って唇に流れ込む塩辛い汗を、エルケは手の甲に巻き付けた汚物と汗が染み込み褐色になった布で拭う。

しっかりと結んであったそれは汗に滲んだ手の甲を滑り、隠していた筈の傷跡を露わにさせた。

エルケの手の甲と背中に残るのは烙印だ。

まだ布を巻き付け隠すことの出来る手の甲の小さな烙印とは異なり、背中に押された物は屈辱的にも所有者を判別するための牛の烙印だった。

傷付けられたのはもう結構前になるというのに未だ背中への傷は疼き、エルケはその時を思い出し悪夢を見る夜も多い。

頑丈に何度も鍵の付いた扉と何人も監視の目がある城は祭りの浮かれ様に少し羽目を外し、今日幾つもの失敗を犯した。

例えば牢の傍に置かれた箒とか、例えば酒瓶を握り締めたまま眠ってしまっただけもとは違う見張りとか。珍しい食材を売りに来た商人達が置いて行った荷車も、しこたま酒を飲み下働き女の部屋できつと夜を明かしてしまっただけ若い兵士が脱ぎ捨てていった祭りの仮装も。

全てはエルケの味方をしてきているかのように進んだのだ。

(……きつと、それは神の思し召しだったんだ……！)

エルケは思っていた。

振り返ると既に城は遠く、エルケは町の外れにまで辿りついていった様だ。

もうどれくらい走ったのか、食事もなくに取っついていなかった為年の割には細く筋肉の欠片も無い足は、たった数本の草にまでも足を取られる始末だ。

あれほど暗かった空は森の向こうから少しずつ白んで来ていて、もうあと数刻もすると農作業を始める者達は起き始めるのだろう。

そうすると、エルケの尋常らしからぬ服装と様相では兵士に通告されてもおかしくはない。

(……少し休んだ方がいいかな……？ また暗くなったら走ればいいよね……？)

エルケはふらつく足に任せ、畑と言うにはお粗末過ぎる荒地の端に建った崩れかけの小屋の扉に背中を預け、隙間から中を覗き込んだ。

勿論、こんな襤褸小屋には誰もいない。

カビと腐った水の臭い。

小屋の入口付近にある大きなかめには深緑色の水が縁一杯に湛えられ、零れ落ちた水が小屋入口に敷かれた藁を腐らせている。申し訳程度にある小さな窓には薄い板が三枚打ち付けられ、小屋の中は暗くどこか湿っぽい。

「こんな所に……誰も入って来ないか……」

これだけ臭く汚い場所ならばきつと覗行ともしないだろう。



エルケは一応用心して、ぼろ雑巾の様な服がより汚れるのも気にせず大きなかめの真横にある影の腐りかけた藁の辛うじてまだ少し乾いた所へ腰掛けた。

くたり、横のかめに体重を預けると火照った頬にかめの冷たさが心地いい。

目を閉じると、耳の奥に聞こえるかめから水の滴り落ちる音が故郷の小川を思い出させた。

(この酷い臭いも川底の泥の臭いだと思えば……まあ、いいかな……?)

エルケはまた鼻の奥をすんと鳴らすと、眠りの淵に意識を沈ませていった。

一瞬、残った意識の奥底で姉が微笑んでいる気がした。

「おい、坊主。起きろ」

目覚めの時は直ぐに訪れた。

焼印のある傷口の丁度上辺りの背中を何かの小突き、エルケは重くて仕方が無い脛をうつすらと僅かに開ける。

(……朝…が来たの……?)

崩れかけた板壁の向こうには、今日の天気の外に出ずとも知れる程の亀裂が出来ていた。

射し込む日差しはどこか新緑の色をしている。

今日は快晴なのだ。堂々と陽の下を歩く事が出来ない筈のエルケだったが、気持ちは晴れる気がして嬉しかった。

声の主の方を向く為に体を起こそうとして、思う様に手足が動かないことに気付く。

藁の敷き詰められた 但し腐りかけだ。床に右手を付いて頭を起こそうとしても、その全ての指には踏ん張りが利かなく、体ごと腐った水の中に飛沫をあげながら突っ込んでしまった。

頬から深緑色の臭い水に突っ込んだ所為で、鼻の穴へ一気に入って来る汚泥が痛く顔を少し顰めた。

(……臭い！ それに痛い……！)

エルケは吐きそうになりながらも小さく咽る。

微かに目を開けると、水は日射しを少し受け臭く濺んでいるのに綺麗な緑色をしていた。

どんなに顔を背けようとしても、臭くて苦しいのに体が動かないのだ。

(僕……一体どうしちゃったんだろう……?)

エルケは霞む意識の中、思った。

口と鼻には遠慮なくぬるりとしたものが忍び入って来る。辛く苦しい日々だったエルケでも味わった事のない程、酷い異臭と味が口

内に広がった。

もしエルケの体が今自由になるのなら、すぐに腰を折ってきつと何度も嘔吐しているに違いない。それでもそんな力すら今は残されていないのだ。

鼻も塞がれ辛うじて残された唇の端で短く息を吸うと、隙間風の様なもの悲しい音がした。

(……苦しい、よ)

ひゅるり、と鳴く。

「何だ、動けないってか」

心底面倒臭そうな声がどこかで聞こえた。

「おい。生きてるか」

しかし不思議とその声の主は、これだけ汚れて異臭を放つエルケの風貌には触れようとはしなかった。エルケが生きているというそれだけを確認しようとしてくれていた様子だ。

だが、エルケには生きているのだと声を出すことも出来ない。辛うじて僅かに開いた瞼も少しずつ閉じて行こうとしてしまう。

小屋のすぐ近くで馬が鼻息荒く蹄を蹴っているのが聞こえ、エルケは見えない声の主が兵士では無い事を強く神に祈った。

(……お願い。兵士にだけは渡さないで……！ あのところには戻りたくはないんだ……姉さんの所に帰りたいんだ……！)

小屋の外にるのが兵士ならば、エルケはそのまま再び城に連れ戻されるのだろう。

そして一生を牢の中で過ごし、訪れる死の足音に怯え、二度と戻ることの叶わぬ郷愁に心を囚われながらエルケは短い生涯を終えるのだ。

泥の中に落ちた烙印のある右手の爪がこの場から離れるのを拒絶し、力無く腐った水溜まりの中を掻いた。

嫌な感触と共に、長く伸び割れた爪の中に何かが入り込んで来る。腐った水を含んで甲に巻き付いた布切れが落ち、隠されていた手の甲の烙印が露わになっていた。

(……見ないで……！ 僕を放っておいて……お願い)  
声の主はもしかして烙印に気付いたのだろうか。突っ伏したエルケの耳に、頑丈な靴が腐った床を踏みつけながら小屋を出ていく音が聞こえた。

乱暴に開けた割に壊れることなくゆっくりと閉じていった小屋の扉が外の春風を伴い、エルケの額に垂れた一筋の前髪を払う。

こんな汚らしい場所に転がっていても、流れてくる風は心地よく誰しもに優しい。

(姉さん……僕は……もういいよね？)

すん、と鼻が鳴った。悲しくなりながらも、エルケはこれでいいのだと自分に思い込ませた。

鼻の奥が熱くなるのを感じながら、今の声の主に自尊心無く無様に命乞いをする程残されていなかった自分の体力を神に感謝する。

きっとこのままエルケが汚泥の中で息絶えるのだとしても、姉は城で死を迎えるよりもエルケらしいと褒めてくれるだろう。エルケはそう信じたかった。

これが運命なのだ。神が導いたエルケの終末なのだ。

ただ姉の所へ戻る事が出来なかった無念と、これから行くであろう神の御許に一人向かう恐怖心がエルケの胸を締め付ける。

頬を熱いものが流れた。

これだけ咽喉は水を欲しているのにも拘わらず、それは絶え間なく一粒では無く何粒もエルケの頬を流れていく。

すん、とまた鼻が鳴った。

もう一度瞼を開ける事も叶わずエルケは辛うじて残された烙印された手の指で汚泥を掻き、せめて拳を握り締めようとした。

(悲しいよ……それに怖い。でも苦しいんだ。でもそれよりもっと……姉さんの所に辿りつけないで悔しい……)

すん、と小さく鼻が鳴る。

敢えて意識を手離そうと全身の力を抜いたエルケの顔に、再び新緑の匂い混ざる風が当たった。

「……つて、おい！ 死んでんじゃねえぞ」

同時に激しい衝突音、木がひしゃげ悲鳴の上げる音。乱暴な靴音は先程の声の主の様だった。

エルケは戻って来てくれて嬉しいとも、またやって来て怖いとも思う程にも頭が動いていない。ただ返事も出来ず、すん、と鼻を鳴らした。

エルケの上に何か大きい物が覆い被さると、頭から足先まで全てをそれが包んでいく。

汚泥と腐った水とエルケの間に何か硬いものが入った気がした。

ずるり、聞くのもおぞましい音が聞こえ、水が滴る音がそれに続く。

歪むのは、体。浮き上がる、体。

抱き上げられたのだ、エルケにも直ぐに分かった。

「おえ、臭えな」

先ほどよりもずっと近付いた声は、エルケの耳近くで面白くもなさそうに短く言った。

小さく咳込み、エルケを包んでいる布　だと感触で認識できた。

もう一度足先まで丁寧に巻き付け、かなり頑丈な造りらしい靴で小屋の扉を蹴り付けたようだ。

蹴り付けられた可哀想な檻籠小屋の扉は流石に何度目ともなるとその寿命を終えたらしく、小屋の元を離れ白日の下に埃を撒き散らせながら吹っ飛んだ。

小屋の脇でまだ控えていたらしい馬がその物音に興奮したらしく、激しい鼻息と蹄の音も聞こえる。

(目の向こう側が……白くて、熱い……)

目を閉じている筈なのに、久し振りに感じた日の光は瞼に隠されたエルケの目の玉を焼き付けた。

風が鼻を撥り、花祭りに使われる今の時期は満開な花々の匂いを運んでくる。

何処に運ぼうとしているのか。最早、声の主が兵士であるのかも

と思うのも忘れ、エルケはただ何とか残った聴覚のみを駆使して探っていた。

腕も体もぴくりともしない。

もう少して天に召されるこの襤褸雑巾のような身体ならそんなに長くは持たないのだろうと、エルケは自棄になった。

全身を脱力させたエルケのそんな体を抱きかかえたままで、声の主は馬に乗ろうとしている。

「おい、我慢しろ。後で洗ってやるって」

強烈な異臭を立ち昇らせているエルケを背に乗せるのは嫌なのだと、持ち主に絶対服従をしていないらしい馬は必死に反抗しているようだ。

エルケの体が何度も上下に動くのは、力の抜けた体を抱いたまま手綱を引いているのか。

「悪いな」

乱暴にそれでも少し強引にエルケを腕に抱いたまま馬の背に乗り上がったらしく、声は少し申し訳なさそうに言った。

鼻息荒く馬がそれに答えた。全く、仕方のない奴だ。そう言うてるかのようにだった。

大陸は今病んでいた。

疲弊した王都から主権を奪還すべく、たび重なる血を血で拭う戦争があちこちで起きている。

幾つもの失われた都市や街。

焼かれた田畑。

失われた家族。

街道を通る軍列は、まるで一人一人が領主の如く、悠々と胸を張り威張りながら威嚇して戦場に赴くのだ。

何処までも澄み通る空と青々とした山々は斧や棍棒それに槍を持つ軍隊を飲み込み、次は何処の農村を焼き払い殺し奪おうというのか。

誰しもが変わらない毎日を望み過ぎしながら、誰しもがその小競り合いに巻き込まれないようにと礼拝堂で祈っていた。

病んでいる大陸では、戦争の大義名分はいくらでもある。

例えば領境の確立。

先日小競り合いが起きた銀山が発見された山脈麓は、王都から伯の称号を受けた貴族達が権利を主張し、曖昧だった領境を主張するために起きた。

貴族達の間では、しばしば家族間のいざこざも戦争で解決されることがあるのだ。

相続の権利を主張する貴族。

ただひたすらに領地を広げようとする貪欲な領主。

異端を排除しようとする躍起になる貴族。

戦争の正当性を主張し、彼らは時には楽しみながら破壊活動に勤しんだ。

一方巻き込まれた農民や領民は、それでも壊された田畑や家を見ていつまでも嘆いている訳にはいかなかった。

泣き叫び苦しみながらも、汚れ傷ついた指でまた壊されたものと同じように作り上げていくのだ。

皮肉にもとめどない戦争は行き場のない商人の懐を癒し、商人達の地位をゆるぎなくさせていった。

各地に散らばる職人たちの間を飛び回り、客が求めるものを手に入れる。

都市などの地域を決めて商売をする小売商人、交易を取り纏め遠隔地での商売を可能とした交易商人。

数多い彼らの中には決められた顧客を持ち、希少価値のある特殊な商品を取り扱う数少ない商人も存在していた。

希少価値のあるものを求め各地の商人や市場を転々とし、地位が高く、金に糸目を付けられない貴族を相手にする商人は彼らの間では隠語で『Schmetterling（蝶）』と呼ばれる。

彼らは価値のあるものがあれば、激しく燃えさかる炎の中にすら嬉々として飛び込んで行くのだ。

少しは名の知れた職人ならば誰でも知っているだろう。蝶に全てを見せてしまうのは命取りだと。

彼らに全てを見せてしまうと、貪欲に蜜を吸い尽くし花は枯れてしまうのだから。

花が枯れてしまえば、誰も見向きもしなくなるのだから。

だから蝶は存在を隠し、蜜を求め花ににじり寄るのだ。

次の花を枯らす為に。

「クルトは見つかったの？ まさか子作り中だったんじゃないでしょうね。あの人、見境なくあちこちに手を出すから………たく、誰に似たんだか」

「これ、見つけてきた」

突拍子もない程にかん高い女の声が延々と文句を言い続ける間を区切る様に、エルケは床に包まれた布ごと転がされた。



激しい衝突音と衝撃。

未だ半分は夢うつつだった薄暗闇の頭と肩が思い切り床に当たると、嫌でも正気と感覚を取り戻す。

ぼんやりと見上げた天井は低く、城では無く民家だった事に胸を撫で下ろした。

(僕……生きてるの……？ それとも……夢……？)

見慣れた白壁は、この辺りの地域ではよく見られる造りの内装だ。油の染み込んだ窓枠と余り綺麗とは言えないカーテンは、結構前からこの家で生活が営まれていたことを示している。

(お腹……空いたなあ……)

鼻を擽るのは、どこかに掛かった鍋の中身の匂いだらうか。

忘れていた空腹が突然感覚として甦り、乾いていた箸のエルケの口内一杯に唾が溜まった。

馬の上で声の主は汚れ臭うエルケの体を布越しとはいえ、しっかりと胸に抱いてくれた。

疲れと空腹で意識を失ったエルケは誰とも知れぬ腕の中ですっかり安堵し、気付くところまで連れて来られてしまったのだ。

僅かに意識を取り戻したのは、エルケが抱き上げられたままで声の主が馬から降りる時。

まるで荷物のように肩に乗せられたエルケは、馬から飛び降りる際に声の主の肩に腹を思いつきりめり込ませてしまったらしい。

エルケは残り少ない腹の息を全部噴き出して、やっと死の淵から目覚めた。

正直、かなりの衝撃と痛みだった。丁寧や慎重という言葉はこの人間の脳には無い言葉だ。

男はそのままエルケを肩に乗せたまま扉を蹴り開け、荷物のように無造作に床へ転がした。

眩しさで薄くしか開かない瞼でも、見える人影は二人。

赤茶けた長い髪を後ろに束ね上げにまだ幼さを残す少女と、軽くうねる髪を無造作に括り足元のエルケを 持ってきた手前仕方な

くの様だ。しかし全く興味もなさそうに、見下ろしている男。くるくると回る少女の大きな瞳は初夏の空の色だ。

開く唇は木の実の様に赤くふつくらと膨らんでいる。泳いでいた視線が合えば、少女は嬉しそうに満面の笑みを浮かべた。

赤い木の実の唇が、開く。

「あら」

彼女は怯えるエルケを見定めようとしているのか、異臭にもともせず寝転んだままのエルケを覗き込みしゃがみ込んだ。

木綿のスカートは新緑色だ。

明るい新芽の色が透き通る青い瞳の彼女にとても似合っている。対するエルケは汚物と泥に塗れた見るにも絶えない姿だ。

（あ、あんまり……こんな酷い姿を見ないで欲しいのに……）

思わず、遠慮なく見詰め返してくる少女の視線から目を背けた。それでも彼女は視線を逸らそうとはしない。

すると、どこか遠くで鍋が噴いている音が聞こえてきた。やはり何かを調理中だったらしい。

「あらあら？」

首を傾げ、彼女はまだ見詰める。

エルケが少し気恥ずかしくなった所で少女はスカートの裾を派手に翻し、但し中は見えなかった。立ち上がると男に向き直った。

「……ヤン。貴方、臭いわね」

少女は無表情で言う。

「……俺か……？」

男は何故かそう答えた。

（違うよ……臭いのは明らかに僕でしょ）

エルケは心の中で思う。

「……盥にお湯を張って来るわ。ヤンは馬を洗って、ついでに貴方の体も『水』で洗って来て」

「……分かった」

どうやらこれから用意される湯はヤンと呼ばれた男の為の物では

無いのだ。

馬のついでに洗え、と言われた男はその言葉の意味を深く考えもしなかったのか、言い返すことも無く再び扉を蹴り開け外へ出て行った。

次いで遠くから聞こえる馬の嘶き、どうやらまた臭いと抗議されている様だ。

(なんか……ごめんなさい……)

とんだとぼつちりで、エルケは申し訳なくなった。

ブラウスの袖を腕まくりし、少女は再びエルケの脇にしゃがみ込む。

くるくるとした瞳には好奇心では無く慈愛を宿し、表情を見る限りどうやら幼く見えるだけで少女はエルケよりも年上の様だった。

汗か泥の所為で額に張り付いた前髪をその細い指で剥がされると、どうやら手の平でエルケの熱を測っているのだ。

頬と耳が恥ずかしさで熱くなった。

「私の名前はカヤ。薄情な年中発情犬よりもずっとお世話のし甲斐があるわね」

聞き間違えたかとも思われる物騒な言葉を、エルケは無意識に聞き流す。

(……は？ 発情……?)

覚悟しておいてよ、と謎な言葉を吐きながらカヤは立ち上がった。

エルケに巻き付いたままの汚泥が染み込んだ布を、両手で掴みカヤは一気に引き上げる。

(……うわっ！ 乱暴だよ！)

エルケが布から転がり落ちた。

しこたま痛んだ体を床に再び強打して、エルケはその布を見上げる。

するとカヤの身長よりも高く持ち上げられたただの布だとエルケが思っていたそれは、美しく野山と小川に無数の花が織り上げられた素晴らしく繊細な模様の絨緞だった。

エルケはその絨緞から引きずり出されたまま、床に転がり目を大きく見張った。

息を飲み先程まで汚泥に浸かっていたことも忘れ、口内に堪ったままだった唾を飲み込む。

「……っ！」

「あら？ 大丈夫？」

痛みにも似た強烈な臭いをさせた味で吐き気をもよおした。

エルケは床を嘔吐したものでこれ以上汚さないよう、口元を自分の袖で覆う。

それでも、再びその絨緞を見上げるとその吐き気すら忘れてしまった。

(こんな宝物で……あの人は僕の体を覆ったんだ……)

その繊細な作品は決して死に掛けて汚泥塗れの人間を包んでいいものでは無く、むしろ途方もない金額で取引される芸術品だった。

決して高価なものに目利きが出来る訳ではないエルケだったが、それでもそれは十分高価なものだと直ぐに分かる。

(こんな……いつ死んでもおかしくない位の僕だったのに……)

申し訳なさで一杯になりながらも、もうどうでもいいと投遣りになつていた自分が実は生きたかった事に気付かされる。

感謝で一杯になつた温かい気持ちのエルケの横で聞こえた、地を這う低い声。

「あいつ、商売道具を使いやがって。覚えときなさいよ……！」

捨て台詞を吐きながら、カヤは女性の腕では重いであろう絨緞をものともせず巻き込んだ。

それをえいやと肩に担いだカヤは、その物騒な台詞を先程吐き捨てたとも思えない可憐で愛らしい笑みを浮かべる。

(聞き……間違い……だよな？ 僕……助かってよかったんだよね……？)

慈愛に満ちた表情。

「ん？ 何？」

カヤは絨緞を担いだまま首を傾げる。

そうだ、先程の声はきつと聞き間違いに違いない。エルケは自分に言い聞かせ、何でもないと弱々しく首を振った。

「お湯を奥の部屋に用意するから、体を洗いましょう」

顔を僅かに上げカヤの指差す先を見たエルケに、鈴の転がる少し高めの声でカヤは言う。

「大丈夫、綺麗にしてあげるから。私が」

エルケは思わず動かなかった筈の体を引き摺り、次は大きく首を振った。

「もう……遠慮しなくていいのよ？」

カヤの提案に、エルケは拒否の意を示す為もう一度大きく頭を振った。

乾いた髪先から？れた泥の欠片が、パラパラと粉になって肩へと落ちてくる。

古いとはいえ埃一つなく磨かれた床に落ちて、広がって行く泥砂は床を曇らせていった。

(……うわ……っ！ ただでさえ臭いのに、どんどん迷惑かけちゃうよ)

まだ上手く声を出せないエルケは立ったままのカヤを見上げると、汚してしまった事を謝るのに顔を床に擦り付けることしか出来ない。

擦り付けた額からざらりと音がした。

額にも、まだ何か汚れが付いているのだ。

「気にしないでいいのよ」

カヤはそんなエルケの姿を見ても細い首を傾げ、愛らしい顔をほころばせただけだ。背中から愛らしい花でも出て来そうな表情だった。

何とか一言でも言おうとして、咽喉に強く力を入れた。渴いた咽喉に走る灼熱感。何か話そうにもか細い吐息しか出てこない。

(そつだ……手は？)

左手で烙印のある右手の甲を掴めば、辛うじて布切れは何とか手の甲を覆っていた。

先程、襪履小屋で甲の布が外れたと思っていたのは気の所為だったらしい。少し安堵し、緊張し強張っていた指を外す。

どう伝えようか悩んでいるエルケを気遣う様に、カヤは慈愛に満ちた笑みのまま口を開いた。

「大丈夫、私は慣れているの。そうね、突起物とかは全く気にしないから」

(……それってその部分を凄く気にしてるってことだよな……こんな綺麗な人なのに、何か変な人だ……)

エルケは激しく怯え、踵で床を蹴り少しずつ後退しながら大きく首を振った。

もう砂が落ちてても今更だ。気にするのは止めた。

焼印を押された背中を誰かに見られることは避けたかったのだ。

エルケの手の甲に隠された烙印もそうだった。無闇やたらと誰かに見せつけるものじゃない。どんな問題を引き起こすか分かったものではない。

(隠さなくちゃ……！ あの焼印が見つかったら、僕は絶対に兵士に引き渡される)

あれだけ体中が弛緩し虫の息だったとは思えない程に、エルケは踵を忙しなく動かし出来るだけ遠くに逃げた。

然程大きくも無かった部屋の中では直ぐに壁にぶち当たってしまった。

エルケは部屋の出口をちらり、視線のみで確認した。

(……僕には……無理だ。今の状況では逃げられない)

逃げ出したくとも分が悪い。部屋の出口側にはカヤが立っていた。きつとかなり重いだろう絨緞を片腕で軽く持ったままのカヤを、エルケは不安げな視線で見上げる。

カヤは暫しの間、拳動不審なエルケを無言で見詰めていた。

程なくして耐えきれない様に横を向き、カヤは盛大に噴き出した。「……ぶっ……っ！ ごめんなさい、つい新鮮な反応が面白くて……！」

カヤの小さな肩が震えている。

エルケはその姿を呆然と見詰めた。

(……僕……もしかしてからかわれたの……?)

新緑色のスカートの真横に重い絨緞を下ろし 床に付いた時ず

どんという地響きをエルケは体を感じた。カヤはエルケが後ずさりした背中向こうにある質素な扉を開けた。

風が扉の隙間をすり抜ける。

風は少し埃っぽい。どうやらそこは余り扉を開かない部屋らしい。

背中をずらし覗き込むと扉向こうは小さな納戸だった。エルケの視界に、いくつか空の木箱と転がった瓶が見える。

光を透す程に薄いカーテンは僅かに開いた窓向こうから吹き込む風に煽られ、大きく翻っていた。

花の匂いと旨そうな匂い。

背中と腹が付いてしまいそうに薄いエルケの体から、緊張感無い腹の音が聞こえる。エルケは熱くなる耳を俯き髪で隠して、腹を手の平で押さえた。

(……聞こえたよね？ 恥ずかしいな……)

微笑むカヤは少し涙目になったままで言う。

「それだけ動ければ死にもしないでしょ？ お腹が空いて、気持ちが悪くなるだけなのよ。綺麗にしてらっしゃい、覗かないから」

エルケは自分の体を見下ろした。

汗と体脂で汚れた体。指の隙間には先程の汚い小屋が夢ではないという風に、緑色の何かがこびり付いている。

足指は泥とあちこちを傷付けた血で汚れ、何より体中が綺麗になりたいと悲鳴をあげている。

確かにエルケもこれだけ自分が動けるとは思いもしなかったのだ。先程まで死ぬのだと思っていたことが嘘のように、少し休めば姉の元へとまた走りだせるようなそんな予感もしていた。

(……本当に覗かれない……よね？)

不安そうに見上げたエルケの視線と合ったカヤのくるくる回る愛嬌のある瞳は、笑みを浮かべる。

「大丈夫よ。私は料理をしているから、ね？」

カヤはもう一度は頷いて見せた。



(どつちにしたって今はこの状態で逃げる訳にもいかないだし……  
……今だけは利用させて貰ってもいいよね……?)

這ったまま扉向こうに移動したエルケは、微笑むカヤの前で何度も向こうを覗き込みながら慎重に扉を閉めた。

小さな部屋にエルケ、ただ一人。

見慣れない部屋の割に何故か不安は感じなかった。故郷の家に、白壁や汚れた木の窓枠が似ているからかもしれない。

しゃがみ込んだまま何も無い部屋を見渡せば、強い風に煽られて床の空瓶がエルケの膝に向かって転がって来る。

ぼんやりと手を伸ばし覗き込んでみても、それはエルケの見たことが無い形をした瓶で酒の瓶なのか、それとも薬の瓶なのか。全く分からなかった。

(……どうしてこの人たちは助けてくれたんだろう……?)

薄汚い手の甲の布を掴み考える。

死にかけていたエルケを助けても、ヤンには何の得にもならないだろう。

もしかしたらむしろ綺麗にしてから兵士に突き出すつもりなのかもしれない。そうなのであれば、今ここで逃げ出してしまった方がいいのではないだろうか、と瓶を床に置きエルケはまだ自由利かない両足を見下ろした。

右足に力を入れてみる。

微かに浮き上がった足も思うようには動かなかった。このままでは逃げ出しても走ることは不可能だろう。

(もう少しだけはここにいて、足の治る頃合いを見て逃げてしまった方がいいかもしれない……)

エルケがそう考えていた時、開いた窓向こうから馬の嘶きが聞こえた。

次いで叫び声。

どうやら馬がヤンを水溜まりの中に突き倒したらしい。ことごとく信頼関係が希薄な主従なのだ。

エルケはぼんやりと窓から見える小さな空を見上げ、ずっと着たままだった臭く汚れた服に目を遣る。

(……汚いし、気持ち悪い)

次第に戻って来る正常な感覚は、この薄気味悪い服を脱ぎ捨ててしまいたいと訴えてくる。

もう元々が何色だったかなど分かる筈も無く、あちこちに何かの染みが広がっている服は乾いた筈なのに肌にまとわりつき張り付いていた。

爪を見れば足だけではなく手の指にも泥がこびり付いている。いくつかの指には欠けて半分しか残っていない爪もあった。

(……爪が？れてたんだ……気付かなかった……)

小さく呼吸をすると、エルケは思い切って両手指を服の裾に掛けた。

一気に脱いでしまおうという所で、扉が開く。

「着替え、持って来たんだけど」

(あ、危なかった……！ 本当にあとちょっとで持ち上げる所だったよ……！)

カヤが湯を張った盥を持って部屋の中に入ってくる。

言葉の通り飛び上がったエルケは、ほんの少し持ち上がりかけた服を直ぐに正した。

体を守る様にエルケが両腕で自分の体を抱くと、カヤが目の前に盥と簡素な服を一式置いてくれた。

決して華美でも上質でも無いけれど、それはとても清潔だった。

(……嬉しい。綺麗な服だ)

それに男物の小さな靴。

湯の横に置かれたのは、リンネルの体拭きと石鹸。

ときばきと用意を擦るカヤを呆然と見ていたエルケは、彼女が全ての準備を終え片手を上げながら部屋を出ていくまでその場から一歩どころか指一本すら動かさなかった。

今ここで逃げてしまつには綺麗な服と湯への欲望は強過ぎるし、

エルケの今の反応が剛力であるカヤの素早さに勝てるとも思えない。完全に閉まった扉をエルケは暫しの間黙って見詰め、本当にもう開かないのを再確認した。念のために部屋の隅に転がっていた空き箱を扉の前に置くと、少し気持ちが楽になった。

(あの人には何の重しにはならないだろうけど……)

エルケは人差し指と親指でベタつく服を摘み、目を瞑ると思いつつ脱ぐ。

脇腹に肋骨が見える。それを包む肉が無いのだ。

背中肩甲骨辺りに大きく残る焼印は、牛の生まれた年と所領を示す簡単な数字だ。人を人とも思わない畜生に向ける筈のおぞましき焼印。

人道にもとる所業は、傷が癒えた今でも残る傷跡の様に未だエルケの心に深い闇を落としている。

肉が焦げ、口から洩れた自分の物とは思えない程のおぞましい叫び声。思い出すだけでエルケは体が震えてきた。

腕と手首の細さには然程差は無い。全ての節々には皮の向こうにすぐ骨が見えた。

エルケは手を伸ばし、恐る恐る指を湯に浸けてみる。

指先に付いていた泥が融け、綺麗だった湯の中に流れ沈んでいった。疲れが指先から流れていくような気がして、瞼を閉じた。

(……姉さん……僕……)

湯の温かさに何かが込み上げてくる胸を押さえると、指には仄かに膨らんだ乳が当たった。

どんなに痩せたとしても、全ての肉が無くなることは無いのだ。

服を着てしまえば何とか隠せても、脱いでしまえば一目瞭然だ。

少年と間違われる程に体が薄くなり、女らしい殆どの物が消え失せたとしても男になれる訳ではない。突起物など、勿論ない。

エルケは女だった。

しかし、それはずっと隠されてきた。姉と離れた時からずっと、覚悟の上だった。

丁寧に体を洗い流せば直ぐに水は濁り、あっという間に盥の底は見えなくなった。

一つの固まりの様になった髪を洗うのが一番、苦勞させられた。解そうにも髪は大きな一つの固まりとなり解れないのだ。エルケは結局先程の空瓶を使い、潰しながら洗うことにした。

潰し、髪を崩してから瓶を使い湯を髪に掛ける。石鹼を直接擦り付け何度も洗った。

泥の向こうに隠された白い肌が見えてくる。

硬く鋭角的だった髪は解れその柔らかさを取り戻し、色も本来の色に戻った。

華やかな赤と金の混じる髪色はエルケが唯一姉と似ている場所だ。自慢だった。

臭いは一度では全て取り切れなかった。

限度を超えた既に泥水となった盥の中では、何を洗っても同じ臭いになってしまう。

エルケはリンネルの体拭きで隅々まで水気を取り去ると、揃えてくれた服を手早く　とは言っても起きあがれず転がりながらだが汗をかきながら、必死になって身に付けた。

広げて気が付いたが、やはり服もまた全て男ものだった。靴は小さいと思っていたのに、意外にも少し大きかった。

誰かが来た。

そう思うまもなく、足音がはつきりと聞こえて来る。

存在を潜める気が全く無いらしい、自己主張の激しい踵を打ち付ける軍靴の音だ。

何と無く誰が近付いてきたのか気付いて、盥の前で身支度を整えしやがみ込んだままだったエルケの背中側で扉が大きく開く。

「おい、飯が……」

既に乾いたエルケの赤金の髪がその風に煽られ、軽く浮き上がって落ちた。

扉を振り返ったエルケは余程可笑しな表情をしていたのだろうか。彼はエルケを見て一瞬足を止め、口を噤む。

（この人にはきつと扉を開ける前に声を掛けるとか、扉をノックするという気遣いをする気が無いんだろうな……）

ヤンは直ぐに気を取り直した。古く軋む床が悲鳴を上げる大きな足音が正面に回ってくる。

エルケはただ見上げることしか出来なかった。

背が高いのか。威圧感か。随分と大男に見える。見上げると首が痛くなった。

見下ろしてくるヤンの瞳は初夏の空の色をしたカヤの瞳よりももっと深く、暮れなずむ青だ。

長く伸びたままの前髪の間からあまり感情の読めない顔がこちらを向いている。それに無精ひげ。整った顔つきをしているのに、どこか華の無い顔だった。

外で馬と共に洗って来たのか、濡れたままの髪は括ることなく背中の下に下ろしている。

シャツの袖を捲り上げ、前もたらしなく腹の下、臍の辺りまで開いていた。

エルケには余り耐性の無い、筋肉質な胸と腹が見える。

(その、目の遣り場的な意味で……何かどこを見たらいいのかわからなくて気拙い……)

慌てて視線をシャツに移した。耳が熱くなる。

与えられた男物の服を着崩すことなくしつかり着込んでいたエルケは、その堅苦しい恰好が気になり少し襟元を引つ張り開けてみた。男性とは通常こういう着こなし方をすべきなのかもしれない。納得させるように小さく頷く。

ただ少々ヤンの着こなしは目に余るものがあつたが。

「飯は……食べそうか？」

(食べたいよ！)

自分が追われている事も忘れ緊張感無く即座に反応しかけたエルケは、そのまま前に突つ伏しそうになるのを耐える。

先程から空き過ぎた腹に申し訳ない程旨そうな匂いが扉向こうから流れ入って来るのに気付いていた。腹は猛烈に空いている。

とはいえ怪しいエルケを本気で匿い世話を焼いてくれるのかも判断に苦しむところだし、ろくに食事を取っていなかったエルケの腹に突然そんなものを流し込んでいいのかも分からない。

(……食べたい。凄く食べたいけれども)

考えるだけで零れてくる唾を飲み込んで、エルケは泣く泣く首を振った。

まだ彼らが信用出来るかどうかなど分からないのだ。

薬を入れていない、とは限らない。

「そうか」

言葉通りただ納得しただけの相槌を打つと、深緑色をした異臭漂う盥を軽々とヤンは肩に持ち上げた。

その中身を小さな窓から、一気に外へ捨てる。

日差し差し込む床に、盥から洩れた水滴の輪だけが残った。

臭く汚い緑色の滝　しかも少し粘り気もある。窓下で餌を啄ば

んでいたらしい数羽の小鳥が、激しい羽音を立て抗議しながら空に飛んで行った。

あの水を頭から被って、鳥達もとんだ被害者だ。

(ごめんね……臭かったよね……)

空の盥を床に転がし、空いたエルケの前にヤンはしゃがみ込んだ。ヤンをずつとめで追っていたエルケの視線の高さが合う。

誠実な瞳だ。彼のことは何も知らない筈なのに、そう思った。

「お前を売り物で巻いて、カヤに箒で叩かれた」

エルケはヤンの視線を微かに逸らし、首を傾げた。

(……箒で？ 凄い。彼女なら巻いた絨毯で殴りそうなものなのに) 脳裏を過る出会ったばかりの彼女に抱いてしまった物騒な先入観を、エルケは頭を振って揉み消す。

ヤンの話の内容は冗談らしく聞こえていても、彼の口調にふざけた色は感じられなかった。どうやら、本当に箒で叩かれたらしい。

(あの綺麗な絨緞が汚れた所為だよ……やっぱり売り物だったんだ……)

エルケは小さく頭を項垂れ、眉を寄せる。

声が出ないエルケが謝罪の意味で頭を小さく下げると、ヤンは僅かにも表情を変えることなく突然エルケの頭に大きな手の平を置いた。

ヤンはエルケを何歳だと思ってるのだろうか。それはまるで子供にする仕草だった。

手の重さでエルケの首が悲鳴を上げる。

「お前は気にしなくていい。俺が勝手にしたことだからな」

落ち込んでいるエルケに気を使っている慰めでは無い。本当にヤンはその絨緞を汚したことについてはどうでもいいらしい。

(でも……あれだけ精密な絨緞を廃棄処分にするのならば、一体どれだけの損失になるんだろう?)

気にしなくていいというヤンを見上げ　しゃがみ込んでいても十分エルケの視線より高い。申し訳なさで一杯になった。

何か謝罪の意を伝えたくともエルケの咽喉はまだ本調子ではない。声を絞り出し何とか話そうとも、潰れた咽喉が猛烈に痛むのだ。辛うじて声を出そうともしわがれた老婆の様な声でたどたどしく意味不明な言葉を話すことしか出来ないのであれば、今はまだ諦めた方がいい。

何か考え事をしている時の癖で、爪で引つ掻く手の甲に巻かれていた布は真新しい。流石に今まで使っていたものは勿論巻くことは出来なかった。

湯で体を洗う前に用意されたリンネルの布を先に裂いておき、着替えた後で丁寧に巻き付けたのだ。

なかなかしつくりいかず何度も巻き直したが、思ったよりもずつと綺麗に巻けている。当分の間はこれで安心だろう。

「馬鹿。何、恰好つけてんだか」

背中側の扉辺りに音もなくカヤが来ていた。

「俺が勝手にしたことだ、ははん」

小さな舌打ちの後で彼女は、ヤンの声真似をする 決して上手

とは言えないが非常に低い声だ。

カヤは足を踏みならし部屋の中に入ってきた。

向き合うヤンとエルケの間に割って入り、床に零れた汚れた水を手にした雑巾で拭う。

(……これって絶対にヤンを邪魔者扱いしている……よね?)

エルケの頭が、離れるヤンの腕に引つ張られ下に押し付けられた。エルケの見上げる正面のヤンの表情に僅かにも判別可能な不機嫌が混ざり、彼は小さく吐息つくとやっとエルケの頭から大きく重い手を下ろした。

苦しかった首が楽になり、一気に軽くなる。

立ち上がり一歩。

床を這い回るカヤに舌打ちされ、二歩三步とヤンがエルケから離れると、ようやく出来た隙間にカヤがしゃがみ込んだ。

カヤは、先程の新緑色のスカート上に愛らしい白のエプロンを付



けている。近くに寄った彼女から旨そうな煮込み料理の匂いがした。エルケの腹が鳴り響く。

膝の前に両手を付き、鼻先がくつつきそうな程顔を近付けられた。仰け反る暇は無い。

「自分で出来たのね、残念だわ」

残念だという割に、彼女は嬉しそうな表情をしていた。

間近で見たカヤの瞳はそれは綺麗で、エルケは呆然と見詰め返す。唇を早業で何かが掠め「まだ少し臭いわね」という吐息に似た声もエルケの唇に触れた。呆気に取られ彼女を見る。

悪戯っぽい笑みが視界一杯に広がっていた。

(……………今のつて……………様子を見ただけだよ……………ね?)

エルケは口元を隠すように深く俯いた。

「おい」

カヤの首筋を片手で掴んだヤンが、カヤをそのまま遠慮なく後ろに引き摺り倒し 女性に対する遠慮は微塵も感じられなかった。新緑色のスカートの中身を隠す事無く真後ろにカヤが転がる。

白い下着だった。

反射的に目を覆ったエルケの手の平に唇が触れる。

(……………今、もしかして……………この人僕にキスをした……………?)

転がせたヤンの軍靴をカヤは苛立ち紛れに拳で殴り付けた。

「ちよつと、女性に対する態度じゃないでしょそれは」

「……………お前もほぼ初対面の人間にする事じゃないだろう」

「……………細かい男」

彼女は歪んだ表情を変え、エルケに向き直る。

素性も知らない見知らぬ二人の視線が今、エルケの方を向いていた。

(……………あ、何か聞かれるのかもしれない……………)

途端に自分は城からの逃亡者であった事を思い出した。

思わず烙印のある手の甲を背中に隠し、視線を落ち着きなく彷徨わせる。

そんな行動が何かを隠している怪しさを思わせる事も知っていたけれど、でもそれを上手に隠せるほどエルケはまだ世間に慣れていなかった。

こんな時につい城でされた事を思い出してしまふ。

女なのだと気付かれていなかった分、汚されず体はまだまっさらなままだった。

それでも何度も殴られ蹴られ、意識を失うと申し訳程度の薬を投げ込まれ放置された。

幼いエルケはまだいい方だ。共に連れて来られた人間達は何処に行ったのかすらわからない。覚えているのは連れて行かれる時の叫びと抗い泣き狂う声だけだった。

もう嫌だ、と全てを諦め投げ出したのはつい先程のこと。

帰りたい、とそれでもただ今はそう思う。このまま死にたくはなかった。

エルケは姉に会いたかった。全てを懺悔し、泣いて謝罪したかった。

見上げたエルケの頬に涙が零れ落ちる。

(……このまま城の兵士に突き出されるのかな？ 折角ここまで逃げ通したのに……この優しそうに見える人たちも僕を突き出して、蔑んでる兵士からお金を貰うのかもしれない)

鼻がすん、と鳴る。

しゃくりあげる様にエルケの細い背中と肩が揺れた。

歪んだ視界で見上げるヤンはどこか暗い影を表情に浮かべ、目の前のカヤはあくまでも慈愛に満ちた笑みを浮かべていた。

仕方ないわねえ、とでも聞こえて来そうな表情だった。

そんな表情に泣きたくなる。

(もう……期待なんてしなくなかったのに……)

もし声が出て言い訳しようにも、こんな胡散臭い逃亡者の作り話等誰が信じてくれるのか。

男でも女でも無い様に見せかけた偽りのエルケの話を、誰が信じ

てくれるというのか。

ぼろり、落ちた涙が膝に零れ落ち借りたズボンの太腿を濡らした。  
一度落ちると涙は滝の様に流れてくる。

「……馬鹿ねえ」

カヤが言った。

親指でエルケの流れた涙を拭ってくれる。その言い方はまるで姉の様だ。

馬鹿ねえ、自信が持てず直ぐに自己嫌悪に陥ったエルケにいつも姉はそう言った。貴女は貴方、私は私でしょう？ 自分らしくありなさい。そう言っただ涙を少し乱暴に拭ってくれるのだ。

(……姉さま……会いたいよ)

エルケの頬を取り留めなく涙が零れ落ちる。

「この時代に訳ありなんてよくあることでしょうに」

この大陸は狂っている。狂った竜がさながら全てを飲み込む様に戦乱はとめどなく続いているのだ。

頬を伝う涙。巻き込まれた子供達はエルケと同じ様に途方に暮れ、街や村を浮浪者となって歩いていて。それを人身売買の市場で奴隷として売る。そんな事が黙認された時代。

まだ少し臭うエルケの薄い体をカヤは他意無く抱き締め、背中を柔らかく二度叩いた。

エルケが視線を窓向こうに向けると、こちらを見ようとしもないヤンの横に小鳥が一羽飛び入って来る。

少し濡れている床を小鳥は何かを探しながら啄ばみ、小さく鳴くとヤンの肩に飛び乗った。慣れているのだ。

「幸運な事にこちらも若干訳ありよ。同じ訳あり同士、仲良くしましよう？」

その隠している訳を告げずに、カヤは悪戯っぽく片目を閉じて見せた。

互いに腹の中を見せずにいようと云っているのだ。

(……他意のない善意だって……受け取っていいのかな)

涙をまた親指で乱暴に拭われ、エルケは目を強く瞑った。

向こうでぎしり、音がする。包み込んでいた温もりが離れていった。少し寂しく感じてしまう。

「ひとまず」

区切りを付ける様なカヤの声。エルケが目を開けるとヤンがこちらに歩み寄って来ていた。

何事かとうろたえるエルケの目の前でヤンは跪き、エルケの体に腕を回す。

靴に体重を掛け床が歪む音。

先ほどとは違う硬い腕と胸がエルケの体を包み、難なく持ち上げた。

床が離れた。

(体が、腕が、顔が近いし、床が遠いよ……！ 怖い！)

エルケは口の中で聞こえない悲鳴を上げる。

「食事にしましょ、毒なんてめんどくさい真似はしないわよ」

仁王立ちしたカヤが妙な事で威張っていた。確かに、カヤなら毒なんてものを使わなくても素手で一撃必殺に違いない。

エルケはひとまず喜んでいいものか、それとも緊張感をまだ保ち続けるべきか。ヤンの腕の中で小さく縮こまった。

「あの子、今はまだ立ち上がれないのよ」

エルケには聞こえないようにカヤが言った。やはりか、とヤンは何も言い返さずにただ納得する。

扉を開けた時に振り返った表情はあどけなく、ヤンには透き通った空気を纏う薄幸の少女に見えて、思わず足を止めた。てつきり少年だと思ひ込んで連れてきたというのに少女と知って、らしく無く僅かに動揺したのだ。服装を見て直ぐに我を取り戻した、やっぱり男だった。

小屋に倒れている細すぎる体を抱き上げた時に見えた小さな足の裏。細かく鋭い石の欠片が足裏一面を傷付け、あちこち膿んでいた手の平もそうだ。見えている限りで傷が無いのは顔くらいだった。

売り物だった筈の絨緞で巻いた汚れ傷だらけの体。襤褸布みたいな服の間から抜き出していた手足は筋肉どころか骨しかなく、よくぞこの足でどこから逃げてこられたものだと半ば呆れながら称賛した。

今、歩く事が出来ないのは至極当たり前のことだ。今まで歩けたことすらかなりの意地だったに違いないのだ。

ヤンは食堂から少し離れた壁に背中を預け、咳き込んだ背中をさすり甲斐甲斐しく世話しているカヤと、食事に夢中で世話されている事に気付いていないエルケを眺める。

傍に寄ると飯が不味くなる。そうカヤに威嚇されたからなのだが、離れたものの何と無く手持無沙汰で、カヤから見えない場所を選んで二人を眺めていた。自分が傍にいと飯が不味くなる理由はよく分からない。

エルケが匙に唇を付けるのに躊躇していたのは最初だけだった。

不安げに揺れていた大きな瞳。一度小さな舌を出し、匙の中を舐めたかと思うと一気にその速度を上げる。匙を咽喉の奥に勢いよく

入れ過ぎて一度咽た。間髪入れずカヤがテーブルに置いた並々と注がれた水のコップを掴み、一気に咽喉へ流し込んでいる。また咽た。余程腹が減っていたらしい。

ヤンは脆過ぎる警戒心とその食いつぷりに感嘆していた。

ハーブが付け合わされた肉に、蜂蜜を練り込んだパン。

チーズと果物。滅多に見れるものではないアーモンドと牛乳のプディング。干しぶどうの入ったカスタードクリームが添えられたタルト。

カヤの趣味で用意された赤い模様のクロスが掛かったテーブルの上を、沢山の料理が並んでいる。食堂の隣にある台所にはまだ調理途中の料理が残っていた。

これだけの料理を全て病み上がりの病人に食べさせる気なのか、迷惑極まりない。腹を壊すだろう。むしろこれだけの短時間で、よくここまで用意出来たものだ。

柔らかく栄養のあるものを煮込んだというカヤ特製の胃に優しいスープはエルケの口に合ったらしく、匙を口に運ぶ度に青く血色の悪かった頬にはほんのり赤味が戻って来ていた。

子鼠みたく忙しくなくテーブルの上を右往左往するエルケの半開きの口元に、カヤはまるで恋人のように得意料理を運び、その度エルケは唇を硬く結び頬を赤らめ俯き、観念して小さく口を開ける。エルケの方はまるで雛鳥の様だ。

エルケの仕草が、よりカヤのなけなしの母性本能を刺激するのか。カヤは食堂に入ってから一瞬たりともエルケの傍を離れようとしなかった。同時にヤンをエルケに近付けようとしなない、結構迷惑な母性本能だ。いや、独占欲か。

ヤンは先程カヤから飯だと渡された硬く平たいパンを口に運び、顎を駆使して噛み切った。硬く、不味い。水で塊を無理やり流し込む。

窓からの日差しを浴び柔らかく揺れるエルケの赤金の髪は、無造作に首根元で切られている。

伸ばせばまるで女の様に可愛らしく見えるだろうに。自分で引き千切った様な不格好で揃わない髪の間から、細い首が僅かに見え隠れしていた。

まだ発展途上らしい細身の体は、これまでの栄養状態の所為か。何処となく中性的に見える。それを気にしているのだろうか。エルケは貧弱な体を隠す様にしっかりと隙なく服を着こんでいた。

シャツの一番上だけを少し開けているとはいえ、そんな首元が苦しそうに見える。

十五歳ならばこの貧弱さでもまだ仕方ないだろう。これから食べるものを食べれば、それなりに男らしく見えてもくるに違いない。

自分の十五のだった頃を思い出そうとはしたが随分と昔の所為か、ヤンには曖昧で思い出すことは難しかった。

ヤンはパン屑の付いた両手を見、エルケを抱き上げた感触を思い出す。骨の所為か硬く、ただ軽かった。納戸から食堂まで抱き上げ運ぶ間、エルケは腕の中で目を白黒させていた。

絶対に落すなど睨みつけるカヤに、だったらお前が運べばいいだろうとヤンは言ったがどうやらそれは駄目らしい。力的には可能だが、気分的な問題の様だ。本当にカヤの考える事は難しい。

胸によしかからせて抱き上げると顔の近くで揺れていた赤金の髪が顔に触れると柔らかい。触れようと両手は塞がれているので、ヤンは顔を埋めて臭いを嗅いでみた。何故か尻にカヤの鋭い蹴りが入る。

髪先の臭いは大分薄くなっていた。ならば奥の方がどうだ？ 蹴りを気にせず鼻で掻き分けて嗅いでみるとまだ根元の方は濡れ、小屋の汚泥らしき異臭はそう簡単には取れていなかった。

「まだ臭えな」

小さく呟くと、びくつく腕の中の体。

やはりルツツに乗せるのはまだ無理らしい。無理に乗せようとしたらヤンは次には水溜まりに倒されるところか、後ろ足で蹴られるに違いない。カヤと同じ反応だ。

了承無く近付いたのに驚いたのか、腕の中で暴れたエルケが両手を小さく振り回しヤンの胸を弱々しく押した。髪に埋めた鼻が少し離れる。

押す力に力強さは感じられない。エルケには筋肉を付ける事よりも、まず体力を付けることの方を重視した方がいいのかもしれない。小さな反応には動じず、ヤンはこれからのエルケの鍛え方を考えながらその軽すぎる身体を目的地に下ろした。

椅子に小さく腰かけたエルケを見下ろした。エルケは怯えた表情を浮かべ、俯き手の甲に巻かれた布切れを爪で引っ掻いている。おどおどと視線を逸らした。

恐らく、この弱さではきつと遅くは無いい内にカヤの強引さに押し負けるだろう。これからの事を考えれば早めにカヤには近づかないよう。特に夜、言っておかなくては。ルッツよりもカヤはずっと面倒な暴れ馬だ。

「名前は？」

と、暴れる体を下ろした椅子の横を陣取りカヤが聞いた。

腰掛けた姿勢のまま膝に両手を行儀よく置いたエルケは声を出す事がまだ難しいのか、少し躊躇してから俯くと唇だけの動きで「エリク」と答えた。

何処にでもある様なありふれた名前だ。それを言うと自分のヤンJanという名前もなかなかありふれた名前だから咎める事はしない。互いに腹に何か隠し持ちながらなのだ、無理に探つて火傷をするのは好ましくない。

「歳は？」

と、聞くとやはり少し躊躇して唇だけで十五だと答えた。その年の割には細く頼りない身体だがそれも人それぞれだ。指摘はしないでおこうとカヤと目配せをする。腹を探られて痛いのはエルケだけでは無い、恐らくこちらもそうなのだから。

「いい歳ね、十分射程範囲だわ」

ほくそ笑むカヤを離れて見詰めながら、逆に射程範囲では無い年



齡はいくつなんだ、とヤンは呆れながらカップの水を飲み干した。

少しばかり他人に固執し過ぎるこの仕事仲間は喜怒哀楽の幅が激しく、何かに付けて暴力を振るいたがる。見かけこそ子供が好みそうな愛らしい少女然としているが、物騒な仕事を手に掛けていただけあってその中身はがめつくあくどい。

仕事で緑の都市ビュローに入ったのはつい最近の事だった。大口の仕事を抱え個別で足を踏み入れた銅山を抱く都市ビュローは花祭りの準備で忙しいせいか、活気に溢れ道行く市民にも珍しく笑顔が多かった。

寒さ厳しい時期をやっと過ぎ野山には緑が生い茂り、市場には香しい匂いを立ち昇らせた焼き立てのパンや、イチジクに葡萄やオレンジなどの果物も溢れ返っていた。

都市ビュローは市場を潤わせる職人や商売を目的とする商人を幅広く受け入れる開放された門戸とは反面、枯渴寸前の鉱脈を抱きその威信に陰り見えてきた領主が市民の財産を取り上げようとする権力の横暴さが目立つ秩序無い混沌とした都市だ。

近年、新しい銀鉱脈や銅鉱脈が次々と発見されているだけあって、懐を潤わす資源の発掘に忙しい。より高く売れ、より長く儲ける事が出来る資源を探しこの辺りでは諸侯や騎士の間で戦争が絶えなかった。

地域に根付き店を持つ商人と違い、ヤンやカヤなどの遠隔地を旅してルートを作り交易しながら商売をする商人が売るのは食料や衣服などでは無い。

主に兜や刀剣、甲冑などの軍用製品に高価な金銀細工。そしてたまに情報。

取引先と揉めると途端に険悪になるこの商売は、客である相手方よりも有益な情報や高価なものを取引する側の商人にどちらと言えば分があり引く手数多の客を選ぶ商人側から取引を反故にすることも多い。今回も多分に漏れず交渉役がちょっと揉めるなり姿を消す

と、途端に力技に転じた客側からの物言いでカヤの堪忍袋が切れ取引は反故になった。

揉めた時には姿を消すに限る。

いくつかの高価な取引商品を持ち出し姿を消した仕事仲間を、早めにビューローを出る為探し歩いていたのは昨夜のこと。市場に持ち込んだ旅をするには重たすぎる今回の取引の一部だった絨緞が高価過ぎて取引にならず、持ち帰りながらヤンはありとあらゆる場所を探し回っていたのだ。

取引相手に唯一顔が割れている奴が、目立ち人混みが多い場所にいるとは思えなかった。かと言って追手を撒き、ほとぼりが冷めるまで大人しくどこかに潜伏しているとも思えなかった。

探し回りふと見つけた小屋の中で汚泥に蹲る影。暴力沙汰になつたとして遅れをとる玉とは思わなかったが、念には念を入れて覗き込み溜息を付いた。

探している姿では無かった。汚れた体に傷だらけの手足、どこかの屋敷に買われた奴隷が辛すぎる労働に耐え兼ね逃げて来たんだろうと思った。埃と汗でまだらになっている頬を一筋だけ涙が流れた跡がある。こんな子供でも今は簡単に死んでいく時代だ。どこか冷めているヤンの心の奥で、仕方ないという声が聞こえた。

寝ているというよりも意識を失ってるらしいやせ細った体は、このままヤンが見離せば夜明けを迎える頃には寒さでその息を止めるだろう。もし今、起してやったとしても面倒事を引き受ける程気がいい訳でもなく、聖人になりたい訳でもないのだ。

頑丈で気に入っている軍靴の底についた腐った草の汚泥を見下ろすと、背中側で重過ぎる荷物を長時間持たされているルッツが激しい鼻息で抗議した。主がなけなしの良心で悩んでいると思っただらいい。

ヤンは表情無く汚れた足を小屋端の乾いた藁で拭い、死に掛けの少年に背を向けた。

すん、鼻を鳴らす音が聞こえ足を止める。振り返ってもまだ意識

が戻った訳では無かった。弱々しく片手が少し上がり何かを掴もうとして抱えた足に落ちる。膝を滑り落ち手の平は僅かな指の動きを止めて床に溜まった泥水の中に落ちた。

怪我をしていたというのか。手の甲に巻きついていた襪褌布が膝から落ちる時にずれて何かが見えている。

ヤンは体を向き直った。少しの好奇心でその何かを覗き込み

舌打ちしながら、水溜まりを蹴り飛ばした。

「やっと落ち着いた所悪いけど、そろそろここを引き払いましょうか」

カヤの声で考え事に没頭していたヤンが顔を上げると、テーブルの上は綺麗に片づけられエルケは先程座らされたままの状態で食事を終えて不思議そうに首を傾げている所だった。

足が付きやすい宿屋では無く、期間を決めて借りている小さな民家の契約期間には少し早いのが確かにそろそろ潮時の様だ。

移動させる荷物は無く、全てが旅先で現地調達と決めてあるので移動を決断すると行動が早い。台所には食べ残された料理が山になっていても今晚にはやって来るだろう新しい借主が喜んで処分するに違いない。そういう契約になっていた。

カヤは荷台の付いた馬車を調達しに歩けないエルケを置いて足早に小屋を出ていく。エリクに近づくなという忠告をヤンに残して、ヤンは椅子に腰かけたエルケと期せずして二人きりになる。

少し離れた場所に立つヤンをエルケは全身全霊で警戒し、俯いたままヤンを見るところか顔を上げようとしなかった。シャツの袖で隠された手の甲には真新しい布切れが巻き付けられている。しっかりと結ばれ絶対に外れることは無いだろう。

その強張った肩を見ながら、ヤンは空のカップを持ってエルケの腰掛けたテーブルに歩み寄る。重い軍靴の音が軋む床を踏みつける度に、細い背中が丸くより小さくなって行くのが見えた。

怖がらなくていい。探しに来られても突き出したりはしないから。

そう言ったとしても、きっとこの若い少年は信じようとはしないだろう。深い事情は分からなくとも決して安易な考えで逃亡者となった訳ではないエルケは、精一杯考えて逃げ出したのだ。

小さな物音を立ててテーブルにカップを置くと、既に正面のエルケは俯き過ぎて頭の天辺しか見えなかった。木綿のシャツは小さめとカヤに言われ用意した物だったが、それでも少し大きかった。ズボンも腰の辺りが大きくだぶついている。十五歳と言っていたが、正直もう少し下なのだと思っていた。それほどまでに華奢だったのだ。

ヤンは俯いたエルケの頭に手を伸ばし、猫や犬にする様に髪を掻きまわしたい衝動に駆られた。

ヤンがそろそろと手を伸ばし、エルケがその長すぎる沈黙に顔を上げた時

「いや、俺の所為で本当にごめんね！ 反省してます！」  
騒がし過ぎる声が沈黙を破ったのだ。

もういらぬです、と悲鳴を上げそうになった。

食い貯めをしているのか、それ程に沢山の料理を噛み下し飲み込むとあつという間に腹は膨れ上がった。

いつも空腹に嘆いていた腹では、食べるなり吐いてしまうのではないかと思っていたが懸念だった。思ったよりもエルケの体は強く生きるのにしたたかだ。

見えている料理を掻き込み、急ぎ過ぎて咽ると咽喉に水を流し込む。苦しくて、息が止まるかと思った。それでも手は止まらなかった。

やっと腹が膨れてもう食べるのを止めようと匙を置くと、エルケが持っていた匙よりも一回り大きな匙を突き出される。カヤの微笑みで口を開けると催促されるけれど、それではまるで病気になった時の子供みたいだ。最初は首を振って拒絶した。

自分はまだ世話の必要な幼い子供だと思えるのだろうか。少年の体付きとは決して言えないエルケの体格を誤魔化す為に本当の年齢よりも少し幼く言つたというのに、もつと下に見られているとは誤魔化しかいがあるとは言つても心中複雑なエルケだ。

甲斐甲斐しいカヤの世話は気恥ずかしく抵抗があつた。それでも強制されて次は俯いて困惑し、その次からは説得を諦めた。口を開ければまた次の料理、と匙の往復は繰り返されて止める暇もない。

きつと自分だけで食べていたら、食べさせられた半分も食べる事が出来なかつただろう。腹が破れてしまいそうなのは、ありがたいのやら、なんなのやら。食べ物どころか生きることにも困っていたエルケにしてみれば、生活の革新的な進歩かもしれない。

訳ありなのだという二人はエルケ程では無いにせよ見せたくない何かを隠し持っている様だった。食べ終わったソースだらけの皿が重なるテーブルの上を流れるように片付け、ソースで汚れたエルケ

の口元をわざわざエプロンで拭うことまでしてくれたカヤは、引き払うと言い残して忙しく扉から飛び出していった。

出る寸前、部屋の奥に睨みを利かせて行ったけれどその行動の意味はエルケには分からない。振り返った視線の先にヤンの姿を見つけるまで。

一瞬も逸らされようとはしないヤンの視線を一身に受け、沈黙は痛いという事をエルケは初めて知った。

何気に二人きりになってしまった、と背中に冷や汗が流れる。体の大きな彼はどうにも苦手だった。怖い人では無い様な気がする。鳥が懐いているし、馬が偉そうだから。それでも何を考えているのか全く分からないのに彼の存在には無駄に　エルケには、威圧感がある。

何か聞きたげなヤンの視線を浴びると、心の奥底に隠した嫌な事も悲しい事も何もかもが見透かされそうな気がした。それは自分が後ろめたい所を持っているからだ、それでも怖かった。

目を見るときと表情に出て誤魔化せないと思ったエルケはテーブルの下、男物の靴先を見詰めて口を嚙む。自分勝手だとは知っていても、このまま何も聞かないでいてくれたら楽なのに。そう思った。

正面に近づいてくるヤンの軍靴の音。軋む古めいた床がぎしり、その度に啼いた。ああ、この場から逃げたい。

硬く重い軍靴の音は嫌いだ。何度も石畳に打ち付けるその音を聞いたから。この音が近づくといい事があつた試しがない。聞いたのは叫び声、それに怒声だった。

ヤンがカップをテーブルに置いた音は決して強く置いた訳では無かったのに、エルケには責めて問い質している様に大きく鋭く聞こえた。

何処から来た？ 何故逃げてきた？ 何を隠している？ 聞こえない筈の詰問が聞こえてくる。

この場から逃げ出してしまいたい。あんな汚く素性も分からない

エルケを助け食事までさせてくれた恩があるのに、感謝するより疑い恐れることしか出来なかった。助けてくれてありがとうございました、と本来は言わなくてはいけないのに、怖くて出来なかった。見詰められているだろう頭が熱い。耳に熱がこもり火を噴きそうだ。

何処から来た？ 何故逃げてきた？ 何を隠している？ そんな事をどれか一つでも聞かれれば、エルケはこの椅子を蹴飛ばして逃げ出したくなるだろう。でもそれもこの不自由な足では出来ないのだ。それでも沈黙は嫌だ。何か言って欲しい。

望んでいる言葉は何なのだろうか？ ここまでしてやったのだからここを出て行けと言われたいのだろうか。それとも動かない足に同情して連れて行って貰いたいのだろうか。何度心の中に聞いても分からないのだ。

置いて行かれると、不安が残る。一人でこの都市を出て姉の元に辿りつけるだろうか。それはただの甘えだ。

連れて行かれると、不信感が残る。完全に信用できるとは思えないこの二人は何を思って自分を連れていくのだろうか。もしかしてエルケの手の甲に焼き付けられた烙印の本当の意味に、彼らは気付いているかもしれない。それは恐怖だった。

何か言われる、と体を強張らせてもヤンはエルケのテーブルを挟んで正面に立っただけで、何か聞いてくる事も言ってくる事もなく、ただ重過ぎる沈黙は流れた。

その沈黙に耐え兼ね、エルケが不安げな面持ちで思い切って顔を上げた時

「いや、俺の所為で本当にごめんね！ 反省してます！」

吹き抜ける風と大きな音。扉を力任せに開け放ち、謝罪の言葉とは裏腹の喜色満面な笑みで男が飛び込んできたのだ。

ああ、眩しい。それがエルケの第一印象だった。

随分と悪趣味な色遣いをしている服だと思う。女性物のシヨールを何枚も肩に掛け、その煌びやかな格好の迫力に負けない顔が凄い。

見開いたエルケの視線を受け止めたのは弓なりの目だ。満面の笑みの男と視線が合い無意識に体がヤンを見たときとは種類の違う拒絶を示した。

見慣れぬ姿に足を止めるのかと思っていた男は全く立ち止まる素振りを見せず、食堂の椅子に腰掛けたままのエルケの元に真つすぐ迷いなく歩み寄って来る。怖い、総毛立った。

その勢いならエルケの胸に飛び込んで来そうな勢いだ。もしかして城から探しに来た兵士なのかもしれない、と気付いた。

嫌だ！ 捕まりたくない！ エルケが椅子から転がりそうな勢いで身を振ると、ヤンが正面で少し身じろいだのが見える。

「見慣れない子鼠ちゃんがいるねえ」

鼠とは総称して人に向けると蔑称になるのではないだろうか。そう不快に思う暇もなかった。

足取りも軽く近寄った男は、短い言葉で寄るなど威嚇するヤンを片手で制して、椅子の背もたれにすっかり背中を押し付けたエルケの足元に跪く。

鼻に触れる嗅いだ事のある甘い匂い。何の物だったのか思い出すことすら難しい懐かしい匂いだった。

下から覗き込んでくる瞳はやはり青だった。永久に美しいアクヴアマリン、水の透明感を思わせる清々しい色が好奇心を隠さず近付いて来る。この家の住人は得てして皆顔を近付ける事に遠慮が無いのが難点だ。

椅子の背もたれが押し付けたエルケの重さにぎちりとなった。

シヨールを頭に被せても隠し通せない髪の色は金色だった。黄金色に輝くのは収穫前の小麦の畑、日暮れ前の日差しを浴びて風に揺りながら揺れる穂。その小麦の穂に花卉が付いている。

薄くほのかに赤み掛かるピンク色の小さな花卉。豊饒の女神に扮した娘達が花祭りに巻き散らす花卉だった。髪に付いた数枚の花卉は枯れる事もおれる事もなくそのまま装飾品の様に金髪に鎮座し彼の華やかさを増幅させている。



怯えながらも逃げ出すことすら叶わないエルケを楽しそうに品定めしていた男が、不意に顔を上げた。この場にエルケの替わりにいる筈の姿を視線は探している。

「カヤは？」

聞いた声には、馬車を調達しに、とヤンの声が聞かれた事だけをエルケの横から答える。

正面にいたヤンは気が付かぬ内にエルケの傍まで移動して、まだ名前も知らない男がエルケの前に跪いているのをただ見下ろしていた。いつの間に、とエルケがその高い場所のヤンの顔を見上げた。

男は、ふ、と笑う。

「ふうん、お姫様はお怒りだろうね」

布切れを巻き付けた手とそれを無意識に引つ掻いていたエルケの手を窘めるように握り締めてきた男は、そう言っただけ意味ありげな笑みを浮かべる。エルケがその早業を呆気に取られ口を半開きにする、横から「クルト」と諫める地を這った低い呼び声が掛かった。

「いいよ、とクルトは言う。おい、とヤンが割り入った。

「いいよ、一緒に行こうか。一人では無理だつて分かっているんだろ？俺らは商人だから、割に合うんなら連れていくよ。その代りに割に合わない判断したら置いて行くけど、選びなよ」

エルケはその甘い毒にも似た申し出を、咽喉に溜まった唾を飲み込んで小さく頷いた。

## 間章

「まさか額くとは思わなかったなあ」

借り物の小さめな馬車の車輪を背もたれにして、クルトが言った。相変わらず奇妙な格好をしている。ヤンはクルトの妙な服装と暮れかけた夕闇の中でも、眩しく光る金髪へ無造作に巻かれた布切れを見てそう思う。

布切れは濡れ、額から頬に掛けて水滴が滴り落ちていた。

絞って水気を切れればいい、と提案したヤンに、面倒だ、とクルトはあっさり言い放った。濡れそぼった服を後で着替える方がずっと面倒だと思うのだが、敢えて明言は避ける。言っても聞かないのはいつものことだった。奴は人と違う理で生きているのだ、恐らく。

疲れが見えてきたルッツを荷台から外し少しの休憩をしていた。

目指すのは青の街エーゲル。白の大都市ヨーブへ向かう街道と、海側へ向かう街道が交差するエーゲルは、大きな湖を領地に抱く漁業と交易の栄える穏やかな街だ。

各地を結ぶ街道は定期的に整備をあちこちでしているとは言え、山間に入れば状態も悪く酷いものだ。車輪が小石に乗り上げたり凹凸に取られると荷台は大きく揺れ、容赦なく舌を噛み、顎を打つ。快適だ、などとは絶対に言えない。この中で眠るなんて出来る筈も無かった。

少し先で水を飲んでいるルッツを見て問題が無い事を確認すると、ヤンは先程に比べ静かになっている荷台の方へと視線を流す。春先の夜はまだ冷える。何枚も重ねた毛布の膨らみは二つ、カヤとエルケだ。

馬車の旅は初めてなのか。激しい荷台の揺れにただしがみ付いていただけだったエルケは、馬車を止めてやっと眠る事が出来たらしい。精神的にかなり野太く出来ているカヤに比べ、回復が完全ではないエルケにとって馬車の旅は辛く苦しいものだろう。

それでも、付いて行く、とエルケは、クルトの提案に頷いた。

「お前が来いと言っただらうが」

「だけどさあ」

誘った本人が先程からずっとごねている。

クルトは頭の布切れを外し、もう一度水の盥に付けた。そのまま絞ることなく頭に当てる。布切れの向こう側から見える額には大きな赤黒い痣。男の頭でも十分に痛々しい。

取引を面倒な事になるまで散々掻き回し、手に負えなくなったら姿を消した。消息を半日以上絶っていた諸悪の根源であるクルトが、エルケの傍にいるのを馬車を調達し終え見つけるやいなや、カヤは言い訳も謝罪も聞かずただ何故か手に持っていた桶で力任せに殴り飛ばした。

勢いでエルケの真横に吹っ飛んだクルトを、口元を両手で覆い声なき悲鳴を上げながら見たエルケはきつと旅に同行すると頷いた事を直ぐに後悔したに違いない。

それでも気を取り直して椅子の背もたれを爪が白くなる程に握り締め立ち上がり、エルケは頭を下げたのだ。

足元に転がったままのクルトと仁王立ちのカヤには結構怯んだ様子を見せてはいたが、馬車へ乗せるのに抱き上げたヤンの腕を躊躇しながらも受け入れた。

何か思う所があったに違いない。ヤンはそう思っていた。

「馬鹿正直に全部言えはいってもんじゃないだろう」

そういうお前だって隠しているものがあるだろうに。そう言いたいのを堪えて、土に足を伸ばしたクルトをヤンは呆れた表情で見返した。

「だって、ほら、俺はしがな次男坊ですし？ 実害が無いから隠しても問題は無いでしょ」

片手を目の前に翻し、ヤンの物言いたげな視線をまるで煙の様に払う。

「誰に迷惑を掛ける訳じゃないしね。それとは、ほら王子様は違う

でしょ」

王子様、とは誰の事かと思っていたらエルケの事だった。カヤはお姫様、エルケは王子様。薄汚れ身元不明のはた迷惑な王族だが、それについては何も突っ込まないでおく。

ヤンは煙のように払われた視線を構わずクルトに流す。

払うには片手で足りないと思っただのか。クルトは両手を振り回し始めた。またおかしなことをし始めている。いや、気にしたら負けだ。理解できない行動を始めたクルトを気にせずヤンは話を続ける。意味ありげな物言いをするのはクルトの悪い癖だ。理解できようが出来まいが、話を続けなくては気まぐれなこの同行者は直ぐに話を止めてしまつたろう。聞いて欲しい訳ではないのだ。ただ口から零れ落ちただけ、なのかもしれない。

「何が言いたい」

思っていたよりも詰問口調になった。

下ろした指先に当たった小枝を掴み、片膝を立てた軍靴の横を削り取っても土は何処までも乾いている。

この辺りは近年雨の量が減って苦しんでいる。数年のうちに農作物の収穫は減り、この辺りの都市は飢餓で苦しむだろう。それを他人事と思いつりながらも、思うと何と無く後味は悪かった。

「可愛らしい皮の中身は蛇か、猫かってことだよ」

若干鋭さを増したヤンの声に苦笑して、クルトは片手に掴んだ干し肉を噛み切っている。

馬車を止めた時は日も暮れたばかりだったというのに、既に辺りは暗く互いの顔は闇に隠れ微かにしか表情も読めなくなっていた。

風が出ている。ヤンは立ち上がった。早い内にこの辺りを抜けなくては。空に月は無く厚い雨雲に覆われている。少し夜は荒れるかもしれない。ざらり、小石を踏んだ足音が案外大きく聞こえ、ヤンは荷台を振り返る。

これだけ話をしていても起きないのに、たかがこんな小さな物音で目覚める筈は無いのだ。荷台の固まりは身動きもしない。少し安

心した。

「どちらにせよ」

面倒な事になりそうならばそこに置いて行けばいいだけだ。そう言いルツツの手綱を取ったヤンの背中中、大きく伸びをしクルトは小馬鹿にした笑い声をする。

膝裏に付いた土埃を両手で払いながら、ヤンに続いてクルトも立ち上がった。

「それこそ、縋り付くのはどっちかね」

何を言っているのやら。言っている事が全く分からなかったのでヤンはそのままクルトの言葉を聞き流した。

まだ休憩をしていたのか、少し抵抗を見せたルツツを半ば強引に引き摺り荷台脇に戻す。鼻面で胸を押し退けられる。本当に調教し甲斐のある馬だ。

「そついや、さ」

話を途中で切られた事にはいつも通り何の反応も返さず、馬車を走らせることが出来るよう用意するヤンの顔を嬉しそうに覗き込みながらクルトが違う話を始める。

また意味の分からない話だろう。ヤンは気色悪い程の笑みを隠そうともしないクルトの方は向かず、作業を続けた。覗き込むと前髪から水滴が滴り落ちる。早く顔を拭け、それだけを心の中で思った。「エリクの声、聞いたけど。あれって声変わり前？ 女じゃなくて？」

聞き捨てならない言葉を聞き、ヤンは作業の手を止めた。思いもしない反応に興味を示したクルトが食いついてくる。

「体も細かいし、顔だつて正直女の子に見えるんだよね」

そう思わない？ 聞いてくるクルトの言葉に反応を返せない。聞き返したいのはそこじゃない。

ビューローを出る前の事だ。カヤがクルトを殴り飛ばし、引つ繰り返ったクルトをエルケの傍から引き摺って避けた。いつも通り慌ただしく旅立ちの用意を終えたカヤの呼ばれる声で、ルツツの準備

を終えたヤンはエルケ　既に旅支度は終わっていた、を椅子から慎重に抱きかかえ馬車の中に座らせる。

その間に声を失っていた筈のエルケは何かを話していたというのか。寄りにも寄って一番最初にクルトと。

黙りこくるヤンに気付かず、調子づいたクルトは話を止めようとはしない。

「別に女の子でなくてもいいかな。俺、趣旨替えの好機に遭遇してるのかも　って、ヤン？」

作業を完全に止め、考え込むヤンの異変に気付きクルトが声色を変えた。

ヤンの眼前に手の平をひらつかせ少し真顔になると突然、足はもう少し掛かるだろうね、とだけ言った。

「……だろうな」

足裏の化膿だけでは無い。長い間どこかに閉じ込められていたのか、やせ細った足を酷使したせいで時間がたつにつれ膝や足首が腫れ痛みが酷い有り様になった。このまま足の腫れが引いて、食事をして筋肉と体力を付けたとしても長い間放置された体が完全に元に戻るかどうか。むしろこのまま一生足を引き摺る生活になり兼ねないのだ。

例えばどこか安全な街に置いて行っただとして、どうやって生きていく？　らしくなく感情移入した考えにヤンはそれ以上無駄な事だと考えるのを止めた。勝手にしたらいい。他人はあくまで他人だ。

「声は、今まだ何言ってるのか分からない感じではあったけど、もう少ししたら出せるんじゃない　って、はくしゅん！」

言いかけの言葉を途切らせ、大粒の唾をまき散らせるとクルトは大きなくしゃみを連発した。

その五月蠅いくしゃみの所為で、荷台の中で声も聞いていないエルケの小さな体が寝返りを打ち、ヤンはくしゃみをする度に大きく上下するクルトの背を呆れ顔で睨みつけた。

だから水気は拭えと言った、そう言いたげな空気を隠さず背中に

ぶつつける。その不穏な視線を完全に見ない振りして、いかにも名案を思い付いたようにクルトが睨むヤンを振り返った。何か、嫌な予感がする。これは長年の勘だ。

「あのさ、ヤンの外套ってまだ荷物の中にあつたよね」  
「ない」

思った通りだ。即答した。濡れた服の上に夜風を遮る為着る気なのだろう。ヤンは作業を終え、馬車に乗り込むと顎でクルトにも早く乗る様に促す。

頬を膨らませ抗議してくる顔が、正直非常に不快だ。

「嘘お、この間夜に着てたよ」

「ない」

何度聞いても同じだ。手綱から手を離さないままで即答した。少し返事に私情が入っているのは仕方ない。何故か非常に面白くないのだから。

「ヤンさんつてば。俺、風邪引くから、本気で」

「行くぞ」

大人げないなあ、とクルトが言った。お前にだけは言われたくない、とヤンは馬車に乗り込んだクルトを横目に見ながら溜息をひとつ付いた。

風が強くなってきた。雨の匂いがする。

私のおばあちゃんが住んでいた家は、おばあちゃんが死んでから空家になった。

大好きだったハーブの匂いのする台所にパッチワークのテーブルクロス。大きな鍋で作る豆のスープと、チーズを乗せた茹でた芋。柔らかな木綿のスカートはあちこち継ぎ接ぎであちこち汚れていたけれど、それでも顔を埋めると太陽の匂いがして安心できた。

私は全部覚えていたのに、おばあちゃんだけが突然いなくなつた。おばあちゃんがいなくなつて、がらんとつた家の中。おばあちゃんがいた場所にその姿がある様な気がして、時々扉からや窓から覗き込んでみる。いつも腰掛けていた木の椅子や、洗濯をしていた盥もそのままなのに、おばあちゃんだけがない。

こんな毎日はおかしい。家の中だけじゃなくて私の胸の中もがらんとつた。

「商人にあの家を貸す予定なんだ」と父親が言った。いつも金の事はばかりしか話さない、汚らしい男。

止めて、と言つたのもう契約した後だ。とせせら笑つた。誰も住まない家なんて貸した方がましだ、とも言つた。

「借主が到着する前に隅々まで綺麗にしておけよ」と父親が雑巾を投げ付けた。舌打ちをして雑巾を投げ返したら、頬を叩かれた。さつさと金持ちを見つけて嫁に行つてしまえ、と言われて思わず反射的に家を飛び出した。雑巾を置いたまま。

途中でラウラに会つた。また新しい服を着ていた。フロリアンに買って貰つたの、とラウラは嬉しそうに辺りを踊り回る。

フロリアンは遠くの都市から来たばかりの役人だ。いつも偉そうで、いつも苛々している。フロリアンはエーゲルの中でも一番綺麗な屋敷に住んでいる。金持ちの娘達にはいつも笑いかけて、贈り物



ばかりをしている。趣味が悪いドレスとか宝石ばかり贈って、いつも威張り散らしている。

「リリーはこれから掃除でしょ？」私はこれから湖で舟遊びなの、とラウラが言った。エーゲルの湖で舟遊びなんて、魚釣り用の船なのに気取ってる。そのまま魚網に飛び込んでしまえばいいのに。

「リリーはどうせ贈り物なんて貰った事が無いんでしょ？」私はこの首飾りも貰ったの、とラウラが言った。さつき父親に雑巾を貰ったわ、なんて馬鹿な事を言いかえす事も出来ずに無視をした。ラウラの傍から早く離れたくて、思い切り走った。雑巾は持たずに。

おばあちゃんの家は、私の家から結構離れている。湖からも離れていて少し小高いエーゲルを見下ろす事が出来る場所にぼつんと建っている。今は誰もいないがらんどろの家、空っぽの寂しい家。

青の街エーゲル。単なる小さな田舎町だったこの街が今の様に栄えたのはここ数年の事だ。白の大都市ヨープからの街道が繋がり、商人や職人が流れ込んだ。沢山の魚が水揚げされて、市場で売られていった。

穏やかで静かな街だったエーゲルは、役人や商人に騙されて金ばかりを叫ぶようになった。私が子供の頃は子供達が水遊びしていた湖に入るには税金が必要になった。勝手に魚を釣る事も出来なくなつた。だから、商人も役人も嫌い。

小さな民家ばかりが並んでいた街には大きな屋敷が建てられて、そこに役人がふんぞり返る様になった。魚の流通と交易を見守るのが役人の仕事なのだという。たまにやって来て、たまに文句を言うて行くだけの気楽な仕事。それなのに苦勞の多い獵師を蔑む役人達、金にうるさい父親みたいだ。

小高い丘には花祭りに使う小さな花が、つい先月までは咲き乱れていた。今はもう枯れている。家に向かう道を通らずに、緑の絨毯になった野原を駆けながらおばあちゃんの家の近くまで行くと、既に借主は来ていた。

空っぽのおばあちゃんの家の前には、馬車が止まっていた。

まず目に付いたのは綺麗な男の人。髪の毛が金色で背が高い。少し髪の毛が乱れているけれど、笑い顔が凄く子供っぽい。綺麗で王子様みたい。フロリアンなんかよりもっと高貴な人に見える。

王子様みたいな人が手を伸ばして、馬車から誰かを下ろそうとしてる。あ、蹴られたみたい。

馬車の脇から小さくて可愛らしい女の子が飛び降りてくる。山吹色のスカートに頑丈な靴。私と同じくらいの歳なのかも知れない。柔らかそうな髪の毛が飛び降りた所為でふわりと浮き上がる。お友達になりたい、ラウラよりもっと綺麗だから。きつと皆驚くに違いない。

馬車に繋がれた馬が大きく頭を振った。随分と疲れているみたいだ。手綱を掴んだまま馬車から飛び降りた男の人がちらり、私の方を向いたのが見えてちよつと驚いた。

こんな遠くで、しかも青々と茂った木の後ろに隠れているのに気付くなんて猟犬みたい。大きな男の人、少し怖い。綺麗な男の人やフロリアンとは違う兵士とか傭兵みたいに見える。体格も王子様とは違う。

大きな人が荷台に足を掛けて手を伸ばした。誰も出て来ない。少し困った様な様子で一度引つ込めた手を伸ばしているのが見えた。そのままの状態で何か話している。

首を振った。頷いた。あ、また首を振った。大きな人の後ろで女の子と王子様が笑った。それを振り返って睨むと、また馬車の奥に向かって何か話している。

くしゃり、髪の毛を掻き回す。私の父親が最近よく見せる仕草。金回りが上手くいかない時とか、役人に無理難題を吹っ掛けられた時にいつもしている。困っているんだわ。

馬車の奥からおずおずと細い手が伸びてきた。馬車の幌を辿りながら、足元おぼつかない様子で誰かが奥から出てくる。

太陽が一番高く昇る昼時。エーゲルの初夏は短くて直ぐに真夏に

向けて暑くなってしまう。射し込む日差しは眩しくて少し暑さが痛いぐらいだけれど、乾いた涼しい風が肌を滑れば丁度良くて、私は一番この時期が好きだ。

花も絶えない、おばあちゃんが一番好きだった初夏。一緒に花も吹き抜ける風も見るともう出来ないけれど。それでも好き。横におばあちゃんがいてくれれば、もっと好き。

眩しい日差しの下に赤金の髪が出てきた。細い上半身を質素な服に包んでいる。少し長めの髪を後ろで紐を巻き付けて括っていた。口元を固く結んで、差し伸べられる腕に出来るだけ体重を掛けないように足を一步一步前へ出す。

手を貸す大きな男の人へ王子様が何かを言っている様子を見せると、大きな人はその体勢を崩さないままで直ぐに王子様を片足で蹴り飛ばした。王子様、いつも蹴られているみたい。何か変なの、顔に似合わない。思わず嘔き出した。

片膝に体重を掛けた時に、思う様に歩けなかったのか華奢な体が崩れ落ちる。咄嗟に荷台に飛び乗った大きな人の腕がその体を受け止めて大事には至らない。危なかった。あのままなら荷台から転げ落ちてた。

幌から全身が出て来てもいまいち信じられない。あの赤金の髪をした子は男の子だった。女の子なら短か過ぎる髪だけど少年の様な大きな瞳に白い肌。どこからどう見ても女の子なのに、男の子の恰好をしている。

確かに体は女の子と言うには細すぎて、顎も少しやつれていた。病弱で儂い男の子、そんな感じた。荷台の横に下ろされて少年はその視線を辺りに漂わせる。赤金の髪が日差しに透き通って凄く綺麗な髪の毛で白い肌が一層引き立って見えた。

何処でだろう？ あんな赤く透き通った宝石を見たことがある。凄く貴重で美しい宝石、きっとラウラが贈り物だと見せつけたものか、役人の身に付けた装飾品に違いない。あんな綺麗なもの、一度見たら絶対に忘れないもの。

少年の横に女の子が走り寄る。ふらついている少年の腕を女の子が引き寄せれば、少年の腕に女の子の歳にしては豊満な胸が押し付けられた。ああ、驚いてる。あの子はまだ初心なんだわ。

赤金の髪の向こうの顔が赤く火照って、ふらついた足は仰け反ると華奢な体でもその体重を支えられずに少年は尻餅を付いた。転がった少年を見て、馬が鼻息荒く首を振る。

駆け寄る女の子を少年は苦笑しながら見上げた。少年に見惚れて思わず木陰から出て来てしまっていた私は、少年が苦笑しながら何と無く野原へ向けた視線をしっかりと受け止めてしまう。可愛らしい顔が照れくさそうに歪んで、俯いた。どうしよう、目が離せない。「エリク、中で椅子を用意したから座ってたら？　そこにいたら力やがいつまでも掃除できないよ」

王子様がおばあちゃんの家から顔を出して、少年の名前を呼んだ。エリクは返事をせずに小さく首だけで頷いて見せて、カヤの伸ばした手の平を掴む。軽く持ち上げられたエリクは、カヤの腕を掴んだままで私の方を見ている。照れた先程と違って真つすぐ逸らさないその視線。射すくめられた様に私は、木陰の横で少し心細げなエリクの顔を見てぼんやりと霞みがかつた大事な事を思い出した。

手に持っていない父親に叩き付けてきた雑巾。空っぽのおばあちゃんの家に来た意味。

足がまだ咲き残っていた小花の花弁を踏みつければ、風に飛ばされて花弁は散っていった。湖まで飛んで行ったらいい。おばあちゃんが風になつて悪戯してくれたらいいのに。

視線はまだ離れない。エリクの様子に気付いてカヤが名前を呼んでいる。ねえ、私が傍に行くまでその視線を逸らさないでいてくれる？

「あの！　私その家の貸主の娘です。掃除、まだ終わってなくてごめんなさい！」

エリクが小さく頭を下げたのが見えた。空洞になった心の奥、忙しさで満たされたらいいなあと思いつながら私は緑色の絨緞を駆ける

足に力を入れた。

初めての馬車の旅はエルケに言わせれば、最悪、だった。

いくら整備されているとはいえ軍用道路では無い、使い古された街道を、狂った様な速度で馬車が走るのだ。どんな小さな小石にも荷台は振り回されて、エルケは何度も顎と肩をしこたま打った。

ゆっくりと快適な馬車の旅？ 冗談じゃない！ 勿論無賃乗車だから、文句は言えない立場だったけれど。

一日目の夜は嵐だった。

長い間馬車に揺られて、休憩中にやっとほんの少し眠れたと思ったださなかに、幌を叩くのは激しい風雨だ。

小石の揺れに風の揺れが加わり、間もなくそれに雷が加わった。うるさいし、痛い。それに怖い。

稲光と地響きと共に訪れる轟音で飛び上がったエルケは、二枚重ねた毛布の中にくるまってただ体を強張らせ震えるしかなかった。幌も毛布も稲光は遮っても轟音は遮ってくれない。馬車が壊れるかと思った、雷をこんな間近に感じたのは初めてだった。

怯え震えたただの毛布の固まりになってるエルケを、その上から抱き締めてカヤがすつとんきような歌を歌ってくれる。稲光の後、轟音が聞こえる頃になるとその歌はより大きくより音程が著しく外れて、怯えていたのも忘れて可笑しかった。

カヤの奇天烈な歌を聞いて、荷台の前でクルトが腹を抱えて笑った。勿論クルトはその後カヤに怒鳴られていたけれど、カヤは震えるエルケの体を離そうとはしなかった。手元にあった何かを投げ付けて、クルトの背中に命中させていたのは毛布に隠れて見ないふりをした。

その日はそのまま気付くと眠ってしまっていた。激しい馬車の動きにもめげずに。疲れていたらしい。

二日目は朝から嘘のように晴れていた。

濡れた外套を乾かそうと寄った小さな村で食料　主に干し肉と固く平たいパン、を買い、小さな市場を見つけたカヤに誘われて、勧められるままエルケは小さなウエストポーチを買って貰った。

皮で作られたポーチには大きな被せ蓋が付いている。腰紐に括る様に作られているそのポーチは金や通行証を入れる事が出来る様に作られていて、色気も素気もない作りだったけれど先に付いた細い革ひもで中身が飛びださないように作られているのが使いやすそうだった。とにかく安く、丈夫に出来ていた。

初めての自分の物に心が浮き立つのを止められない。今は入れるものは無いけれど、おいおい見つけていけばいいだろう。

やっと出せる様になった掠れた小さな声でありがとう、と言うとカヤはまるでとろける様な笑顔を浮かべてエルケを抱き締めた。

カヤは時々、姉さんみたい。エルケは腕の中で鼻の奥が熱くなっていくのを、奥歯を噛んで堪えた。

それから四日間。熱を出した。

昼過ぎに突然体中が痛くなり、休憩中のルツツの傍で餌を食べるその姿を見る振りして蹲るエルケの肩を、ヤンが突然掴んだ。驚いた。

有無も言わず額に当てられたヤンの大きな手の平が冷たく気持ち良くて、目を瞑るとそのまま気を失った。

気付くとエルケは小さな民家の一室に寝かされていた。丸二日眠り続けていたらしい。順番に番をしていたというクルトがその時近くにあった農家の一室を借りたのだ、と教えてくれた。

目覚めたエルケの額に手の平を当て、まだ熱が下がらないのを確認すると、

「もう、いい加減気付いたんじゃない？　君に『旅行』は無理だと思っよ」

と、枕元でクルトが冷たさも優しさも何も感じさせない口調で言った。

「俺達は商売をしてる。遊行する君の為にいちいち足を止めていられないんだよね」

そんなきつい言葉の割には、責めてる訳でもなくただ淡々と言った。

ああ、ベッドの脇のウエストポーチが見える。苦しく恐ろしかったあの城から逃げ出した夜を少し忘れて、楽しんでいたのは事実だ。そう思った。

「諦めたら？俺らは君の保護者じゃない」

そう言ったクルトに突然、じゃあ何でここまで連れてきた、と泣きながらなじりたい気持ちになった。

違う、それは責任転嫁だ。ビューローを何としても出たかったのはエルケの方だ。利用したのはエルケの方だった。あの都市から連れ出してくれさえすれば誰でも良かったのだ。

何も聞かず、食事をさせて貰って、服を貰って、保護されながら、本当は追われている烙印のあるエルケを連れ出してくれさえしたら、なんて自分勝手なんだ。

「ここまでできたら十分でしょ」

領け、と強制されている感じは無かった。ただ見透されている感じだけがしていた。

取引は五分五分だ。互いに腹を隠して旅を続けている。それでも何か後ろめたいものがあるのだろう、とクルトは言いたいのだ。意味の無い旅では、本当にただの旅行になってしまう。

これから先は目的がなければ連れてはいけない、と言われているのだ。

「ま、エーゲルまで少し考えてよ」

その日はそのまま眠りについた。薬が効いたのか、沈む様にただ眠った。



二日間、眠り続けた。二日間、夢を見た。

額に冷たい手の平が乗る。熱を出すと姉がいつも傍に付いて話を  
していてくれた事を思い出す。

故郷に伝わる悲しい恋の歌。小さな涙のお話。

悲しく切ない話を姉はいつもまるで自分の事のように話したがる。  
一つ一つ、大切な言葉を紐解きながら決して幸せとは言えないその  
お話をおとぎ話の様に幸せそうに話すのだ。

汗に濡れた髪を拭いてくれる。耳まで流れ落ちるのは涙なのだろ  
うか。固く握っていた筈の姉の指が少しずつ離れていった感触を思  
い出した。しゃくりあげた。

人は、欲に塗れるとおとぎ話もまるで真実にしてしまうのだ。叫  
び声と怒鳴り声。家が燃やされる焦げ臭い臭いと笑い声。戦争は嫌  
い。兵士も嫌い。でも何よりももっと　　が嫌い。

会いたい、姉さま。ごめんなさい、姉さま。許して、姉さま。

二日間、死んだように眠って起きると体が軽かった。目覚めたべ  
ツドの横でカヤが嬉しそうに笑った。

それから一週間。ただひたすら馬車の旅だった。

遅れた予定をただ取り戻す為、荷台を引いて駆け続けるルツツが  
可哀想で、短い休憩の度に荷台の下に下ろして貰って鼻面を撫でた。

最初は威嚇されていたエルケでも、旅が十日を超えるとルツツは  
次第に懐いてくれるようになった。その体の大きさに手を出すのも  
ためらっていたけれど、今はとても目が優しいと知ってからには体の  
大きさも気にならなくなった。傍に寄ると鼻面をエルケの胸に押し  
付けてくる、可愛い。

ただ近くにヤンが要る時だけは、どうしても傍には寄れなかった。  
ヤンが怖くて。どうにもやっぱり慣れなくて、転びそうになる度に  
一番最初に差し出されるヤンの手を気楽に取る事が出来なかった。  
それにまだ答えを出す事が出来ない所為か、どうしてもクルトと

話す事が出来なかった。そんなエルケの態度をクルトはまるで意に介さない様子でいつも通りに振舞っていた。

すこし歪な旅の日々に、確かにエーゲルで別れた方が自分の為なんじゃないか。そう思ってもいた。

怖く嫌な思い出しかない緑の都市ビューローを思わぬ幸運で逃げ出してから、二十日目の昼。やっとエルケ達は乾いた初夏の風が心地いい青の街エーゲルに入った。

昨夜の簡単な食事の時にヤンが漁業で栄える穏やかな街だと言っていたけれど、街中は喧騒が押し寄せ、とてもじゃないけれど穏やか、と言った風では無かった。むしろ少し殺気だっている様にも見えた。

市場には美味しそうな魚が並んでいる。果物も絹製品も一番よく見られたのは鉄の生活用品だ。穴あき杓子にりんごの芯抜き器。包丁や肉料理に使う手鉤もあった。

休んでばかりのクルトにルッツの手綱を預け、エルケの正面に腰掛けて市場を眺めていたヤンが、玩具の剣や兜ばかりを売っている店を見つけて僅かに眉を寄せた。理由は分からなかった。

カヤの腕に寄りかかる様にして馬車の外を覗き込んでいたエルケが偶然見ていたそのお店は結構な客が立ち止っていて、中には兜と盾を身に付けて遊んでいた。人を殺す道具なのに、と思うエルケはやはり心の中は女なのだろう。店に集まる客は老いも若いも全て男だった。

嫌な気分になって荷台に視線を戻すとヤンが同じ表情をしていた。だから珍しいヤンの変化に気付いたのだ。でも、もしかしたら違う場所を見ていたかもしれない。確証はなかった。

「魚だけじゃない臭いがぶんぶんするねえ。ヤンの出番かな」

「ああ」

エルケにはよくわからない会話をヤンとクルトがしていた。多分、仕事の事だろうと思う。

エルケの横にいたカヤを振り返ると、放っておきなさい、と言う表情と目配せを返された。頷いて目を閉じる。喧騒がうるさくて眠ることは出来なかったけれど、考え事をしていた。

もしかしたらここから一人で旅をしなくてはいけないのかもしれない、そう思うとただ苦しく不安だった。

「着いたぞ」

というヤンの声に顔を上げる。喧騒はいつの間にか離れてしまっていた。

幌の中にいるエルケにはどういう場所がエーゲルの短い借り家になるのか分からなかったけれど、馬車の正面を見たら随分と開いた場所だという事が分かった。昔は小麦畑だったのだろうか？ 伸びきったローズマリーや雑草の生い茂った荒地が見える。

クルトが最初に下りた。カヤが下りる前にエルケを振り返って、私はか弱いからヤンに降ろして貰ってね、と言った。その後で思い切りクルトを蹴り飛ばしていたから、エルケはその言葉に信ぴょう性が無い事がこの二十日間の旅で良く理解している。

幌の奥に腰掛けていたエルケを、ヤンが幌の支えに手を掛けて覗き込んだ。名を呼ばれる。偽りの名を。

「エリク」

中に入ろうとしている。エルケは拒絶し大きく首を振った。途端に眉を顰めるヤンの顔が怖い。

「お前が一人で下りるのは無理だぞ」

馬車を下りる度にこの攻防戦はいつものことだ。エルケは乾いた唇を開く。

少しずつ出るようになってきたエルケの声でも、長く話す事は無理だった。どうしても会話も短くしようとしたら素っ気ない物言いになってしまう。

「ゆっくり降りれば」

「出来ねえだろ」

あつさりと却下される。

「……はい」

「めんどくせえな、中に入るぞ」

幌の中に入ろうと身を乗りだすヤンを両手で制して、エルケは荷台の入口まで行こうと立ち上がった。やっと片方の足の裏の腫れが取れて引き摺れば何とか立ち上がることぐらいは出来るようになってきた。

それでも膝には余力が入らない。それがどうにももどかしかった。

「いえ、そこまではなんとか」

ふらつく足、慌てて支えから垂れた幌の一部を掴んだ。ああ、溜息。危なげなエルケの足取りを見て、髪を掻き回す仕草。

「大丈夫じゃねえだろ。いい加減にしろ」

「ヤンは子供好きだねえ」

少し苛立ち混じるヤンの背中向こう、エルケの幌を挟んだ向こう側から暢気な声が聞こえる。

暢気に鑑賞している位なら間に入ってきてもいいのに。それでもクルトが手を出すと違う意味で怖いので、言い返す事も出来ない。

勿論、カヤは絨緞を片手で持つ事が可能な『か弱い』女性らしいので手を貸すのは無理だ。諦めていた。

クルトの声に続くのは、暢気なカヤの声。

「違うのよ、クルト。こういうのは過保護、っていうのよ」

続く大きな二人の笑い声。

大きな溜息が仲良くもない二人で被った。二人を睨み付けるヤンと、何とか荷台ぎりぎりまで歩いて来たエルケの物だ。

ヤンがまだ何かを言いかけたクルトをエルケへ手を差し伸べたままで蹴り飛ばした。この人たちは仲がいいのか悪いのか、本当に分からない。

伸ばされた腕に出来るだけ体重を掛けないようにしてエルケは空

を見上げた。

吹き抜ける風と混じり合う花の匂い。見上げた空はカヤの瞳の様に澄んでいて、何故か少し寂しかった。腕を掴む指先に少し力が入るとヤンが、気を付ける、と言ってくれる。

この腕と優しさに慣れてはいけない。そう心の奥で分かっていた。いつか離れてしまう人達に甘えてしまうと、もしかしてここで離れなくてはいけなくなった時に一人で立ってられない事も知っていた。

膝に力が入らなくて転びかけたエルケの体を、荷台に反射的に飛び乗ったヤンが受け止める。

「だから言ったぞ」

と大きく溜息つく肩に、今度こそ大人しく顎を預けて、はい、と答えた。

慣れてはいけないのに。そう思って、奥歯を噛んだ。

「ちょっと野暮用。俺はここで自由行動ね」

そう、クルトが言った。なかなか帰ろうとはしない借家主の娘だというリリーをやつと帰して、皆がやつと一息ついた時だった。

換気の為に開けた窓から入って来る風が、素っ気ない木綿のカーテンを揺らしている。部屋に巻き込んで来る風はまだ少し埃っぽく、エルケは小さく咳込んだ。

何か物言いたげなカヤの視線に、クルトは片手を上げながらも通りに満面の笑みを返して、お土産ね、と答えた。何と無く気になつて振り返つたエルケの横で、カヤの両手に握られた雑巾が不穏な悲鳴を上げている。うわ、怖過ぎる！

エルケはこれからどうするのかの答えがまだ出ていない。それを分かっているのか、扉を開けながらクルトは、無理しないでね、とエルケに意味ありげに言い残した、らしくない微笑みも付属させてそして、エルケの返事を待たずに薄い扉を閉めた。

ぱたむ。風を含んで何とも気の抜けた音が響き、何もない部屋に椅子を置いて腰掛けていたエルケの髪の毛を揺らす。無理しないで、とは体の事か。それともこれからの事なんだろうか。

含むものが多過ぎて、嫌な気分になつた。早く答えを出さなくてはいけないだろう。自分に言い聞かせる。

「俺も仕事だ」

そう言つて、ヤンも立ち上がった。行つてらっしゃい、とクルトの時とは大違いの口調でさつさと行けとばかりに片手を振つたカヤに、街に行くなら送るぞ、とヤンが言った。彼もまた返事を待たずに、さつさと扉を開けて家を出て行く。

行くならさつさと用意して外に出てこい。と、いうことらしい。

ヤンの申し出を何と言つて断わろうか？ 今は少しでも色々な事を考えたい。

ここからどうやって、一人で姉の所へ辿りつくか。それに全く手元に無い路銀はどうしようか。考えたい事は沢山あった。

「行きましょ、ここで腐つてても何も無いわよ」

考え込むエルケの腕を引いて、カヤが言った。雑巾を奥の小さな台所へ放り投げると、山吹色のスカートの上に付けた真っ白のエプロンを椅子の背もたれに掛ける。

「僕、ちよつと考え事があるから……」

そう言つてもう一度首を振つたエルケを、カヤは強引に立ち上げさせる。俯くエルケの顔を澄み切つた夏空の青が覗き込んで、さすがエルケの背中が強めに叩かれた。

「げふ！ 苦しい！ 大きな音と咳き込みそうになる程の震動。一瞬、エルケの息が止まり、視界が涙で曇つた。」

「考え事なんて何処でだつて出来るでしょ！ か弱いレディーの買い物に付き合つのが男の役目よ！」

この迫力でレディーなんて、それならクルトだつて性別は無視したら十分にレディーじゃないか！ 心の中の声は奥に仕舞つておくクルトみたく何でも口に出してしまうと、カヤがどんな反応を示すか。もう勉強済みだ。

レディーの買い物に長く付き合う事は出来ない足なただけだな。そう思つたのも内緒だ。それだけは何とか勘弁して貰うしかない。

「日差しが暑いから、これを被つてね」

カヤが荷物をかき混ぜて取り出したくすんだ緑色の帽子をエルケは困惑しながら受け取つて、その赤金の髪に乗せた。丁度いい、いつの間にカヤはこれを買つたのだるか？ エルケには店で大きさを合わせた覚えは無いというのに。

不思議そうに振り返つたエルケを見て、似合うわ、そう言つとカヤは少し寂しそうに笑つた。

青の街エーゲルの丁度中央に位置する広場は賑わつていた。

街の威信を現わす為に作られたのか。豪奢過ぎる教会と、隣接す

る派手な屋敷が、獵師街であるイーゲルの町並みにはおかしな程不似合いだ。それ以外の、広場をぐるりと取り囲む民家は薄汚れ普通の民家というよりはどちらかと言うと襤褸家といった方が似合うのだから。その分、やたらと教会と屋敷がどうしても目立ってしまう。中央広場のまさに中央。煉瓦で取り囲んだ小さな泉とその脇に建つこれまた悪趣味な銅像の前に下ろされたエルケとカヤは、果物や野菜と魚など生ものと、鉄製品や銅細工それに衣製品が並ぶ雑多な市場を見回した。

イーゲルに入ったばかりの街道を埋めていた鉄製品を主に取り扱う市場とは違い、この市場は並ぶ商品に高級品が多い。

人通りが多過ぎる市場の中では肩がぶつかり、未だ足が不自由なエルケが上手く歩いて買物できるとは思えなかった。

泉の縁の煉瓦に腰掛け、二人は揚げた魚のフライを食べている。こんな所をクルトに見つかつたらまた、遊行には付き合つてられない、と言われるだろう。ここでお別れなのだ、と気持ち半分で割り切ってしまうばそれもあまり気にならなかった。

結局はエルケの子守をさせる事になってしまったカヤが申し訳なくて、エルケは揚げ衣を落すことなく上手に食べているカヤを首を傾げ、覗き込む。

「カヤ、ありがとう。気を使ってくれて」

「何の事？」

頭を下げたエルケを振り返つたカヤが、早くも食べ終えたフライの包み紙をくしゃりと丸め、不思議そうに聞き返してくる。

「ヤンやクルトと一緒に商売してるから、一緒に」

「ああ、無い無い」

一緒に商売の交渉に行けなくてごめんね、そう言いかけたエルケの台詞を丸めた包み紙を空に投げて遊ぶカヤが遮った。一人になつてしまうエルケを気遣つたのか、と思つたのだが違つたらしい。

今日のカヤは髪を一つに高く結わえている。

細く綺麗なうなじを隠すことなく出して、年齢不詳の幼い顔立ち



とは正反対の少し色気を感じさせる首元が何とも男目を引く。先程から前を通り過ぎる老若混在の男の市場客が遠巻きに熱い視線を送っているのを、何と無くエルケは気付いていた。

こんな自分みたいな偽物の男でも、カヤを守る番犬になれるだろうか？ 無理か、ヤンだったらきつと一睨みでこんな遠巻き一掃するだろうに。男でも女でも自分は中途半端だ。

「いつもこんなものよ？」

遠巻きにしてこちらを窺う男の一人が意を決したのかこちらに歩いてくるのが見えて、らしくない目つきでそちらを睨んでいたエルケにカヤが言った。男はエルケの視線を受けて立ち止り、直ぐに横を向き足を返す。

やった！ 一人追い返したぞ！ 何と無く役に立った事が嬉しくて、拳を握り締めた。ああ、段々女から離れて行くような気もしてきた。悪い事か、むしろいい事なのか。悩ましい。

悩むエルケに、カヤはむしろ全員揃って旅をする方が珍しいとも笑ってみせる。

「いつもは現地集合、現地解散なの」

こんなに一致団結しているものもなかなか無いわね、と落ち着かないエルケの様子を見ながらカヤが苦笑した。

「そつなの？」

不思議そうにしているエルケの風で少しずれた帽子の位置を戻しながらカヤが頷く。少し汗ばんだ額に張り付いたエルケの前髪を指先整える。くすぐったくて、エルケは肩を竦ませた。

「だから、エリクは余計な事を考えないで付いて来ていいのよ？」

ビューローからエーゲルまでのクルトとの経緯をカヤが知っている様子は無かった。それでも、エルケの心中を何と無く読んだ様なその口調にエルケは何と返していいか分からなくて、曖昧な表情だけで返事は出来なかった。

背中側で澄んだ水を湛える泉にカヤは指をひたし、油で汚れた指を洗う。泉の表面には何処から飛んできたのか黄色い花卉が沢山浮

かんでいる。エルケもカヤに倣って、手を拭った。暑い日差しの中で冷えた泉の水が気持ち良かった。冷えた指先は直ぐに日差して体温を取り戻す。

カヤが煉瓦から立ち上がった。

「さあて、ヤンが来るまで何をしましょうかね。まずは今日の食事の買い出しかしら？」

エルケとカヤが腰掛ける辺りは、主に高級品や細工品の取り扱ひが多い様だった。脇に建つ不細工な銅像がどうやらこの街の偉い人の様だ。エルケは少し頭の割に足が短すぎるその銅像を見上げ、その偉そうな表情に唾を吐き掛けたい気分になる。ビュローで見た誰かに似ている。別人だというのに、このしてやったりとした表情が特に反吐が出た。

食料品の売り場はもっと向こう側、民家の辺りだった。広げた灰色の麻袋の上を取れたての野菜が並んでいる。今の時期は豆が多いようだ。

どうやら今日は豆のスープか。きつと豆の筋取りはエルケの役目になるに違いない。

「カヤ、行って来ていいよ。僕はここで待ってる」

エルケの提案にカヤが少し躊躇を見せた。

こんなことまで迷惑をかけたくない。エルケの足ではあの売り場に辿りつくまで結構な時間を要するだろう。賑わった売り場では肩をぶつけて転んでしまいかもしれないのだ。カヤは買い物どころではなくなってしまう。

悩むカヤの前で、エルケは煉瓦に礼儀正しく座り直して見せる。

「大丈夫。ここで大人しく座ってるから」

まさか、こんな遠くまでビュローの追手が来るとは思えない。イーゲルに絶対来るといふ確証もないのに、ここでエルケの事を知ってる誰かに会うなんてあり得ないのだ。

奴等が待ち伏せするのならば、もっと確実な場所を選ぶだろう。

例えば　とか？

「分かったわ。その代り、冷たい飲み物でも買ってきてくるわね」  
「うん」

観念したようにカヤは、エルケを何度か振り返りながら人混みの中に姿を消した。エルケはその背が見えなくなるまで片手を小さく振り、全く見えなくなった所でその手を下ろした。

さて、考えることは沢山ある。もしここに一人残るのだとしたら、一体何をして路銀を稼げばいいのか。何処に住み、どうやって姉の場所まで辿りつけばいいのか。

そもそもこの足は治るのか、いつまで男なのだと偽ればいいのか。時間はいくらあっても足りなかった。

「……あの。これ、あげるよ」

俯き悩んでいるエルケの頭上で見知らぬ男の声がした。顔を上げてみれば、先程睨みつけた男だ。若く、少し気が弱そうなその男は手に持った焼き菓子を手にとらない。先程魚のフライを食べたばかりだ、腹は空いていなかった。

誰？ どうして話しかけてくるのか。首を傾げた。目の前に出された焼き菓子は手に取らない。先程魚のフライを食べたばかりだ、腹は空いていなかった。  
「君、初めて見るよね？ 商人なのかな？」

首を振る。商人なのはカヤとヤンとクルトだ。  
「そっか、商人じゃないんだ。でもさ、この街のこと、あまり知らないよね？」

頷く。そろそろ何か嫌な予感がした。先程カヤを熱っぽく見詰めていると思っていたが、もしかしてそれは大きな見間違いだったんじゃないだろうか。

尻を後ろにずらせば、後ろ手に煉瓦の終りが触れた。これより先は泉だ、後ろには逃げられない。人混みの奥に視線を向けても、見えるのは混み合った人の背中だけでカヤらしき姿は何処にも見当たらなかった。

エルケはカヤから被せられた帽子をより深く被り、危なげな足取りで立ちあがった。足を引き摺り、その男に背を向けて歩きだして

も男はまだ付いてくる。

「ね、足が悪いの？ 手を貸してあげようか？」

押し付けがましい親切を前面に押し出した男の声の後、通りすがりの街人の肩にぶつかりふらつくエルケの脇に男の腕が入って来る。気色悪い！ ヤンに抱き上げられた時とは全く違う嫌悪感が、体中を這い回った。腕を振り回し、その手を振り払う。

思わず泣きそうになった。それでも男はこんなことで泣かないのだと自分を叱咤した。

「ね、待ってよ」

逃げなくては、何処でもいい。出来るだけ人混みの中へ。出来るだけ沢山集まっている中へ、逃げなくては。

小さな体だという事をこれほどまでに感謝した事は無かった。押し寄せる人混みは、ふらつくエルケの体を支え転ばないままで賑わった人混みの中に飲み込ませていく。

「ちょよ、ちょよと待って！」

そんな切羽詰まった男の声が離れて行くのを押し寄せる人混みに体を任せながら聞き、エルケは安堵で肩を下ろす。実際は身動き一つ出来なかつたが、と人混みの切れた奥が何やら騒がしい。

「おい、これがベルンシュタイン？ ゼークト産じゃないくせに値段が高過ぎだろ！ 横のを寄越せ！」

神経質そうな金切り声が聞こえた。

気を失いそうな衝撃を感じてエルケはふらふらと押し出されるまま、その騒動の前に出てしまう。ビロードを広げたそこにはまばゆい程の宝石の原石が並んでいる。それを取り囲むのは豪華な服を着た客達。市場にはそぐわないその空気にエルケは今更気付いて、辺りを見回した。どうもおかしな所に入り込んだ様だ。

緑色の艶めくビロードの真ん中で宝石が嵌め込んである折り畳みの椅子に腰掛けて、蛙の様な店主が取引中に突然現れたエルケを頭から足先まで視線で舐めまわす。

一体、今日はどれだけ最悪の日なんだ！ 気色悪い視線に縮こま

った。

「何だ！ お前は！」

数多い客の中でも一番派手で、一番趣味が悪そうな男が叫んだ。苛々とした口調を隠そうともせず、近くで立ち竦むエルケの肩を強く押す。ふらつき、エルケはそのまま押されるままに売り場の横にしゃがみ込んだ。

蛙がそんなエルケを見て、気を付けるよ、と凄む。

「でさ、どうするんだい。フロリアン坊っちゃん。買うのか、買わないのか」

「五月蠅い！ 今、考え中だ！ 貴様、坊っちゃんと呼ぶのを止めないと商売許可証を破り捨てるぞ！」

「それはねえ、困るなあ。でもフロリアン様を買わないなら、他の客もいるだろうしね」

意味ありげに辺りを見回した蛙の視線に応じて、何人かの客が「俺が買うぞ」と手を上げた。どうやらフロリアンと言う客が取引中で、他の客は口を挟めないらしい。

既にエルケは蚊帳の外だ。売り場の横でしゃがみ込んでいたエルケは、ビロードの上で無造作に鎮座させられた原石達を見回す。

ワインのグラナート、透明のクリスタル、紫のアメテュスト、深緑のスマラクト。並べられた石は玉石混合だ。値段の札は無く、どうやら店主の機嫌と気分が決まるらしい。

この質ならば、然程高くは無い物なのだろう。そう、思い込んでいたエルケは蛙の手の平に乗ったベルンシュタインの値段に目を剥いた。

「これ以上は下げられないねえ」

「冗談だろ！ じゃ、このオパールはどうだ！」

「そうさねえ」

それもまた、法外な値段だった。大きさは十分でも見える光が少ない。こんな値段で取引される石では無い筈なのに！ この店は絶対におかしい。エルケは眉を寄せた。

「見てごらんよ。この黒が夜の闇の様だろう！　これなら、白の大都市の大司教様も喜んで金を積むに違いない！」

蛙店主の口上に客の間から拍手と歓声が沸き起こる。

先程まで取引をしていた筈のフロリアンが首から下げた柔らかそうなスカーフを噛み切りそうな表情を浮かべている。あ、スカーフを掴んだ！　エルケの期待も空しく彼は噛み切ることもなくただ首からスカーフを外しただけだった。取引に熱中して暑くなったようだった。

勢いに乗った蛙店主は先程の取引品の横にあったベルンシュタインを掴む。

「これこそ人魚の涙と言われる最大級のベルンシュタインだよ！」  
高くその手を挙げる。自分に酔っているその姿を、もし手に剣を持っていたら突き刺して殺してやりたいと思った。

沸き起こる喝采、我先にと手を上げる客達。

「強欲で身を滅ぼした赤の村ゼークトの忘れ形見だ！　金を積む奴にこれは売ってやるよ！」

その言葉で我を忘れた。

体の中を吹き抜ける炎の嵐が見える。煉瓦造りの広場に片手を付けて、動かない膝に力任せに力を入れて立ち上がれば怒りと痛みで体中が燃える様だ。

広場に手の平を付き力を入れた時に爪が割れた様な気がする。そんな瑣末、今はどうだっていい。少しの痛みなど気にならない。もし、自分が本当の男ならこいつらを皆殴り殺してやるのに。

「違う！　こいつ、詐欺師だ！」

叫ぶ声が自分の物だとエルケが気付くのに、然程時間は掛からなかった。

身目麗しい少年が、たった一人で業突く張りな商人と大立ち回りを演じている。そんな大袈裟な尾ひれのついた話が広がり、たった一言エルケが言葉を発したただけだったというのに、広場の野次馬があつという間に集まつてきた。

仁王立ちをしたままのエルケの背中で、汚い野次を飛ばし面白半分なのか囃し立てる声がうるさい。

その騒ぎのさなかで、やっとエルケは我に返った。

しまった！ 頭に血が上って口にした一言が、大変な事態を呼び起こしてしまった！

集まつた野次馬の数に、エルケは思わずたじろいだ様子を見せてしまう。

辺りを見回せば、忘れていた筈の力が入らない足が途端に震えてきた。どうしたらいいのだろう、今更逃げ出すことなんて出来ないではないか。

勿論、その隙を蛙店主は見逃さなかった。唾を飛ばしながら体を乗り出す。

「遊びじゃねえんだぞ！ 言いがかり付けてないで、子供は糞して寝てる！」

エルケの声を聞いて一度は口籠った店主だったとはいえ、今までずっと商売しているだけあって面の皮は厚い。舌の回った勢いのある台詞に歓声が続く。そうだ、引っ込め。と叫ぶ声に、負けるな、坊主。と責任感なく囃し立てるがなり声。

怒鳴り声で戻ってきた店主の台詞を聞いて、人混みの迫力に思わずたじろいでいたエルケの勢いが元に戻った。頭に血が上って、回りの声が簡単に聞こえなくなった。

言い返してくるならいくらでも罵倒してやる。負けてたまるか。

「こんな糞石！ そこら辺の山に行けばいくらでも転がってるよ！」

「はあ？ 子供のたわごとになんか構っちゃられないね」

糞と言われれば直ぐに糞と返す。今は少年と偽っているとはいえ、女ではありえない品の無い会話の応酬だ。

今朝まで声あまり出なかつたのに、なんて考えもしなかつた。無理に出した声は掠れて丁度少年の声変わり時期の様な声になっている。むしろ都合が良かった。

エルケは勢いに任せて、その指を先程のオパールに叩きつける。観衆の視線が揃ってその場に注がれた。

「この、オパール！」

決して名前を呼ばれた訳でもないのに、フロリアンがエルケの鋭い声に飛び上がる。

「大きさはいいけれど、深みがない！ もっと沢山の光が見えないと高くなつて売れない筈だ！」

エルケの出した値は店主の言い値の半分を下回つた。それでも十分に利益は出ているに違いない。その値を聞いて蛙店主は目を剥き、回りの客から「その値なら俺が買うぞ！」と言う声が続くも聞こえてきた。

エルケの主張は終わらない。目まぐるしく頭の中で昔教えて貰つたものを仕舞い込んだ引き出しを開けていく。

思い出せ、手に触れた感触。市場に出回る卸値と手間賃の相場。がめつい商人に騙されないように色々教えて貰つた筈だ。宝石の種類、見分け方。色の濃さに透明感。専用の器具を使わなくても十分に基本は押さえられるのだ、と言われた事を思い出していく。

オパールには沢山の遊色が見られる筈だ。その石で目視できるのはほんの少しだった。値段の割に天の星空の様に沢山の色で瞬く光がエルケの見る限りでは少な過ぎる。エルケが日常的に見てきたオパールと比べると天地の差で、まるで違う石の様だ。

フロリアンがエルケの言葉に大きく頷き、俺もそう思っていた、と叫んだ。とは言いながら、反身をエルケの体で隠している。ああ、本当の男なのに情けない。



ただの観客である回りの野次馬はもつともだが、一番の被害者になりかけたフロリアンはエルケの言っている内容が本当に理解できているのだろうか？ いや、分かってないだろう。確実に騙されかかっていた。

エルケの腕を掴むフロリアンの手を振りほどかずに、エルケの独壇場は続く。

「その指輪のスマラクトは偽物だ。何なら金槌で軽く叩けばいい。本物なら簡単に割れるだろうから、大損失だろうけど」

余りに長く叫び過ぎて大きく咳き込んだ。それでも叫ぶ言葉が止まらない。顔を紅潮させて、涙目になりながらエルケは続けた。

何となく思い当たる節があるのか、顔色一つ変えなかった商人の口元が大きく歪む。

「クリスタルは艶はいいけど磨きが足りな過ぎる！ きつと使ってる職人をけちつたんだ。ベルンシュタインなんて」

言葉を止めてエルケが睨みつけた石は、見たことのあるベルンシュタインよりも小ぶりでその姿の何もかもが違っていた。

人魚の涙？ いや、これは違う。自信を持って言い切る事が出来る。

「問題外だよ！ これは絶対に人魚の涙じゃない」

店主の手の平に転がった拳大のベルンシュタイン。

人魚の涙と呼ばれる奇跡の石はもつと大きくもつと赤く、それにもつと透明でもつと残酷だった。燃え上がった小屋、立ち上った炎。その時に見た怖い程の夕焼け、流れ出る血の色。

エルケが最後に人魚の涙を見た日は、全てが赤く染まっていたのだ。守る人、逃げる人、捕える人、殺される人、それに盗む人。あの時の人間は今のピロードの上に広がった石みたいなものだ。命の価値もまるで玉石混合だった。簡単に壊れて消えていった。

「この石は、屑だ。そんな値段には値しない」

目を逸らさずに蛙の店長を睨みながら言い切ったエルケの回りは、先程の喧騒も嘘のように静まり返っていた。誰も声を出さず、誰も

動こうとは思わない。

「何も知らないと思って、客を馬鹿にするな！」

若い少年と小馬鹿にしていた空気が変わり、詐欺の様な法外な値段をただの石ころに付けていた店主に騙される寸前だった客達からパラパラと拍手が起こる。それはさざ波のように広がり、辺りを包んで行った。

フロリアンの大きな声。

「ほら、やっぱり、俺はそう思ってたぞ！ この詐欺店主め！」

こいつは俺の恩人だ、そう小芝居の口上の様にフロリアンはかん高い声を上げ、エルケの行動を称賛して見せた。そしてエルケの布切れを巻いた方の手首を掴み、高々と掲げて見せる。その引っ張る強さにエルケの体が斜めになった。

フロリアンの姿に後押しされた様に遠慮がちだった拍手が割れる様に大きくなり、エルケを小突いてくる手が増える。口汚い称賛の声、娯楽を求めていた街人が拍手を送った。

蛙に似た店主はその騒動に隠れて、早々に店を畳みエルケに罵声を吐き捨てる人と人混みの中に消えて行く。いくつか布の間から転がり落ちた安物の石　とはいえきつと結構な値段に違いない、は押し寄せる足の間を縫って見えなくなつた。

「君、名前はなんというんだ？」

よく見ればまるで天使の様な美しさではないか、フロリアンは両手を高く掲げ大袈裟にエルケの顔を讚え始めた。それを聞いて、エルケの背筋に寒いものが走る。

「天使は両性具有だと言うが、君はまさにこの地に舞い降りた天使だ！」

ただその場の雰囲気で盛り上がっていた野次馬が内容もよく分かわずに、喝采した。無責任に盛り上げないで欲しいのに。

どうやらこのフロリアンと言う男はこのエーゲルの中でもそれなりの地位を持っている人間らしい。とてもそうは見えないけれどそうらしい。エルケは今にも愛の告白に変わりそうなフロリアンの独

壇場から逃げ出したいくて辺りを見回した。

カヤの姿はない。こんな所へ勝手に来て、待ち合わせの場所からいなくなったエルケをきつとカヤは心配しているだろう。合流したら開口一番にまず謝らなくてはいけない。

俯き考え込んだエルケの手首をまた遠慮なく掴み、フロリアンは熱っぽい口調でしつこくエルケの名前を聞いてくる。名前だけ教えたら逃げられるだろうか。そう思ったのが運のつき。

「え、エリク」

「エリク！ 君は私の為に舞い降りたのだ！」

彼は赤面必須の口調でそう続けると、もう聞くのも躊躇う程の美辞麗句を並べ始めた。そもそも先程と全然口調が違っている。

一人エルケの事で盛り上がっているフロリアンを放置して、回りは勝手にワインやビールを飲み歌い始めていた。中央広場は祭りの渦だ。ただエルケを抜かして。

うわ、本当に逃げ出したい！ 強く掴まれた手首を引き、逃げ出そうにも動かない。無理に立ち上がった所為で膝が笑い、体中が痛かった。咽喉も少しずつ痛みを感じている。

「私の心ばかりのお礼だ、君を屋敷に招待させてくれ」  
「結構です」

近づいてくるフロリアンの顔を拒絶して、俯いたエルケが即答した。これで何とか諦めて欲しい。そう思ったのもつかの間、フロリアンが思わぬ提案をしてきたのにエルケは顔を上げる。

「君を私のお抱え鑑定士として雇いたいのだよ！ さあ、来てくれるね！ 勿論、報酬は」  
「悪いな」

フロリアンの報酬の話に食いつき、エルケが話を聞かせてくれ、と答える前に低い声が割って入った。エルケの手首を掴むフロリアンの指上に手を置き、エルケの掴まれて赤くなっていた手首を解放してくれる。

エルケの背中を完全に包む様に上から覗き込む大きな影は、表情

無くフロリアンからエルケを離してそのまま自分の肩に担ぎ上げた。ヤンの肩よりも少し低い所で、フロリアンが大きく口を開け呆気に取られている。

ああ、大事な資金提供者なのに。まだ詳しい話だつて聞いていないのに。

「ヤン、下ろして！」

軽く宙に浮きあがったエルケがエルケの話を聞こうともしないヤンの大きな背中を叩いた。まるで大きな小麦袋でも叩いている様だ、全然痛手を与えている気がしない。

しかもそのままの体勢でヤンは直ぐにフロリアンに背を向けた。

ここから立ち去る気なんだ。

「ちょ、ちよつと、ヤン！ 僕、まだ話が  
「戻るぞ」

エルケの制止を聞いてか聞かずか、ヤンは祭り騒ぎになっている広場の中をもともせずに入つて行つた。

たまに足元に転がつて来る酔っぱらいを足や片腕で押し退け、エルケの望みとは裏腹にどんどん喧騒から離れて行く。

何度か、背中を叩いた。それでも動じている様子を全く見せないヤンに、エルケは何度か罵声を吐いて諦めて力を抜いた。

民家の建ち並ぶ裏手、高い壁と日差しの射し込まない路地は古い猟師町だけあつて裏手まで整備の手が伸びずに薄汚れている。鼻につく魚の腐った臭い。ヤンがエルケをやつと下ろしたのはそんな場所だつた。

ここから一人で旅をする。問題になつている路銀が解消される寸前の介入に、喧騒から離れ人通りの無い路地に下ろされるなりエルケはヤンに噛みつく。

「僕はまだ話があるつて言った！」

疲れの所為か、上手く立っていられない。路地の壁に背中を預け、エルケは正面間近に立つヤンを下から睨みつけた。汗に塗れている帽子を頭から取ると、大きく肩で息をする。

折角の好機だったのに。これで金を稼ぐ事が出来れば、独り立ち出来る。誰にも迷惑はかけずに、目的の場所まで一人で旅をする事が出来るのだ。誰に文句を言われることもなく、それに誰に真実を探られることもなく、勝手きままに出来る。

それなのに

「どうしてあそこから連れ出したのさ！」

噛みつくエルケを見下ろしたままヤンは返事をせず、それでいてエルケから視線を離そうとはしない。真っ向から降りてくる鋭い視線を負けじと受け止めて、エルケは踵を返そうと足を一步踏み出した。直ぐにふらつく。

だが直ぐに腕が伸びて、エルケの体を支えてきた。

「離してよ！」

離すと立っていられないのを知っていて、ヤンの手を振り払った。案の定、エルケの体がよろけて壁に肩をぶつける。こんな立つてられない体で、一体どうしたらいいんだ。悔しさで目の前が滲んだ。辿りつかなくてはいけない場所はまだずっと遠く険しい。まだ完全に諦めていないだろうエルケを閉じ込めていたビューローの主はエルケの目的地の近くに網を張っているだろう。

金があれば傭兵が雇える。馬車も借りる事が出来るし、宿屋にも泊まる事が出来る。

「僕には金が必要なんだ、だから」

「……エリケ」

エルケのふらついた体へ大きく覆い被さり、ヤンが突然名前を呼んだ。

見上げると頭一つ以上大きな体に、エルケはすっかり閉じ込められている。半泣きで俯くエルケの両耳の横にヤンの両腕を置かれ、唇が触れそうな程近くに顔を寄せてきていた。

ああ、まるでこの路地裏の様だ。警戒心無く、服を着ていても分かる程筋肉質なヤンの腕を見てエルケはそう思う。大きな壁に囲まれていると、エルケには何故ヤンが近づいてくるのか全く分か

らないのだ。ただ、驚いた。息を飲むと、今にも見開いた瞳から零れ落ちそうだったエルケの涙が止まった。

鼻先が付くのではないかと思える程ヤンは顔を近付けていた。が、何かを睨みつけている視線はエルケの方を向いておらず、路地の奥に向けたままだ。

その視線の先に何かがあるか知りたくて横を向いても、今の体勢ではエルケにはヤンの腕しか視界に入らない。腕の中から出ようとすると、ヤンに短く、動くな、と窘められた。

誰かがいる？ そう気付いたのは、路地に潜めた足音がエルケにも聞こえたからだ。身を離れたヤンがエルケを背に庇い、正面を向いた。

大きな背の向こう側で数人の男達が剣を片手に近づいてくる。

こちらを見ている視線に面白半分な感情は全く感じられず、偶然エルケ達を見つけたのではなくエルケ達を完全に獲物として狙っているのだという事が分かった。動かない足を引き摺って後ろに下がれば、ヤンが背中を向けたまま後ろ手で壁側に寄る様に合図してくる。その姿はまるで盾の様だ。逃げる事もままならないエルケを庇い、この場で終わらせる気らしい。

ヤンの邪魔にならない様にエルケは慌てて壁側に寄る。肩を強く打ったが、目はヤンの背中から離さなかった。心臓がうるさく恐怖で指が震えても、目だけは瞑らない様にしようと自分に誓った。

「エリク、詳しい話は後で聞く」

そう言った後、聞こえてきた怒声と悲鳴。それに激しい物音にエルケは肩をより壁に押し付けると小さな悲鳴を上げた。

狭い路地、高い壁に囲まれた小さな戦場。

多勢に無勢な筈なのに、エルケの前に立ち塞がった背中は一向に怯む様子を見せない。むしろその背中ではエルケの盾になった事を楽しんでいよう。エルケはその離れて行くヤンの背中へ声をかける事を思わずためらった。

剣を手にした相手の方へ素手のヤンが無言で躊躇いなく足を進めると、その長過ぎる沈黙に耐えられなくなった先頭の男が切りかかって来る。僅かにしか射し込んで来ない日の光が偶然その剣に当たり、目が眩んだ。

ああ、痛い！ 反射的に意味無く片手を伸ばしてしまったエルケの前で鈍く何かが砕けた音がして、エルケは肩を竦め飛び上がる。あまり聞いていて気持ちのいい音では無かった。どこかの骨がひしやげた音だ。辛くて奥歯を噛む。

壁に背を付けたままだと、路地が狭いこの場所からエルケには何が起きているか目視する事は出来なかった。

エルケの足元にその男が握っていたらしい剣が、煉瓦の道を削り火花を散らしながら滑り込んでくる。エルケは自分の足元にやってきたその剣を、震える足で思い切り踏みつけた。金属が打ち付ける嫌な音が耳に突き刺さる。

逃げる事も共に戦う事も出来ないエルケが何か手伝える事と言ったらそれくらいだった。この剣は相手側へ戻してなるものか。それだけしか考えないようにして、勇気を振り絞り幾人もの男達と対峙するヤンの背中へ目を凝らす。いつでもヤンの指示に従えるように。

衝撃音と衝突音。だけど無言の交戦。無駄のない動きでヤンは腕を振り回し、拳か肘で的確に相手の顎か腹を捕えている。一斉に掛ければたった一人の相手だというのに、この狭い路地では囲む事も

エルケの方へ切りかかる事も出来ないのだ。

男達がヤンの隙を見計らって背中側に回ろうと躍起になっているのに気付く、エルケは自分の後ろ側を振り返った。

そうか、この路地裏の奥は袋小路になっているんだ。だから彼らは後ろからエルケを捕える事が出来ないらしい。見上げる壁に見える窓の中で鉄格子の付いていない窓は無く、ここの表はどうやら倉庫らしかった。

相手の狙いはまさにエルケだった。その原因は恐らく先程の商人との大立ち回りに違いない。あれだけの恥をかかされて、あの商人はイーゲルでの商売がもう出来ないだろう。その腹いせなのだ。

ヤンはエルケの浅慮に巻き込まれただけだった。気性の荒い商人に立て付いたエルケが悪いのだ。もしかしてヤンがエルケを急いであの場から連れ出し、ここへ連れて来たのは理由があったのかも知れない。走って逃げる事が出来ないエルケを庇うには、ここしかなかったのだ。

ヤンの足元に見える幾つもの体は脱力していて、土埃が付いている。それでも血は見えなかった。圧倒的なその状況というのに怖くず一人駆け込んできた男の腹に膝を埋め再起不能にした後、ヤンはその頭を掴み壁に投げ付けた。

鈍い音と激しく咳き込む声。何故かその瞬間、絶対に目を逸らさないと決めたのにエルケは、思わず目を閉じて両手の平で顔を覆ってしまった。どうしても見えてられなかった、余りにも辛すぎて。

振るわれる暴力を見たのは一度や二度では無い。何度も殴られ、痛めつけられる場に居合わせた事はあった。勿論、その暴力が自分の方に向いた事もあったのだ。

それでも、自分の所為で他人が巻き込まれるのを見るのは辛い。ヤンだって、相手側程では無いにせよ無傷では無いのだ。もう止めて、また叫びそうになった。

店主の冒頭に腹を立て、後先考えず知識をひけらかせた。その知識が認められたと自惚れて、状況を察知したヤンがエルケを助けに



来てくれたのに、エルケは自分勝手にヤンを責めた。何もかも考えなしな自分の所為だ。

一度目を閉じてしまうと、もう目を開けて背中を見る事は出来なくて、剣の上に乗せた足はそのままエルケはその場にしゃがみ込んだ。心の奥で「もう止めて」と絶え間なく叫んでいる声が唇を破って飛び出してしまっそうで。

顔を覆っていた震えている手を拳にして、それを固く握り締める。

ああ、また何か折れる音と呻き声が聞こえる。終わると思っても、まだ続く。もう止めて。お願い、もう止めて！ もう嫌だ。

もう 耐えられない。

「ヤン、僕が謝りに行くから！ もう止めて！」

エルケは叫ぶと、足を引き摺りながら離れたヤンの背中に半ば飛び上がる様にしてしがみ付いた。

前に出ると状況がよく分かる。ヤンの目の前に立っている男はもう一人しか残っていないかった。擦り傷と切り傷が浮かぶヤンの握り締めた手には、一人の男が呻きながら襟首を掴まれぶら下がっている。

エルケはそれを間近で見下ろすと、ヤンの腕にしがみ付き小さな悲鳴を上げた。思わず目を逸らす。それでも、逸らした先には気絶した男が何人も転がっている。ああ、なんて辛い。

咄嗟に目を瞑りたくなる衝動を耐えて、エルケが上を見上げるとヤンが呆れた表情をしていた。苦虫を噛み潰す表情を浮かべると、吐き捨てるように返される。

「馬鹿か」

襟首を掴んでいた男は一度呻き、そのまま気を失った。ヤンはそれをまるで塵の様に男達が累々と転がった中でも空いた場所へ投げ捨てる。その場所に丁度転がっていた違う男の靴に気を失っている男の頭が当たり、首が向こう側にだらりと力無く垂れた。

それを見てエルケは狂ったように叫ぶ。今日は全くなんで日だ。

咽喉を酷使してばっかりじゃないか！ 最悪だ。

「駄目だ、もう駄目だよ！ 僕が悪いんだ、僕の所為なんだ。だから」

「謝れば、許してくれるってか」

また舌打ち。綺麗事だな、そう言い返すとヤンはもう一人残った男へ足を進めた。砂を踏む音が大きく聞こえてエルケはまたヤンの前に回り込む。

「駄目だ、もう止めて！」

そう、即叫んだ。

残った男は既に刃向かう気を失っている様に見える。剣の柄を握る手が細かく震えているのだ。

そのままヤンの腕を掴み ぶら下がってたが、エルケが首を振りながらその男を振り返ると、騒動で気付かなかったけれど、先程広場でしつこくエルケに声を掛けてきた男だった。

決して好印象の相手ではないとはいえ、傷付けていい相手でもない筈だ。だって、震えてる。だって、怖がってる。それなのに。

「早く！ 早く行って下さい！」

「エリケ」

振り払える程の力だった筈だ。

掴む指の力は実際には女の物で、しかも恐怖で殆ど指には力が入らなかった。エルケが両手で強くしがみ付いても、ヤンの腕は太いそれに名前を呼んでくるその声は明らかに怒っていた。そんなヤンなら簡単に、エルケを壁側にでも投げる事が出来た筈だ。

でも、振り払われなかった。それを信じた。

「お願い！ 早く逃げて！」

これが一番いい事なのか？ 正解なのか？ 必死なエルケにはそんな難しい事は考えられなかった。

これ以上ヤンが自分の為に暴力を振るうのが耐えられなくて、それ以上にそんな事をさせた自分がいたたまれなかった。

そうだ。一番は自分だ、綺麗事を言っただけでも一番はヤンじゃな

い。そんな自分勝手な考えに反吐が出た。本当に今日は最悪の日だ。

「……あ、ありがとう！」

エルケの声に戸惑って、それでも男は剣を投げ捨てると直ぐに背中を向けた。

ヤンがそれを追おうと若干手を上げた様な気がして、エルケは必死に腕を掴んだ指に力を入れる。絶対に離さない、そうそれだけを考えてただ必死だった。

遠のいて行く足音。完全に足音が消えると、ヤンの舌打ちとエルケの安堵した溜息が同時に重なる。

「お前な」

文句ありげなヤンの声がエルケの頭上から聞こえた。

エルケはヤンの物言いたげな声を聞いて、掴んだ腕をゆっくりと離す。全身を使って押し留めていた腕を見下ろせば、ヤンの体に見えるのは薄く付いた切り傷に擦り傷だ。

拳に滲む血と破れた服を見ると、今更ながら恐怖でまた震えが込み上げてきた。

「ああいう手合いを逃がすと、碌な事にならねえぞ」

何度も続く溜息と苛立ちに、エルケは震える体を自分の両手で抱き締め頂垂れた。

こういう時はなんて言えばいいのだろう。ありがとう？ ごめんなさい？ 違う、そんな事じゃない。俯いたエルケは下唇を噛んで大きく首を振った。なんて言えば、伝わるんだろう？

垂れたままのヤンの拳を俯き見詰めたまま、エルケはもう一度大きく首を振る。

掠れ、焼けつく咽喉の痛みに耐えながら振り絞った今一番言いたかった言葉は随分と投遣りな口調になり、エルケは唇の向こう側に追いだしてしまっただけから思わず唇を噛んだ。

「僕はここで、エーゲルで別れるから。ヤンがそんな事までしなくていいんだ」

結局、あれから二日間、部屋に籠ったまま過ごすことになった。

不貞腐れて、と言う訳ではなくて何と無く出るタイミングを失った。カヤが届けてくれる食事を食べながら、エルケの使っている部屋に置き忘れていた前の住人の書いたレシピノートなんて物をずっと見ていた。

いちじくのコンポート。りんごのジャム。甘い蜂蜜菓子、香ばしい焼き菓子。肉汁滴る表面に蜂蜜をたっぷり塗ってローストした鶏肉料理。塩漬けた魚の美味しい食べ方。

たまに子供が描いたような小さな絵があつて、それがささくれたったエルケの心を少し癒してくれた。

窓際に腰掛けて外を見ると、空の色を写して青く輝く湖が玩具の様な街並の間に見える。大きな教会と屋敷だけが窓の景色の中で無駄なだけで、それ以外は十分絵画の様な景色だった。

風が丘を吹き抜けると、その度に花の香りを運んで少し開けてある窓から忍びこんできた。

この街は嫌いじゃない。どうせ少しでも滞在するのなら、こんな街がいいのかもしれない。一向に晴れない気持ちにそう言い聞かせて、エルケはレシピノートの文字を指で辿る。

震動が触れた気がしてエルケは顔を上げた。一階の扉が開けば、窓際に腰掛けたエルケの尻には直に物音が響く。その度にエルケは慌てて窓際から飛び降り、姿を隠すのだ。

聞こえる声は大体がヤンとクルトだ。扉を出るなり、絶え間なく話していたクルトの会話が一旦止まるのにエルケは気付いていた。窓を見上げているのだ。エルケはあの日から一度も二人の間に姿を見せていない。

幼すぎる反応だ。理由なく癩癩起こすのは子供によくありがちな行動だから。それでも、内心感謝こそすれど面白くないのだ。ああ、

本当に子供だ。情けなかった。

あの路地裏で、エルケが投遣りな口調で唇から解き放した一言に、ヤンは感情ない視線を俯いたままのエルケへ下ろし「金はどうする」とだけ言った。引き止める事も、エルケがそう言いだした事にも何も思わない様な口調で。

何も引き止められるのを期待している訳じゃない。そうは思っ  
いても、無関心なヤンの口調に正直苛つく感情を抑えられない。随  
分と自己本位な感情だ、そう分かっていた。

何も考えてない。じゃ、恰好が付かなかった。それで先程のフロ  
リアンという男が話していた事を思い出して嘘を見繕った。下手に  
長く言い訳をすると、きつとヤンには見破られるだろう。そう思っ  
たから「稼ぐよ」とだけ答えた。

嘘じゃない、全然嘘じゃない。あの話はまだ立ち消えになってい  
ない筈だ。ヤンが商人に狙われているのを助ける為にエルケを連れ  
去ったから、話は途中で止まっている筈だ。そう自分に言い聞かせ  
た。

それから少しの間、返事が無いまま沈黙は過ぎて、おどおどと見  
上げたエルケの真上でヤンは何か物言いたげな表情を浮かべていた。  
それでも何も話さない。

「いいよね」なんて、言っただうする。そう思いながら、躍起にな  
った言葉は絶え間なく唇から零れて行く。自分の後ろめたさで胸が  
潰れそうだった。

「ああ」とヤンが答えた。どうしてか、寂しくなった。これでヤン  
ともクルトともおさらばできる。カヤと離れるのは少し悲しいけれ  
ど、それでも彼らはいつも通りの日常に少なくとも戻れるのだ。エル  
ケの子守をすることなく。

これが最適な行動だ、誰にも迷惑を掛けずに旅を続ける。大体、  
無理だったんだ。性別を偽り、過去と旅の理由を隠しながら旅を続  
けるなんて。ヤンの顔を見上げて思わず「ごめんなさい」と「あり  
がとう」と言いたくなるのを耐えた。奥歯を噛んで、必死だった。

今ここでいい子の顔をしてどうする？ 彼らとはもうここで別れるのに。

ヤンはそのまま何も聞く事もなく、勝手な事を言っているエルケを責める事もなく、ただいつも通りに肩にエルケを担ぎ広場で途方に暮れていたカヤの前まで連れて行ってくれた。それがあの日の顛末だった。

本当に最悪の日だったのだ。きつと、エルケよりも喧嘩沙汰になったヤンや探し回って不安になったカヤの方がずっと。

レシピノートを最後まで 結構厚かった、読み終わり、最後のページに描かれたつたない文字を読み上げながらエルケはルツツと荷台の立てた土埃を見送っていた。今回は何を取引しているのか、ヤンとクルトは毎日のように家を出て、夜遅くになってから帰ってくる。商品と呼ばれるものは何も持たないで彼らは出掛けるのだから、きつと市場で何か交渉しているのかもしれない。

時間的にカヤがそろそろ二階に上がって来る頃だった。

エルケはレシピノートをベッドの薄い布団の下に隠し、日が昇るにつれ日差しの暑くなってきた窓を少し大きめに開ける。枷を失って一気に吹き込んできた風がエルケの頬と髪の毛を揺らして、エルケはその赤金の髪を片手でかき上げた。

丁度、小さな合図の後に部屋に籠って三日目になったエルケを気遣うカヤの声が聞こえてくる。

エルケはここで別れると宣言しつつも未だ世話になっている事を少し後ろめたく思いながら、廊下へ続く扉を開けた。

「元気？」

毎日、カヤはそう聞いてくる。熱でも出しているのだと思っっているのだろうか、閉じ籠った二日間ずっとカヤは扉を開ける度にそう聞いて来た。

「元気だよ、ありがとう」

カヤにだけは少し素直にそう言えた。姉に少し似ているからかもしれない、と思う。姿形は全く違うけれど、琴線に触れてくる奥底

がどこか懐かしいのだ。

「そう。何か食べる？」

「さっき、パンとシチューを食べたよ」

エルケはそう言っつて首を振る。

ここで別行動をしようと云ったエルケに一番反対したのはカヤだ。言い返す隙も与えなかった。ただ強い口調で「駄目よ」とだけ言っただ。そして、直ぐに「無理よ」と泣きそうな口調で続けた。それからずっと、まるで親鳥の様に閉じ籠ったエルケの世話を甲斐甲斐しく焼いてくれる。

元々世話好きらしいカヤは、食事を作ったり、体の不自由なエルケの手助けをするのが余り負担にならない様だった。憎まれ口を叩きながらも、クルトやヤンの食事もきちんと用意して母親の様に振舞っていた。洗濯も掃除も毎日欠かさなかった。

今にも家を飛びだしそうだった勢いのエルケに、エーゲルにカヤ達が滞在している間までは住居を共にする、と説得したのもカヤだ。「出てく、つて言うならいいでしょ。男の子なんだから」そう苦笑しながら言ったクルトに雑巾を投げ付けて、例え男だといえ不自由な体ではおいそれと外へ出す訳にはいかない、とカヤはエルケの首を握った。痛みに倒れるかと思っただ、それぐらい強い力だった。

「揃いも揃って。まあ、勝手にしなよ。俺も勝手にするからさ」そう言っただクルトの顔へ次は花瓶が飛んだ。クルトはそれを受け止めて。花瓶の水は被っていた、片手を上げると寝室へ消えて行った。濡れたまま。

ヤンはその間、一言も発しなかった。相変わらず何かを考え込んでいる様な、それとも苛立っている様な、そんな難しい顔をしたまま壁に背中を預けて立っていた。

「エリク、今日の外は凄く暑いだよ」

カヤが額から垂れてくるエルケの汗を指で拭いた。昨日、カヤに渡された短い袖の服を着た方が涼しくていいんじゃないか。そう言われているのは分かる。

「うん、そうみたいだね。風が気持ちいいもの」

そう言って、エルケは上手くはぐらかした。

袖が短くなると手の甲に巻いている布切れが目立つだろうし、どうしても細すぎる腕は痩せているとはいえ女性を思わせるだろうから、剥き出しにするのは避けていた。それに、薄着だとうしても胸の辺りが気になった。

汗が噴き出ているのを知っていて、エルケは袖の無い上着をシャツの上に着込んでいる。少し大きめの上着は厚手で傍目どころかきつと抱きついたとしてもエルケの体格に気付く事は無いだろう。暑い、確かに暑いけれども。

汗を流していたエルケの顔が赤かったのか。カヤが窓をより大きく開け放ち、

「水を持って来るわね」

とエルケの部屋を出て行く。次第に遠くなる軋む階段の音にエルケは肩で大きく息をして、窓際へ上半身を出した。カヤは優しい、それでも息が詰まった。優しくして貰って、そう思うのはおかしいのに。

汗まみれの体に、生温いとはいえ吹き付ける風が心地いい。仰け反り、より一層上半身を出せば解放感に胸が震えた。ここで全部脱いで風を思う存分浴びる事が出来たら！

勿論そんな事は出来ないけれど、考えるだけで涼しくなるような気がしたのだ。何もかもを全部忘れなくなる、絶対に出来ないのを知っていてそう思う。

「エリク」

突然、窓下から聞き慣れない声が聞こえる。遠慮がちなその声は窓から今にも転がり落ちそうなエルケを案じていて、エルケは慌てて完全に気の抜けた表情を改めると体を窓外から引っ込めた。

階下の少女はまるで宮廷の姫君の様に、少し薄汚れたスカートを広げて挨拶して見せる。

「こんにちは、今日も暑いね」



本当に！ この厚着には吐き気がする程だ。

窓際にいるエルケを眩しそうな表情で見上げ首を傾げているこの娘は、確かこの家の貸主の娘だった筈だ。初日に会ってから見ていなかった顔に、

「こんにちは、リリー」

と上手く表情を作れずにぎこちなく答えると、エルケは小さく頭を下げた。

愛嬌のある表情を隠さない子供臭さと、無理に大人っぽく見せようとしているのが同居する少女だ。一生懸命背伸びしようとしているけれど、もしかしてエルケと同じ位の歳かもしれない。やはりこの年齢位の女は肉付きも良く血色もいい方が女らしく愛らしく見えるのだ。

まじまじと顔を眺めてくるエルケの視線に耐えかねたのか、それともただ単に今日の日差しが暑過ぎるのか。頬を紅潮させて彼女はエルケから目を逸らした。

それからリリーは手持無沙汰にスカート脇を掴み、エルケには見えない埃を指先揃えて払うと、

「ね、今お話しできるかしら？」

と窓から顔を出しているエルケを見上げてくる。

反射的に、何故か家の前を通る先程ルツツと荷台の消えた向こう側へ視線を移した。何の影もない。当たり前だ、さっき行っただけりなのだから。そうだ、戻って来る筈は無い。

外に出るのを誰に咎められた訳でもないというのに、何と無く後ろめたかった。

それでも部屋を出ようとはしないエルケを心配しているカヤに少しでも安心して欲しくて、窓向こうへ、ちょっと待って、と答えるとエルケは久し振りに階段を下りた。

暗く狭い階段は、足元が不自由なエルケにはむしろ逆に都合が良い。体の重心が崩れても、下に転がり落ちない限り手摺も壁も十分に支えになるから。

足音を忍ばせて一階に下りると、水の入ったカップを手にしたカヤと鉢合わせた。手に持った瑞々しいオレンジが乗った皿。どうやらいつまでも上に上がって来なかったのは、これの準備に手間取っていたらしい。

きつとオレンジは井戸の水で冷やされている。エルケには分かるカヤ、ごめんね。エルケは心の中でそう謝った。

「出掛けるの？」

不安そうなカヤの声。

「ううん。リリーが来てるから、直ぐ外で話をしてるね」

それを宥めるように、エルケはカヤの手に持ったカップの水を飲み干した。

「暑いから、日陰でね」

まるで心配性な母親の口調だ。分かってるよ、そう言ってエルケは扉を開ける。閉める寸前の不安そうなカヤの顔がどうしても目に焼き付いて、何故そんな顔をするのか。不思議で仕方無かった。

なんて高い天井と、なんて金の掛かった内装なんだ！　口を大きく開けたまま、エルケは天を仰いだ。

正面の扉の無い壁には、とてつもなく大きな絨緞がタペストリーとして飾ってある。下手すると自分が今毎日を過ごしている部屋の広さよりも大きいだろう。

金のポールに掛かるそれは深い青の湖と深い緑の山々だった。ああ、エーゲルの街だ！　そう、直ぐに分かる。　エルケは溜息を付いて見上げた。美術品の良し悪しが分からなくても、エルケの見るそれは息を飲む美しさなのだ。

「ああ、エリク」

感動の余りにリリーが名前を呼んできた。素晴らしいわ、そう言いたいのだろう。エルケはリリーが上げた感嘆の声に無言で頷くと、またその絨緞に見惚れた。

壁の一部から見上げた天井まで、緻密な絵画は続いている。

今にもこちらへ手を伸ばしそうな迫力と、慈愛に満ちた微笑みを浮かべる天使が二人。何を求めているのか、それとも誰かを助けようとしているのか、片手は廊下の奥へと伸ばされていた。だが、長々と見ていて目が耐えられる内装はその二つ位だ。

それ以外は、眩し過ぎる金、どぎつい色の薔薇、多過ぎる天使。

見回す先はそんなものばかりで、どれだけ財産があるか、内装だけで威圧しているように見えた。はつきり言つて、一貫性が無く悪趣味だった。邸の主人の趣味を疑わざるを得ない程に。

エーゲルの中央広場真横にあつた無意味な程に大きな教会と、趣味の悪い大きな屋敷。

その屋敷が実はこのエーゲルの役人であるフロリアンの邸宅だと分かったのは、つい先程の事だ。

リリーと話を始めたのもそこそこに、現れたフロリアンの馬車

彼は乗っていないかった、でエルケはこの邸宅に連れて来られていた。その時一緒にいた、リリーも一緒だった。

フロリアンの友達がりリーの友人でフロリアンがりリーの友人と丁度広場で出会ったエルケの話をしている時に偶然居合わせたリリーがエルケの話を　なんていう少々複雑な説明を馬車の中でリリーに教えて貰ったものの、正直リリーが話してくれる耳からの情報だけでエルケがその関係を整理するのは困難を極めた。要はよく分からなかった。

雇い主になる予定のフロリアンが怪しい人間でさえなければ、きっとカヤも他の二人も心配、もしくは文句はないだろう。

そう安易に考えて、エルケはりリーと共に馬車へ乗り込んだのだ。そう、凄く簡単に考えていた。

「どうぞ、足元にお気を付け下さい」

玄関の扉を恭しく開けてくれた男性の使用人が奥へ進むよう言葉少なにエルケを促して来る。

促されるまま、意を決してエルケが前へ足を進めようと振り返ると、同じく横で大きく口を開けて絨毯を見上げていたリリーが不安げな表情を浮かべてエルケを見ていた。

どうやら邸の規模の大きさに今更怖気づいたらしい。ちよつと友達を紹介、リリーはそんなつもりだったに違いない。

それとも、そう思う様に上手く言い包められていたのかもしれない。今日、エルケを招き入れた男に。

貴族というものは得てしてそういうものだ。口が上手く、信用する事が出来ない。

どちらにしてもこれから先行く物の事を考えると、ここでエルケが怖気づいている訳にはいかなかった。ともすればリリーと同じ様に足が竦みそうになる自分を、エルケは心の中で叱咤する。

いくら偽りとは言っても、今は男なのだから。目的のためにはしつかりしなくてはいけない。一人で旅を続ける覚悟があるならば、それくらいは我慢しなくてはいけないのだ。

事実、どんなに足が竦んだとしても。

「リリー、僕行くよ」

革製の長靴は、高価なタイル床の上では歩き辛かった。引き摺る足に少し嫌気がさしながら動こうとはしないリリーへ背を向けると、小走りの足音が直ぐにエルケの後ろを追って来る。

足音を聞いて安堵した。良かった、一人にされなくて。ああ、どうしても女みたいな弱気が消えてくれない。腹が立つ。

リリーは数歩先を行っていたエルケの右腕にしがみ付き、皮と骨だけのエルケの腕を思い切り掴むとそのまま腕を強く握り締めた。痛い。声無く飛び上がった。なんだって最近、周りにいる女はこんなに力が強いんだ！

思わず振り返って、リリーを睨もうとして分かった。腕を掴まれて気付いた。腕を掴む指が、細かく震えていること。怖いんだ。

だから痛かったけれど、エルケはどうしてもリリーの手を振り払う事が出来なかった。

慣れないタイルの床ではエルケは一人で上手く歩けずに、支えが無いままではどうしても上半身を左右に揺らしながら歩いてしまうから。長く続く廊下は全く終りが見えなくて、正直嫌気がさしていた所だったんだ。仕方ない、リリーに腕を貸してあげよう。

リリーがエルケの腕を強く掴んだのは、ただ単に置いて行かれたくなかったからなのかもしれない。それでもエルケは、リリーの腕を支えにし素直に頼って、二人で並んで使用人の後を追った。

エルケだって、実は貴族の邸宅に出入りした事は数えるほどしかなく、正直少し気負けしていた。だから二人で良かった、なんて実は少し安心していたのだ。顔には出さないけれど。

「ごめんなさい」

仲良さげに腕を組んだまま、使用人の後へ付いて少し歩くと、リリーが突然小さな声で謝ってきた。

その意味が知りたくてエルケが横を振り返っても、リリーは俯いてその表情までは読めない。騙す様にして馬車に乗せてしまった責

任を感じているらしい、ということだけは分かった。

確かに少し話とは言っただけ、フロリアンの邸まで連れて来られるとは思ってもしなかった。とはいえ、実際馬車に乗り込んだのはエルケの意志だ。謝られる理由などない。

むしろ話が早くて助かった、とも思っていたのだ。出来るだけ早く、一人で動けるようにならなくては。妙に焦っていた、それが足を引っ張る事になるのを気付かずに。

「いいよ。僕もフロリアンとちょっと話したかったんだ」

気にしないでいいよ。自分も一杯一杯な筈なのに、随分と気を使った物言いをしてしまう。

エルケは内心、自分の面の皮の厚さに呆れていた。どうやら男装も長く続けば一応は板に付いてくるらしい。但しエルケの場合、口調だけが一丁前にちよつとした男並みで、態度だけは殆ど伴って来ていないのが難点だけだ。

未だ、どちらがしがみ付いているのか分からない程に、エルケとリリーは傍に寄り添って歩いていた。その姿はまるで少女が二人迷い込んだように見える。

廊下を歩くと踵が床にぶつかる音が響いていた。それが何と無く緊張感を煽る。

宝石にも負けない美しい装飾がなされた扉が並んでいるのを見ると、ふと、一体邸の部屋数はいくつあるのだろうか？ という疑問が湧いた。

気を紛らす為に、もし専属の鑑定士になったらこの邸に住む事になるのだろうか？ それともどこか家を用意してくれるのだろうか？ 等と余計な事も考えた。でも、楽しみながら思い付くのはそれ位だ。

そんな美味しい話は無いのだ。だから気を緩めてはいけない。

リリーが頂垂れた。

「ここまで大袈裟になるなんて思わなかったの。フロリアン様がお話している男の子がエリクだって分かって。私はエリクと友達だっ

て、言ってしまったの」

振り返ると見える唇を強く噛んだリリーの顔。今にも泣きそうだった。

何か言って慰めるべきなのだろうか？ そう考えながら返事を悩んでいる間にも、廊下の突き当りにあるより大きな、より目立つ扉は目の前に迫ってくる。

振り返りリリーを見る余裕なんてものはエルケには無く、大きく開いた扉の向こうでフロリアンが大きく手を広げているのを見てエルケは咽喉に溜まっていた唾をごくろり、飲み込んだ。

「やあ、エリク。僕の天使、歓迎するよ」

大袈裟な相変わらず芝居染みた素振り、フロリアンがエルケに向かって両手を広げている。

エルケは頭を下げるだけに留めたが、顔を上げててもフロリアンはまだ両手を広げたままだった。どうやら胸に飛び込んできて欲しい様だが、それだけは丁重にお断りした。

エルケはフロリアンが勧めてくれる前でもお構いなしにフロリアンの腰掛けるテーブルの向かいに腰掛け、部屋の入口に立ち竦んだままのリリーを直ぐに横へ呼んだ。何と無く無性に嫌な予感したからだ。

今まで、勘が当たったなんて事は無かった。それでも何と無く空気が荒んでいる気がして、リリーを帰すべきか少し悩んだ。選択を間違った。部屋に入って、少しそう思う。やっぱり安易に考えるべきじゃなかったんだ。今更後悔しても遅過ぎるけれど。奥歯を噛んだ。

リリーは足が縫い止められた様にそこから動かなかった。無理にこちらに来るよう促さず、エルケは正面を向く。そのまま腰を落ち着けたエルケを見ると、わざとらしく落胆した姿を見せてフロリアンはソファアーに腰掛けた。

リリーが怖気づくのは当たり前だった。テーブルに敷き詰められ

ているのは縁一杯に刺繡されたビロードの布。その上には同じ布地が敷き詰められている箱がいくつも置いてあるのだ。何がこれから起こるのか見当もつかないに違いない。特に、リリーは広場の顛末を知らないのだから。

フロリアンはリンネルのシャツを着た上から長いガウンを着ていた。その姿は地方の役人では無く、まるで地方領主のようだ。首に掛けてある記章の付いた首飾り、腰には丁寧にも銀のベルト飾りまで付いていた。

案内して連れて来た筈のリリーに一瞥もせず、フロリアンはテーブルの上の箱の蓋を一つ開けて見せる。後ろでリリーだけが大きく息を飲んだ。

箱の中には小さなベルンシュタインが一つ。色は目も覚める様な赤、何処までも深く透明な血の滴。まさしくゼークト産のベルンシュタインだった。心臓が止まるかと思った。

フロリアンが目を輝かせてエルケに箱を突き出してくる。箱の中で敷き詰められたビロードの上で親指の爪程の石が、転がって行く。日差しが射し込む部屋ではない筈なのに、石に陽が当たった様な気がした。燃える炎に見えるその石は元々が台座に付けられていたものらしく、四隅に微かな傷が付いている。

「これはゼークトの涙かな？」

疑いようがない。色も透明度も見慣れた物だった。但しエルケが見たものよりも小さく、ほんの少し薄い色だったけれど。

赤の村ゼークトからしか手に入れる事の出来ないベルンシュタインの色合いは、他のベルンシュタインによく見られる黄色や橙とは違い、透明で真紅だ。よく見比べなくては分からない程の色合いの赤い石もたまに見られたとしても、炎の様に揺らめく神秘的な色合いはゼークト産だけでしか見られなかった。滅多な事では流通しない、それこそ奇跡の石だ。

それも今はもう絶対に手に入らない、村の存在が消えたから。

エルケは胸を締め付ける痛みには耐えながら、小さい声で「多分、



そうです」と言った。

その時だった。

「その石、おばあちゃんの物だわ！」

リリーが突然叫んで、テーブル前に回って来る。テーブルに手を付いた。幾つもある箱の内、一つの箱蓋が外れた。箱の中から零れ落ちてくる金貨。

それを見て、エルケは息を飲む。

零れ落ちた金貨は気にもせず、リリーはフロリアンに詰め寄った。

「まさか！ 私の物だよ」

「だって！」

「エリク、君は私の思った通りの腕らしい。是非、これから仲良くして貰いたいものだね」

フロリアンはリリーの言葉へ畳み掛けるように言った。リリーを鼻にもかけずにせせら笑うと、その二つの箱の蓋を満足そうに閉める。

そうだ、彼は部屋に入ってから一度もリリーに挨拶するどころか話もしていないのだ。

黙りこくるエルケへ片手を伸ばすと、ソファーに腰掛けて俯いたままだらりと垂らしていたエルケの片手　布切れが巻かれていない方を敢えて選んでいた、を勝手に掴み上げ、握手した。触れた瞬間、先日広場で男に触れられた様な寒気がした。

同時に、絶対に助けを求めてはいけないう人たちの名前が頭を過った。きつとカヤはまた探してる。きつとヤンは呆れてる。クルトはどうでもいって思ってるかな？

泣きそうになった。こんな事誰も想像できないに違いない。

やっぱり貴族は嫌いだ。いけ好かない。それに回りくどい物言いが苦手だ。あとやたらと威張り腐っている所も。はつきり言えば、全部嫌いだ。好ましい貴族になんか出会った事もない。やっぱり目の前の彼もそうだった。

ああ、来なければ良かった。今更後悔しても遅過ぎる、やっぱり

自分は考えなしだ。

「是非、私の邸でゆっくりして行って欲しい。部屋でも用意するよ」  
リリーは呆然としている。エルケは部屋から出て行くフロリアンの背中を振り返る事も出来ず、震えるリリーの指を慰めるように握った。

自分でどうにかしよう、そう思いながら泣きそうになるのをただ耐えた。

「本当に、なんて言っているのか」

不器用だねえ、と続けながらクルトは小馬鹿にした笑みを浮かべた。

ヤンは手綱を握りながら、クルトの小馬鹿にした台詞には何の反応も返して来ない。いつもそうだ、この無骨な旅の同行者はいつも比較的感情を抑えめにしている。

クルトは何を考えているか極力悟らせないようにしているヤンを横目で見ながら、御者の台に背中を預ける。吹き抜ける風が心地良く天を仰ぎ、目を細めた。

「そんな難しい顔してんならさ」

何と無くクルトが言わんとしている事を察したのか、ヤンがルッツの手綱を持ち直していた。本当にらしくない反応だ。クルトは内心呆れ返りながらも、容赦せずに次の句を続ける。

遠慮しては駄目なのだと知っているからだ。特に自分達の関係は、クルトが手を離せばきつと直ぐに瓦解するだろう。分かっているからこそ、放っておく訳にはいかなかった。あの赤金の小さな少年を、「言つてやれば良かったんだよ。エーゲルは間もなく戦場になるって」

白の大都市ヨープへ続く街道を得た青の街エーゲルは、穏やかでどこか無骨だった数年前とはまるで様変わりしてしまっていた。

何処までも優しい街人は湖で猟をする為に役人へ支払う税金に追われ、漁業の売り上げだけで暮らしていけなくなった貧しい街人は苦しみながらも街を見限った。もう既に出て行ってしまった街人はクルトの知る限り半数を超えている。何処へ行ったのかは知らない。知る必要もない。

怠慢な役人は、自らの懐を癒す商人を優遇した。市場が混迷しているのはその所為だ。

例え偽物を扱おうと、質に合わない値を付けようと、役人の定めた税金さえ払えば商売が出来る。そうになると、ヨーブからの利便性が向上したエーグルへ、ヨーブからの商人がなだれ込んだ。

大司教が治めるヨーブは市場の質にはうるさい。教会の目と鼻の先を開く市場に、まさか偽物やぼったくり商品を扱わせる訳には行かないだろう。定期的に市場を巡回する騎士はならず者を決して許さない。ヨーブで商売が出来なくなった札付きの商人は、エーグルで売りさばく時にヨーブからエーグルまでの旅賃を値に加え、扱う商品の値段は跳ね上がって行くのだ。

鉄製品の値段が跳ね上がり、白の大都市ヨーブから緑の都市ビュローまでの交易が滞った。経済的に潤っているヨーブはまだいいとしても、鉾山の枯渴に加え領主の横暴が目立つビュローは黙っていない。金があるのならば、金で戦争は回避できる。理解はしていても直ぐに金を用意できないエーグルは、今攻め込んでくるビュローへの防衛に必死なのだ。集めているのは兜や刀剣、甲冑などの軍用製品だった。今回はヤンの担当だ。

「そうだ、大立ち回りだった様だね」

「見たのか」

ヤンは二転三転する会話にも律儀に付き合ってくれる。まあ、鉾先が悪ければそのまま無言で流されることも多かったとはいえ、今回は珍しく直ぐに反応が返ってきた。

大立ち回りで直ぐに市場の一件を思い出すとは、ヤンも結構な重症だ。よっぽどあの少年が気に入ったのか、それとも同情したのかのどちらかだろう。

クルトは苦笑する。

「まあ、見ていたっていうか見せつけられてたんだけどね。文字通り、高みの見物ってやつ？」

ヨーブからの街道が繋がる前までは、中央広場には修道院と教会が並んでいた。広場中央には大きな泉と、湖を見詰める天使の像。ささやかな市場には新鮮な魚が並び、色取り取りの花が民家の窓際

を飾っていた。

久し振りに見たエーゲルはその面影は何も残さず、懐かしいものも全て違うものに取って変わっていた。変わらないのは湖だけだ。ただそれを見ていた。聞きたくもなく人間の話を聞きながら。

「そうか」

律儀な相槌に、思わずクルトは噴き出した。

実際、あんなに必死になったヤンは久し振りに見た。人波を漕いで進むヤンの前に飛び出してしまった街人か商人に、思わず同情したぐらいだ。この体格があのだ速さで近づいてきたら、余程恐ろしかった事だろう。ヤンは最初こそ進むのに苦労した位で、エリクの近くまで来たら人混みの方がヤンに道を譲る位だったのだ。余程の形相だったのだろう。

まるで麻袋でも持ち上げるようにエリクを肩に担ぎ、躊躇することなく広場を去っていくヤンを見ていた。

快適だった付かず離れずの旅は、もしかしたら終わりを迎えるのかも出来ない。そう思って少しエリクの存在に苛立ったのは事実だ。何も出来ない。何も言わない。何も聞いて欲しくない。それを許しているカヤとヤンが馬鹿みだだった。それよりも何故、あの時わざわざ迎い入れる様な事を口にしてしまったのか。それが一番分からなくて、自分が一番馬鹿みたいだとクルトは思った。

そろそろ出て行ってくれ。そう言っただけで追い出せば、あの男の癖に妙にらしくない顔を歪めてさっさと出て行っただろうか。むしろ一度くらい、脅せば良かったのか。そうしたらカヤもヤンもエリクに執着し始める事もなくいつも通りの旅が続けられたのか。

全員欠けたものを補う事もせずに、旅を続けている。久し振りに受け入れた『外部の人間』は思っていたよりも面倒な少年で、何かに付けて直ぐ出鼻を挫いた。不安げな表情を浮かべて謝れば全てが許されると思っっているのか、何かにつけて怯え、直ぐに部屋に閉じ籠る。まるで子供の癩癩だ。手に負えない。

あの体なのに追い出す気がしれない。そう言っただけで噛み付いて来た

カヤは、元々執着心が強いだけあってエリクを手離す気は無い様だった。じゃあ、一体どこまで連れて行く気だ。そう言い返してカヤと揉めるほど情熱的にもなれない。

「それこそ自分で決めるだろ」

ルツツの手綱を引いて、横のクルトとの会話から逃げるようにルツツを急がせるヤンは、そう突き離すような物言いをしても、最終的にはエリクから手を離す事が出来ないのだ。賭けてもいい。

男だから出来る。そう思ってる事自体、そもそも疑わしいのだ。クルトは思っていた。

出て行くのなら勝手にしろ、と言った後に敢えて男であることを疑った様な台詞で鎌をかけても、エリクは特別変な反応はしなかった。ただいつも通り、怯えた口調と曖昧な態度、それだけだった。

事実エリクは本当に男なのか？ 強引に服を剥いてしまえば直ぐに判明する事とは言え、そういう趣味には余り明るくないのに無理をしたくは無かった。女であればまだ救いがあっても、男ならその後の空気は最悪だ。冗談で言えても、本心は絶対に嫌だ。

細い腰に狭い肩。誰がどう見ても薄過ぎる体は成長期に栄養失調なら、まああんなものだろう。

未だに着込んでいる長袖の袖口から見える手首は骨と皮しかない程だったし、刺さりそうな程鋭角だった顎も明らかに痩せている所為で仕方ない。だから、何と無くクルトも疑問に思っていただけだった。

それに誤魔化す事の難しい、声を聞けば分かると思っていた。それでも痩せて枯れた声は、あの年齢に良くある掠れ声だ。判別付かない。

何と無くはつきりしないまま旅をして既に一月を過ぎると、少しずつエリクの体に血色が戻り、ほんの少しでも体に肉が付いてくる。すると、エリクの見かけはより一層少年と言うよりも少女に近づいていった。疑問に思わない方がおかしいだろう。服装だけ 確かに胸回りは女だとしたら非常に残念な感じであっただけで、で性別

を判断するのか？

もし女なのだとしたら、どうして女である事を隠すのだろう。旅をする為に女の一人旅が危ないというならば、あれほど頑なに名前以外を隠す意味がクルトは分からない。

エリクは女だ。クルトはまだその疑いを完全に消してはいない。色恋が動物並みに本能任せなヤンが、エリクが男だろうと女であろうと全く気にしないのは理解できる。きっと人間か人間じゃないで判断しているだろうから。

一方のカヤは例えエリクの本当の性別を知っていても、エリクに真実を問いただす事は決してしないのだろう。言って自分の前から誰かが突然消えてしまう事を、カヤは誰よりも恐れている。

それは決して表面に出さなくとも、クルトやヤンに対しても一緒だ。

まあ。それでもエリクとの旅がここで終わるのであれば、女であろうが男であろうが今となってはどうでもいい事だった。瑣末でしかないのだ。

「またあそこに行かなくちゃいけないのは流石にきついなあ」

ヤンの横で、首に巻いた何本ものシヨールを振り回しながら、クルトはぼやいた。

速度を速めた所為で、あっという間に馬車は目的地に近づいている。並んでいる教会と大きな邸。昔とは違う悪趣味な物が中央広場に建っている。

天使の像と入れ替わっているのは、醜悪な像だ。足も短く顔も大きい。普通はもっとと美化して作られる像は、職人たちの手に寄って本人の行き写しの如く精巧に醜悪に作られていた。

「ヤン。ルツツにあれ、邪魔だから蹴らせてよ」

「馬鹿か」

馬鹿な話を切りだして、クルトはエリクの話題をわざと切った。

それに関して、話筋をもう一度エリクに戻そうという様な面倒な事をヤンがしてくる気配は無い。いつも通りにただ聞き流している

だけだ。

本当に不器用な奴だよ。クルトはあくまで平然とした顔を崩さないヤンの足を、嘔き出しそうになりながら蹴り飛ばした。



「邸でゆっくりして行ってくれ」

そんな言葉、体のいい監禁宣言じゃないか。

部屋にある大きな窓には、一応確認しても全部鍵が掛かっていた。部屋から出る事が出来る唯一の扉は傍目には何もされていない。とはいえ、自由に行き来が出来る様には見えても、きつと外に見張りがいるのだろう。逃げ場は無かった。

先程まで宝石や金貨の乗っていたテーブルは、今では甘い香りのするローズテーパーや色々な焼き菓子が銀食器の上に載せられ置かれている。先程、ここまで案内してくれた使用人が恭しく持ってきた。まさか、こんな物に毒を入れてまでして、エルケとリリーを殺したり害しても何の進展にもならないだろう。分かっているにしても、エルケはどうしても手を出す気にはなれなかった。毒入りが判別できないという銀食器が使われていても、違う毒を使っていないとは限らないから。貴族ってものはそんなものだ。

エルケは未だソファーに力無く腰掛け脱力し、俯いたままのリリーの手を握った。

「なんか、色々複雑な感じになったね」

頭が壊れそうだった。色々な考えが頭の中を飛び回り、吐き気がしてきた。ここに来る事は誰も知らないから、助けを呼ぶ事は出来ない。

助け？ 浮かんだ顔に大きく首を振る。こんな短い期間だったというのに、与えられるものに慣れ過ぎていた。待ってても絶対に来てくれない。エルケがどこに行ったのかすら誰も分からないのだ。きつと勝手に出て行ったと思うだろううな、特にクルトは。カヤは心配してるかな、またかつて思うかな。ヤンはどう思うだろう？ 次から次へと出てくるのは、そんな事ばかりだ。別れようと決めた端からこんな事でどうするんだ。たった一人の旅はこれから

だというのに。

専属宝石鑑定士、なんて上手い言い訳だ。フロリアンが実際に見せたかったのは宝石じゃなくて、金貨の方だ。それが今更でもやつと分かった。

世間を知らなそうな、その割に目利きの人間。エルケは条件に合ったのだ。少しの金さえ与えれば、エルケは言う事を聞くと思われらしい。

遠方を旅する商人か商人の関係者なら、いなくなっても誰も不思議には思わない。商人や商人の隊列が、峠や山で賊に襲われることはよくあることだから。エルケが一人いなくなつたとしても、きつと大した事件にもならないだろう。

エルケに頼む予定の仕事は鑑定かもしれない。でも宝石の、ではなかった。金貨だ、しかも偽造金貨の鑑定だった。

完全な偽物では無く、発覚しないように緻密に計算して、金の量を減らした金貨。金に何らかの金属を混ぜ込んで造り直すのだ。それをエルケは仕事として鑑定する事になる、目の肥えた人の目をしても見破られない完璧な偽金を造る為に。

だって、それは犯罪じゃないか！ エルケはリリーの手を強く握り締めて、空いた片手で頭を抱えた。

本当ならば捕まれば大変な事になる、経済を簡単に揺るがすからだ。貨幣の価値が下がると混乱が起きる。きつと役人が取り締まるべき事だ。

でもエーゲルでは、先導しているのが役人のフロリアンだ。やっぱり危ない事に係わっていたんだ。この部屋に入ってから、ずっと付き纏っていた嫌な予感は当たっていた。

でも今回だけは当たっても本当に嬉しくない。最悪だった。

逃げ出したい、でも逃げ出せない。リリーを連れて、この不自由な体で、どうにも出来ない。

俯き悩むエルケの髪を、おずおずと遠慮がちに伸びた指が触れて来る。リリーの指だった。

「エリクの髪、綺麗ね。エリクの髪をどうして見た事あるって思ったのか、今やっと思い出したわ」

「おばあちゃんの指輪？」

どうして分かったの？ そう言っただけでリリーは悲しげに笑った。そのおばあちゃんももしかしてもう天に召されているのか、そんな感じだった。

フロリアンの持っていた石の四隅。台座の痕は汚れ、石は少し欠けていた。それに色も少しくすんでいた。

日常的にベルンシュタインを付けたまま、リリーの祖母は生活していたのだろう。水や衝撃に弱いベルンシュタイン、しかも貴重なゼークト産を気にもせずに。

フロリアンが知ったら卒倒しそうだ。あの大きさでもっと状態が良ければ、きっと普通の街人よりも裕福な暮らしを数年働かず過ごす事が出来る。あの石は時がたつにつれ、値は上がるばかりだから。

「おばあちゃんは、もう、いないの」

いない事を認めたくない様な口調で、リリーは言った。

眉を寄せると、鼻の頭に皺が出来る。苦しい、泣けなくて苦しい。そう言っている様だった。

「エリクの借りている家、あれはおばあちゃんの家だった。つい、この間までは」

確かに、何と無く歳のいった人が住んでいた気配は残っていた。

大きく使い古した盥に、何度も使い古くなったオープン。エルケの部屋に残されたレシピノートもそうだ。

そうか、という事はあの中に残されている可愛らしい落書きはリリーの物か。リリーはきつと可愛がられていたのだろう、優しい雰囲気レシピにも残っていた。

嫌だっただろうな。エルケは思った。大好きなおばあちゃんの住んでいた家に知らない人が乗り込むのをリリーが見て、いい気はしなかっただろう。

「ごめんね、知らなかった」

「いいの」

思わず謝ったエルケを見て、リリーは直ぐに微笑み返す。

「最初はおばあちゃんの家には誰か入るのが嫌だったけど、それが、どうしてかエリク達だったらしいの。それでも、金を用意する為だけに、おばあちゃんの家を利用した父さんだけは、どうしても許せない。きっとおばあちゃんの指輪をフロリアンに渡したのも、父さんだわ」

フロリアンの名前から、様が消えた。

どうして、リリーの父親が指輪を奪うのか。不思議そうに首を傾げるエルケの前で、リリーはテーブルを見詰めながら話を続ける。それでも何と無く不安なのか、エルケの手とリリーの手は繋がれたままだった。

「税金が高過ぎて、エーゲルの街人は皆必死なのよ。数少ないエーゲルの金持ちは皆、フロリアンのご機嫌取りに夢中だしね」

「市場は混んでいたよ？」

「エリク、市場の商品の値段は見た？」

首を振る。

魚のフライを買ってくれたのはカヤだ。商品が並び値段まで見たのは、あの大立ち回りを演じた宝石商人の前だけだった。

「驚く程の値段よ、普通の何倍もするの。たかがオレンジ一つ、たかがパンを一つ、私達は簡単に買う事が出来ない。多分、あの家もかなりの条件で貸していると思う。父さんはそういう人だもの。今年の税金を絞り出すのに必死なの」

カヤが切ってくれていたオレンジは、ここでは貴重な物だったのだ。エルケは厚着をして暑気あたりを起こしそうな自分の為に、オレンジを冷やしてくれたカヤの心遣いに泣きだしそうになった。

「ごめんね、迷惑掛けてごめん。でも、もう言えない。」

「私の家は少し前から、金策で苦しんで頭を抱えていたの。私もおばあちゃんがいなくなった頃からずっと手伝いに追われて、遊んだりする事は出来なかったのよ。だから 遊んだり、華やかな格好

をしてられる友達が、羨ましかった。フロリアンがエリクの話をしているのを聞いて、家を貸しているお客さんだって言ったら、私初めてフロリアンに話しかけられたの。それが、嬉しくて」

リリーを責めることは出来ない。エルケだってそうだった。

街に行く少女を見て、本当は羨ましかった。

綺麗なドレスを着て笑う少女達は、湖の畔に咲く小さな花みたいだった。艶のない自分の肌と違い、何も塗らなくてもきめ細やかで白い肌。

少女達のブラウスの袖から出ているのは、少し肉付きのいい腕。どうしても自分の骨しかない腕と見比べてしまった。しかも着ている服は自分が選んだ事の成り行きとはいえ、男ものだ。レースも刺繍も何もない。女の子の笑う声は、エルケみたく掠れ声じゃなくて小鳥が囁っているみたいだった。

何もかもを捨てて、エーゲルで女として過ごしたら？ 穏やかな家庭を持って過ごせたら？ 考えなかった訳じゃない。

それでも出来なかった。欠けたものを見ない様にして背を向ける事だけは、エルケには出来なかった。どんな思いをしても姉に会いに行かなくては、それを諦める事が出来なかった。

カヤが、優しくしてくれて嬉しかった。ヤンが、助けに来てくれて嬉しかった。クルトが、あの時一緒に来てもいいと言ってくれて嬉しかった。だって、今までそんな人達は姉さまくらいしかいなかったから。

だから、浮かれてしまった。

「リリー、逃げよう」

エルケはリリーの腕を引いて立ち上がった。エルケの勇ましい口調に、驚いた表情を浮かべてリリーもエルケの横に立つ。

背は同じ位だった。姿形は違うけれど、まるで同じようなことを思っていた少女。

危ない仕事に係わる予定のエルケだけではなく、フロリアンの持っているベルンシュタインが祖母の物だと知ってしまったリリーも

また危ないのだ。

「どうやって？ 逃げる場所なんてまるで無いじゃない」

「分かってるけど、逃げなくちゃ」

「やっぱり、このまま何も言わずにカヤ達の前から姿を消すのは良くない。」

癩癩を起した子供の様に、むくれて別れるのは間違いだ。例えここで別れるにしても、しっかり言わなくちゃいけない言葉を口にして、助けて優しくしてくれた事にちゃんと感謝して、それからきちんと別れなくちゃ駄目だ。

とはいえ、エルケにも策は無かった。それでも、ここで簡単に諦める訳にはいかない。

窓向こうを覗き込んで、リリーと一緒に窓枠を掴むと前後に揺らしてみた。激しい物音、軋む窓枠。駄目だ、結構頑丈だった。

横を振り返って、エルケは一人掛けのソファーを見詰めた。ソファーの背もたれと尻の当たる部分は、美しい布張りになっている。腕を置く部分まで細かく彫刻があり、これなら何とか二人でなら持ち上げる事が可能そうだった。

「この椅子でも、窓に投げたら割れるかな」

「投げるのは、流石に無理だと思うけどねえ」

「そっか、でも二人なら」

透明感のある割に厚いガラスの窓から、外を覗き込んだ時だった。呟いたエルケの言葉に、聞き慣れた声が重なる。

「ヤンなら、簡単にやるだろうけど」

息を飲んだ。空耳かと思って振り返った。

誰もいなかった筈の部屋の扉は開け放たれ 後ろに不安げな面持ちの見張りが見える。そこには扉に肩を預け、呆れ顔のクルトが立っていた。

「顔の割に乱暴だよね、エリク。ヤンに似たのかな？」

まるで育ての親がヤンみたいない草だ。

相変わらず悪趣味なシヨールを重ね付けしている。このシヨール

の色合いの趣味だけは、本当にフロリアンといい勝負だ！　むしろ顔がいいだけに不条理極まりない。

いつもならクルトが傍にいる事が不安だった。何を考えているか分からない、それなのにずっと奥を思わせる言葉ばかり吐いて行くから。

笑っているのに、睨んでいる。軽口を叩いているのに、遠くを見てる。クルトはそんな人だ。それでも今、ここにいてくれるのは心強かった。助けに来てくれた訳じゃなくても嬉しかった。

「どうして！　どうして、ここに？」

「同じ言葉を返すよ」

バツサリと切り返された。

だから、いつもそれだ！　あの無意味に翻してるシヨールを引っ張ってやりたい。クルトが傍にいてくれる事に心のそこから安堵しながらも、エルケは内心で口汚く文句を言った。

クルトは、不安げな面持ちの見張りの前で扉を閉めた。少し怯えている表情を浮かべた見張りの顔が、閉まって行く扉の向こうに消えて行く。

完全に閉じた扉向こうへ手を振って、クルトはエルケの方へ振り向いた。

呆れた表情、その上に溜息をつかれる。

「そんな、捨てられた子鼠みたいな顔して」

「勝手にいなくなつて、ごめん」

捨てられた子鼠、って。どうにも理解できない言い回しだったけれど、初めて素直にエルケは謝罪する事が出来た。いつも通りに口を噤んで黙り込むのはもう止めないと。だって、黙つても何も進展しないじゃないか。

エルケの謝罪には何も返さず　顔色一つ変えなかった、ずかすかと部屋に入ってきたクルトを、エルケはつい期待に満ちた視線で追ってしまう。何しろ、これだけ堂々と部屋に入ってきたのだ。何かいい策でもあるのかもしれない。

他人任せでも、もう今の状況はエルケだけではどうにもならなかった。ここでの話が大き過ぎたのだ。

クルトはそのまま真っ直ぐソファーに腰掛け、テーブルの上の焼き菓子をつつまむ。え、もしかして？ まさか、食べないよね？  
一抹の不安が過った。

それは勿論、エルケの杞憂では終わらない。

「クルト！」

クルトは躊躇なく、菓子を口へ放り込む。エルケが、直ぐにクルトの腕へ飛び付いた。馬鹿じゃないの、本当に信じられないよ！  
心の中で思いつきり毒舌を吐きながら。

無理やりにクルトの頬を掴む。あ、綺麗な色の瞳。そう思う間もなくエルケの制止も聞かず、軽い音を立ててクルトの口内で菓子は噛み砕かれていた。甘く香ばしい匂いが、エルケとクルトの間に広がる。

ああ！もしかして何か入っているかもしれないのに！ 変な所でクルトは豪胆過ぎる！

エルケは上から被さる様にして、クルトの顔を覗き込んだ。毒の効果が出るならきつとすぐだ。苦しみ出して、顔色も悪くなる。お願い、神様！ 見上げたクルトが珍しく驚いて、目を見開いていた。エルケと同じく菓手に手を付けていなかったリリーが胸の前で手を組み、エルケと同じ様な表情をしていた。やっぱり、リリーも菓子には毒が入っていると思っていたのだ。

エルケが顔を間近に寄せて覗き込むと、今まで目を見開き驚愕していたクルトから、表情が消えた。そのまま、何か考える様にして視線を天井に逸らす。クルトらしくない表情に一瞬、不安になった。それでもすくなく、エルケの沈痛な表情に耐えられなくなったのか。クルトが横を向き、突然嘔き出す。殴ってやるうかと思った。

「それだけ警戒できるなら、来なければ良かったのに！」  
それは確かに正論だ。言い返す言葉もない。

クルトはいつもの調子に戻っている。ソファーに腰掛けエルケを



膝に乗せたまま、先程ここに座っていた筈のフロリアンよりももっと偉そうな態度で足を組んだ。すっかり冷えた紅茶を一口飲む。

そのカップに視線を向けても勿論もう止める事はせずに、大人しく部屋に居座ったクルトの横にエルケは脱力して座り直した。大きく溜息を付いたそんなエルケを見て、横でクルトが笑う。ああ、小憎たらしい！

「笑わないでよ」

「必死だったね、嫌ってるのに」

嫌っているのはむしろそっちだろう！ 凄く心配したのが馬鹿みたいだ。

安堵で力が抜けてるのか、呆れて力が抜けているのか本当にもう分からない。見知らぬ場所で突然出された食べ物にせず食べるなんて、クルトぐらいだ。非常識だ。

そう言えば不思議だ。エルケ達はここに来るまで使用人に案内されてきた。ここに至るまで何人も使用人とも擦れ違ったし、気付かなかったけれどそれなりに警備もされていた筈なのに。

「どうやって、ここに」

来たの？ エルケは最後まで質問を言い終える事が出来なかった。横で二つ目の菓子を食べ終えたクルトが話し始めたからだ。

クルトは、ついでに三つ目に手を伸ばした。腹が減っているらしい。

「ここは昔、修道院だった」

エルケの問いとは全く繋がりの無い話だ。少し戸惑った。

クルトの会話の癖なのか、本筋が全く見えない。それでも今動けるのはクルトだけだ、聞くしかないだろう。無駄に尊大な態度をしている訳ではないと信じたい。

エリクは勿論その過去を知らなかった。リリーを振り返ると、彼女はエルケに頷いて見せる。どうやら本当らしい。クルトの話はまた続く。

「教会もここまで大きくはなくて、修道院と教会の敷地には小さな

孤児院もあった」

リリーは頷く。クルトはどうしてそこまで知っているのか？

エルケは最早、フロリアンが来てしまおうとか、先程の見張りが不審者を見つけたと誰かを呼んでくるのではとか、そんな事すら考えなかった。ただ声もなくクルトの話聞いていた。クルトがリリーを振り返る。

「どうしてこの街が大きくなったのか、分かるよね？ そっちの子なら」

「税金と市場……ですか」

「でもそれでちよつと面倒な事になって、今エーゲルは開戦の危機に遭遇してる」

なんてことだ。この街は戦争をしようとしているのだ！

エルケは理由なくフロリアンの消えた扉の向こうを振り返った。扉は閉じたままだ。誰も入って来る事もないし、外が騒がしい様子もなかった。

振り返った先でリリーが立ち竦んでいた。ああ、泣きそうだ。

戦争は誰しもが怖い。何もかもが壊され、燃やされる。殺され、犯され、盗まれ、尊厳なんて綺麗な言葉なんてない。エルケだって知っていた。大事にしていたものが壊されていく恐怖と、今まで有ったものが突然消える絶望も全部、知っていた。

じゃあ、何故それが偽の金貨に繋がるんだ？ まだエルケの疑問は解決していない。

クルトはまだ続ける。彼が話すと、現実も物語の話に聞こえてくる。余りに飄々とし過ぎて。

「勿論、エーゲルも戦争をしたくないんだろうね。最近、頓に税金が上がって役人の取り立てが厳しいのはその所為だよ。この街は金が欲しいんだ」

それだ！ エルケは紅茶を手にしたままのクルトに、体を乗り出した。

勢いに押されたのか。ソファアの背もたれに体を押し付け、エル

ケから思わず距離を取ったクルトの手元から残った紅茶が零れ落ちる。

「そうか、戦争を回避する為に金を集めても、結局間に合わなかったんだ。やっと分かった！ あの金貨はその為の物だ。」

「偽造金貨が、役人主導で造られてる。僕はその鑑定を依頼されたんだ！」

クルトは染みの出来たソファアをただ見下ろしていた。

今にも乗り上がりそうなエルケの肩の前で押し退けようとしたのかクルトの手が一度宙に浮き、リリーと視線が合うとそのまま静止する。

クルトはエルケに顎で、避けろと促してきた。エルケは慌ててその指示に従う。

「ま、予定してたヨープからの借金も破談になったし。その金貨は戦争を回避するために使うつもりだろうね」

「やっぱり、そうだ。やっと胸のつかえが取れた。」

このソファアが高価な物だったのは見れば分かるだろうに、よりによって特に綺麗な刺繍された部分で、クルトは零れた紅茶で濡れている浮いたままの手を拭いた。人の物だと思っ、容赦ない。

そのまま、クルトは立ち上がる。エルケはクルトの袖を掴んだ。

「駄目だよ。あんな偽金貨、放っていけない！」

「あの金貨を使わないと、今にここは戦火の渦だ」

ああ、言葉に棘がある。綺麗な事を言うな、まるでヤンみたいな事を言うんだね。

「でも」

リリーを振り返った。何も反応がない。どうしたらいいか、分からないんだ。でも、それでも、何か出来る事があるなら、それをしないと分らないのに！

エルケの言いたい事がまるで分かっているかのように、クルトが言う。暗い表情で笑いながら。

「どんなに力があっても、たった一人で戦争を止めるなんて無理だ」

よ。自分以外を全員殺してしまわない限りはね。エリク、君は神じゃない」

「選びなよ。オレンジを食べたいの？ それともりんごにしようか？ そんな口調でクルトは言った。非情とか残酷だとか、そんな感じでもなかった。ただ達観していた、苦しい程に。」

偽金貨に目を瞑れば、それを使って戦争が回避できる。湖を抱く美しい青の街を守る事が出来る。でも

「それでも、平和なんて永遠では無いけどね。愛情と一緒にだよ」  
吐き捨ててクルトはソファアールから立ち、そのまま部屋の出口に向かった。立ち竦むエルケとリリーに笑いもせず、振り返る。その声に、いつもの軽口が混ざっていると錯覚させる明るさは一欠けらもなかった。

「出るよ。ここから出る気があるなら付いておいで」

それでも、連れて行ってくれるんだ？ らしくないクルトの口調に、エルケの方が軽口を叩きたくなった。いつものクルトの方が怖いけれど、いつもの方がずっとマシだ。

だって、今のクルトは悲しそうだから。

縫い止められたように動かないエルケの足を動かしたのは、クルトの声だった。

エルケは一度部屋の中を振り返り、リリーの顔を見る。行こう、という風にリリーも頷いた。そうだ、もう選択の余地は無い。だけど、納得はいかない。

テーブルの上には食い散らかされた菓子跡。その部分に載せられていた金貨を思う。それでも、今だけの正義感で戦火を選ぶことは出来ない。

強く目を瞑って先に廊下へ出たクルトの後を追う。いいの？ っ て心の中で正義感満ち溢れる自分が問い掛けて来たけれど、その声に分からないとしか答えられなかった。わざと考えないようにした。釈然とはしないけれど、それしかないのだ。

白いタイルに白い内装、次々に見えてくる派手な扉と金メッキの取っ手。上塗りして、取って付けた様な違和感を感じさせる内装だ。それでも飾りの様にたわむカーテンも金の刺繍がされて美しい。来た時には見ていなかったものが見えるけれど、どうしてか羨ましいとは感じなかった。リリーのおばあちゃんの家の方がずっと素敵で、ずっと温かいから。

妙に堂々としているクルトに先導され、エルケとリリーはそのまま誰に咎められる事もなく廊下を進んだ。

勿論、途中で使用人とも擦れ違った。邸の警備をしているらしい物々しい装備の兵士もいた。それでも彼らはまるでエルケ達が見えないかの様に振舞い、もしくは道を開けるのだ。そしてたまに頭も下げた。

隣でエルケの腕を握りながら歩くリリーも、状況が良く掴めない顔をしている。エルケも勿論一緒だった。分からない事が多過ぎる。唯一、状況を理解している筈のクルトだけが、やけに足早に歩い

ていた。それも、エルケがまるで追いつけない程の速さで。一歩一歩が大き過ぎるんだよ！ エルケは心の中で悲鳴を上げた。

冷たい床の上を歩く靴音だけが響く。ただエルケの靴音だけがずるずると引き摺る音だ。革靴の足先は、遅くない内にきつと摩擦で破れてくるに違いない。もったいない。

どんなに必死で足を動かしても、エルケと男のクルトの足幅とは違い過ぎる。

ああ、もうこの足どうにかしたい。苛ついてもどうにもならないのがまた腹が立った。これだけ長く不自由が続くのならば、もうきつとエルケは一生この不自由な足と付き合っ行って行かなくてはならないのだ。溜息を付く。

「大丈夫？」

「うん」

リリーが顔を寄せて聞いて来た。エルケは取り付く島もないクルトには聞こえないように、小さい声で頷く。もう少し、気を使って歩いてよ。そう思っても絶対に口には出せない。直ぐに置いて行かれそうだ。

囁き合ったり近づいたり、リリーはこの邸に来てからというものエルケをまるで男性 偽りとは言え、では無いかのように接してくる。顔を近付けるのも腕を持つものにも躊躇がなさ過ぎて、逆にこつちが戸惑ってしまいそうになるけれど、それはそれで嬉しかった。女友達なんて初めてだ。

リリーが掴んだ腕を見下ろすと少し照れくさかった。だから『今』を守るこの選択は正しいのだ。

あと半分位で玄関ホール、という所で突然クルトが立ち止った。考え込んでいたエルケと、その腕に掴まっていたリリーも立ち止った。フロリアンでも来たのかと思った。その割に静かだけど。

でも、クルトはその立ち止った理由をエルケ達が察している暇なく、また歩き出した。

理由は直ぐに分かった。あんなに遠く離れて行ってたクルトの背

中が、それから離れていかない。立ち止った意味に気付いて、二人で女の子みたいに顔を寄せ合って肩を竦めると、来た時には逆側からの玄関ホールが見えた。入ったその時に見た、大きな絨緞と天井の天使が出迎えてくれる。

どうしてこの絨緞と天井には、こんなに目を奪われるんだろう？  
思わず足を止めて天井を仰ぐ。

取ってつけた様な悪趣味な内装ではなく、この天使達はこの邸に馴染んでいる。この部分だけを見るとクルトが言っていた、この邸は元々修道院だったという事が信じられる気がした。それほどまでに天井は神々しく、絨緞は澄みきっていた。

扉を出る前に思わず振り返った邸の廊下は、来た時よりずっと短く見える。

出来るならこの地が戦争になりませんように。大きく手を伸ばす先が、決して欲ではなく幸せでありますように。エルケは天井の天使達にそう祈る。

そのまま、深く頭を下げた先程の使用人の前を通り過ぎた。

小さ過ぎる声でまるで聞き取れなかったけれど、最後に聞こえた言葉はせめてもの使用人からの謝罪だとエルケは信じたかった。

邸の敷地を出て、外で待っていたルッツを繋げたヤンの馬車に乗り込んだ。

ここまであっさりと邸を出入りする事の出来るクルトの存在が何であるのか、勘ぐるのは結局はそこまでだった。それ以上はエルケには全く想像もつかない。だから考えるのは止めた。探しても本人は答える気は無いだろう。実際、馬車に乗り込んでクルトはリリ―と並んで座っているエルケの方を見ようともしない。

ただエルケに分かるのは、フロリアンがもう手出しをする事が出来ない状態になっている、という事一つだけだった。偽金貨を鑑定するのに、エルケが必要では無かったのか。何も共犯者はエルケじゃなくても良かったという事か。フロリアンに問い質したくても、

彼は姿を見せなかった。

何もかもが不透明で説明が無いまま馬車は走り出し、そのままリリーも家に帰った。リリーの父親はいなかった。また金を集めに行っているのよ、とリリーが吐き捨てた。そうかもしれない、でも違うかもしれない。

今は何よりも一番自分が危険だ。だってカヤが馬車に乗っていないから。

家に入ると、まず怒鳴られた。これは本当に怖かった。カヤがクルトに物を投げたりしているのは、あれはあれで十分愛があるって事が分かった。手抜きが無い説教はもう金輪際お断りだ。同じ事を何度も繰り返し言わされて、仕舞いには咽喉が枯れて声が出なくなつた。言葉の暴力って、有りだな。

次に抱き締められた。子供を叱る様に尻を一度叩かれた。涙が出る程痛かったけれど、自分の所為だし我慢した。それでカヤは終りだった。何があつたか、なんて何も聞かなかつた。クルトに聞くか、もしくは分かっているんだらう。そう思った。

ヤンは何も言わなかつた。カヤと一緒に何も聞かなかつた。それが何を意味するのか、深読みしてしまう位だった。

クルトは戻ってから凄く不機嫌だった。エルケが近寄る隙も与えない。少し放っておく事にした。だって悲しい顔をしているよりも、意味無く苛ついている方がまだマシだと気付いたからだ。

そして、彼らはエーゲルを発つと言つた。

エルケは眼下に広がる新緑の絨緞と、青く澄んだ湖を見詰めた。

今日も暑い。丘を吹き抜ける生温い風を浴びていると、汗が噴き出してくるようだ。雲一つない晴れ渡つた空はそのまま湖と混ざり合つてしまふそうだった。

立ち竦んだままのエルケの手の平に、ルッツの鼻が擦り寄つて来る。エルケはくすぐつたさに振り向くと、そのままルッツの首に抱きついた。獣の臭いがする。ルッツの鼻息が首に当たってくすぐつ



たくて、首を傾げて口元を緩ませた。ルッツの後ろには馴染みの荷台が付いている。エーゲルを出る時が来たのだ。

「ルッツ、くすぐったいよ」

遠くを見ると、今日も何事もなく毎日が始まっていた。市場は数日前と同様、少し柄の悪い商人が横行し、相変わらず値は目を剥く高値が付いているようだ。

今朝起きたエルケはいつも通りに身支度をし、日課になったレシピノートを読んだ。リリーの祖母が書いたというそれには幼い頃のリリーの落書きがあった。

辛うじて分かったのは、歪なおばあちゃんの顔、おばあちゃんの家。他は何か丸が二つ並んだもの、それにただ丸だけの物だった。最初見た時は判別できなかったリリーの落書きは、今なら何を書いたのか分かる。ベルンシュタインの指輪、何も飾りつきの無い女性の指には少し無骨な指輪なのだろう。

エルケはそれをいつも通りに読んだ後、部屋の元々あった場所に返さなかった。それを大事に抱えて、階段を下りた。返さなくてはいけない人がいると思ったからだ。

大切な思い出の欠片。まだ読み返す事は出来ないかもしれない。手に持って喪失の苦しみと空虚に犯されるかもしれない。それでも大切な思い出は、いつか穏やかな気持ちになつて読み返す事が出来るだろう。大切な人から受け継がれたレシピを使って料理をして、いつか泣きながら食べる事もあるのかもしれない。

それでも、その人が自分を愛してくれた事実は必ず何かとして残っているのだから。

エルケは首を振ったルッツを離し、誰も握っていない手綱に手を寄せるとまた遠くを見つめた。目的地までは遠く険しい。上手く動かない足と、未だ旅をする以上は隠し続ける性別と烙印。

金策はエーゲルほどでは無いにせよ行き詰まり、先行きは不透明だった。

「あ、あの金貨を口止め料として何枚か貰ってくれば良かったかな」

独り言ちたエルケの背中をルッツが咎めるように押した。時々この馬は人の言葉を理解している様な、そんな反応を示す。

エルケはぐいぐいと押してくるルッツの鼻面に指を置き、首を振った。

「冗談だよ。そんな事をしたら普通の人間は捕まっちゃうからね」それに一時期だけの安心だ。きつといつかイーゲルはその報いを受けるのだろう。残酷な事を思い付き、エルケは身を震わせた。

戦争は大体そんな物だ。大きな城壁のある城を抱く場所ならともかく、邸の中に農民や街人を全員避難させる事は難しい。貴族や役人、それに金を持っている街人だけが守られて身分の低い農民等は虐げられるままになるだろう。

それでも、今エルケが見ない振りをするだけで、今の平和は守られる。エルケはその甘い汁を啜った。

いいんだろうか？ じゃなくてそれしかなかった。人が出来る事は限られている。だから赤の村も焼かれ、沢山の人が殺されたのだ。分かっているけれど、やっぱりまだ納得は出来ない。頑ななのかもしれない。

ルッツが鼻面を上げ、首を振った。エルケはそれに促される様に顔を上げた。小道の向こう、緑深くなってきた野原からリリーが駆けてくる。片手を上げて大きく振っている。エルケも応えて、片手を小さく上げた。

若草色のスカート、薄いアイボリーのブラウス。刺繍もレースもなかったけれど、それはそれでリリーにとてもよく似合っている。

長い髪は一つに纏め、走る度に背中から浮き上がって見えた。

「エリク！」

「おはよう」

頬を赤らめて、リリーは駆け寄った。額から顎に掛けて汗が一粒流れている。今日は本当に暑いのだ。エルケは締め切った首元をいつもより少し大きめに開けた。最近、少し服が小さくなった気がした。

ルツツ以外誰も姿が見えないのを気にして、リリーが家の前を覗き込んだ。

「エリク、一人？」

「うん、まだ中にいるよ」

彼らは今、旅立つ準備に忙しい。カヤ先導でこき使われているのだ。主にカヤの荷物を取り纏めさせられている力仕事担当が一人と、多分口だけの応援担当が一人。それに指揮官のカヤだ。

エルケは手に持っていたノートをリリーの胸の前に突き出した。案の定、不思議な顔をしている。

「おばあちゃんの指輪を取り返せなかったから、代わりになるか分からないんだけど」

フロリアンに渡ってしまったベルンシュタインは、結局取り返せなかった。リリーの父親が借金のかたに渡してしまったのなら、流石に無理だ。

リリーはノートを何枚が開き小さく、おばあちゃん、と囁いた。崩れそうな程に零れる笑顔をエルケに向ける。

「ありがとう、凄く嬉しい！ 宝物だわ」

「うん」

リリーの笑顔を見て、頬がくすぐったかった。胸が熱くなって、口端が思わず上がってしまう。ああ、久し振りに笑ったな。凄くそう思った。

笑ったエルケの耳にエルケが唇を寄せる。彼女は凄く真顔だった。何かおかしな事でもあったのかと不安になる。勿論、杞憂だった。

「本当はね、私エリクの事が好きなのかもって思ってたの」

「え」

生まれて初めての愛の告白　もどきに思わず仰け反った。でもリリーの話には先がある。

「でも、エリクって女の子みたいだから友達の方がいいみたい」

うん、だって女の子だからね。そう答えることは出来ないから、じゃあ友達で、と笑った。

リリーとの会話が終わるのを待っていた様に、階段を駆け降りるカヤと扉が開いて大荷物を持ったヤン、それにいつも通りに飄々とシヨールを振り回すクルトが出てくる。ああ、ここでお別れだな、と思った。

エルケは三人と別れてから、何とかして緑の都市ビューローから逆を進みながら遠回りして目的地を目指す予定だ。出来るなら旅先でどこかに滞在して金を稼ぐ事が出来たら、行き当たりばったりの旅だがそれしか方法は無かった。

結局、三人と別れるとそんなものだ。でも元々ビューローを逃げ出した時もそのつもりだった。幸運にも少しの間警沢旅行が出来たと思っておけばいいじゃないか、そう言い聞かせる。なんだか最近言い聞かせる事が多過ぎるな。俯いて、苦笑した。

荷物を荷台に乗せると汚く使い古した荷台は大きく沈み、ルッツは軋んだ音に鼻息で文句を言った。リリーはエルケと一緒に行くものだと思っっているらしく、クルト達に頭を下げエルケには手を振っている。

違うんだ。ここで皆とはお別れなんだ。そう言いたくても皆の前では言えなかった。

フロリアンの邸から戻ってきた日に「ごめん」と「ありがとう」だけは言えたけど、どうしても「さようなら」だけは言えなかった。かといってまた一緒に連れて行って、とも、子供っぽい意地っぱりが邪魔して言えなかった。

最初に荷台に乗ったのはいつも通りにカヤだ。目頭が熱くなつて、思わず俯いた。

やっぱり付いて行っちゃ駄目かな？ 本当は一人で不安なんだ。今は何も言えないけれど、いつか言える時が来たら全部隠さず話すから。だから一緒に行っちゃ駄目かな？

離れたくないんだ、もう一人なんてなりたくないんだ。  
寂しいよ。

心の中でどんなに叫んでも、唇から先へは出て行かなかった。鼻

がすんとなる。置いて行かないで、お願い。

じゃり、と足が鳴った。自分の足だと思ったら足は動いていなかった。俯いた先に、足が見える。そのまま足を見て、顔を見上げた。堪えた涙がぼろり、顔を上げた所為で隠しきれずに一粒零れ落ちた。何かを言うよりも先に脇に手が入った。結構細い体 ヤンに比べてはだけど、の割に、軽々とエルケの身体が持ち上がる。思わずその首筋を掴んだ、顔にしがみ付く様にして。

「行くよ」

クルトはそう短く言って、もしかしていつも通りに荷台に抱き上げようとしてくれていたらしいヤンの横をエルケを抱いたまま通り過ぎた。ヤンよりも結構乱暴にエルケを荷台に投げ込んで、自分もその後に飛び乗って来る。

荷台の下に投げられたまましゃがみ込んで、汚くなってきた手の甲の布切れで涙を拭いたら、悪趣味なシヨールを投げ付けられた。

「あらまあ」

カヤが意味ありげに笑う。

「さあ、行こうか」

そんなカヤを完全に無視して、クルトはルツツの傍で何が起きたか分からないというような珍しい表情をしているヤンを促した。この複雑な経緯を知らないリリーは手を大きく振って馬車から離れる。「エリク、さようなら！ 絶対にまた会いましょうね！」

また会おう、その言葉の重さに胸が詰まった。

荷台の端に飛びついて、エルケも大きく声を張り上げる。掠れて悲鳴みたいだったけれど、リリーに気持ちが届くように張り上げた。「本当にまた会おうね！ また絶対にくるから。その時にノートのレストランを食べさせてよ、絶対だよ」

絶対に、そんな時は来ないのかもしれない。それでも、手を振った。

リリーも何と無く気付いている。今、不変の状況という物は無いから。馬車が速度を上げて、土埃がリリーの姿を消していく。

こうして、本当の四人の旅が始まった。

## 闇章

危険を伴う長い旅を続ける交易商人や巡礼者の為に、存在する騎士団がある。峠を抱く、橙の山ワルゼにいる騎士団がそうだ。

彼らは金を取り、目的地まで護衛するのが仕事だ。所領の管轄になるので傭兵よりも安全で値段設定がはっきりしている。

難点はその金額だった。清貧で貞潔、それを神に誓った筈の彼等とはとにかく金にうるさく、高い。

夜も更けた暗闇の中、月灯りも今は幌の中までは降って来ない。

直ぐ近くに屈んでいる筈のエリクが少しでも沈黙すると、もう眠りに付いてしまったのか傍にいるカヤが確認する事も出来ない程に木々に遮られた今日の闇は深かった。

「僕、聞いた事が無いよ。そこに行くの？」

何も見えない闇の中で声が聞こえる。起きていたらしい。

少し前まで目立った声の掠れはもう無くなっていった。今のエリクの声は少し高い。少年では無く、姿が見えないとまるで少女の様だ。

いや、エリクは姿が見えてもまるで女の子の様だわ　カヤは闇の中で微笑んだ。

「ええ。脳味噌が柔らかい割に、財布の紐は固くて、無駄に大きくて臭い男共の集まりよ」

エリクはその名を今初めて聞いた様に首を傾げている様だ。ふうん、と一応相槌を打ち、毛布にくるまったままで隣で同じ毛布にくるまっているカヤの方へ近づいてくる。姿が見えないのが不安になったのか。カヤがそれを咎める事は無い。むしろ嬉しいのだ、暗闇を人が怖がるのは生理現象だ。頼ってくれる事が嬉しかった。

闇の中で僅かに見えるエリクの首は既に傾き、膝へ預けてしまっていた。

「あんなのが、城壁内で甘いもの集る虫みたいに存在してるなんて最悪だわ」

カヤは苦虫を噛み潰したしかめっ面で、そう吐き捨てた。

全く想像もつかなかったらしいエリクは、荷台に伸ばした足を縮めて毛布の中に巻き込む。どうやら夜風が思ったよりも寒かったらしい。先程までしつかりと見開いていた瞳は、既に重そうに半分閉じてしまっていた。

カヤはそんなエリクを振り返り、もう寝なさい、と笑う。返事は無かった。

エーゲルを出て既に九日。高低差の多い旅路は予定通りに行かず、今ヤンとクルトはルッツ以外にも馬を用意するべきか荷台から少し離れた場所で話し合っている。

相変わらず、激しく揺れる荷台の上ではエリクは思う様な程の睡眠が取れていない。暫しの休憩で思う存分寝かせる為に荷台の傍で話さず、なけなしの気を使って、どうやら二人は荷台から離れたようだった。

もしくは馬を買う買わないの話し合い自体が、休憩を長くさせる言い訳に過ぎないのかもしれない。それでも、カヤには瑣末だ。どうでもいい事だった。

幌の付いていない荷台の端から奥を覗き込んでも、一体どこで話しているのか二人の姿は見えなかった。あの二人のことだ。いくら腕に覚えのあるカヤを傍に置いているとはいっても、女と、見かけは少女然している少年だけを荷台に残して、駆け付ける事の出来ない距離まで離れたりすることは無いだろう。そう分かっていてもいた。体を乗り出せば、僅かに見えるは星以外には何も無い空。それに深く覆い被さる木々。もれなく何もかもが闇に包まれている。

随分と明るくなったと思えば、丁度真上の木々が無い部分にまで月が移動してきていた。月を包む紫の光、光を包む濃い闇色の空。月灯りは眩しい程だ。でもどこことなく冷たい光に見える。

ああ、とても眩しい。心の奥底に凝り固まった物を見透かすような光だ。見たくないものまで見えてしまう、そんな光だ。途端に胸の空洞に気付かされる。もうやっと、忘れたのだと思ったのに。



カヤは横で既に眠りに入ったらしい温もりを振り返り、自分の背に掛かっていた毛布を被せた。ゆっくりと横たわらせれば、目を擦りながらも起きあがって来る気配はない。その姿を見ると、空虚になつていた筈の自分の中がほんの少しでも潤つて行く気がした。思ひ込みなのかもしれないけれど。

ずっと前に、大切なものを手放した。そのカヤの傷はまだ癒えず、未だ言い訳の様な旅を続けている。手放したものは何もかも違う筈のエリクから、どんなに言い聞かせても手を放せないのはその所為だ。

荷台から静かに下りると、木が軋んだ。これ位の音では目覚めなйдらう。ゆっくり眠ればいい、今は私が守るから。そう心の中で誓う。

絶対に放さないと神に誓った筈の唯一無二の存在は傍にはいない。月を見上げるつもりもなく、空を見上げた。月が見える。全てを癒す事もなく、ただ見つめるだけの存在。

愛すると決めた時に、決して報われないと知っていて愛した。愛した事も傍にいる事も全て、直ぐに夢になつてしまう事も知っていた。触れた一瞬、一瞬が幸せで愛おしかった。もう微かな記憶。

それでも待ちに待って腕に抱いた柔らかな贈り物に、頬を擦り寄せた一瞬は今でもまだ鮮明に覚えている。指を握る小さく細い指。つい先程までの痛みを忘れる程の、愛おしい泣き声。抱いた時に号泣した。ただ無性に愛おしくて。

やっと全身全霊掛けて守るものが見つかったのだと思った。何を無くしても、それだけは守ろうと思った。自分から手放した永遠とも言える愛情が抜けた空虚さを、それで埋め合わせするのだと信じていた。

眠る無邪気な顔を見れば、胸が詰まった。意味無く涙が溢れて、愛おしさが胸から溢れ出た。

抱くと胸に頬を擦り寄せてくる。顔を合わせ見詰める目は、未だに愛しているあの人の瞳。決してもう会うことの許されない、あの

人の目。それ程まで愛していたのに、自分から手放してしまった。

見上げた月は孤独だ。見上げると無性に泣きたくなる。寂しくて、苦しくて。

ヤンやクルトの手を離せないのは自分の方だ。カヤは届かない月から目を離し、背中の方こうで微かな寝息の聞こえる毛布の山を振り返る。寝息で安心する事を、カヤは大切な物を失ってから初めて知った。

定期的に聞こえる寝息。上下する体。

空を見上げる。どんなに手を伸ばしても、絶対に届かないのを知っている。爪先を伸ばした。

「会いたいわ、貴方に」

呟いた声は闇に消えて行く。何もかもを例外なく包む静寂の闇が、全て覆い隠した。

「俺は今回、顔が割れてるから無理」

橙の山ワルゼに入る寸前、最後の休憩の時に突然クルトが言った。そのまま木の幹に背中を預け、先程の小さな集落で仕入れたばかりの赤く熟したりんごを一口齧る。瑞々しいりんごの汁が、クルトの着ているアイボリーのシャツに飛んだ。

今日のクルトは、アイボリーのシャツに腰には革のベルトをして、ごく普通の服装だ。ごく普通の服装、の筈なのに全然普通に見えないのは上に載っている顔のお陰なんだろう。顔がいい人って得だ、なんてったってりんごだっけ付いてくる。

金色の柔らかそうな髪は、日陰にいても輝いている。

アクヴァマリーンの目は遠くから見ても印象的だ。でもいつも笑っているようで、全く笑っていないそんな少し冷たい感じのする瞳だ。あれが本当に笑えば、さぞかし美しい宝石になるだろうに。エルケがそう思っても、本当のクルトなんてまだこの短い旅の中では見た事が無いので予想でしかない。

エーゲルを出て、既に十二日目。たまに集落や村を見つけると、彼等は商人である事を思い出したように仕事しているようだ。先程の集落で、また野暮用と消えたクルトが袋一杯のりんごを貰って来た。りんごはその仕事の報酬のおまけらしい。

袋の中のりんごはどれも艶があり、美味しそうに赤く光っている。日陰に腰掛けたまま、手を伸ばしたヤンへと手元のりんごを投げ付けたカヤも、クルトの話聞いて頷いた。

カヤは今日、らしく無くねずみ色のくすんだスカートを穿いている。ちよつと野暮つたいけれど、どうやらウールで出来ているらしく風の冷たいワルゼの近くでは温かそうだ。髪の毛は結ばずにそのまま後ろに流している。腰に白のエプロンでもしたら、お針子のおばあちゃんみたいだった。実際の中身はカヤだから、そんなことは

無いけれど。

カヤは最近少し元気が無い。暑さの所為なのか、少し食欲も落ちている。珍しくその所為か、クルトがカヤには優しい。口調も態度も。

クルトのそんな態度、エルケには向けられたことなんて今までに一度もない。最近、何故か担当になつたらしい出発の時にエルケを馬車まで抱き上げてくれるのも、荷台へ最後はいつも放り投げる。だから最近を受身まで覚えた、投げられる時に痛くて。

顔が王子様みたいなんだから、もっと王子様みたくしたらいいのに。でもクルトも、身元が判明して隠し事なんて持つてない普通の女の子には優しいんだらう。嫌だな、どうしても卑屈になつてしまふ。

「私も。今回は勿論、無理だし」

カヤが言った。

エルケは渡されたりんごに大きく噛み付き、咀嚼する。中に蜜の見えるりんごは甘く、ほんの少しだけ酸っぱい。

今日のエルケはいつも通りのシャツに、ウールのベストを着て、前をベルトで留めていた。カヤに買って貰ったバッグ 何も入っていないけど、を腰から下げ、先日新しくして貰ったばかりの短い革靴を履いている。前まで履いていた長靴は底が破れ、穴が開いてしまったのだ。

赤金の髪は結構長くなつてしまった。エルケは切らずに後ろで括る様になっている。そうしたら女に戻る時、楽かも。そう思ったが、いつ女に戻るかなんて途方もなく先の事だ。

垂れてくる甘い汁を指先で拭くと、エルケはもう一口噛みついた。今日の行程は朝から過酷で咽喉が渴いていたのだ。山に登るまでは、夏という事もあり暑く日差しも容赦なかった。

話はまだ続いているらしい。だらりと伸ばした足で足元の土を引っ掻いて、三人の話が聞こえない振りをする。分からない会話には参加しない方が無難だ。交易の事も商売の事も、はつきり言って素

人のエルケには参加しても、偉そうに何か言えることなんてない。別にむくれてる訳じゃない、だって仕方ない。でもほんの少しだけ寂しかった。

踵で土にりんごの絵を描いて顔を上げると、ヤンと目が合う。でも直ぐに逸らされた。別にわざとでは無いのだと思う、それでも少し何故か落ち込んでしまう。なんか、そんな今日の自分が嫌だった。ヤンの今日の服装は漆黒。比較的、旅が始まるとシャツ以外は濃い色を着るヤンでも、流石に全身を黒というのは初めてだった。筋肉質な身に付いた黒の服が、元々の体格を際立たせている。

多分、ヤンがいきなりエルケの目の前に現れたら恐怖で泣くか、しゃがみ込むだろうな。逃げようなんて気が起きるとは思えない。逃げ切れないのを本能で察知するに違いない。

いつもは後ろに括っていた少し伸びた髪を、ヤンはどうやら自分で何も見ずに切ったらしい。短くなつてはいるけれど元々僅かにうねっていた髪は、より一層その方向性を失ったようで、とにかくあちこち無造作に散っていた。

後で嫌がられなかったら、少し整えてあげようかな。そんな事を思う。

「俺が行く」

ヤンが口を開き、会話が突然再開した。

「ヤンは分かるんだけどねえ」

「ヤンだけって言うのは、ねえ？　今回は何も手に入らなかったし」

「ま、仕方ないんじゃない？」

「そうねえ」

全く話の読めない三人の　主に二人の、話が途切れた。  
ん、何かあった？　話決まったなら、違う話してもいいかな。

エルケはりんごを半分程まで減らした所で顔を上げる。このりんご、本当に美味しいね。そんな他愛もない話で口を開いていいか、どうにも踏み切れなかったのだ。

視界の端に見える街道は、相変わらず整備の手が届いていない悪

路だ。壊れた煉瓦や石が散乱し、いつにも増して揺れるし、荷台が飛び上がる度にエルケも宙に浮いた。尻と肩が痛い。多分、青痣になってるに違いない。

少し山側に向かっている所為か、日差しは強い真夏の筈なのに空気が冷たくなってきた。エルケはその場にいる三人　ルツツまでもこちらを見ている、の顔を交互に見て余りの居心地悪さにもう一度俯いた。

話は終わってないみたいだし、もう少し我慢しよう。

伸ばした足も太腿へ近付け、りんごを持った手でそのまま膝を抱く。退屈だ、ルツツの傍にでも行ってようかな。お邪魔みたいだし。被害妄想染みた考えにまた嫌気がさした。旅の新参者はまだ上手く空気に馴染めない。こういう仕事の話をしている時は特にそうだった。こんな事ばかり考える。

「エリク」

突然、クルトに名前を呼ばれて驚いた。

やっぱりエリクとエルケって何と無く響きが似てるから、反応が鈍くならなくて楽だよね。驚きの余りに、そんな今更な事を考えてしまう位だった。

最近、クルトは滅多にエルケの名前を呼んで来る事が無い。だからわざわざ名前を呼んでエルケへ話掛けてきたのが、エルケには少し意外だったのだ。やっぱり、話を聞いてないのがばれたのかな。

クルトが食べ終えたりんごの芯を放り投げた。ルツツの前にまで芯が転がって行くと、別に芯を食べると言われた訳じゃないのにルツツが歯を剥き出して怒っている。きつと後でクルトは背中ヘルツツの鼻面をぶつけられるだろう。もしくは蹴られるかもしれない。冤罪だけど、ルツツはクルトに厳しいから。

クルトが片手を振っている。飄々とした口調で、彼は苦笑しながら言った。

「今回は、ヤンと二人で行つといで」

ヤンと？　どこに？　何で？　突然、自分に降ってきた話の流れ

が分からず、エルケはりんごをぽたりと土が垣間見える草むらへ落とした。

こうして、エルケの初仕事が強制的に決定した。

ワルゼはやや高い丘の上に広がるので、辿りつくまで傾斜が急な坂が多い。その為に馬車で城まで辿りつく事は出来ない。ワルゼに辿りつくには、基本徒歩か馬でなくてはならないのだ。

橙の山と呼ばれるワルゼ騎士団が常駐するワルゼ城は城壁、防壁、それに門に至るまでその全てが赤い煉瓦造りだ。麓には砦に守られた小さな村もある。

ワルゼ城を初めて見たエルケは、そのまさに『橙の山』と呼ばれる所以を知った。

陽の光に当たると、赤い煉瓦は陽の光を跳ね返し、まるで橙に見えるのだ。

重なる防壁、伸びる城壁はそのまま角ばった主塔へと続いていた。その姿を言葉で表現するならば確かに『橙の山』で、エルケはヤンの背に強くしがみ付きながらその堅牢な姿を見上げた。その迫力に圧倒された。

威圧感のあるその姿は先入観の所為か、頑なに突然の訪問者であるエルケを拒んでいるようにも見える。

腰を少し浮かせても尻に直接響くルツツが駆ける震動にエルケは必死で耐えながら、手綱を握るヤンの背中に顔を押し付けた。

今回は、エルケがヤンの仕事の同行者になる。その話をクルトから聞いて、エルケは正直かなり驚いた。彼らの仕事を手伝うなんて事になるとは考えてもみなかったのだ。

確かに金を持っている訳でもなくただ食べさせて貰っている身ではあるので、手伝えることは手伝えたいと思っではいたけれど。

それでも、どうせ組むならカヤの方が良かったな。なんて、口が裂けても言えない。

最低限の会話しかしない同行者の、その背中に顔を寄せながら小

さく溜息をつくるとルッツの動きが少し収まってきた。エルケは必死に浮かせていた尻を少し脱力させて、やっと鞍に下ろす。

明日は絶対に内腿が痛むに違いない。うわ、明日が来るのが怖い！ 後でカヤに説明して、何か薬でも無いかって聞いておこう。

「疲れたか？」

「ううん」

気遣う声が、前から聞こえてくる。もう既に疲れている、とは思われなくなかったので「大丈夫」とだけ答えた。内腿と尻がもう一杯一杯なんて言えやしない。一応、これでも女の子だし。

どうやら城が近付いて来たらしい。ヤンはルッツを走らせずに、周りの景色はゆっくりと進んだ。顔を上げると煉瓦の門構えはもう目の前で、城の全貌は既に茂った木々に隠れ見えない。

エルケはヤンの背中から体を起こし、横からヤンを覗き込む。肩幅が広くて、ヤンの顔は全く見えないんだけど。

「ね、ヤン」

「何だ？」

「気になってたんだけど」

「ああ」

律儀に返って来る相槌。こういう所は、無愛想なヤンだけだいいと思う。

黙られるとその風貌の所為で流石に話しかけていいか悩むけれど、こう律儀に相槌を打ってくれると聞いてくれそうな気軽な　　まではいかないか、感じがするから。

エルケは後ろ手で鞍を掴み、周りを見回した。

深い緑、高くその背を伸ばし生い茂る雑草。誰もいないけれど、誰か潜んでいる様な気がする静かな森。何かに驚かされ飛んで行く鳥の姿も、姿は見えなくても可愛らしく鳴く鳥の声も聞こえないのは少し不気味だ。こんなに空は明るくて、日差しも降り注いで来るのに。

空を仰ぐと、羽を大きく広げ飛翔する鳥の姿。真っ直ぐに城へと



飛んで行った。

「どうして、カヤは城に行っちゃ駄目なの？」

元々いつもは別行動と聞いていたけれど、今回のカヤの言い方はいつもと少し具合が違っていた。勿論無理、って今までのカヤには無いことだ。最近の具合の所為かと思っただけれど、そうでもないみたいだった。

それにいつもならエルケの行く所には必ずカヤが付いて来てくれて、例えば着替えだったり体を拭く時だったり、口では過激な事を言いながら実際にそれをされた事はエルケには覚えが無く、いつも安心して過ごす事が出来た。だからエルケは正直、カヤと離れるのが不安だ。

最近とみにエルケは体へ肉が付いて来たらしく、小さめの子供服では体型を隠すのが難しくなってきたというのに、今回の同行者はそういう事には全く無関心なヤンだった。それでも、クルトじやなくて良かったというべきか。最近のクルトは少し変だから。

エルケの前でヤンが、物凄く重要な事を全く何でもない事のように言った。

「ワルゼは女性禁制の城だ」

「なんだ。そ、そうなんだ」

背筋に冷たいものが走った。

だからどうした、という風な口調のヤンの後ろに、完全にその規則を破っている人が同行者として乗ってるんですけど、とは言えない。

明らかに心臓が早打ちしているのを誤魔化しながら、エルケは仰け反りながら笑って見せる。背中にくっついて体が震えているのを悟られたくは無かった。動揺しているのがばれてしまう。

流石に動揺が口にも出る。しどろもどろになるのを止める事は出来なかった。

「そ、そっか。それじゃあ。うん、無理だよな」

「ああ」

十分自分も弾かれる側なんだけどな。発覚したらどうなるのか。なんて、もうここまで来てからそんな事は言えなかった。

目の前に迫った赤い煉瓦の門。重そうな門扉は隙間なくしっかり閉まっている。門上には見張りの出窓があり、そこで訪問者の応対をするらしい。ここでエルケ達が疑われると、決してその門扉が開く事は無いのだろう。

ここは全てヤンに任せるのが良策だろう。出自を明かさず、性別も不鮮明なエルケには何も出来る事は無い。それでもクルトとカヤは、この城でエルケが出来る事があるからそれだけに力を注げ、と助言してくれた。

実際は女であるエルケがヤンの迷惑にならず出来る事の最優先は、女であることを気付かせない事だ。あとはそのやるべき仕事のみに力を注ぐしか、ないだろうな。仕事の面では、迷惑掛けない自信は無いけれど。

軋んだ小さい音をたてて、木で出来た見張りの出窓が開く。顔を覗かせた男はどれだけ敵つい男かとエルケは構えていたが、ごく普通の青年だった。むしろ結構な好青年だ。

「ヤン・ディーデリヒ・リュッタースだ。副総長に、お会いしたい」朗々と響くヤンの声に、エルケはヤンの背中で正直驚いていた。今の声は、いつもの言葉少なで可能な限り声も低く話すヤンの声と全く違った。ヤンは今、先程の服装の上に外套を羽織っている。長い外套はまるで軍衣に見え、そんな格好のヤンは立派な騎士にも見えた。しかも貴族に仕えている、そんな身分の騎士だ。

出窓から顔を見せていた門番が頷くと、彼は直ぐに顔を引っ込める。この時間は、その副総長へ訪問者の身分の確認中なのだろうか？ その後少し待っても窓から誰かが出てくる様子はなかった。

退屈になって沈黙に耐えられなくなったエルケがヤンの背中を突つき、声を潜めて話掛ける。別に他愛もない話を選んだつもりだった。

「ね、ヤン。僕、ヤンの名前初めて聞いたよ」

ヤンはエルケの想像した通りに不思議そうな表情を浮かべた。返事は多分、言っただろう、そんな感じだ。

「言っただろう」

ああ、やっぱり！ 自分も言いたくない所為か、敢えて全部名乗らないけれどヤンはそういうのではなくきつと全く気にしていない。エルケの前にいるヤンは過去もフルネームを知らなくとも、ただの旅の同行者のヤンだ。

逆を言うと、ヤンが話しているエルケはあくまで、今存在している『エリク』であってエルケでは無い。彼にとって、エリクの奥底にあるその中身も過去も関係ないのだ。

「うん、そうだね。聞いてたよね」

エルケは曖昧な返事をして、そのまま出窓へ視線を戻した。

名前がヤンであるのだけは知っている。カヤもクルトもそれは一緒だ。でも複雑だった。彼らにも過去はあり、隠しているものもある。

元々、皆訳ありと言っていたじゃないか。自分が何も話したくは無いの、他人の事だけは知りたいというのは自分勝手だ。分かっている。

ぎこちなく目の前にいるヤンの腰に腕を回せば、微かに笑っている気配がした。

「怖いか」

「大丈夫、だよ」

背中に頬を預ける。大きくて温かい、凄く安心した。ヤンが声を出すと背中に直接声が響く。声が低い所為か、頭に震動が直に伝わって頭の中で考えている事が混ざり合った。

あ、また笑っている気配。目の前にある門扉が重く地響きを立てながら開いて行く。ルツツの手綱を持ち直したヤンが背筋を伸ばし、エルケもそれに倣って背筋を伸ばした。

少しずつ、門扉は開く。あの中は騎士団の管轄する女性禁制の場所だ。門前の庭が見え、その向こうに煉瓦造りの建物が見え

てくる。ここで引き返して、なんて言えやしない。逆にここで言ったら怪し過ぎる。

橙の山ワルゼ、金にがめつい男しかいない無骨な城。エルケは門に続く高い城壁を見上げた。ああ、扉が全て開いてしまう。

ルツツの足を進める寸前、先程の騎士然とした声では無くいつも通りの低い声でヤンが言った。

「俺に全部任せろ、お前はいつも通りでいい」

開かれたワルゼの城内に、エルケは足を踏み入れた。

ワルゼ城は、大きさも形も異なる二つの城から出来ている。

高い円塔が印象的な大きな城は正面から奥に、塔は無く中庭を囲む形で造られている中型の城が手前に、それぞれを屋根の付いた通路が繋いでいた。

正面の門から中に入れば、中型の城　中城、の中央にある中庭の他にも、中城と門の間に一つ、大きな城　高城、と中城の間に大きめな中庭が一つある。

エルケは城の中庭というと花の咲き乱れる美しい物だと想像していたのだが、その予想は全くといって当たることなく、広がっているのはただの野原だった。申し訳程度に見える緑は、城の中で育てている野菜だ。それは案内してくれている先程の門兵の談。

門を抜け、ルッツを預けるとヤンとエルケはそのまま中城の中に案内された。

中の回廊を抜け、そのまま高城への通路を通る。どちらかという和不自然にも感じた中城の静けさに比べ、高城の静けさはその澄み切った空気自体の所為に感じる。

外の外壁は全てが煉瓦造りなのに比べ、建物の内部はその下半分のみ煉瓦造りだった。高城への通路は残り上半分は白壁で、まるで花の蕾の様な美しく閉じる天井の形をしている。

先日、エーゲルで半強制的に連れて行かれたフロリアンの邸とは違い、飾り気はないもののそれが却って荘厳な雰囲気醸し出していた。

例え剣を持ち、人の為とはいえ剣を振るい戦う騎士団とは言えど、その基本は礼節、公正、忠誠である。騎士団とは無骨で血の気が多いというイメージでしかなかったエルケは、そのどちらかという教会にも似た静謐さに息を飲んだ。

「副総長室はこっちなんです。遠くて申し訳ないです」

高城への通路を歩きながら、門兵であるマルセルが言った。本来は守衛室から離れる事は無いのだが、今回は特殊な事情でマルセル自身が副総長室に案内する事になったらしい。

含みのあり過ぎる説明に突っ込みどころが満載だったとはいえ、エルケもそこまで気が回らずにただ、お願いします、としか言えなかった。ヤンはマルセルのその説明で理解できたのか、軽く返事するに止まった。もしかしたら意外に全然分かってないのかもしれない。

マルセルは黒の団服を着ている。黒地に抜かれた橙の紋章が印象的だ。柔らかそうな風貌をし、ヤンに話しかけながら少し足の遅れがちなエルケの方も気遣ってくれていた。

少しでもエルケが置いて行かれると、ヤンは周りを顧みずにエルケを肩に背負うだろう。こっちも遅れないように必死だ。だからマルセルが少し歩調を遅くしてくれて助かった。これなら何とか付いて行ける。

但し、歩き過ぎでエルケの体は汗まみれだった。今日、戻ったら体を拭く事にしよう。そう思いながら、エルケは汗で張り付く首元を緩めた。

大きく取った窓が続く通路を抜け、三人は高城に入る。

ここまで来るのに、騎士団の城で会った人間はマルセルだけだ。正確に言えば、ルッツを預けた馬番が一人と扉を開けてくれた扉番が四人。それにマルセルで、城に入ってから六人の姿しかエルケは見えていなかった。

勿論、静けさ増した高城でも人影は無く否応なく緊張感が増していく。そうだ、ここは女性禁制だった。思わず思い出してしまえば、背中に冷や汗が流れて行くのが分かった。

肌に触れる空気が若干冷たくなった気がする。だが、その緊張感を暢気なマルセルの声が唐突に破った。

「それにしてもお久しぶりです。お元気でしたか？」

「ああ」

どうやらヤンはワルゼが初めてでは無いらしい。

元々動じる姿を人に見せる事は無いとは言え、道理で随分といつても通りを保っていられるわけだ。だとしたら、慣れた場所へ行くのに何故エルケを連れて行かなくてはいけなかったんだらうか。エルケは自分がここに居る意味が分からない。出来る事って一体何なのだらう。

二人は足を止めてはいない。話しながら歩く速度を緩めることなく進み、むしろ少し速くなった位だった。そうになると、もうエルケの足では付いていけない。少しずつ離れて行く。

分かつてはいるけど、少し気遣ってよ。そう言いそうになるのをエルケは我慢して飲み込んだ。

不可抗力とは言え垣間見えるヤンの過去に、エルケはこの場にいる事が少し後ろめたくなって来ていた。わざと足を進める速度を下げると、途端に今までよりももつと二人の背中が離れていく。

だって近くに居ると、聞いてはいけないと思うのにどうしてもエルケは耳をそばだててしまうのだ。

「前は、十年前でしたっけ？」

「そうだな。マルセルは騎士見習いだった」

「そうですね。初めて見たヤンは正直、かなり怖かったのを覚えてます。ああ、あの時も僕が案内したんですしたっけ？」

「ああ、あの時は庭で迷っていたな」

「まだ聞こえる、もつと離れた方がいい。」

今にも立ち止まりそうな速度でエルケは歩く。その反面、気付いてくれればいいのに、と甘えた事も思った。

でも、勿論あのヤンがそんなエルケの複雑な心境に気付く筈もなく、会話をする度にどんどん背中はずらくなっていった。こんな時、カヤならきつと気付くだらう。クルトだって、ちよつと傷つく事を言っても結局は気付いてくれる。

嫌だな。聞きたくない。でも、目の前で昔話を始めた方が悪いんだ。何度もそう思おうとしたけれど出来なかった。

ヤンの昔話を聞いたからって、その分自分も言わなくちゃいけない訳でもないのに、足が何と無く止まりかかった。それで、速度を緩めた言い訳が欲しくてエルケは何と無く何も無い壁側よりも、窓側に視線を移す。

左側に見える大きな窓と窓の間には全て、エルケの身長よりももっと大きな紋章を刺繍している旗が連なっていた。黒地に橙、重なる剣と楯。勇壮としたその旗はやっぱり思っていた騎士団そのままの力強さで、エルケは足を思わず止め、その旗を見上げた。

凄い迫力だ。でも何故なのか、その旗を見た記憶があつた。黒地に橙、色合いだけではなく大きな逆三角の団旗。風にはためくその姿が、どうしてか記憶の片隅に残る。

姉さまと見た事があるのだろうか。エルケは、とうとう完全に立ち止まってそれを見上げた。

覚えているのは、小さなエルケの指を握った姉の冷たい手指。

記憶の中の姉さまはエルケより少し大きい位で、エルケが見上げている事を考えるとエルケはかなり幼い頃だろう。でもどうしてか、どこで何を話したのか、全く覚えていなかった。ただ傍に姉さまがいるならいいや、そう思ったことしか覚えていないのだ。

「リク」

どこで見たんだろう？ いつ見たんだろう？ エルケは見上げながら、団旗をもっと近くで見ようと壁側に近寄った。

ふと視線を向けた大きく開け放たれている窓向こうから、先程までは聞こえて来なかった騒ぎ声が聞こえてくる。団旗を見返そうとして、思わずそっちの方が気になった。窓に寄って外を眺めてみれば、マルセルと同じ団衣を着た体格のいい男達数人が誰もいなかった中庭で騒いでいる。

なんだ、やっぱり他にも人がいるんじゃないか。

エルケは窓枠に手を預け顔を出すと、中庭にいた男の一人が不思議そうに窓から中庭を覗いているエルケに気付き、片手を大きく振った。



覗いていた事を気付かれた。赤金の髪は陽の光に当たるとどうしても目立ってしまうから、窓に隠れたつもりでも結構目立っていたんだろう。見ていた手前無視する訳にもいかず、エルケは小さく片手を上げると手を振ってくれた青年に振り返してみる。

すると、途端に騒ぎ声はより一層大きくなった。その後直ぐにエルケの手を振り返した青年は上から覆い被さる男達に揉まれ、全く姿が見えなくなる。

一体何が起きたというんだろう、さっぱり分からない。エルケは手を振ったままの状態で行き場の無い片手を下ろした。中庭の馬鹿騒ぎは継続中だ。

もういいのかな？ エルケは首を庭に向けたまま体だけを正面に向き直り、何故か壁に正面衝突する。鼻を思いつきり打った。

「悪い」

「ヤン、今の副総長室は二階です」

短く謝った声の後に、マルセルの声が聞こえる。でも、マルセルの声だけは少し遠くからだ。

「分かった」

ヤンの声が聞こえた、でも、ヤンの声は遠くからではなくエルケの真上からだった。

壁に向き直ると、ヤンの外套が見えた。ヤンは窓枠に手を掛けてエルケの上から外を見ていた。エルケが突っ込んだのはヤンの胸

正確には腹、だ。

エルケの背中側からより騒がしい声が聞こえてくる。間もなく剣がぶつかりあう金属音も聞こえてきた、どうやら手合わせが始まったらしい。元気な事だ。

「何か、見えるか？」

別に、退屈だから見ていただけだよ。なんて、子供臭く、へそ曲がりな言い方だ。

でも思い付くのはそんな責める言葉ばかりで、エルケは無難に「何も」とだけ返した。思ったより、声が少し怒っている様に響いた。

おかしいな、確かただ寂しかっただけな筈なのに。

エルケはそのまま横を擦り抜け、既にその場を去っているマルセルの消えた方へ足を進めると、唐突にヤンがエルケの頭に手を伸ばしてくる。行きかけた体の勢いを頭だけで阻害されて、首が悲鳴を上げた。

むくれているんだ。今回は知らない場所で、今頼れるのはヤンだけだから。もつと自分に気を使って欲しい、そんな事考えるなんて本当にどうかしてる。

「二階まで抱くか？」

使い所を間違ったら勘違いされそうな言葉を、ヤンは表情変えずに言ってきた。

いらないよ、歩けるよ。ありがとう。じゃあ、手だけ貸してくれる？ 言い方なら色々あった筈だ。それなのに、苛立っていたエルケはただ首を振る事だけしかなかった。

「そうか」

そう言っただけ背中を向けたヤンに向かって、エルケは心の中で大きく舌を出した。

すぐそうやって引いてしまうから、簡単にヤンとは話が出来ないんだ。心の中で思う限りの罵声を吐いた。そんな変な自分が、分からなかった。どうしてこんなに苛立つかも、全く分からなかった。

ゆっくりとエルケが付いてこれる程の速度で歩き始めたヤンの背中を、我儘でどうにもならない天邪鬼なエルケは足を引きずって追い掛けるしかなかった。

副総長室は、二階へ続く階段を上がって直ぐにあった。

扉の前に立ちヤンとエルケの到着を待っていたマルセルは、息も絶え絶えのエルケを見て笑いながら小さな声でもう一度、遠くで申し訳ないです、と頭を下げる。

助けの手を全て振り払ったのは自分なので自業自得です、と答えるべきだったけれど息も上がってエルケは首を振ることしか出来ない

かった。階段も急だし、エーゲルみたいに狭くないので落ちないようにするのが大変だ。

帰りたい。まだ来たばかりだけど、とにかく帰りたい。それだけエルケは考えていた。

「副総長、マルセルです」

「入れ」

短い二度のノックの後にマルセルが声を掛けると、扉が閉まっているとは思えない程はつきりと野太い声の返事が聞こえてくる。

その、よく言うと朗々と、悪い言い方をするとまれに見る程うるさい副総長に指示されるがまま、マルセルが開けてくれた扉の近くへとエルケは足を進めた。

最初にヤンが風のように大股で入った。ヤンがこちらを向く前に、エルケはその後をヤンの背中に隠れながら入った。手は借りたくない、ただの意地だった。その後にマルセルが入り、扉が閉められる。

最初に見えたのは、騎士団というイメージで凝り固まった頭が想像していたよりも整然とした机の上だ。壁には幾つもの書棚がある。背表紙には細かい文字が書かれているけれど、学のないエルケには読めなかった。どうしても騎士団って言うと勝手に粗野なイメージを持っていたエルケには驚きだ。

大きな窓、でも部屋は薄暗く感じる。なんて事はない。大きな体を存分に広げ、副総長と呼ばれる人間が窓際に立っているのだ。漆黒の団服は彼が着るとマルセルよりももっと威圧感を感じさせる。

褐色の髪に褐色の髭。青よりも深い藍色の瞳はヤンに笑いかけ、その大きな片手の平でヤンの肩を抱いた。

「やあ、ヤン。久しぶりだな！」

「ああ」

ヤンよりも僅かに低い身長か、もしくは同じ位の背だ。

横にいるエルケは勿論彼らの視界に全く入らず、まるで蚊帳の外だった。マルセルに冷めきった視線を流せば、申し訳ない、と両手を合わされる。いいけどね、別に。

直ぐに紹介されるのかと思っていた。二人はいきなりまたエルケの分らない話を始めてしまった。紹介の時期を失い、エルケはただの置物の様だ。

俺に全部任せろ、とか格好のいい事言っていたくせに。そんな事を考えると、切りが無い。嫌な事や文句ばかりがどんどん増殖する。四人の旅を始めてまだ少し、少しずつ互いの事が分かりかけて来ると、贅沢になった気がした。

連れて行ってくれるだけで、本当は良かった筈だ。寂しくさえなければ、本当は良かった筈だ。そうだった筈なのに、優しくされると当たり前になってきた。足が不自由だから、手を貸してくれるのが当たり前になってきた。

「エリク君！」

「は、はい！」

考え事をしていた所為で、耳の傍から突然聞こえた大きな呼び声に呼吸が止まるかと思った。

横を見れば副総長の顔、藍色の瞳が柔らかく微笑んでいる。髭、歳もそんないってなさそうなのにおじいちゃんみたい。

彼は直立不動なままのエルケを両腕で掻き抱き、団服を着た胸にしっかりと沈めた。エルケはその汗臭い腕に抱かれて、思わず懐かしい女の子の様なかん高い悲鳴を上げる所だった。でも。声を上げるなんて出来やしない。顔を思い切り体に押し付けられているんだから！

でも逆に良かった。かん高い悲鳴なんてあげたら、女子禁制なのに早速ばれる所だった。

腕の力は強く、抱かれていると息苦しい。

「おい」

直ぐにヤンに襟元を掴まれ、エルケは副総長から引き剥がされた。目の前の彼は残念そうな顔をしながら、愛らしい仕草。おっさんだけど、で首を傾げている。勿論、悪意は無いんだろつな。でも許されもしないけれど。

振り返った先でまたマルセルの謝罪。ここにいる間に彼は一体何  
度謝るんだろう、心配になる。

副総長はエルケの手を両手で掴み、嬉しそうに言った。もとい、  
叫んだ。

「私はワルゼ騎士団の副総長をしているノルベルト・レーニシュだ  
！ 君達の短い滞在を、騎士団は心から歓迎しよう！」

もう一度、抱き締められそうになったからエルケはその場を飛び  
退いた。足が不自由な割に素早い行動だった。

短い滞在って、もしかしてここに泊まるの？ ヤンと二人で？  
聞いてないよ、クルト！ エルケの頭の中で色々な事が渦巻いてい  
る。

今回の仕事を割り振りしたクルトに強く詰め寄りたかった。もし  
くはヤンに問い質したい、一言ぐらい言ってくれたら良かったのに  
心の準備も出来やしないじゃないか。

酒と料理の件を台所へ伝える為に、気苦勞なマルセルは「また後  
で」と言い残して、副総長室を去っていった。門兵なのに、マルセ  
ルはまるで全担当のようだ。

今夜は朝まで酒盛りだな。そう継いだノルベルト副総長の浮かれ  
様とは間逆に、エルケは何度も彼に背中を叩き続かれているヤンの  
後ろ姿を黙って見ている。勿論、文句ありげにだ。

「よし、飲むぞ！ 騒ぐぞ！ さあ、エリク君も一緒に！」

あの、こことて礼節と公正と忠誠を重んじる騎士団ですよね。

エルケはカヤが前に言っていた『脳味噌が柔らかい割に、財布の  
紐は固くて、無駄に大きくて臭い男共の集まり』という言葉を思い  
出した。最悪だ。本当にその通りだ。

一体、いつ何処で団旗を見たんだろう？ エルケは手渡されたゴブレットの中に入った、ベルンシュタインが溶け出した様な濃い色の赤ワインを覗き込んだ。揺れる赤い表面には、何と無く元気の無いエルケの顔が映っている。

それは初めて飲んだワインの所為か、先程からずっと考え込んでいる所為か分からない。

高城にある騎士の間と呼ばれる大広間には、今既にかんりの人数がひしめいていた。乾杯の後始まった無礼講とも言えるお祭り騒ぎに、エルケの耳は割れそうだ。

食事を始めた当初こそ何とか席に付いていた騎士団だったが、酒も程々回って来ると椅子は蹴り倒され、テーブルの上にすら人が乗り叫んでいた。とても大人が集まっているとは思えない程の大騒ぎだ。

エルケもまさかこの城に、こんなに人数がいたとは思わなかった。ざつと見、六十人以上はいる。比較的筋肉質で大きい体に黒地の団服を着た男が、六十人も大広間にひしめき合っているって言うのは壮観だった。それに何とも言えず臭く、想像以上に騒々しい。

先程まで彼等は中城　騎士団が主に生活している城、の中で待機中だった。というのがノルベルト副総長の談。

待機というか、息を潜めてこちらを窺っていたの間違いだろうな。あの静けさは、やっぱりちよつと不自然だった。

壁に掛かる何と無く見た覚えのある大きな団旗は、団服と同じ様に黒地に橙の紋章。通路に掛けてある団旗よりも一際大きく、騎士の間の中央に一枚しか掛かっていない。

何度見ても、エルケはやっぱり覚えていた。臆気だったけれど。

こんなに団員がいても、まだ十人程は任務中だ。とノルベルト副総長は言った。

ここ最近、頻繁に現れる賊から白の大都市ヨープまでの旅人を送る任務をこなしているらしい。ワルゼ騎士団の他にも、騎士団は拠点を持ち複数存在している事も教えて貰った。

常に七十人程いるここは、比較的人数が多い騎士団なのだ。

「何、ヨープまでならあいつらにはそんな難しい任務じゃないからな！」

そう言っただ口で笑いながらエルケの横で酒を飲むノルベルト副総長は、酒盛りが始まる前から非常にご機嫌だ。

陽気でエルケにも気さくに話しかけてくれる副総長は嫌いじゃないけれど、大きな声は慣れていないから少し怖かった。

それに、たまにだけどエルケの背中を強く叩いてくるのだ。その度に少ししか飲んでない赤ワインがゴブレットから零れ、白いテーブルクロスを汚した。エルケがワインを飲んだ時に叩かれた所為で、先程は思いつきり口から嘔いて笑い飛ばされた。嫌だな、段々性別が曖昧になっていく。

きつと今日、エルケの背中中は真っ赤に腫れているに違いない。それよりも今日はどこで寝るんだろう？ 答えはまだ無かった。

聞きたい筈の人間が、何処に行ったのか、捉まらないのだ。

「エリク君！ こんな体じゃ剣も持てないぞ！」

持ちません。こんな体って言われても僕、女ですから。心の中で即答した。

曖昧に微笑むと、ノルベルト副総長に剣を持つ心得を長々と伝授される。もしかして、ここに連れて来られたのはこの為なんじゃないんだろうか。

体の鍛え方に心の鍛錬、それに何故か子供の育て方まで伝授される。副総長は、本当に困った酔っぱらいだった。

どうやら会話の対象がエルケの逆隣に移ったらしく、エルケはやつとのことでそろそろ説教になりかけていた問答から逃げ出す事が出来た。けれどそれまでは団員は逃げていたらしく少しの間誰も寄って来なかったから、かなりの間は聞かされたと思う。

念の為、副総長の席からかなり離れた場所で椅子を少し動かして背を向けると、エルケの席前に置かれた皿にはまだ沢山の料理が残っていた。

エルケは酒もあまり飲めず、酒宴が始まってもただひたすら料理だけを食べていた。やっぱり思った通りに直ぐに腹が一杯になる。

頑張っても食べ切れずに残された目の前の皿を見渡すと、テーブルに並んだ料理はかなり豪華なものだし、量が尋常じゃない。今日まで生きて来て、もしかして一番の御馳走かも知れなかった。

肉料理には飾りの為にわざわざ羽が射してある。肉は香ばしく飴色に焼かれ、肉汁が垂れていた。果物も多様な物が並んでいる。デザートは見当たらなかったが、焼き立てのパンならいくらでもあった。

飲み物は全て、酒だ。勿論エルケの為に飲みやすいものが出てくる筈もない。

仕方なく咽喉が渇くとエルケはたまにゴブレットの中身を少し舐めたり、果物を齧った。飲み慣れない物を飲んでいた所為か、たまに視界が歪む気がしてきた。

ヤンは、というと、あれだけはつきり任せると言ったのにも係わらず、騎士団の数名に引き摺られて行ってから今は姿が見えなかった。

ヤンも何度か断わって、団員を振り切ってエルケの横に戻っては来ているものの、つい先程三人掛りで四度目に引き摺られて行ってからというもの戻って来る気配もない。駄目だ、自分の身は自分で守ろう。

「食べてるかい？」

「あ、はい。ご馳走になってます」

「良かった。遠慮せずに食べてね。えっと、彼はトニだよ」

先程、副総長室で別れたマルセルが、中庭で手を振っていた青年を伴ってエルケの傍にやってきた。

態度が温和で眼差しも柔和なマルセルに比べ、快活な空気を纏う



トニはくすんだ金髪と感情豊かな大きな瞳。ブラウンの目を弓なりにさせ片手を振る姿は、少し臆病なエルケからでも感じが良く人慣れている印象だ。

「エリク、初めまして！ さっきは手を振ってくれてありがとな」  
「初めまして」

立ち上がって挨拶しようとしたら、マルセルは片手を上げてエルケを止めた。それに甘えてエルケは椅子に腰かけたまま、トニに頭を下げる。

「本当、皆言つてたけど小せえなあ！」  
「そ、そうかなあ」

トニに頭を撫でられた。なんか余りに自然だったから、エルケも抵抗はなかった。だって、猫にするみたいだったから。

少し物怖じしているエルケに気を使ってくれたのか。トニはエルケの真横にある椅子では無く間を一つ開け、どっかと腰掛けた。勿論、その近くにはマルセルもいる。

どうやら寂しげだったエルケに、マルセルが気を回してくれたらしい。でも、副総長の語りの時はどうやら援護の手は必要無しと思われたらしい。あの時も十分助けを求めてただけだな。

「エリクは、何飲んでるんだ？」  
トニがゴブレットを覗き込んだ。

「ちよっとずつワインを」  
「このワインは少し酸味も多いし、質より量だから、蜂蜜を入れた方が飲みやすいと思うよ」

質より量。何と無く分かる気がする。エルケは未だ治まらない大広間を見渡した。熱冷めやらぬ、といった様子だ。むしろちよっと悪化してる。

マルセルが持って来てくれた小さな入れ物には、沢山の蜂蜜が入っていた。エルケの握り締めていたゴブレットに流し込むと、深紅が少し薄まっていく。

まだ三分の二も飲んでいないから、とエルケはマルセルに頼んで

蜂蜜を沢山入れて貰った。

「ほら、飲んでみ」

ト二に勧められるがまま、エルケが恐る恐る口にするとゴブレットの中身は大分飲みやすくなっていった。えぐみと酸味が薄れ、蜂蜜でかなり甘さが増してこれなら飲める。

「うん、これなら美味しい」

頷くと、マルセルとト二が安心したように笑ってくれた。

何と無くヤンを探して問い詰める気も薄れ、そのままマルセルとト二と三人で他愛もない話を始める。

一番、興味深かったのは任務の話だ。その次は任務中に抜け出し

ト二談、食べに行つた揚げ菓子の話。

最後は失敗談。ト二に失敗が多いのかと思いきや、彼は上手く切り抜ける天才らしく、マルセルの方が多かった。彼の名誉の為に、失敗談は今後誰にも話さない事を約束した。確かにあれは恥ずかしい。

彼等は常に依頼があればあちらこちらを飛び回り、剣を握って人を守っているらしかった。マルセルも今日は門兵だったけれど、いつもは違つのだ。マルセルが今日門兵で良かった。それでなくては、こんなに楽しい時間は無かつただろう。

ノルベルト副総長は滅多に任務につく事は無いけれど、貴族や領主であれば任務につく事もあるそうだ。確かに酒さえ飲まなければ、彼が傍にいと安心できるだろう。あの大きな声で、熊ぐらいなら退ける事が出来そうだ。

あれ？ 何と無く気になった。

飲みやすくなった酒の勢いを借りて、エルケの口から疑問が素直に飛び出す。

「ノルベルト副総長は『副』なんでしょ？ じゃあ、総長は今ここにいないの？」

一瞬、二人が止まって聞き過ぎたと思った。マルセルの優しさとト二の気安さについ口が滑つた。エルケは慌てて首を振る。

折角の楽しい時間だったのに、自分の所為で台無しだ。最悪だ。

「ああ、んと。マルセル、別に隠してるってわけじゃないんだ、よね？」

「そう、ですよ。まあ、事実ですからね」

齒切れの悪いマルセルとトニの会話。

また先程のヤンとマルセルが話していた時の疎外感がエルケの胸にやって来る。やっぱりこんな話、しなければ良かったな。俯いて小さく、ごめん、としか言えなかった。

マルセルが慌てて、両手を振った。

「エリクに言えない、という訳ではなく、総長は今極秘任務中なんです」

「結構長い間、総長は同意の元留守中でき。それまで俺らがきちんと責任持って騎士団を守ってるんだ。だけど、対外的に総長が留守つてのはちょっと拙いからさ。皆分かっても、口には出さないんだよ」

そういうことか。「分かった？」と聞いてくるトニに頷いて、エリクはゴブレットの中身を飲んだ。

底に溜まっていた濃い筈のワインは蜂蜜と混ざり合ってどろりとしている。エルケがそれを一気に飲み干すと、ゴブレットを避けた向こうに慌てたマルセルとトニが見えた。

空になったゴブレットを突然奪われる。

「ちょ、エリク。飲み易くなったって言ってもそれはワインだからな！ うわ、マルセル。空になってるよ。保護者を呼んできた方がいいんじゃない？」

「大丈夫です！」

片手を上げて、エルケははっきりと答える事が出来た。な、筈なのに目の前ではマルセルが頭を抱えている。

「ヤンは副総長と大事な話中ですから、ねえ」

「はい！ 僕は大丈夫です！」

もう一方の手も挙げて、エルケははっきりと答える事が出来てい

る。な、善なのに目の前でトニが呆れた表情をしていた。横を向くとマルセルも同じ顔。

広間の奥では小さないざこざが始まったらしく、混迷度合いが増している。あれだけあった料理はもう半分以上も無くなっていった。テーブルの上は嵐が過ぎ去ったかのような汚さだ。

「トニ、エリクを連れてちよつと酔いを冷ましに行つて貰えますか？ 僕は時期を見て、ヤンに知らせに行きますので」

「了解」

短い応答の後、トニが椅子から立ち上がった。その間にマルセルは人混みの中へ姿を消す。どうやら喧嘩の仲裁に行つたらしい。

トニは、顔を見上げているエルケの背を苦笑しながら叩いた。腕を掴み持ち上げられる。エルケの体は軽く持ち上がった。

「ウチの一番下の弟よりも軽いなあ。もつと筋肉付けた方がいいんじゃないね？」

「いえ、頑張つても付かないんです。体質なんで」

「そつか、体質じゃあ仕方ねえなあ」

トニに引き摺られながらエルケは扉の外へと向かった。たまに通りすがりの酔っぱらい団員が大声で「持ち帰り」と騒いでいたのに、トニが蹴りを入れた。足元おぼつかないエルケを掴んでいるから手が使えないのだ。

「いいの？」

エルケは不思議そうに首を傾げ覗き込む。

「明日になったら皆忘れてるから、大丈夫！」

断言したトニの背中を見ながら、酒の力つて凄いな、とエルケは思った。だって、全然知らない人と全く怖がらずに話が出来てるもの。

一階にある騎士の間の横には食料倉庫がある。その横にある配膳室でトニは果物を数個とカップに入った水を受け取り、そのまま内庭に出た。中城の中にある内庭ではなく、高城と中城の間にある野

原の事だ。

高城と中城を繋ぐ回廊の柱に背を預け、二人は腰掛けた。

ト二に手渡されたカップには並々と水が入れられている。エルケはそれを一気に飲み干した。

喧騒はここまで微かに聞こえてくる。門の方に見える灯りは、今門を担当している見張り番がいる証拠だ。空は漆黒、団服のように星もない暗さだ。明日は雨かもしれない。

「今日の見張り番は外れくじだな」  
そうト二が笑った。

確かにあれだけの料理と酒が振舞われているのに、参加出来ないのは可哀想だ。

「怒ったりしないの？」

山の上に吹く冷たい夜風に当たれば、かなり朦朧としていた頭もはつきりしてきた。エルケはト二から受け取った葡萄を一つ摘む。酸っぱい。

「そろそろ交替番が行くдар。それにしても、今日の交替番はゆっくりしてるな」

酒でも飲んで潰れてるんじゃないの？ そう言いながら、ト二は口に含んだ葡萄の種を野原に飛ばした。

エルケも手に出そうとしていた種を、ト二に倣って野原に噴き出した。が、失敗して膝に落ちた。横でト二が噴き出している。

「今回は偶然失敗しただけだよ！」

「はいはい、失敗ね」

エルケの投げた一粒の葡萄を軽やかにかわし、ト二が笑う。

「ウチの弟もそうやって直ぐに言い訳をするんだ、出来ない癖に」  
「弟がいるんだ？」

「ああ、三人な。エリクは？」

姉さん。エルケの唯一血の繋がった姉の事を思い出した。

最近、慌ただしい所為か。今までは頻繁に思い出していた姉が、エルケの心の中から遠くなった気がしていた。一人で泥を這い、痛

みに耐えていた頃は神の御姿のように思い出す姉の姿が救いだつた。鮮明だつた姉の姿。髪も顔も声も全て鮮明だつたのに、今はこんなにも遠い。

エリクの手の甲に何か隠している事は、もう三人とも気付いているだろう。最近では細長い布切れをエルケが欲しがつても聞かれることも何もなく、自然に渡される様になつていた。

姉さんが遠くなつたのは、烙印を隠す様になつたからだろうか？  
今まではずっと烙印を見て自分を責めていたから。

「エリク？」

返事の止まつたエルケを促す声。

「僕は、姉が一人。誰よりも大切な人なんだ、その為に旅をしている」

誰にも話していない言葉がするりと出て来た。

もうここだけの付き合いなのだ、と思いつつたのも大きいけれどそれよりももっと気持ちは複雑だつた。

何も話していないのはエルケの方だ。それなのに、おかしな自分は何も話してくれていないヤンを責めている。何も聞いていないのだから、何も言う必要はないとそう思っている。

だから

「ヤンには、今の事は言わないでくれる？」

そんな一言が出た。

「ああ、そういうのは勝手に言わねえよ」

トニから即座に戻ってきた返事に、つい口を滑らせたエルケは胸を撫で下ろしたのだ。

樽で所領から買い入れたワインは全て水差しに移し替えてあった。質より量を信条とするワルゼ城では、高地にある事もあり頻繁にワイン樽のみを城へ運び入れる訳にもいかず大量に仕入れる。十年も過ぎれば酒くらいは変わっているかと思っていたが、相変わらず香りの抜けている古臭いワインだった。

ハーブや香辛料を入れ、何とか飲めるような代物になったそれを、意外にも豪勢な食事で流し込む。要は酔っぱらう事さえ出来れば味などどうでもいいのだ。

お祭り騒ぎが許されることなど、半年に一度。時機があつて任務もなく、怪我も病気もない健康な状態で酒を飲めることなど滅多に無い。彼らにとっては幸運だ。

故に少しの羽目外し位で、ノルベルト副総長が騎士団員を咎めることなどなかった。上手くその場を諫める天才が、騎士団には存在する事を誰もが知っているのだ。

激しい歓声の後にいくつかの椅子が宙を飛んだ。酒も程良く回つて、そろそろ何かがあつてもおかしくは無いな。そう思っていた時だった。

ヤンは表情を巧妙に隠しながらも、俯いて口端を上げた。十年経つてもここは全く変わらない。むしろ団員の年齢が若くなつた所為か、喧嘩っ早く血気盛んなのが増えた気がする。

何度断わつても懐かれているのか、何人かは話を聞かせると詰め寄ってきた。エリクの事をマルセルと、エリクを先程見たと言っていたトニに頼んだ。確かに喧嘩騒ぎが始まるまでは端で談笑していた筈だ。見当たらない。

「だからな。お前は少し過保護なんじゃないのか？」

何度目だろうか。エリクの異常な細さにノルベルト副総長が目を輝かせている。

手元に置いて、しっかりと鍛えたい。一年ほど任せてくれたら、立派な筋肉を付けて育て上げてやる。と騎士団に入団させる気らしい。ヤンは、何度目か分からない程繰り返した返事を一字一句変えずに返す。

「拾った手前、責任がある。おいそれと手離す訳にはいかないだろう」

答えながら、騎士団員の間には視線を走らせた。ざっと見、あの珍しい色の髪の色は無く、同時にトニとマルセルの姿も見えない。途端に心配になった。

何と無く城に入ってから様子がおかしかったような気もしていた。元々があまり快活な少年ではないが、特に今日は特に物憂げだった。返事もそこそこで視線を合わせようとしてもしない。

最近慣れたのか、少しずつ表情を崩す様になってきたエリクは、出会った当初には考えられない程ヤンにも話し掛けるようになった。冗談も言う、たまに微笑むようになった。

それがどうだ。今日のエリクはまるで出会った時の様だ。強張った表情でヤンの助けを拒んだ。足を引き摺って階段を上るのは一苦労だった筈だ。それでも、言葉少なに「一人で行ける」と首を振った。助けてくれ、と言われたのなら、恐らく何も聞かずに抱き上げたに違いない。それでも助けを望まないエリクの自立心をへし折る真似だけは出来ない。

だから辛そうなのを見て、見ない振りをした。その後は視線を感じるのに振り返ると、背けられる。文句ありげなエリクの表情は直ぐに考え込む様な表情に変わり、それ以降は口を聞こうともしなかった。

気分が悪い。多分酒の所為では無いだろう。

「どうした、ヤン」

ヤンの様子がおかしいのに気づき、ノルベルト副総長が聞いて来た。聞きながらもヤンのゴブレットへ酒を注ぐのを忘れない。入れら



れると空にしないままでは立ち上がる訳にはいかないので、エリクを探しに行く為に一気に煽った。咽喉が焼ける。

「ちよつとな。エリクの姿が見えない」

「お前、子供じゃないんだぞ！ どっかで転がってるだろうさ」  
過保護だと、また話は戻る。騎士団に預ける、立派な男にしてやる。

ふと脳裏に過るのは出会ったばかりの姿。男にしては線の細い体に、白い肌。俯く頬に被る髪が夕焼けの様で、思わず声を掛けるのを躊躇った。女だとあの時は一瞬疑わなかった。あれを騎士団に預ける？ 冗談じゃない。どう考えても無理に決まっている。

再度一字一句違わず繰り返す問答。繰り返す度に拒絶は明確になっていく。逆に理由だけが深みに嵌り、見えなくなっていく。

もう一度、見回す。エリクの姿は見えずマルセルの姿だけを見つめる事が出来た。意味無く苛立つのを酒の所為にして、問い質そうと立ち上がったヤンの手首をノルベルト副総長が掴んだ。

大口を開けて笑っていた。が、目は至って真剣で剣呑だ。

「女じゃないんだ、放っておけ。お前、あの少年を見る目つきはまるで女に向ける『それ』だぞ」  
ノルベルト副総長の荒唐無稽な思い付きに、ヤンは思わず鼻で笑

った。

「俺が？ あれはただの糞ガキだろう」

生活力も計画性もなく、助けの手が必要な、身元不詳のガキだ。今こそ旅をしてもいつどこで消えるか分からない。どこかで仕事をする為に留守をしたとしても、戻ったら姿もない。そんな事がまかり通る位、絆は浅く信用がない。

ヤンが掴まれた腕を振り払うと、憎たらしい程の笑顔でノルベルト副総長が水差しを持った。ヤンは顔を背け、再度椅子に腰掛ける。勢いよく腰掛けた所為で決して丈夫ではない椅子が悲鳴を上げた。

ゴブレットを掴む。直ぐに満杯にされた。

「そうか？ あの年頃なんてな、ガキって言ったって気にいった女

でも見つけたらすぐに人の物になってだな」

一番聞くのに抵抗がある長過ぎる話が始まった。ノルベルト副総長の長女は先日結婚したばかりだ、と教えてくれたのはマルセルだ。酒も佳境に入ると必ず出てくる娘の話は長く、くどく、それにしつこいらしい。

今はそんな話を聞いている暇はない筈だ。が、思っていたよりも娘の話は短く終わった。水差しからゴブレットに注ぐのが面倒になったのか、ノルベルト副総長は水差しから直に酒を飲み始めた。

一気に飲み終えた後は真顔だ。この感情の切り替えに付いて行けず、ヤンはいいペースを握られるのだ。

「ま、それはいいとしてだ。どうだ、お前さえよければ本気でエリクを預けないか？」

先程までの口調とは打って変わっている。これは本気だ。

「いや、俺の一存では決められない」

エリクを気に入っているのはカヤだ。最近はクルトもよくエリクの面倒を見ている。クルトの場合、気まぐれが多いから長く続くかどうか分からないとはいえ、勝手に騎士団に入れるとは決められないだろう。

「お前、さつき拾っただけに責任があるって言っていただろう。手を放すのも保護するのもお前の勝手じゃないのか？」

それじゃあ、エリクの意志はどうなる？ あいつは奴隷として俺が買って来た子供じゃない。

考える度に苛立つのが押さえ切れない。椅子を蹴倒して、直ぐにでもエリクを探しに行きたいのを耐えた。酒を煽る。もう味などどうでもいい。

言い訳はどうする。どうしたら、ノルベルト副総長を言い負かせる？ それだけを酒を二杯、一気に煽りながら考えた。

「あいつは目的があるから、俺達と旅をすると言っていた」  
そうだ。それまでは手を放す事など出来ない。

空にしたゴブレットを置くと、目の前で面白そうに笑う顔。何度

答えても、負かせた気がしないのはやっぱり相手が百戦錬磨なだけある。

そつだ、あれだけ我儘な総長を何とかこれまで続投させているのだ。口では負かせない。

「何だ、何も聞いてないのか。じゃあ、こうしないか？ ワルゼが、お前からの依頼としてエリクを無事に目的地まで送り届けるってのはどうだ？」

「それは」

「お前、もしかしてエリクをいなくなった弟の代わりにしてるんじゃないか？」

「違う」

ノルベルト副総長の言葉に覆い被さる様に言い返し、拳でテーブルを殴り付けた。

思っていたよりも大きな声になった所為で、少し離れた場所で談笑していた団員が数名こちらを向き、ただならぬ二人の空気に席から離れて行く。

髭を指で拭いながら諸悪の根源が肩を竦めた。ヤンはまた満杯にされていたゴブレットを空にし、水差しの傍に突き返すと椅子から立ち上がった。酔っぱらいには構ってられない。

ノルベルト副総長は椅子の背もたれに体を預け、立ち上がったヤンの顔を含み笑いを浮かべ見上げる。

口調は相変わらず飄々としていた。長い間、同じ人間の下で働く態度も似てくるのか。

「それならいいけどな。ま、こつちも大事な総長を預けている身なんでね。お前にはしつかりして貰わないと困るんだよ」

お前らの責任をこつちにまで全部押し付けるな、そう言い返してやりたかった。

ヤンは短く返事をすると、大股で混迷を極めている騎士の間を突っ切る。余りの迫力に押されたのか、途中治まっていなかった喧嘩が途端に止まり、その場にいたらしいマルセルがヤンの後ろを追い

掛けてきた。

仲裁役をしていたらしい。温厚なマルセルは比較的こういう役を、昔からよく押し付けられていた。

「ヤン、すいません」

「エリクは何処だ」

足を止めないままで背中側を歩くマルセルに問い質すと、高城を出て中城との境目で酔いを醒ましているとマルセルは答えた。

酒を飲んで目が据わってきたのだと言った。あいつは今日、本当にどうかしてる。

「気付いたら、酒を飲み干していて。失念しました」

「別にいい」

子供でも酒を飲めばどうなるか位、考えるだろう。

考えなしで飲み干したエリクが明らかに悪く、逆にヤンはマルセルとトニに謝るべきだった。本来ならばあの少年を監督するのは自分の役目で、今回はして貰う仕事があるのだから遊びに来ている訳ではない。

「面倒を見させて、悪かったな。マルセル」

彼は苦笑している。

「随分と子供扱いしているんですね」

「あれは子供だろう」

「そうですね？ まあ、ヤンから見るとまだ子供かもしれないけど、結構しっかりしていますよ」

また同じ話を聞かせるのか。マルセルの声に曖昧な返事を返し、ヤンはそのまま騎士の間を出た。

酒の追加でも頼まれたのか、宴が佳境に入ったのにも係わらず配膳室は変わらず忙しい様だ。配膳係が今日の食事を楽しむにはまだ時間が掛かりそうだった。

ヤンは騒がしい配膳室の横にある短い通路を通り、高城と中城を繋ぐ回廊に出る前に高城の廊下から空を見上げた。星もない漆黒の空だ。見上げた空には厚い雲が掛かっているのか、月すら見えな

った。

夏でも高地のワルゼは相変わらず夜は寒い。それは昔からずっと変わらない。

十年前、ここに来た時もやっぱり月は見えなかったか。そんな事を考えていた。ノルベルト副総長が急に弟の事を話題に出したからだと思う。

それではなくては、説明が付かない。それとも、エリクを弟として実は無意識に見ていたという事か。

高城を出ると直ぐに中城への通路がある。通路に沿って、庭とは形ばかりのワルゼ城では鍛錬場として使われている中庭があった。

涼し過ぎる夜風が吹く中、回廊の柱に背中を預け二人は談笑している。

声を掛けるのを、思わず躊躇った。話が聞こえたからだ。

「僕は、姉が一人。誰よりも大切な人なんだ、その為に旅をしている」

もう既に掠れも消え、男という割には高いエリクの声が聞こえた。一つ一つ大切な言葉のように紡いでいくその内容は、ヤンも聞いた事の無い内容だ。意味無く何かが込み上げてきた。

ほぼ初対面に近い人間にそんな簡単に身の上話をするのか。じゃあ、聞かされてない俺達は一体何なんだ。

風に煽られて出会った時よりも長くなった髪がエリクの頬まで流れ、それを見たヤンは拳を握り締めた。

指で流れた髪を辿り、後ろに流す。その姿はいつもの少年の姿ではなく可憐な少女の姿で、ヤンの脳裏に先程の会話がいくつかわれ消えて行く。

『お前、あの少年を見る目つきはまるで女に向ける』それ』だぞ』  
違う、よく見る。あれは男で、あれはガキだ。

『随分と子供扱いしているんですね』

あいつは足が不自由なんだ。たまに目を離すと何処で何かに巻き込まれているか不安になる。だから。

どこか悲しげな表情を浮かべて、エリクは手の甲に巻いた布切れを引っ掻いた。そのままエリクは空を見上げ、ゆっくりと臉を伏せる。

拳を握ったまま、ヤンは壁に押し付けた。そうしなければ、衝動のまま行き場の無い手は伸びてしまいそうだった。

声が、聞こえる。

「ヤンには、今の事は言わないでくれる？」  
直ぐにトニも答える。

「ああ、そういうのは勝手には言わねえよ」

安堵したエリクの顔が緩み、僅かに微笑んでいた。

笑うな。意味の無い苛立ちに、ヤンは奥歯を噛む。

「そう言や、ヤンにも弟がいんだよ。今は失踪中だから、やっぱりエリクと重なんのかな？」

「そ、そうなん」

勢いに任せ、そのまま拳を思い切り壁に打ち付けた。白壁に大きく重い音が響き、話をしていたエリクとトニが突然の音にこちらを振り向く。

驚き、見開いたエリクの眼は一度だけヤンを捉えた。だがそれもたった一瞬で、表情を無くした視線は俯き隠れてしまう。先程、トニに向けていた柔らかな表情は欠片も見えなかった。  
どうしてか、それが苛立って仕方ない。

「そう言や、ヤンにも弟がいんだよ。今は失踪中だから、やっぱりエリケと重なんのかな？」

そうか、ヤンに弟が。その言葉を聞いて、エルケの胸にすんと何か落ち着いた気がした。

そこがどうしても腑に落ちなかった部分だった。気になって、それでもエルケが知ることの出来なかった事だった。それが全部組み合わさって隙間なく重なり、積み重なった感じだ。それなのに、心に穴が開いたみたいだ。

あれだけ怪しい身なりで明らかに誰かに追われている様子のエルケを、ヤンは何も問い質すことなく助けて、しかも意識を失っているにも関わらず連れ帰ってくれた。

食事を与え、服を渡し、足が不自由ならば抱き上げて保護してくれた。

弟に見えたのだ、と言われてみれば見返りの無い行動の何もかもがしっくりくる。それは全部、ヤンの傍にいない弟に向けるものだったのだ。

そうか。そうだったんだ。うん、そうだよな。  
なあんだ。

全部、分かってすっきりした。すっきりしたじゃないか。そう言い聞かせた。だって、心の奥底で泣きそうな程苦しくなっている自分がいる。

見返りの無い行動はヤンだけじゃない。きっとカヤだってそうだから。クルトだって何かを抱えて、何も意味無くエルケを保護している訳ではないのだ。決してエルケを唯一無二の存在だと思っている訳ではない。

何故なのか、それは本当の自分に向けられたものだと勘違いしていた。何もエルケは話していないのに、それでもそんな事を聞

かなくとも無条件で自分の事を好きになつて貰えるのだと思つていたのだ。

そんな筈ない、そんな訳ないのに。

動揺は簡単に声になつて現れてしまう。

「そ、そうなん」

そう震える声で、言い終える寸前だった。

何かを叩き付ける重く沈んだ音が、話を無理やり打ち切つた。エルケは反射的にそちらを振り返つてしまう。何の音なのか、想像も出来なかつた。

だつて、まさか近くにいるなんて考えてもいなかつた。あんな事を言つたばかりで、ヤンの事を聞いたばかりだったのに。

だから漆黒の闇の向こうに漆黒の服で身を包んだヤンを見た時に呼吸が止まつた。どうしてこんな時に、なんて一瞬思つた。思わず胸に走つた痛みにもエルケは顔を歪める。

一体、何処から話を聞いていたの？ 姉の事を話した場所なのか、それともヤンには言わないでくれと言つた所なのか。それともヤンの過去を聞いてしまった所から？ でも、どの内容を聞かれても後ろめたいじゃないか！

だからヤンの顔を長く見ていられずにエルケは俯いた。この場から逃げ出せないから、せめて顔くらいは見たくなかつた。

大股で通路を歩く硬質な靴音。いつも通りの大きな足音が、何処となくエルケを責めている風に聞こえる。後ろめたいからそう思うのかな。

横にいるト二が「酔いは醒めたみたいですよ」と明るく言った。

あのヤンの状況を見て動じていないト二は凄い。エルケと言えば、しゃがみ込んだまま顔を上げる事も出来ずに、ただ烙印の手の甲を握り締めた。足先の土を見つめれば、じやりという音の後に見慣れた軍靴が見える。だから、もつと深く顔を伏せた。

ヤンの足音はやっと止まり、少し酒に焼けたらしい低く嘎れた声かエルケの真上から聞こえてくる。



「悪かったな、ト二。迷惑掛けて」

「いえ。子供のエルケには水でも出しときゃ良かったのに、酒入れた副総長の所為ですよ」

「全くだ」

会話をするヤンはいつも通りで、少し安心した。

良かった、ト二との会話を何も聞いて無かったのかもしれない。

エルケは激しく跳ね回る胸を心の中で撫で下ろした。

壁に拳を打ち付けて機嫌が悪そうに見えたのも、酒を飲んで迷惑を掛けているエルケに怒っていただけであって、見当違いかもしれないじゃないか。言い聞かす度にどんどん悲しくなった。

やっぱり聞くべきじゃなかった。聞きたくなかったな。

門番の交替が滞っているらしく、ト二はそのまま前門に向かう様だった。このまま酒宴が終わってしまったえば、門番は食事を取り損ねるのだ。

ヤンに就寝の挨拶をすると、去り際にエルケの頭に手を置いたト二は駆け出す軽やかな音と共に闇へ姿を消した。

静けさ増した中庭には、まだ微かに宴の喧騒が聞こえてくる。瞼を閉じれば特に良く聞こえた。

エルケは眠った振りをしてしゃがみ込んだ膝に頭を預けた。何もヤンと話したくなかった。また意味無く子供っぽい事を言ってしまうそうだったから。それは、逃げ、だ。分かっている。

聞こえるのはヤンの小さな溜息。ごめん、勝手に聞いてごめん。扱いが難しくくて、ごめん。心の中でヤンに謝った。返事は無い。だつて当たり前だ、意地が邪魔して声には出せないんだ。

靴が小石を踏み砕く音が聞こえた。

顔を手の平で隠したままで固まったエルケの背中にヤンの腕が入り、軽く持ち上げられると横に抱き上げられる。たったそれだけで胸が詰まって、やっぱり泣きそうになった。それでも、今更起きることなんて出来なかった。

エルケに怒っているなら、この場に置いて行ってもいい筈だ。で

もヤンはそんな事、きつとしない。分かっているんだ。でもそれは全部、弟みただからでしょ？ そう言ってくる意固地な自分もいる。

近くにある胸を拳で叩いて詰りたくなった。失踪している弟が見つかればエルケは必要ない。

保護と無条件の愛情は、全部そっちに向けられるじゃないか。そうしたら、また一人になるんでしょう？ ヤンも力ヤもクルトも皆、永遠に傍にいてくれる訳じゃない。当たり前だ、分かっているのに頭が混乱する。

ヤンがエルケを抱いたまま、歩き出す。揺れる体はまるで揺り籠の様で、エルケは泣きそうな顔を起きかけた振りをして手の甲で隠した。

お願い、ヤン。顔を見ないで。きつと今は凄く醜い顔をしてるんだ。

だって、ヤンとカヤとクルトの大切なものに凄く嫉妬してる。自分を入れ替わってしまいたいと思うんだ。

姉さま、苦しいよ。こんな感情、初めてなの。何もかも壊して、消えてしまいたくなるの。

傍に姉さまがいてくれたら、こんな苦しくないのかな？ 胸が満ち足りて、何でも無くなるのかな？

瞼に当てた腕が熱くなってきて、ヤンにばれないように奥歯を噛んだ。

今まで土の中で膨らんでいた種が、春の温かさで一気に芽を出したみたいだ。芽を摘むことはもう出来なくて、そこにある事を思い知らされる。これは一体何なの？

ヤンの足音が響く度に、喧騒が離れて行った。静けさと程良い揺れは酒に酔ったエルケの体に眠りを運び、いつの間にかうつらうつらとしてくる。

揺れる体と揺れる意識。耳に当たるヤンの体温は温かく規則正しく脈打っていた。

だから、短い夢を見た。

『人魚は恋をしました。報われない恋でした』  
姉が幼いエルケを抱いて話している。赤の村ゼークトのおとぎ話だ、悲しく残酷な恋を知った人魚の話。透明な赤に彩られた宝石の物語。

人魚は王子を愛している。心から誰よりも愛している。人魚はその恋が決して報われないと知っている。

人魚の住む場所は海で王子の住むべき場所は王宮だから、傍に居続ける事が出来ない。それでも良かった。ただ王子が愛おしく、人魚はその狂おしい程の愛おしさを愛した。

ある日、王子は海辺で美しい石を見つけ、その美しさを歓喜し褒め称えた。

人魚の髪は燃える様な真紅。まるで君の髪だ、と王子は人魚と共にその石を愛した。

人魚が王子にあげる事が出来るのはたったそれだけだった。だから、人魚は愛する王子に喜んで欲しくて、王子が海辺に来る度に赤く輝く石を贈った。来る度に何度も、何度も。

でも石は人魚の命だった。人魚は王子の為に血族を殺し、石を手に入れたのだ。その石には終りが来て、ついに人魚は渡すものを失った。

海の底は赤く染まり、もう人魚はいない。だから人魚は最後に自らの命を絶った。その命を王子に渡す為に。愛し過ぎる夢の思い出として、彼の心に永遠の自分を残す為に。

人魚の涙。赤の村ゼークトに伝わる激しい恋の話。大きな石は命の輝きを内に秘め、見るものを圧倒し魅了する。

悲しい話なのに姉はいつもその話をエルケに愛おしげに話した。そう最後のあの日まで何度も。

愛おしい人がいるのよ、と言いながら姉はいつも苦しそうで切なげな表情を浮かべた。小さい窓がある壊れそうな小屋だった。

姉は何もしてあげる事が出来ないのが、口惜しいのだと言った。どうして、私は人魚じゃないの？ そう泣いた。その時もまた二人で座っていた。何も無い小さな部屋の中に椅子を置いて。

姉さま、泣かないで。エルケが探してあげるから、大きな人魚の涙。見つけたら泣き止んでくれる？ もうそんな悲しい顔をしないで笑ってくれる？

『エルケ、あなたの笑顔にはきつと魔力があるに違いないわ』

泣かないで、姉さま。エルケが笑うから笑って、姉さま。

エルケが何でもするから、エルケを置いて行かないで。姉さまにはエルケがいたら、エルケには姉さまがいたらそれで良かったの。

それなのに蝶が、それなのに蝶が全てを

何かの上に体が横たわり、やっと目覚めた。エルケは夢うつつだった視線を彷徨わせる。

目覚めても、何処にいるのか分からなかった。だから辛うじて動いた人差し指で体の横を辿った。自分の手は腰の横に置かれている。指先には固い寝台が触れた。

半分まだ閉じた瞼の隙間から窓が見える。窓向こうはまだ暗く、何も見えない。ああ、まだ夜なんだ。もう一度引き摺りこまれるままに眠ってしまったてもいいんだ。安堵した。だって凄く眠かったから。

久し振りに見た夢の所為か、体が凄く重苦しい。瞼が熱くて、今にもまた閉じてしまいそうだった。

姉の夢を見た。ついこないだまで、エルケにはそれは凄く嬉しい事だった。姉の話す言葉の意味は何も分からなかったけれど、それでも声を聞き鮮明な姿を見るのはただ嬉しかった。

それなのに今は姉の言葉の意味が少し分かる。人魚の狂おしい想いも、姉の想いも。夢の中の切なさが今も胸に残る気がする。苦しい、今にも泣きそうだった。

エルケは汗で額に張り付いた前髪を退けようと、ゆらりと手を上

げる。でも何かに阻まれて、エルケの手は額に辿りつかなかった。軽い音をたてて、寝台に腕が落ちる。

ぼんやりと、不思議そうに横を向いた頬に何かに触れ、その頬の横にある何かを辿り、エルケは視線を上げた。体の上に、大きな漆黒の固まりが見える。

まるで闇が落ちて来ている様だった。

「起きたか」

エルケの体を今寝台に置いたばかりなのか、エルケの耳横に手の平を付いたままでヤンが言った。

部屋は暗く、表情も微かにしか見えない。ああ、ここにいたんだね。そう思うと安心した。寝ぼけたまま、小さく頷けば大きな欠伸が出る。

まだ眠っていいかな。どうしてだろう、考えたくない事がある様な気がするんだ。眠って、全部忘れたい。

姉さまのね、夢を見たんだ。エルケはヤンを見上げながら、心の中で話す。

姉さまは恋をしていた。本当は許されない恋だったんだ。何もかもを壊す恋なのだと思っていた。あの時はまだ小さくて姉さまの気持ちは分からなかったけれど、今なら少し分かる様な気がするんだ。

大事な物を見つけると、こんなに欲が出るんだね。知らなかったんだ。一つを手に入れると、残りも手に入れたいくなるんだね。いつか話すよ、全部。話せるかな？

ヤンを見上げると、彼は不思議そうな顔をしていた。どうしてそんな顔をするのか分からなくて、エルケは微笑んで見せた。

嫌だなあ。もしかして起きているか、疑ってる？

「僕、起きてるよ」

ヤンの表情は見えなかった。

ぎしりと寝台が沈む音がして、エルケの耳の横でヤンの手の平が拳を作った。余程強く握ったのだらう。ぎり、と聞こえる。

「ああ」

返事は吐息の様だった。何か劇的に不味い物でも食べた様な表情をヤンはしている。

見上げてでもエルケの瞼は重く、少しずつ閉じて行く。窓の外を見なよ。外はまだ暗い。夜だから眠いんだ。また落ちて行く。抗うのも面倒臭い。このまま沈んでしまいたい。

夢はね、嫌いじゃないんだ。だってもう会えない人にも、会いたい人にも会えるし声も聞ける。でもね、起きた時に誰もいないと思うのが苦しいんだ。

笑った姿は鮮明なのに、失った苦しみに泣き叫びたくなる。いっそ、このまま夢に閉じ込めてくれたらいいのって思うんだよ。だから、ヤンがいてカヤがいてクルトがいる今は夢なのかな？ 起きたら一人になるから、起きたくないのかな。

閉じた瞼の向こうでヤンが体を起こす気配がした。そのまま、寝台の一方が歪んで、傍にいてくれる事だけが分かる。

温かい指が首筋を辿って、髪を括った紐を外した。髪の毛が絡んだそれはいつも解くのが大変なのに、ヤンの指なら抵抗なくするりと抜けた。首に当たっていた結び目がなくなって、伸びた髪が首を隠す。

その感触で、瞼は閉じたままなのに感覚だけは眠りから覚めた。だから、聞いてしまったんだ。まるで吐き捨てる様な言葉だった。「エリク、お前が男で良かった」

痛く、苦しい。胸を押さえて転がりたくなかった。聞こえるヤンの声が胸を突き刺して、眠りかけていたエルケは途端に現実に戻った。

ヤンはそう言い残すと、直ぐに寝台から立ち上がり背中を向けた。それから一度もこちらを向くことなく足早に部屋を出て行く。

静かに扉が閉じて、エルケは瞼を開いた。

小さな部屋だ。古びた机と椅子、それに寝台だけのある部屋だった。カーテンの付いていない窓枠向こうには塗り潰した闇が広がっ

ている。

無性にカヤに会いたかった。まだ離れて一日なのに、無性に会って甘えたかった。クルトの声も聞きたかった。あの飄々とした口調で、甘えたな自分を鼻で笑って貰いたかった。

そして、自分の中に芽吹いた初めての何かを静かに封印した。向きあうのが怖かった。ただそれだけだった。

副総長が呼んでいるよ、と中庭でト二と騒いでいた団員から伝言を貰った。食事が終わってから直ぐだった。

正直行きたくないな、って思ったけれどそれを敢えて顔には出さなかった。だって、食事も眠る場所も借りてる居候のみだから偉そうなことは言えないよね。

「急いでいるみたい？」

「いや、仕事が終わった後でいいってさ」

「うん、分かった。ありがとう」

頷くとエルケは腕を捲り、配膳係から手渡された皿の山を受け取った。重さに腕が悲鳴を上げる。思ったよりも重かった、予想外だ。

それに油で汚れた皿は重なりも甘かった。落としそうになって、服が汚れるのも構わず胸に皿の山を預けると、やっとの事でエルケはよたよたと歩き出す。

「エリク、産まれたばかりの仔馬みたいだぞ！」

誰かのからかう声に煽られて、食堂内に残っていた数名の配膳係から笑い声が聞こえてくる。

そつちを見ようとして、ずれた皿から洩れたソースが腕を汚した。その気色悪さに悲鳴を上げそうになりながらも、必死に耐える。駄目だ、放っておこう。

足を引き摺っている所為で思ったよりも皿の安定が上手くいかなかった。落としたら、手伝いをしている意味が無いからゆっくりと慎重に運ばなくてはいけない。

だって、やれる事はやるって決めたんだから。

「ほら、遅えよ！　しっかり持て」

他の配膳係にも細腕を馬鹿にされて、少し足の進める速度を上げた。



彼等は例えからかつて、必死に手伝うエルケの手助けは決してしようとはしない。仕事が遅くても、任せてくれているのだ。

食堂を出て直ぐの配膳室に皿を運び、配膳係に汚れた皿を全部手渡すと、エルケはまた食堂へ駆け戻った。昨日の酒の所為か、少し頭が痛かった。まだ少し視界が揺れている様な気もする。酒が残っているのかもしれない。

起きてから、一度もヤンを見ていなかった。どちらにしても今日には言われていた仕事もあるだろう。そう思って深く考えない様にしていた。

正直、ヤンの顔を見て何を話していいのか全く見当がつかなかった。だから、姿が見えないのはむしろ気が楽だ。それでもついで目が姿を探してしまつて、少し寂しく思う自分が嫌だった。でも動いて忙しくしていたらきつと何も考えずにいられる。

それで食事を終えてからエルケが見つけたのは、六十人余りの食事の世話を一手に引き受ける配膳係の仕事だ。

何往復しただろうか、汚い皿を重ねて落さない様に何度も運んだ。

笑い、エルケの細腕をからかった団員達は一見怖そうな見かけの割に皆優しく、沢山は持つていけないエルケを咎めようとはしない。もしかして、今日だけの手伝いだからと大目に見てくれているのかもしれないけど。

最後の皿を運び終わり、駄賃とりんごを貰った。何と無く子供扱いされた気もする。でも悪い気はしなかった。正直りんごは大歓迎だったから、エルケは頭を下げて受け取った。

高城へ向かう為、貰ったりんごは一度預け少し足早に中城を出る。

中城と高城を繋ぐ回廊から見える中庭は雨に濡れていた。今日は、昨夜の雨雲の所為で朝から小雨が降り続けている。空には厚い雲が陽の光を遮り、風こそないものの肌に当たる空気は何と無く肌寒かった。

こんな日だというのに中庭には団員が何人も集まっているのが見える。雨に濡れている姿は、見ていただけで寒そうだった。

中には見慣れたト二の姿も見えた。昼間だというのに薄暗い中でも、目立ってしまいうらしいエルケの髪を目敏く見つけたト二が片手を上げてくる。

駆け寄って来る度に、飛ぶ水飛沫。軍靴は既に泥で汚れている。汚いよ。そう言おうとして、自分の姿を見下ろした。

ああ、もっと汚いのはこっちの方だった。ソースと何か分からないものでエルケの上半身は酷い状態になっている。

ト二がそんな散々な状況の上半身を見て笑った。これって、実は凄く頑張った証拠なんだよ。言い訳をしたくて仕方がない。

「エリク、もしかしてテールブルに突っ込んだ？」

「ううん、今まで配膳係を手伝っていたんだ」

「へえ、お疲れさん。頑張ったんだな」

その言葉が嬉しかった。笑いながらト二は水浸しの手でエルケの頭を撫でてくる。まあ、これも少し嬉しかった。

最初は猫を撫でている様だったト二の仕草も、小さな弟がいるのだと分かるとやっぱりしっくりくる。弟なんて考えると胸の奥がちゃんと痛んだ。首を振った。駄目だ、考えないようにしよう。

エルケの酷い状態の服を見下ろして、ト二が後ろ頭を掻いた。

彼らしくなく 会ってたった一日だけど、言い淀むト二を不思議そうに見上げるとト二がエルケの上半身を指し示してくる。

確かに凄い染みだ、それに臭いも凄かった。寄りに寄って濃い色のソースだったから目立ってしまうのは仕方ない。

「まさかそれで副総長の所に行くつもりじゃ、ねえよな？」

「でも、僕これしか服持ってないし」

きつと今日一日で仕事は終わるだろう。そんなつもりだった。戻ってからカヤに新しい服を出して貰って、直ぐに着替えるつもりだったけれど、今日はこのまま過ごす気だ。

きつと濡れた部分は乾くだろう。臭いも少し我慢して、乾いたら

薄れるんじゃないかな。

「顔の割に、大雑把な過ぎね？ お前」

トニは首を振ると、立ち竦むエルケにこのままここで待つように言い残した。直ぐに背を向けて、水飛沫を上げながら先程の団員の輪に駆け戻っていく。

雨は小雨から少しずつ本降りになって来ていた。

「ねえ、変じゃない？」

着慣れない服は居心地が悪い。エルケは大きく裾を引き摺りそうな漆黒の団服を指で摘み、見下ろした。

トニの団服とはまるで形が違うみたいだ。トニは膝上までしかない長さの上衣が、エルケには足首の手前まで来てしまっている。

これじゃあ、本当に女の子みたいだ。まあ、確かに元々がそうなんだけど。

エルケを見たトニが居心地悪そうに目を背けて、後ろ頭を掻いた。返事はいつもの快活さもなく、何とも感想を言いつらそうにしている。やっぱり変なのかな。服が大き過ぎて、袋を被ったみたいになっているもんな。

「変じゃ、ねえけど。やっぱり、エリケは小せえな。見習いの団服がドレスみたいだわ」

ドレスか、そうかもしれない。くるり。裾を翻して回れば、腰をベルトで締めたそれは丸く翻りスカートにも見えてくる。うん、やっぱりこれはないと思うな。

副総長に会うのに、流石にこの汚さでは駄目だろう。トニにそう説得されて引き摺って来られた。エルケが先程まで寝ていた部屋に押し込まれ、昔着ていたらしい団服を手渡される。

でも、着せ方を教えてくれると親切にも言ってくれたトニの親切には丁寧にお断りするしかなかった。慌てて首を振って、ついでに両手も振った。

女性禁制のこの城でだけは絶対に見せちゃ駄目なものがあるから、

流石に遠慮したい。例え、本来女の子が付いている筈の肉がかなり少なめでも。体に見せたくない酷い傷があるから嫌だと言いつつ。

思ったよりもトニはあっさり引き下がってくれて、安心した。

この騎士団で別段それは不思議な事では無いらしい。孤児院から見習いに入る少年もいるのだとトニに教えて貰った。そういう少年には、勿論虐待や奴隷扱いはよくあることだ。隠れた場所に傷を残すのは常套手段だった。

団服を着るのには、かなり一苦労した。だって団服は長いし、重い。

でも、本来の任務の際にはこれにまだ長い外衣を付けるらしい。実用的ではなく邪魔なんじゃないの？ と聞いたエルケに、トニはあっけらかんと「そうでもねえよ」と答えた。

「剣でかかってきた時に、外衣で巻き込めば動きを止める事も出来るしな」

「あ、そうなんだ」

エルケが自分で留める事の出来なかった部分をトニは慣れた手つきで留めながら、知らなかった事を次々と教えてくれる。

剣の事とか、戦い方とか、そう考えてみたら全部ヤンに任せて何も考えたことなんてなかったな。これから旅を続けるのなら、自分の体くらい自分で守れた方がいいのかもしれない。

ヤンにはちよつと頼みづらいから、クルトにでも頼んでみようかな。きつと文句を言いながら最低限は教えてくれるに違いない。最近、クルトはいつもそんな感じだから。

「ほい、出来た」

背中を強めに叩かれて、数歩前に吹っ飛んだ。

必要な部分を止めると、スカートの様に膨らんでいた団服が少し『らしく』なつて残っていた部分が前へ綺麗に収まった。漆黒の団服に靴の茶色だけがいまいち似合わないけれど、これは仕方がない。

恐る恐る振り返ると、ト二が難しい顔をしていた。顎に手を当てて思い悩んでいる風だ。

「ト二？」

「エリクってさ、女の子みたいだからかな」

「うん」

「何か見ると変な気分になるな」

なんてことない言葉だったんだろう。それでも身の危険を感じて、エルケは一瞬体を引いた。

本当言つと、壁まで一気に逃げてしまいたかった。でも、腕で胸辺りを隠すのは流石に耐えた。だって、それじゃ本当に女の子に見えるてしまうじゃないか！

顔が強張ったままのエルケを見て、ト二は鼻で笑い片手を振る。

「いや、エリクに何かしようとかじゃなくてさ。俺等、一応貞節を守る騎士な訳だからさ。女は勿論、ある程度になるまで家族も持てねえし」

完全に逃げ腰になっていた体から少し力が抜ける。

「そう、なんだ」

「色々と問題がな。ま、エルケには早えかな」

この世の中には色々な事に耐えている人がいるんだな。そう思った。

エルケは仮初めの男だから、いまいちその辺りの苦悩は良く分かってあげられないけれど、多分何か難しい状態なんだろう。やっぱり男はエルケには色々難しい。

エルケの汚れた服を一つに纏め部屋の隅に放り投げたト二は、高城の副総長室へ向かう為に扉を開ける。

エルケが先に出る時に見上げたト二の顔は、ヤンよりも少し低い場所にあった。いつもならヤンは腕を掴んだり、肩に抱えたりしてのにな。変な事を考えて、直ぐに目を逸らした。胸が締め付けられるように苦しい。

ト二の話は続いていた。それは何と無くぎくしゃくしてしまっ

空気を、無理遣り取り戻そうとしているみたいだ。

中城の中は閑散としていた。皆、中庭か騎士の間にいるんだろ、とトニは言った。この時間に中城で勉強したり本を読んでいるのはマルセルぐらいらしい。

確かに彼なら、雨音を聞きながら詩集でも読んでそうだな。

「弟が三人いるって言ってただろ？」

「うん、小さいって言ってたよね」

「子供好きなんだ、俺。だから早く家族が欲しくてさ。それなのに、騎士団に入るってな。血迷ったな、俺」

歩きながら、思わず嘔き出した。そうだな、女性禁制の場所に入ったら結婚なんて当分無理だよな。

軽く返事をしようとして、トニを振り返ったら真顔だった。だからふざけた事は言えなかった。話は終わってないんだ。これからなんだ、と思った。

歩調は少しずつ遅くなる。今、副総長に呼ばれてるんだよ。そう言ってこの場を去る事も出来たけど、こんな表情のトニを放っておけなかった。

「俺はこうやって家族を守ることしか、出来ねえからなあ」

自嘲的な言い方に寂しげな笑い顔が、妙に印象的だった。

その言葉を最後に歩調は少し速くなり、トニはその話を打ち切った。その後は、昨夜の話の様に馬鹿げた仕事の話なんかをした。寂しそうな顔なんてそれから一瞬だって見せなかった。

聞きながら、思う。

皆、それぞれ何か隠し持って生きているんだ。今まで自分が一番辛い様な気持になって嘆いていたけれど、皆心の中に隠して嘆いたり苦しんでいる。苦しみは大なり小なりだ、でも自分の中で消化出来ないものは大きくても小さくても十分辛く苦しい。

もつと強くならなくちゃ駄目だよな。悲しみに酔って俯いていても、例え逃げでも見ない様にして必死に立っていても、どちらも同じ時間は過ぎるんだ。だから、今は耐える時だ。

そう、自分に強く言い聞かせた。でも凄く胸は痛かった。

副総長室は騒然としていた。

どうやら呼び出されたのはエルケ一人だけでは無い様だ。扉をしまっているにも拘わらず、大きなノルベルト副総長の声が聞こえてくる。まさか一人で話している訳ではないだろう。

トニの腕を借りて、相変わらず勾配の急な階段を登り終えたエルケは大きく深呼吸をして顔を上げた。団服が重い所為で結構膝に負担が掛かる。何度も裾を踏んづけて階段から転がり落ちそうになったのをトニに助けて貰った。あのまま転がり落ちたら、後頭部を強く打してる。かなり危なかった。

扉を開けようと手を伸ばした時、聞き慣れた声が聞こえてくる。それは、ヤンの声では無かった。

「だからさあ。エーゲルの孤児院と修道院はもう結構前に閉鎖されているって報告は、上がってなかったんだろ？」

声は苛立っていた。

相手を責める時に容赦ないのは彼の特徴だ。会話を掻き回し、動揺した所を一気に攻めて崩す。それはまるで戦における戦法の様だ。いつも一緒にいる時よりも声が尖り、飄々とした口調でもなく上に立つ人間の威圧感があった。どうして、ここに？ 導き出される答えは一つしかなかった。彼がワルゼ騎士団の総長だ。

「ヨープの方には来てないようだな。まあ、探せば見逃していた可能性が無い訳でもないと思うんだが」

宥めるノルベルト副総長の声はむしろいつもよりも大きめだった。この人は、確実に内緒話の出来ない人だな。秘密は全部ばれてそう  
だ。

畳み掛ける声は、ノルベルト副総長に対して低く冷静だ。

「俺を無理やり呼び付けた上に、報告がそんなお粗末なのか。異常を見逃す無能は養っても無駄なだけだよ。実際に起きた事を細かく報告出来ないのなら、わざわざ『目を付けている』意味は無いだろ

う。で、消えてたのか。ヤン、報告は？」

ヤンの名前を聞いて、思わず動揺した。

曖昧なノルベルト副総長の説明に、どうやら総長はより苛立ちを強めた様だった。

エルケが横を見ると、トニが首を傾げ少し苦笑している。どうやらここで部屋に入る時期を伺うつもりらしい。聞き耳をたてているみたいで嫌だけど、確かに今の状況で彼の矢面には立ちたくない。

「目は消えたな。因みにライゼ GANG とも連絡が取れない」

金鉱山を抱く村であるライゼ GANG は、白の都市ヨーロッパの権力者である教会諸侯の支配下にある。鉱山の労働者が集まり住む小さな村だが、最近は金の発掘も減った上に近くで新しい鉱脈が見つかった事もあり、村は閑散としているらしい。

旅をしている間、難しい文字は余り読めないエルケは売っている本も読めず暇をしていた。それでカヤが持っている地図を指差し色々教えてくれたのだ。

隣接し、対立する所領同士。対立は無くとも内部分裂が著しい所領。地図の中は混迷を極めていた。

「次はライゼ GANG か。全く俺はいつになったらここに帰れるのかねえ」

「何なら俺が行きましょうか、総長？ 残された家族の面倒を見ていただけるのなら、このノルベルト・レーニシュ、いつだって旅立ちますよ！」

「お前の家族はうるさいからお断りだよ。なんだって自分の伴侶も見つけてない内から、あんな面倒な家族抱え込まなきゃならないんだ」

部屋の中の会話の流れが変わり、トニが横を向いて嘔き出しながら扉を二度叩いた。止まらないままだった会話が直ぐに止まり、扉の向こうから副総長の声が入室を促して来る。

エルケは扉が開く前に、思わず自分の服装を見下ろした。変、じゃないよね？ 我ながら結構似合っていると思う。最初は着慣れな



い所為でしつくりこなかつたけれど、漆黒の団服は着ると気持ちがい引き締まる様な気がするもの。

前で皺になつた部分を伸ばし扉を開けたトニの横を擦れ違つて部屋の中に入ると、真ん中に腰掛けたクルトと脇に立っているノルベルト副総長。それにヤンの姿が見えた。

三人三様で驚いていた。でも、誰も何も言つてこないのが息苦しかった。

エルケは楽しそうに笑っているトニの背中側に一歩下がり、俯いたままで小さく頭を下げた。

夜半にヤンが呼びに来たのは突然だった。扉が壊されそうな程に叩かれて、鍵を開けるなり蹴り開けて入って来た。

最近、頓に体調を崩しているカヤに配慮の欠片もない。

これだからこいつは女もないんだ。クルトは心の中で毒づいた。これだけ騒がしいのにカヤが起きてくる様子は無かった。クルトは少し胸を撫で下ろす。

漆黒の服に纏っているのは厚手の外衣だ。どうやら外は雨が降っているらしい。外衣が濡れそぼっていた。

「俺は行かないって言ったよ」

睨み付けるヤンの顔を見て腕を組むと、一応拒否して見せる。ノルベルト副総長がヤンに指示したとなると、この拒否も無駄だろう。早めに準備をしなくてはいけない。

またあの責務を負う場所に戻るのか。少し吐き気がした。

「緊急だ」

何があつたのか、ヤンは今日かなり機嫌が悪い様だ。

外衣を投げ捨てる様に脱ぐと、近くにあつた椅子に勢いよく腰掛ける。息は少し切れて、かなり酒臭い。これだけ自制が利かない状態だ。余程、ノルベルト副総長に吞まされたのだろう。未だにあいつは他人へ限度がないらしい。

息が切れ肩で息をしている所を見ると、どうやらヤンはルツツを置いて来たのだろう。雨が降っていればぬかるむけれど、ルツツにはさほど苦でもないだろうに。それとも、誰にも知らせずに来たかつたのか。

「あの子鼠さんが何かしたのかなあ」

鎌を掛けると、剣呑な表情で睨み返された。

自制が利かない人間　しかもヤン、に喧嘩を売って買われては厄介だ。早々にこの話題は切り上げる事にする。

クルトは白壁に背中を預けた。寝着の上に軽く羽織っただけのガウンだけでは、高地のワルゼでは少し寒く、背中へ直に冷たさが伝わって来る。

「エーゲルがビューローと交戦中だ。戦火はエーゲルまでは及ばない小規模なものだが、広がればヨーロッパから騎士団にも要請が来るぞ」

「へえ、案外持たなかったな」

無関心に見せかけた返事をして、赤金の髪が一瞬脳裏を過った。

エーゲルが交戦中と知ると多分憤り、誰よりも悲しむに違いない。偽金に興奮したエリクを上手く口で丸めこんで、見逃せと言ったのはクルトだ。それが結局の理由では無いにせよ、彼が自分を責めるのは避けられない。

「エリクにはまだ言っていない」

そんなクルトの様子に気付いているのか。ヤンの方から言ってくる。どうやら気にしているのはどちらも一緒らしい。最近頓に傾倒している。何と無く、それはヤンの様子で分かった。

縋り付くのはどっちだ？ 明らかに今それはヤンの方だ。最近の過保護っぷりは既に度を越して、馬車へ抱き上げるクルトの背中にすら剣呑な視線を感じる事もあるというのに。

だが、本人は死んでも認めないだろう。何故ならエリクは仮初の同行者であり、女では無く男だ。共に一生を連れ添って生きて行くことなんて出来ない。しかし、果たしてそれが本当にヤンの枷になるのか？

罪滅ぼしで失踪した弟を探す旅に、いつかエリクを無理やり連れて行きそうな気もする。本能を隠して、貞節を守り生涯を生きるなんて、まるで修道女の様だ。さながらエリクは神か。

馬鹿らしい考えにクルトは腕を組み直した。腹の中に黒く重いものが凝り固まり、簡単には消えない。特に最近その回数は増し、考えが纏まらない事が多かった。

「ワルゼに出動要請は来ないよ、一応これでも息子だからね」

漁業で栄える青の街エーゲル。騎士団を抱く山ワルゼ。枯渴しつつある金鉱の麓にあるライゼガング。宝石の鉱脈があるミュンヒ。これらは全て選帝侯の統治する白の都市ヨープの直轄地だ。

数年前まで飛ぶ鳥を落とす勢いだったヨープだが、鉱脈が枯渇するにつれ選帝侯である大司教の権威も薄れ、ビュローの様宮殿は混迷している。ただビュローと決定的に違うのは、戦火を広げる事はせずに守りに入っている所か。

比較的、商人の集まりやすい立地にあるヨープは、西の商業都市レノーレに並び欠かすことの出来ない場所だ。レノーレは歴史こそない新興の商業都市だが、その勢いは衰える所を知らず今は政治にも影響力を持つ。レノーレの権力者バルタザールと言えば、隙のない食わせ者として知られていた。

レノーレとヨープ。二つの商業都市でこの大陸の商業は今成り立っている。そして、それを可能な限り継続させる為にヨープの大司教は姑息な管理を怠らない。長男を手元に置き、後継者として育て上げると同時に、次男をワルゼへ、他の腹心をそれぞれの騎士団の総長に配した。

民衆が集まりやすい教会、孤児院を管理し巡礼者を守るという名目で信頼を勝ち取るためだ。貴族と民衆の信仰する宗教は異なる事が多いが、名目上は目を瞑っている。民衆の反発を防ぐためだった。

ヨープ選帝侯の次男はクルトだ。決して嬉しくもない肩書きに縛られて幼い頃からずっとここに縛られて押さえ付けられていた。

「世直しの旅の後は戦で殺して来い、なんて言われたら流石に俺は騎士団を捨てるよ」

いや、そんなことはきつと出来ないのだろう。

ノルベルト副総長を始め、全てが幼い頃からの身内みたいなものだ。騎士団を潰すのなら最後は自分の父親に剣を向けるに違いない。それほどまでにこの城を愛してはいても、ずっとこの地に居座る事は出来なかった。反発かもしれない。責任感よりもそちらを優先し

た。

「他は？ まさかそれだけでここに来た訳じゃないんだろう？」

「ああ」

窓や屋根を叩く雨は次第に強さを増している。そろそろ潮時、と言った所か。

クルトは壁から背中を上げ、着替える為にヤンに背中を向けた。ヤンもそれに倣い、漆黒の体に外衣を纏う。

「ワルゼに『蝶』が出入りしている」

面倒な事になった。クルトは大きく溜息を付き、カヤを起こさない様に心がけながら自室の扉を開けた。

扉が二度ノックされ、クルトの視線に促されるままにノルベルト副総長が机の上に広がった地図を全て集めると脇に避けた。考えるだけで頭が痛い、問題が目白押しだった。

昨夜はずつとぬかるんだ山を歩き通した。その上ワルゼ城に到着するなり、ただでさえ煩いノルベルト副総長に耳元で「久し振りだ」と嫌みを聞かされ、濡れて泥塗れの軍靴を取り替える時間もなかった。

外衣のお陰で体こそ余り濡れてはいなくても、足から来る寒気でクルトは苛立ちが押さえ切れない。

だが、苛立ちの理由は他にもある。

エリクの入団を熱烈に押してくるノルベルト副総長は、クルトの傍で彼がどれだけ細く、筋肉の出来ていない体であり、今ならまだ通常の男の体へ近付ける、という事を頻りに熱弁してくるのだ。

確かにノルベルト副総長はその道の熟練であり、見習いとして騎士団に入った子供を立派な騎士に育て上げた過去があるだけに邪険には出来ないが、少し話の内容が趣味に偏っている気がする。

「まずその話は後で聞く」

そう言って終わらない熱弁を切り捨てたのは、先程の事だ。

だから扉を開けて、団服姿のエリクが現れた時に息が止まった。

扉を開けたト二の後ろから遠慮がちに出て来たエリクは、小さな体の所為で服の中に体が泳いでいる。袖も折り上げている様だったが長かった。

漆黒の団服に赤金の髪が映える。何よりも長い裾が床に付かない様、腰をベルトで締めている所為か。腰の細さが際立った。

一瞬、焼き付く様な感情が巻き起こる。一体誰の服を借りたのか、腕を掴んで問い質したくなった。

「あの、自分の服を汚したのでト二に借りました」  
「素晴らしい！」

ノルベルト副総長が泣きそうな勢いで歓喜の声を上げて、クルトは我に戻った。このまま騎士団の鍛錬に連れて行きそうな勢いだ。本当にこの少年は自分の行動の意味が分かっている。

こっちがどんな思いをして、ノルベルト副総長の依頼を断っているか。分かってもいけないのだ。旅を終えてしまう気なのか、そう思っただけに旅を続けて行く気になっただけに自分に気付いた。

ヤン程では無くても体の出来ているト二の傍に立つエリクは細く小さい。カヤの横に立つとそれは然程気にならなかったが、ト二と比べれば一目瞭然だった。絶対どうみても男には見えないのだ。

エリクのこちらを見る視線にらしくない様子が垣間見えて、そうか今はワルゼの総長だったのだとクルトは気付いた。言っただけで無かったのすら忘れ、知っても気にせずそのまま受け入れて貰えるのだと何と無く思っていた。

何かを言おうとしたらしいエリクの唇は動かさずに閉じたままだった。遠慮がちに俯いた顔に線が引かれたのが分かる。どうしてだろう。自分が引いた線は許容出来ても、今更他人に引かれると踏んで詰りたくなる。

左の興奮した筋肉馬鹿は放っておいて、ヤンはどうだ。

右を視線だけで観察するとヤンはまだエリクに目を奪われたままだった。どう考えても男を見る視線では無い事に気付いているのか、逆に全く気付いていない鈍感なのかのどちらかだ。

エリクが離れないヤンの視線に気付き、その身体をト二の背中に隠すと横に立つヤンの拳が強く握られた。まあ、自覚はありつて事か。何故か面白くない。

「まずは解散、詳しい詰めは夜にここで」

自分で叩いた机の音で解散を無理やりに告げる。この場所から一刻も早く、この逆に自覚のない子鼠を出してしまわなくてはいけない。今回の目的である仕事も終えずに、こいつはどうして着せ替えなんかして遊んでいられるんだ。

着替えた理由は聞いた筈なのに、不条理な毒舌が脳裏を過った。ただでさえ華奢な体が隠す事によって際立っている。この城は女性禁制で色々と複雑な事情も多い。こんな恰好をして歩いていい場所では無いのだ。

素早く椅子を立つと、エリクの腕を掴んだ。

いつも通りに抱き上げればいいのだと思っても、腰の細さが瞼の裏に残り手を回すのに気が引けた。エリクが転びそうになるのも構わず、そのまま引き摺ると小さな悲鳴が聞こえた。もっと男らしい悲鳴をあげたらどうだ、なんて子供みたいな八つ当たりだけど仕方ない。

背中へ突き刺さる視線には気付いていた。気になるなら追いかけて来いよ、そう思いながらクルトは追ってくる視線を扉を閉めて絶ち切った。

高城の二階には大広間があつて、脇には小さなポーチがあつた。窓こそないものの屋根があるおかげで雨や風から体を守る事が出来る。

奥まったポーチは手摺まで出なければ十分に叩き付ける雨を防ぐ事が出来る。城内を選ばなかったのは、少し雨風で頭を冷やしたかったからだ。

「うわぁ」

濡れた手摺から、雨に濡れるのも構わずエリクが体を乗り出した。

ポーチの下は防犯上、崖に面している。僅かに開いた隙間は戦を想定しての事だ。崖をよじ登る敵兵がいれば、このポーチは狭間となり隙間から矢を射かける。

濡れている床はより滑りやすい。全く気にもしていないのか、エリクは楽しそうに下を覗き込んでいる。その姿はまるで子供で頭が痛くなった。転びそうで腕を放すきっかけが掴めない。

楽しそうに浮かれている？ いや、違うもしかして浮かれている様に見せかけているのか。下手くそな小細工だ、はつきり見える引かれた線を踏みにじりたくなる。

こつちを向けよ。背中を向けられると、腹が立つ。

「その格好、似合わないよ」  
「知ってる」

苛立ち紛れに吐き捨てると、手摺を掴んだままのエリクが直ぐに不貞腐れたような口調で言い返してきた。

エリクは背を向けてこちらを向こうともしない。危ない筈の手摺から顔を覗き込ませている所為で、激しくなってきた雨が赤金の髪と細い首筋を遠慮なく濡らしていった。

腕を引つ張つてやるうか。それとも向こう側に押してやるうか。

両極端な衝動が突き上げてくる。

そう思っている癖に頭の中は常に止まってしまっている会話の糸口を探していた。エリクが興味を持っている唯一の接点は、今頃誰もいない部屋で残した手紙を読んでいるに違いない。

追い掛けて来たくともワルゼ城は女性禁制で、カヤはどう鼻屑目で見ても男には見えないから、もどかしさに物凄い形相で奥歯を噛んでるに違いなかった。戻ってからの反応が怖い。

「カヤの具合は少し良くなってるよ」

「本当に？ 良かった！」

彼女の名前の効果は靦面だ。思った通りにエリクは手摺から片手を放しクルトの方へと向き直った。



下を向いていた所為で少し前に比べ長くなった細い髪が頬に張り付いて細い頬から顎の線が丸見えだ、思わずクルトは嬉しそうに見上げてくるエリクから目を逸らした。見ていられなかったのだ、どうしても。

今まで確かに女みたいで華奢な少年だとは思っていた。未だに性別が事実かどうか疑ってモいる。

それでも二か月以上も一緒に旅をしていると、どんな女っぽい男だっけ見慣れて抗体だっけ出来てくる。一昨日までこんなまるで女に見えたことなんてなかった筈だ。

それなのに、細い腕を掴む指が熱い。

手を放すのを名残惜しいと思う妙な衝動を、クルトは小さく溜息付いて降り続く雨へ逃がした。濡れ鼠になったエリクの顔を自分の団服で拭う。濡れ鼠とは言い得て妙だ。小さく丸まって震えている姿がエリクにはお似合いだ。

乱暴に拭くと痛かったらしく、エリクは眉間に皺を寄せて目を瞑る。

その姿に思わず嘖き出した。まるで小さい子供みたいだ。雨に濡れた所為で忍びよって来る寒さで鼻が垂れて来たらしく、エリクはしきりに鼻を吸っている。

本当にこいつは馬鹿だよ。何度失敗しても勉強する事を知らないんだ。

「体が弱いくせに雨にあたるからそうなるんだよ。風邪を引いたって俺は外に投げておくからね」

その団服で鼻を拭くな。借りてる癖に少しは考えろよ。

苛立ちながらも自分の団服を使って、顔のついでに鼻まで拭いた。別に汚れても着て外に出る訳ではないから、後でノルベルト副総長にでも渡しておけば洗濯係に渡してくれるだろう。

見上げるエリクの顔。先程まで感じた総長である自分への線引きは見えなくなっている。その事に何故か心から安堵した。顔を拭いているクルトの団服の袖向こうで、エリクが不思議そうに首を傾げ

ている。

「クルト、何か変だよ？」

「何が、別に俺は普通だよ」

普通じゃない。確かに何かがおかしいんだ。

言い返したクルトの返事を聞いて、エリクが笑った。もう既に乾き掛けた赤金の髪が笑う度に、強い風に煽られて揺れて笑い顔を隠す。それを見て息が詰まった。

エリクの笑い顔を見るのは初めてだ。今まで見て来たのは僅かな微笑と無表情。不貞腐れた顔と悲しげな顔。それだけだった。そんな警戒心の無い顔をして、こいつは本当に何も分かっていない。

「嘘だ、なんか優しいクルトなんて変だよ」

エリクが笑うと、指が宙を浮いた。何をしようかは明確だ。握り締めた。ヤンの拳の意味が何と無く分かって、苛立った。

憎まれ口でも叩いてこの場を乗り切つてしまおうか。

「笑っている場合じゃないよ、今回は仕事で来ているって忘れたの」

「忘れてないよ、でも僕はここでは役立たずだから言われないと何したらいいか分からないし」

ヤンは一体何をしていたんだ、何も仕事の内容を話していないのか。

少し寂しげなエリクを見て、思わず宙に浮いた手をエリクの頭に載せた。小さな頭は手の平にすっぽりと収まって撫でる度に小さく揺れる。柔らかい髪に触れて、もう何もかもどうでもいいような気がした。

旅の次の目的地はライゼガングだ。エリクの旅の目的地が何処なのか、未だに知らない自分が『付いて来るのか』とは流石に聞けなかった。抱き上げて馬車に乗せれば、無条件で連れていける。

一体何処まで付いてくる？ 何処までなら共に歩ける？

なんて事だ、これなら俺だって十分ヤンの事は言えやしない。むしろ枷が無い分厄介なだけだ。女なら自分の物にしたらいいいし、男

ならもつと簡単だ。共に生きるには騎士団に入れてしまっただけでいい。

手を放すなら今の内だ。執着してしまえば、それだけ逃がせなくなる。最ももう手遅れかもしれない。

「仕事はあるよ、エリクの得意分野だろ」

厄介な問題ばかりが、どうも最近山積みだ。目を瞑ってしまおうか。

人魚は恋をしました 初めての恋でした  
 月の映る水面を抜けて 逢いに行きました  
 星の流れる水面を滑り 逢いに行きました  
 貴方に会えるのならば この足など捨てましょう  
 貴方に会えるのならば この腕など切りましょう  
 貴方のその髪は金の敵 貴方のその声は天の唄  
 聴く度に私の胸は震え その全ては呪縛となる  
 見る度に私の眼は潤み その全ては鎖となる  
 貴方を想う度に この心は炎となり全てを焼き捨てて  
 貴方を想う度に この心は水となり貴方を癒していく  
 止まらない涙は石となり 水面を辿り貴方の元へ  
 止まらない涙は水に消え 水面を辿り貴方の元へ  
 人魚は恋をしました 最後の恋でした

任された仕事は、騎士団が最近手に入れたという石の鑑定だった。  
 エーゲルの市場での一件をどうやらクルトはヤンに聞いていたらしい。

エルケは任された手の平よりも少し小さな石を、慎重に掴み上げた。

手の平に転がすと冷たく、そして軽い。まるで血を絞り取った様な濃い赤は、雨雲が遮った薄闇の部屋の中でも分かる。きっと日の光に透かせばもっと美しく激しく光るのだろう。

奥に小さな斑点が見えた。石の膨らんだ手前に細かく、平たい奥には大きめの斑点。これは多分、何かの葉だ。

葉の隙間に閉じ込められた虫も見えた。ごくたまに綺麗なままの虫が閉じ込められた石が見つかる、昔に聞いた事があった。でもエルケが実際に見るのは初めてだ。

指で表面を辿ると滑らかだった。ひびもなく目立つた欠けもない。これは明らかにゼークト産のベルンシュタインだ。長い間赤の村にいたエルケでも、余り見る事がなかった程に綺麗な石だった。

石を手の平に載せたまま、エルケは席を外しているクルトの消えた扉を見詰めた。扉向こうには人の気配はなかった。

エルケはその石をそつとテーブルに戻す、そして上に覆い被さる様にして額に当てた。額に冷たい石の感触を感じる。

石には様々な力があるという。その力を貰う時には体の一部分にそつと押し当てるのだ。ベルンシュタインがエルケに何かの恩恵を授けてくれるとは思えなくても、澱み濁った自分の中を癒して欲しかった。

濡れたエルケの団服はクルトによって脱がされている。替わりに着る物を持つてくると言っただけの戻って来る様子は無かった。

まさかクルトが総長なんて、思いもしなかったな。エルケは額に石が食い込む痛みに少し顔を浮かし、窓を打ち付ける雨を見遣る。雨は激しさを増している、その代わりに風が大分治まってきた様だった。

貴族様、なんだ。言われてみれば、納得がいく。フロリアンの邸で感じた違和感、どこか上から見下ろす達観した思考。

ヤンの弟の時と同じだ。胸の中に、小さな何かがやって来て積み込んだものが填まった感じだった。とても気楽に話をしていい相手では無い。まるでおとぎ話の人魚と王子の様に、それは住む場所が違うのだ。

ヤンの弟の話聞いた時にも同じ様に引いた線を、同じ様にクルトにも引いた。それは自己防衛だ。今の内に防護線を張っておけば傷つかなくて済む。苦しまなくてもいいから。

エルケからは乗り越える事が出来なかった。だってその線は高くそして深い。でもエルケが敢えて引いた線を、クルトは意に介せずいつも通りにあっさり乗り越えて来た。

だからまるで当たり前の様に線を越えたクルトの行動は、凄く嬉

しかつた。淒く、嬉しかつたのだ。

それでも、線は消えずに足元に残っている。人魚は海へ、王子は宮殿へ。

ほら、色々な事を聞く度にあちこち綻びて行く。必死に繋げた絆も綻びを見つければ、崩れるのは時間の問題だ。ヤンはエルケとの旅では無く弟を見つucker旅へ、クルトは元いる場所である騎士団へ、カヤもきつとどこかにいる大事な何かに会いにどこかに行ってしまう。

ああ、嫌だな。もう少し旅が長いのだと思っていた。姉に会う為に急いでいた筈なのに、気付くと違うものを優先していた。余りに毎日が楽し過ぎて、現実に戻るのが嫌だった。だって　　現実はずしく認め難いものだから。

テールに頬を付けて、指先で布の上に置かれた石を転がした。綺麗な石だ。丸味を帯び、中に閉じ込められた虫が今にもこの赤を乗り越えて動き出しそうだった。

涙は海からやって来る。ゼークトの村なら誰でも知っている事だ。

殆どの石が鉱脈と呼ばれる場所から見つかるのは異なり、ベルンシュタインは波の高い夜の明けた朝に海辺に打ち上げられる。小さな嵐の夜の後には小さな屑石が、より高くより激しい波がうねった夜の後には大きな石がゼークトの海辺に打ち上げられるのだ。真紅で透明の石が打ち上げられるのは、本当に稀な事だった。

嵐の事をゼークトの村人は皆、人魚が泣いていると言った。だから海に打ち上げられる石は、魂を模した涙だと。その魂を石にして愛する人間に捧げた人魚を敬い愛していたのが、ゼークトの村だった。

海辺に辿りつく石の全てが美しく輝いている訳ではない。打ち上げられた石を磨きそしてやっと真紅の涙なのか、それとも屑石なのか分かるのだ。

表面は濁り汚い石が、村の職人の手に寄って美しく磨かれていくのをエルケは幼い頃からずっと見ていた。だって、それはまるで奇跡だった。水に濡れ、汚らしい石が気付くと美しい宝石になっていくのだ。赤に黄色に褐色に緑に橙に、ベルンシュタインは沢山の色がある。

それを飽きることなく見詰めれば、最初は無愛想だった職人もぼつりぼつりと色々な事を教えてくれる様になった。彼等はまるで宝石の様だった。表面は触るのも躊躇する程気難しいのに、隠された部分は優しく温かい。そして愛おしい。

石は陽の光に透かせる。

中に見える斑点は少ない方が高い値がつく。

水に濡らしては駄目な石もある。

叩くと脆く崩れる石もある。

逆に叩いても滅多に壊れない石、燃やすと白い炭になる石。

紫、緑、青、黄色、赤、無色。限らない色の中で小さな頃から育っていたエルケにとって、例え生まれた場所が違ってもゼークトは故郷だった。エルケは幼い頃に違う場所からやってきたのだ。

エルケにはその記憶はない。まだずっと幼い頃だったから。共にゼークトへ来た姉はその話を余りしてくれなかった。エルケも聞こうとはしなかった。何故か、聞けなかった。

人魚の涙と呼ばれた最大級のベルンシュタインが海辺に打ち上げられたのは、ゼークトが滅ぶ一週間前だった。

大きな原石は海に洗われ、波に削られて海辺へやって来る。傷だらけで色も濁るそれを何度も削って大きさを一周りも二周りも小さくさせ、石はやっと本来の光を取り戻し、輝き始めるのだ。

でも、その人魚の涙は打ち上げられたその時から奇跡の石だった。見つけたのはエルケだ。一人で歩いた海辺の道を今でも覚えている。

姉に構って貰えない寂しさに不貞腐れ、抜け出した嵐の夜だった。雨に濡れながら砂浜を歩いた。波が唸る轟音が響き、暗闇の中でも

はつきり見える波飛沫は雲の様に横に棚引いて見えた。

裸足の足に響く地響きと体ごと持つて行かれそうな強い風は子供心に怖かったけれど、家に戻らないのはただの意地だった。姉が追い掛けてくれるのだと思っていた。追い掛けて来てくれるまで帰らないのだと思っていた。

寂しい。怖い。でも帰れない。泣き出しそうになつて空を見た。容赦なく打ち付ける雨は冷たくて、人魚が泣き叫んでいるみたいだった。

それは、一際激しい嘆きの後だ。激しい風と、一瞬の激しさをより増した雨。大きな波が海辺を襲い、余りの恐怖に悲鳴を上げた。強く目を瞑り、咽喉が痛む程に叫び目を開けると、もうそこには何かがあつた。波間から顔を出して、少しずつ砂浜に押し出されてくる。

最初は何かが蹲っているのかと思つた。膝を抱え、泣いている様に見えた。だから恐る恐る近付いた。大きな波が何度もそれに打ち付けてくる。

膝まで水に浸かり、水の中に手を入れてその石を触ると手触りは滑らかだった。大きな波が体を襲つて肩から下がずぶぬれになつても、余りの大きさに驚いてそこから動く事が出来なかつた。

赤い石、奇跡の石。ゼークトの全てを変えた石。誰もがその美しさに魅了され、誰もがその美しさを手にしたいと願つた。それは残酷な程美しい石だった。

蝶は蜜を吸いに来るといふ。花はその匂いで蝶を誘ふ。匂いに魅せられた蝶は花に忍びより、その全てを奪うのだ。人魚は恋をした。『蝶』に恋をした。全てを吸い尽くされ、全てを壊されると知つていても、それは止められなかつた。

人魚は『蝶』の望むものを全て差し出した。大小の真紅の石、人魚の渡せる全ての何もかも。腕を切り、足を捨てるおとぎ話の人魚と同じ様に。

最後に何も上げるものが無い事を知つて、どうしてこの身は人魚



では無いのだと嘆いた。この涙はただ頬を濡らすだけで、魂を石に  
もしてはくれない。この体は血が流れるだけで石にはなりもしない。

花は村であり村人で、香しい匂いをさせる蜜は石だ。そして、人  
魚は姉だった。

神に仕えていた姉にはそれが初めての恋だった。そして、多分最  
後の恋だった。絶対に報われない恋だった

激しい嵐は姉の泣いたその夜だ。だからエルケはその人魚の涙が  
姉の涙なのだと思ったのだ。悲しみ嘆く姉へ、人魚からの贈り物だ  
とそう思った。

泣かないで、姉さま。これを見て、姉さま。大き過ぎる涙は一人  
では持てない、見つけた高揚感も手伝ってエルケは村人に吹聴して  
回った。これは姉の物なのだと、興奮してはしゃぎ回った。

でも、結局それが村が消える全ての始まりになった。

この混迷する時代に蹂躪され消えた村は、勿論ゼークトだけでは  
無かった。戦いに敗れた所領が一夜で消えるという事も何もおかし  
くは無いのだ。越境侵略に巻き込まれた小さな部落もあるし、糧秣  
が絶えた軍に襲われた村もあった。でも全てを奪われ、全てを壊さ  
れるのはいつも小さな村や部落だけで、いつも突然襲われて静かに  
消えて行く。残されるのはただの廃墟だ。

赤の村ゼークトもそんな簡単に消えた村だった。燃えた村の最後  
を覚えている。何もかも知られた蝶に全てを奪われた末路だった。

海から石はやって来る。そんなおとぎ話を誰も信じる訳もなく、  
見つからない鉱脈を探すビューローにゼークトは侵略された。決し  
て全てを望んだ訳ではないのに、全てを差し出さないと殺された。  
壊され、犯され、燃やされた。村人は次々と軍隊に連れ去られて  
いく。行く末は拷問や尋問だ。それは死んだとも同じことだ。

エルケはただ見ていた。姉と互いに抱き合い隠れ、ただ震えてい  
た。エルケは恐怖に、姉は自分のしたことの罪深さに。蝶はビュー

ローの商人だった。

焦げ臭く息苦しい。燃やされているのは最早、人なのか家なのか分からなかった。叫び声と泣き声、現実とは思えない声が小さな小屋の向こうから聞こえてくる。少しずつ近づいてくる剣戟がただ怖かった。

だから姉がエルケの体を手放した時、思わず縋り付いた。姉さま、置いて行かないで。でも外から聞こえる叫び声が怖くて声には出せなかった。だから泣きながら、首を振った。

「エルケ、ここにいなさい」

置いて行かないで。一人にしないで。一緒に連れてって。嫌だよ、怖いよ。足をばたつかせて泣き叫びたかった。

「姉さまは人魚の石を隠してくるから、エルケはここで待っていて」

嫌だよ、一緒に行くよ。お願い、置いて行かないで。腕に必死で縋り付いた、でも放された。

「いつもの場所に隠してくるから、エルケはここから絶対に出ないでね」

炎の中に駆けて行く姉の背中は、今でも瞼に焼き付いている。絶対にもう二度と笑う姉には会えないと思った。だって、エルケの方を決して振り返る事は無かった。自分を捨てて、男の元へと走ったのだと思った。だから悲しくなって、小屋を飛び出した。

野原を濡らすおびたしい赤。空に立ち昇る炎の赤。天を覆う夕焼けの赤。転ぶ度に手も体も赤に染まり、次第に姉の背中はずっと遠く。手を伸ばしても遠くなった。

それがエルケの姉を見た最後だ。

テーブルの下にだらりと落した濡れていた手の甲の布切れを解けば、出てくるのは罪人の烙印だった。

これは姉と離別してから、数十人の村人と共に連れて行かれたビュローの城で付けられた。エルケと共に連れて行かれたのは主に

職人だった。姉を追い掛けたエルケは、村人を連行する軍隊と鉢合  
わせしたのだ。

助命を懇願する職人達と共に、エルケは殺されることなく城へ連  
れて行かれた。優しかった職人達はたび重なる拷問に次々と姿を消  
していった。それでも彼等は石の事を話そうとはしなかった。

エルケが閉じ込められていた場所の向こう側から聞こえる兵士の  
声は、一句一文字間違えることなくいつも一緒だ。話せ話せ話せ話  
せ話せ話せ話せ。石は何処だ石は何処だ石は何処から来る石は何処  
から来る。話せ話せ話せ。失いつつある金と権力に怯え、ビューロ  
ーの城は狂っていた。

「寒い。クルト、遅いな」

誰もいない部屋で小さく呟いた声は、思ったよりも大きく心細く  
響いた。上着を着ていない所為かそれとも昔の事を思い出した所為  
か、背中から寒気がやって来る。

エルケは俯いて小さくくしゃみをすると、椅子から立ち上がった。

部屋を見渡せば、家具もあり整然とはしているけれど少し物足り  
なさを感じる部屋だった。生活感が全く無いのだ。人のぬくもりの  
無い部屋だ。クルトはここを総長の部屋だと言った。

薄いシャツしか羽織っていない上半身を両腕で包むと、辛うじて  
腕に残った体温が冷え切った身体を温めてくれる。

この二カ月以上も定期的に食事をし睡眠を取ると、体にはあるべ  
き肉が戻って来ていた。腕で隠れている向こう側には、本来この時  
期の女性には少な過ぎる程ささやかだが、確かに胸の存在がある。

「エリク」

「終わってるよ」

軽くノックの後、クルトの声が聞こえてきた。

テーブルに置かれた布張りの箱に転がった真紅の石を見つめ、テ  
ーブル脇の椅子に腰掛けると直ぐに返事をした。

先程は余り気にしていなかったけれど、これだけ薄着なら体の線

が見えてしまいかもしれない。前屈みになってテーブルに肘を付ける。なんてことない。ささやかな胸はこんな簡単な事で目立たなくなった。

濡れて汚れた団服は着替えて来たのか。エルケの鼻水も付いていない乾いた団服に着替えて来たらしいクルトの後ろから、濡れた外衣を脱いだヤンが入って来る。

シャツ一枚のエルケを見て、手に持ったウールの上着を直ぐに肩へ掛けてくれた。大きさはトニの物に比べ大分小さい。どうやら小さめの服を探してくれていたらしい。

いつもと何ら変わりなく見えるヤンは、上着を掛けたままで袖に腕を通そうとしないエルケを促してくる。

「エリク、着た方がいい。風邪をひく」

何を急いでいるのか。半分浮いたままの上着からヤンは手を放そうとはせずに、エルケが腕を袖へ通すのを待っていた。まるで急かされているようだ。

「ヤン。僕、自分で出来るよ」

顔を見ない様にして、エルケは上着をヤンの手から引つ張った。

もしかして今の言葉に、ありがとって付けたら良かったかな。でも今更思ってももう遅い。子供の意地っ張りみたいに聞こえなければいいけれど、そう祈る。

「ああ」

何か言いたげな様子を見せていても、案外、あっさりと上着はヤンの手から離れた。それはちよつと拍子抜けだった。

だってヤンが部屋に入ってきて来てからというものの、平然を装っていたけれどエルケの心臓はずっと早鐘を打っている。だってこの上着を着せようとするのも全部、本当は弟へ向けられるものじゃないか。そんなの簡単に受け入れられる訳ない。

そう毒づきながらも、実は嫌われるんじゃないかと内心肝を冷やしていた。

袖を通すと一枚着るだけで随分と温かい。エルケは胸の部分が余

り目立たない様に前を合わせた。袖は少し長かった。手の甲まですっきり隠れてしまう。

「で？」

部屋に入ってから黙っていたクルトが、椅子の左横で腕を組みながら屈み込んだ。

テーブルに片手を付け、エルケの顔の真横まで一気に近付いたクルトのアクヴァマリンの瞳が、間近でエルケを覗き込む。エルケはその青い瞳の前に石を掴み上げると、真横からもう一度石を見て頷いた。

「うん、多分ゼークト産だと思う。確証はないけど……」

エルケはそのまま黙り込んだ。

ゼークトが地図から消えて既に1年以上、存在する筈もない鉱脈を見つけるのは不可能だ。赤いゼークト産の涙は村を経由して、王族や貴族の装飾品になっていた。鉱脈から掘り出せない赤い石は定期的に流通させる事が難しく、村はいつも屑石や比較的海辺へ打ち上げられ易い黄色や橙の石を加工し交易品にしていたのだ。

裸石のままの石が今頃市場に出るとは思えない。ただ一つの可能性を除いて。

「エリク、どうした」

返事の無いエルケを訝しく思ったのか、ヤンが先を促してくる。

「ううん、何でもないよ」

エルケは脳裏を過る嫌な予感を振り払い、無理に平然を装って首を振った。

『人魚は恋をしました 初めての恋でした』

人魚が蝶に手渡した加工前の沢山の裸石は、あの赤に染まった日以来蝶と共に姿を消していた。

人魚の涙もビューローには渡らず、その行方は分からないままだ。エルケはそれを見つけないで行くのだ。姉が多分最後に魂を模した人魚の涙を。姉さまはもう念願の石になっている。きっとそれは美しく残酷な色をしてどこかでエルケを待っている。

「ルツツ？」

覗き込んだ馬小屋に馬番がいる様子は無かった。

心なし声を抑え目にエルケが名前を呼ぶと、小屋の中から物音がする。馬小屋の太い柱横からエルケが中を覗き込むと、嬉しそうにルツツが顔を寄せてきた。

「なんかちよつと久し振りだね、元気だった？」

足先を伸ばし、少し高い場所にあるルツツの首に手を回して頬を寄せる。筋肉が固い、でも柔らかい。温かい。

絨緞に簀巻きにされて初めて乗せられた時の様な、嫌がる様子をルツツがもう見せる事はない。ルツツは黙りこくり頬を寄せるエルケのされるがままになっている。

エルケは滑らかな褐色の肌に指を這わせ、小さく溜息を付いた。どうしようもなく疲れていた。

今夜も懲りずにまた酒宴だった。門前庭まで高城の騎士の間の喧騒が聞こえてきた。

久し振りにワルゼ城へ姿を見せた総長を讃えて、というのは完全な名目で、任務が増える前のつかの間の休息らしい。それにしても二晩連続で酒盛りとは、正直迷惑極まりない。酒も殆ど飲めないのに。

大きなテーブルに並べられた食事は、昨日にも増して豪勢だった。余りの量に見ているだけで十分腹が一杯になった。何よりももつと騎士の間いっぱいに充満した酒の臭いが辛かった。酒を全く口にしていなくてもエルケの頬は時間がたつにつれ火照ってしまふ。もう少しあの場所にいたら、確実に酒気あたりしてしまうに違いない。だから今日は申し訳ないと思いつながら、平たいパンを二つを念のためにとト二に用意して貰っていた水で一気に流し込み、早々に広間を退散したのだ。

沢山の団員とノルベルト副総長の近くにいた二人には、結局何も告げずに出て来た。しかも出て行く姿を咎められない様に、こっそりと機会を窺って扉を閉めた。

具合が悪いと言ったら気にするだろうし、寝るとは言っても昨日の今日だ。

心配して、部屋まで付いて来られるに違いない。エルケの都合に、わざわざ二人を付き合わせる事は無いだろう。特にクルトは久し振りの我が家みたいなものだから。

ルツツの傍で少し時間を潰して、程々に気分が落ち着いたら寝室に戻ろうとは思っていた。ただ、ほんの少しだけ一人になりたかった。ゼークト産の石で引き摺り出された重い記憶は、どす黒く背中に押し掛かっている。

昨夜の一件から、ヤンとは何と無くぎくしゃくしている。

必要以上に手を出されるのを避けるエルケと手を出す事に躊躇するヤンは、結局双方が余り必要以上に近付かない事で決着がついたようだ。預かり知らぬ内に自然とそうなったただだけれど、仕方がない。それが互いの為にいい事なのだ。

エルケも知った以上はヤンの弟の身代わりとして必要以上の世話を受けることにも抵抗があったし、ヤンは多分そんなエルケに手助けするのは嫌だろう。そう決めた筈なのに、でも心は晴れないままだった。

対するクルトの過保護っぷりは、ついこの間までのヤンを彷彿とさせる。

しかもエルケが男であり、背こそ小さいもののそれなりの歳である事を彼は失念しているのだろうか。エルケに対する行動はまるで親が小さな子供にするみたいだ。黙って手を出したヤンに比べて、クルトは口うるさく説教臭い。

あくまでも幼い子供に対する態度なのが、本来は女であるエルケには複雑かつ納得し難いが、ヤンに伸ばせなくなったこそぞと言った時の逃げ場を見つけた様で少し安堵したのも事実だった。

両極端な二人の間でエルケは少し気疲れしていて、どうにもならないもどかしさをぶつけるのにルッツを選んだ。カヤに会う為、勝手にここを抜け出すほど事を大きくはしたくなかったのだ。

大きく溜息をつくくと、エルケは馬小屋に背中を預けしゃがみ込む。団服を着てはいなくても、先程借りたウールの上着は結構な厚さで十分温かい。膝を抱えるとどうしても開いてしまう前を掻き合わせて膝ごと上着で包み込んだ。馬車の中で毛布に包まれ、眠っている時の様に温かい。

肩を落として、空を見上げた。

「カヤは元気かなあ」

昼まで窓に叩き付けていた激しい雨は嘘のように晴れ、夜空に雲は僅かに残る程度だった。星が闇の中で幾つも瞬いている。でも月だけはまだ僅かに居残っている薄雲に隠れ、少ししか見えなかった。薄暗い夜だ。

クルトがもたらしてくれたカヤの近況は、ここ数日ずっと晴れないままだったエルケの心に小さな光を射してくれた。早くここから出て、カヤに会いたいな。本来の性別の所為か、どうしても男塗れの中で生活するのは個室を与えられているとは言え抵抗がある。

壁の向こう側は皆、男だ。いつ扉が開くか分からない所なら、安心して体を拭く事さえ出来やしない。騎士団の男達は皆中庭で半裸になって水を浴びるらしい。でも、そんな事エルケがしてしまったものならワルゼを放逐されるしクルトにも迷惑がかかる。

だから、この数日は体を拭く事を我慢していた。とにかくストレスが溜まる。

「ルッツ、クルトがまるでヤンみたいなんだ」

ルッツは馬小屋の止め板を足で蹴った。背中に直接震動が来る。どうやら相槌のつもりらしい。

言いながら表現がおかしくなっている事には気付いていた。でも所詮ただの愚痴だ。どうせルッツしか聞いていないから別にいい。

総長室を出る時に高城の急な階段を二段踏み外したら、クルトに



問答無用で縦抱きされた。

ヤンと、後からやってきたノルベルト副総長の目の前だ。流石のヤンだって同意を取るといふ気遣いを見せた。断わったけど、のに階段で目を見開いたまま呆然としていたら突然だった。

クルトへ抗議をしても、それなら階段くらい踏み外さず降りろ、と厭味の応酬で返された。

「逆に、ヤンはちょっと前のクルトみたいなんだよ」

ルッツが次は鼻息で相槌を打って来る。

結局、クルトの首に大人しく腕を回した。落すと脅されたからだけど、エルケの視線向こうで、聞こえるように厭味を言う。こちら辺がクルトと似ている、ノルベルト副総長とヤンは仕事の話をしてきた。どうやらクルトはこのままワルゼに残る気は無いらしい。クルトの肩越しに見えるヤンは僅かにこちらへ視線を流しても、直ぐに背を向けた。まるで興味も無く流すみたいだ。何と無くヤンのその背中を見ると置いて行かれた気持ちになって、エルケは首に回した腕に少しだけ力を入れた。ヤンの手は振り払ったのに、クルトの手は許容した自分がよく分からなかった。

ルッツは慰める様に馬小屋の木枠を蹴り付けている。言うなれば、あんまり考え過ぎるな、って所かな？

「うん、分かってるよ」

本当は今だって、席を外す事を誰かに言い残してきたら良かったんだ。クルトやヤンが駄目なら、せめてトニやマルセルにでも言うてきたら良かった。でも、敢えてしなかった。

不貞腐れて家を飛び出したゼークトの時と一緒にだ。

結局自分は、誰かが追いかけて来てくれるのを期待している。そして、一緒に帰ろうと言ってくれるのを待ってるんだ。あの騎士の間にクルトやヤンの居場所はあっても、エルケの居場所は無いから。今、居場所の無いエルケに明確な場所が欲しかった。誰かの隣にいたかった。

もしかして自分は試しているのかもしれない。

「カヤに会いたいなあ」

結局、話は戻ってしまう。

いつも何も気にせず傍に置いてくれたヤンの傍には近寄れなくなつて、代わりにたまに振り返つてエルケの存在を確認してくれるクルトは久し振りのワルゼでこつちを見る暇も無い。

そうか、試しているんだ。誰に手を伸ばせばいいのか分からないから、迎えに来てくれる人なら我儘を言えるんだって思つてる。いつもならカヤが走つて来てくれる。何も聞かずに姉さまみたく甘やかせてくれる。男女の愛情ではなく、家族的な愛情で。

「寂しいよ」

一人になると嫌な事を考える。

姉と恋に落ちた『蝶』と緑の都市ビュローの領主は、エルケが人魚の涙の在処と存在する筈も無い鉋脈の在処を知っているのだとまだ思っているんだろう。行く場所、行く場所で痕跡を残していかれている気もする。念入に張った蜘蛛の巣の中に疑似餌として蝶が待っている、そんな感じた。

蝶は決してこの大陸で一人では無い。でも多分、真紅のベルンシユティンを数多く手にしている蝶は姉が恋をした蝶だけなのだ。エルケは姉が恋したという男の姿を見た事は無かった。

いつも姉は、エルケと眠る小屋を夜半に抜け出し彼の元へ走っていた。たまに怖い夢を見て目を覚ました夜分遅く、横に眠る筈の姉がいなかった時は凄く心細かった事を覚えている。置いて行かれるのが怖くて、凄く悲しかった。

彼がもし目の前にやってきたら自分はどうするのだろうか？ エルケは顔も合わせた事の無い蝶の事を考える。

体の中が熱い。咽喉の奥が焼ける。指が何かの衝動を感じて宙に浮き、考えるだけで腸が煮え繰り返つた。多分その時が来たら、エルケは躊躇なく殺そうとするだろう。憎しみのまま剣を振り回し、自分が殺されるのも覚悟でかかつていくに違いない。

腕を切られても、せめて何所かを切り裂いてやらなくては治まら

ない。切り付けるのが無理なら突き刺してやらなければ。

命などは惜しくは無かった。どうせもう一度は死に掛かった身だし、偶然で命を拾った様なものだから。無事、姉の場所へ辿りついたら石と共に眠ってしまおうと思っていた。だから旅の終わりはそれこそ本当の終りだ。

でも旅を終える事に今は少し躊躇していた。出来るだけゆっくり進みたかった。

「苦しい」

「何処が苦しいのさ」

一瞬、ルッツが聞いてきたのかと思った。

上着に顔を埋めていたエルケが顔を上げると、背中でルッツが板を蹴り付けている。仄かに漂う酒の臭い、喧騒はまだ続いているのに、彼は抜け出してきたのだ。何か返事をする前に、頭上に外套を投げ付けられた。

本当にこんな所はちよつと前のヤンにそっくりだ。いつも一緒にいるとやっぱり似てくるのかな。

「何でも無いよ」

外套の中で無理に笑った振りをして、クルトからの返事は無かった。

横に立っている気配だけはする。外套を被っていても、どうしても突き刺さるような視線だけは感じて息が止まりそうだった。その熱い空気から逃れたくて、わざと明るい声を出した。

「主賓が逃げ出しちゃ駄目だよ」

「逃げ出した人には言われたくないねえ」

だって僕は主賓じゃないよ。そう言い返したかったけれど止めた。それじゃ、折角迎えに来てくれたのにまるで厭味みたいだから。

あのね、クルト。王子と人魚は住む場所が違うんだ。だからわざわざ線を踏み越えてまで、こっちに来なくてもいいんだよ。本当はそう思っている筈なのに、迎えに来てくれたのがクルトで嬉しかった。

「いいの？ 抜け出して」

「別にいいよ、副総長が上手く誤魔化してくれるから」

「そっか、ごめんね。心配かけて」

ヤンが来るときつと素直に「ごめん」とは言えないだろう。もうここまでぎくしゃくしてしまったものをこれ以上悪化させたくない。もう。

そのまま暫しの沈黙。騒がしくしていたルッツもいつの間にか静かになっていて、どうやら眠ってしまったようだった。外套から顔を出す事も出来ずに、エルケは温かい固まりの中で目を閉じる。眠る事は出来なかった。

小さな溜息の後、足が小石を踏みつけた音が聞こえる。

その言葉は余りに唐突で、覚悟をする暇も無い程に呆気なく耳に入ってきた。

「らしくないのは、その手の甲に関係がある訳？」

「手の甲？」

言われて今更だけど、やっと気が付いた。

借りた上着は長くてすっぽりと手の甲を隠していたから、先程総長室で布切れを解いていた事を忘れていた。外套の中で慌てて甲に指を触れると、微かに指先に触れる傷の凹凸が剥き出しになっている。

一瞬、ルッツの傍にいる事を思い出して立ち上がるうとした。だつて、ルッツなら乗せてくれるかと思つたから。逃げ出そうと思つた。意味無く、ただ反射的に。

でも外套の上からクルトに手首を掴まれ、エルケは体を固く縮こませると小さな悲鳴を上げた。不思議と拘束されているのに痛くはなかつたけれど、知られた恐怖で手が震えた。この足では逃げ出せないのに、逃げ出そうとクルトを振り払つたらそのまま外套ごと馬小屋の壁に押さえ付けられる。

軋む背板の音と、耳元で掠れながら聞こえる冷静で小さな声。

「俺も食事の時に少し見えただけだから、他は誰も気付いていない

よ

熱い息と共に洩れて来る声は外套越しでも十分に耳に熱く、エルケは奥歯を噛むと天を仰いだ。首筋にあるクルトの身体が体重を掛けて、逃げ出さない様にエルケの体を馬小屋へと押し付ける。

烙印は罪人の証だ、そんな人間と一緒に旅なんて続けてくれる筈はない。

もしビューローにばれたら、何を言われるか分からない。引き渡しを求めた時には無条件で引き渡さなければ、武力行使に訴えられる事も少くは無いから。その為の烙印だ。背中にも証はあった。

赤の村ゼークトの生き残りはもうエルケ一人だ。他は皆殺された。だから、石の在処を知りえるのはエルケだけだ。きつと『蝶』と一緒に彼等はエルケを探している。枯渴しつつある鉾山を抱えたビューローには時間が無いのだ。

「それはただの火傷じゃない。詳しい話を聞かせてくれるのであれば、この手は放すよ」

咎める様な声を聞いて、泣きそうになった。

「俺はお前が『蝶』でさえなければ、いいんだ」

吐き捨てる声は疑いたくはないと訴えているようで、もう隠せないと思つた。女であること以外は。

## 間章

外套の中は小さく身動き、女みたいな細かい悲鳴を上げた。

薄汚れた布切れごと掴む細い手首と馬小屋の横板へ押し付けて拘束した小さな体は、触れ合ってからずっと細かく震えている。多分、ここが耳だろう。見当を付けて顔を寄せると、細い肩の感触。

性懲りも無く拘束した指から放れようとする手首をもう一度掴み直して、柱に押し付けると静かにしていたルッツが抗議しているのか柱を蹴って来る。押さえ付けている布の固まりが怯え、悲しんでいるのが分かるらしい。

「別に、怖がらせているつもりはないよ」

ルッツに答えながらも、小さくなつた外套の中へ囁きかける。

声を掛ける度、間に外套だけを挟んだ体の向こう側で体を固く強張らせて来た。感じるのは骨と薄い肉。泣いているのか、鼻を嚙る音と不安定な呼吸。

「でも、俺はヤンみたいに心は広くないんだ」

どんなに面倒で負担だとしても、大所帯を守る立場である以上黙認する訳にはいかない。

直ぐに下へ落ちて行こうとする細い手首を引き摺り上げ、持ち上げた。背中に今にも刺殺してきそうな程、物騒な視線を感じてクルトは声を出さず口端だけで笑う。

大人しく見ているよ。お前だつて知りたかつた事だろう？ この機会を逃したら、結局この子鼠は何も話さないままお前の傍を逃げる出すかもしれない。それはお前だつて不本意な筈だ。

分かっているのか、首筋か背中に剣を押し付けられる事は無い。自分の命の紙一重の攻防に唇に笑みが浮かんだ。それでいい。そこで俺のする事を黙って見ている、ヤン。

「エリク」

名前を呼びながら、両手で掴んでいた手首を片手に持ち替えた。

大体検討を付けていた顎の場所を掴んで、逃げて俯こうとする顔を天に向ける。外套越しだから傍目では何が起きているのか分からなくとも、実際は男にするにはかなり危険な体勢だ。でも十分分かっていて敢えて、そうさせた。

頬の辺りの外套が濡れている。閉じ込めた腕の中で、本格的にしやくりあげ始めた。本当にお前は何もかもが女みたいだ。感情を掻き立てられるよ。

「エリク、早く」

耳元に顔を寄せて懇願すると、暫しの沈黙の後小さな声で謝罪が戻ってきた。違う。それだけじゃ足りない。これから先を促す為に、俺は次にどうしようか？

「どう思う？」

漆黒の闇の中で浮かび上がる影に、背を向けたまま問い掛けた。闇の中から返事が戻って来る様子は無い。影が動いた様子も無かった。

中城の向こうへ消えて行ったエリクの背中は今も見えない。必要な事が必要なだけ吐いて震えながら解放を求めて来たから、約束通りに手を放した。放すなり、風のように身を翻し闇に消える。あつという間だった。

剥いで脱ぎ捨てて行った外套だけが足元に広がっている。手の平を乗せても既に温もりは消えて、頬の辺りに触れていた部分だけが濡れていた。

「ヤン、俺を殺すなよ」

苦笑交じりに降参と両手を上げれば、軍靴が小石を踏む音が背後から聞こえた。

今なら簡単に殺す事が出来るだろう。相手は丸腰だし、両手を上げている。それでも掛かって来る気配は無い、ヤンもまた小さな背中が消えた漆黒の闇を追い掛けているのだ。よく我慢したね、褒め

てやるよ。あの状況を見ながらも、何とか持ったヤンの自制心を心から称賛した。

騎士の間を黙って抜け出すエリクに気付いたのは、多分ヤンの方が先だった。

それでも敢えてヤンが先に話し掛けなかったのは命令故だ。ワルゼ城に出入りしている『蝶』の気配と、エリクの何か隠している様子に符号が見えないのか。そろそろはつきりさせたかった。

「ゼークトの生き残りねえ」

赤の村ゼークトは希少石の産地と聞いた事がある。その石一つ一つが途方も無い金額で取引され、村はつい数年前に滅んだ筈だ。金や銀ならいざ知らず、然程石の知識には明るくない。あの小さな石に一体どれだけの価値があるというのか、見当もつかない。

実際、どんな状況で滅んだのかは広く知れ渡ってはいなかった。小さな村や集落が突然消えるのはこのご時世だ、よくあることだった。それに一つ一つ理由を付けて管理する暇な人間もいなければ、敢えて攻め込んだ所領を敵に回してまで抗議する程正義感溢れる所領も存在しない。

いつもそういう小さな出来事は起こりうるのだ。突然現れ、突然消える。不意に訪れる妙な衝動の様に。

丸めた外套を闇に放り投げれば、漆黒の腕がそれを拾い上げた。軍靴が草むらと小石を押し潰す足音が近付いてくる。

柱に背を預け腕を組んだまま、ルッツの鼻面を撫でるヤンの横顔に視線を流した。相変わらず、面白くない程の無愛想で無表情だ。ただ珍しく殺気は隠し切れていない。

張り詰めた糸は、ほんの少しのきっかけで簡単にぶつりと切れてしまいそうだ。だから言っただろ、縋り付くのはお前だって。片手を蝶の様にひらつかせた。

「エリクは蝶では無いってさ」

そうだ、エリクは蝶では無かった。

何度聞き返してもその返事が聞こえなくて、苛立ち紛れに腕の中



で震えている体から外套を剥ぎ取った。手の平で涙と鼻水塗れの泣き顔を隠しながら首を振るエリクの甲には、一生背負う烙印がある。ゼークトを侵略した際に、ビューローが捕虜に付けた証なのだとエリクが言った。見ないで、と泣いた。その声に無性に煽られる。

拘束していた筈の手首から指を外して親指で痕を辿れば、凹凸が指の腹に触れた。傷は深い。逃げても追いかける、そんな執念を感じさせる証を戦の捕虜に付けたのはビューローの領主だ。狂っている。

ここ数日のうちに『蝶』がワルゼに持ち込んだ真紅の石ベルンシユタインは、確かにゼークト産の物らしい。エリクのゼークト出身が真実なら、それは多分間違いないのだろう。

噁り泣くエリクから根気よく聞き出した話によると、姉ユツタは修道女で、彼女はゼークト生まれでは無かった。ゼークトには教会も修道院も無く、彼女は何処かの修道院からゼークトまで辿りついた事になる。

はたして幼い子供を連れだした女が、一人でそんな遠くまで旅が出来るのか？ 真実は知りえない。エリクはその時まだ幼く記憶は無いのだ。

ごめんなさい、とひたすら謝罪を繰り返すエリクの涙は拭けなかった。この手は両手と顎を拘束していたから。そう言い聞かせないと、この身体は道徳に反する事を簡単にしてしまいそうになる。線を踏み越える所か、俺が常識を壊したくなる。

柱の横からルッツが突然顔を出した。奴は今の飼い主の感情を映し出しているのか、かなり憤っている。

馬は人間の感情に敏感だ。少しの間はルッツには近付かない方がいいかもしれない。エリクを泣かせた所為で、蹴られるのだけはお断りだった。殺すだの蹴るだの、本当に物騒な主従だ。

「俺も一応はお前の主人なんだけどね」

ルッツはワルゼ城の馬だ。だが、彼は今の飼い主同様に面倒な奴だった。

丈夫で見かけも悪くないし、足も速い。とはいえ、それを差し引いても有り余る程の自尊心の高さが半端無く、自分の選んだ人間じゃないと絶対に乗せない頑固さを持っている。ヤンはワルゼの中で唯一ルッツに乗り操れる人間だった。それでもなかなか苦戦しているのだ。

ヤンは手綱を持ったまま、手に持った先程までエリクに被さっていた外套を羽織った。

何も指示はせずとも全て理解している様にルッツを馬小屋から出し、無言のまま飛び乗る。旅の準備は既に出来ていたらしい。

上から降って来る視線は剣呑だ。当分この件は根に持たれるに違いない。

「エーゲルの修道院か」

今現在のエーゲルの役人はフロリアン・パプティスト・ヨナタン・フォルクマール・シユタイベルト。

舌を噛みそうな程長く吐き気のする名前だが、今現在の役人就任前に消えた修道院と孤児院が気に掛かった。とはいえ、調べても帳簿も何も処分した後だろう。無駄骨になるのかもしれない。

ここで俺は、ヤンを離していいのか？

「無理はしなくていいよ」

きつと、何も見つかりはしないのだろう。

何せ、あの場所は先日ヤンとクルトで調べたのだ。クルトがヤンと出会う前、恐らく修道院と孤児院が消えた時期と合わせてヤンの弟はあの場所で失踪している。当時は、雪の降った月夜だったらしい。

取引相手を慎重に厳選する『Schmetterring(蝶)』の扱う商品はいくつもある。

その中で最も高く取引されるのは、宝石や宝飾品、それに情報や武器ではない。実は最も高く売れる商品は『人間』だ。

宗教上表面的には禁止されていた売買も、比較的人手の必要な新しい鉱山などでは重宝された。一人一人が高く取引される訳ではな

い、一山いくらで人間が売られるのだ。

戦を起こし捕虜を捕えても、それらを賄うには金が掛かる。怪我をし、死に掛けている人間を労働者には出来なく、兵士ならいつ反乱を起こされてるか分からない。

だから蝶が主に売るのは子供だ。賄う量も少なく、死んでも埋める場所が狭くて済む。至って経済的な理由だった。

いなくなっても足のつかない孤児院や戦後の村や集落には、沢山商品が溢れ返っている。そして、厳選された顧客に纏め売りをするのだ。吐き気がした。

「もし名簿が何かが見つかったなら  
「調べてくる」

エリクの存在を確認して来てくれないか、その先は言えなかった。何も言わなくても分かっている、と言わんばかりだ。本当にお前は有能だよ。だからいつか放そうと思っても、なかなかの居心地の良さにお前の手だけは離せない。

ルッツの鼻面に手を置いたら、首を振って拒否された。歯を剥き出しにする姿は馬なのに肉食の様だ。苦笑して、片手を上げる。

「ま、子鼠の世話は任せてよ  
鎖にでも繋いでおくよ。

冗談で言っても、真面目一辺倒なヤンには通じない。腰に佩いた剣が物騒な光を返す前に撤退する事にして、ヤンがこちらを向く前に天を仰いだ。

「ワルゼの内通者はノルベルトに任せて、俺はライゼ GANG に行くよ。ヨープで落ち合おう」

闇から返事は無かった。

それでもルッツの足音が門前の松明へ消えて行くのを確認して、クルトは前門に背を向ける。

高城の窓からはまだ灯りが洩れ、喧騒は治まり止まぬ様だ。すっかり抜けた酒の高揚感を物足りなく思いながら、何の気配も感じない馬小屋を見下ろした。

体の中に熱く渦巻く何かが籠っている。腐りかけの柱に拳を叩き付け、大きく息を吐いた。

金鉱山を抱く黄色の村ライゼガングは、今や没落の一途を辿っている。

露出した鉱脈を掘り尽くし、地中深くに長く伸びた坑道も数多く、しかしそれも老朽化した坑道の崩落に浸水等、度重なる問題で今や壊滅状態だ。しかしそんなライゼガングも全盛期には働く労働者は千を越え、過去、村は鉱山都市と呼ばれていた。

その栄華も今は何処へやら、衰えた鉱脈を捨てて鉱夫達は新しい仕事場を探しに村を出て行ってしまった。故に村は衰退し、今や新しい鉱脈を掘削する事もせずに残る資源の枯渇を待つのみだ。

まだ他に比べれば比較的人通りの多い中央広場を眺めながら、エルケは疲れ切った活気の無い村人達の姿を見ていた。

女はまだ忙しく洗濯や掃除をしても、男達は何処となく暗い表情が多い。それに子供の姿が極端に少なく、天気の良い昼間だというのに遊んでいる姿を見かける事がなかった。

空はからりと乾いた青空。雨はここ数日降っていないらしく、あちこちに見られる緑は男達と同じ様に何処となく元気がない。

風が強く、吹く度に乾いた土埃が宙に翻った。すると、あつという間に口の中が砂塗れだ。少し目に砂が入ったらしく手の甲で擦った。

替えたばかりの布に涙が滲み込んで行く。

カヤは今宿屋の手続きに行っていて、街を眺めるエルケの横に腰掛けるのはクルトだった。

エルケの横は男性が丁度二人ほど腰掛ける事が出来る位、開けられている。その距離が妙に空々しい。クルトを横目に戦々恐々としているエルケに対し、クルト自体は何ら動じていない様子だ。

どうにも居心地の悪い空気だった。明らかに過敏過ぎるほど反応をしてしまう自分がまるで自意識過剰みたいだ。そう思っても無意

識にしてしまうのだから仕方ない。

あの最悪の夜の後、起きると既にヤンは発った後だとト二に聞かされた。

行く先は誰も知らないようで、結局は嫌でもクルトに聞きに行くしかなかった。

旅支度を既に整えていたクルトは外套を投げ付けてただ「行くよ」とだけ言った。まるでエルケとも、これから旅を続けるのが至極当たり前である風に、共に行くのが当たり前前のように。

連れて行ってくれるのか、と驚きを隠せないままで聞いたエルケに、クルトはいかにも心外だと言った表情を返したのだ。

ここに置いて行って、一人で辿りつけると思ってるんだ？ そういったクルトの表情に違うのだと返したかった。聞きたいのはそういう事では無くて。負担にならないのか、とか、罪人出ることが気がならないのか、そういうことだ。

でも聞くことは出来なかった。元より口で勝てる相手だとは思っていないし、それでは連れて行かないと言われてしまうことが何よりも怖かった。

一人で辿りつけるだなんて、今更もうエルケだっと思ってはいない。

でも迷惑を掛けてしまふんじゃないか、とは思っている。薄々、ヤンもカヤもエルケの様に農民以下では無いのだとは気付いていたし、寄りにも寄ってクルトは貴族なのだ。エルケがワルゼに置いて行かれても勿論文句は言えない。

だから旅が続く事自体は嬉しかった。カヤにもまた会えるし。

ワルゼを発つ前にエルケは「手の甲の烙印は隠した方がいい」と新しい布を手渡された。旅を続けるのに剥き出しなのは支障が出るのだという。

隠すことで連れて行って貰えるのなら、構わない。エルケは隠しでも一緒に行くことを選んだ。

その後、結局ヤンの行く先はエルケには教えて貰えなかった。クルトの指示でヤンが動いている、という事だけノルベルト副総長からは教えて貰えた。

実はワルゼを発つ時に一番悲しんだのが、トニやマルセルでは無くノルベルト副総長だ。

未完成の体をむざむざ手離すなんて、とクルトに厭味を言っただんまりをされていた。やっぱり、騎士団の新しい人材として考えられていたみたいだ。正直、エルケにとって城に入るだけで一杯一杯だというのに。

とはいえ、彼はエルケの事ではなくクルトの事を一番心配していたらしい。実際にルッツではない馬が牽く馬車にエルケが乗り込む乗る寸前、クルトの見ていない隙を狙ってノルベルト副総長から「クルトの事を頼む」と耳打ちされたのだ。

頼まれるのはあくまでも自分であって、クルトじゃないだろう。不思議そうな表情を浮かべたエルケの顔を見て、ノルベルト副総長は大声で笑っていた。

大声だけじゃなく内緒話をする事だつて出来るノルベルト副総長にも驚いた。もしかしたら、彼は全てを偽って生きているのかもしれない。見える事が全てとは限らない。

因みにマルセルは任務だったのか、最後まで姿は見せなかった。

トニは中城の鐘楼の傍で手を振っていた、少し寂しそうな顔だ。副総長外の団員は形式上、送りに出る事を許されなかった為に、エルケは皆に世話になった挨拶すらできなかった。

騎士団としては総長が外出するのを形式上はおもむろにはしたくないらしい。例え明らかであったとしても形式上の何かは必要らしい。

あれからの会話は必要最小限。勿論、触れ合いも必要最小限。クルトと一度乗り越えた壁は、全く違うものとして立ちあがっていた。

それはエルケの今まで気付かなかった女の部分だ。男であれば掴まれた手首も触れ合い過ぎた体も、然程気にせず、逃げようとしたエルケを押さえ込むには必要だったんだろうと思えるのだろう。それでも、幼い頃の村で逃げようとしたエルケが兵士に押さえ込まれた恐怖と、クルトのあの時とは随分とエルケの感じるものは違っていて、たまにこうやってクルトだけが傍にいとどうしたらいいのかわからなくなった。

命の恐怖ではない、何か分からない束縛感か閉塞感を覚えてしま

う。

今まではこれ程まででは無かった。だからカヤが近くにいてはエルケに取って凄く楽であり、それにストレスが溜まらない。逆にカヤがいないと会話すらままならないのだ。正に今現在そうであるように。

宿屋の扉がいきなり開いて、カヤが手を振っている。ここにいるよ、そう教える為にエルケも小さく手を上げた。

これだけ人の行き来も少ないライゼガングの宿屋が混み合っているとたまさか思っていた。しかし思ったよりも宿屋自体が少なく、殆どが閉まっていた為に宿屋探しが難航した。

部屋はどうやら空いていたらしい。

カヤが頷いて両手を振っている。やっとこの息苦しい場所から逃げる事が出来る。と、エルケはカヤの元に駆け寄り立ち上がった。

縛られた。そう思った瞬間、もう手首は引き戻されている。

勢い良く体は元の場所へと戻り、元通りクルトの横へ腰掛けてしまった。反射的に横を向いても手首を掴んだ主はこっちを向こうとはせずに、前を向いたままだ。意味が分からない。

手首が熱い。

「どうしたの？」

「行くよ」

聞いた事に対する、クルトの返事は無かった。



自分が立ち上がるよりも先に立たれたのが、もしかして面白くなかったのかな？ 拘束された手首は直ぐに離れ、クルトは立ち上がってさっさと一人でカヤの元へ行ってしまう。思わず、放置された自分の手首を見詰めた。

土埃に煽られたカヤを、クルトは自分の広げた外套で隠して守っていた。それなのに、カヤに腹を殴られていた。どうやらエルケの手首を掴んで無理やり引き戻したのが見えていたらしい。彼女は危ない、と怒っている。

ヤンと離れて、突然はつきり見えてきた事がある。ヤンと離れた所為なのか、自分の心の所為なのかはつきりとは分からない。

最近は何にだけれど、クルトは実はカヤを凄く大事に扱っているという事。

カヤの体調は随分と良くなったものの、いい時と極端に悪い時が半々だ。今日は大分いい日。笑う顔にも快活さがある。でも悪くなると途端に起きあがる事が出来なくなる。そうになると、クルトが凄く心配するのだ。

今まで気付かなかったけれどヤンはエルケを、クルトが陰ながらカヤを、という構図が出来上がっていたのだろうか。殴られたり蹴られたりしている癖に、実はカヤの精神的な面倒を一手に引き受けているのはクルトだった。

満面の笑みのカヤ。エルケに手を振りながら寄って来る。

可愛いカヤ、綺麗なカヤ。優しいカヤ。本当に心からそう思っているのに、エルケの中に黒く濁って沈む感情がたまに湧き起こっている事は、絶対に内緒だった。その汚い感情に名前を付ける事は出来なくて、ただそんな事をカヤに思ってしまう自分が嫌だった。

そんなことを思う自分を、認めたくは無かった。

「エリク！ やつと、今日はベッドで寝られるのよ！」

「良かった、部屋が開いていたんだね？」

夏の今時期は旅人も多い。宿屋に空きが無い所為で最近は何野宿が恒例になっていた。

馬車の旅も三カ月を過ぎると、眠れなかったエルケも比較的野宿にも慣れ、揺れる馬車でうたた寝位は出来るようになっていく。人間、何でも慣れなのだ。随分と神経面で凶太くなった自覚はあった。カヤはエルケの手を握り、大袈裟に振った。良かった、今日は凄く気分がいいみたいだ。

「一室しかなかったら、クルトには馬小屋か外のゴミ箱にでも行って貰おうと思っていたんだけど。残念な事に二室の空きだったの」「残念なんだ……」

カヤは本当にクルトには容赦ない。カヤと笑いながら横を見ても、クルトはいつも通りに飄々としているだけだ。聞いているのかすら分からない。

たまに、視線を感じる時がある。

振り返っても決してそれは絡む事は無かったけれどカヤと話していたり笑っていたりする時、特に強く感じた。何か言いたげな視線、熱く苦しい視線。少し苛立ちを感じる視線。見ないで、と言いたくなるような視線。

言いたい事があるならば、はっきり言って欲しいのに。その視線の意味がどうしても理解が出来なくて混乱する。クルト、僕は一応男だよ。そう思うと胸が苦しくなって、まだ隠しごとをしている自分が嫌な人間になりそうだった。

「エリクは私と一緒に部屋だから行きましょ！」

「え？ 僕と一緒になの？」

カヤは何を今更と笑う。そんな彼女が好きだ。

カヤに掛かると、女だと隠している事も瑣末だと思わせる。どうでもいいの、エリクがエリクであればいいのだと言われている様だった。烙印の事もクルトに聞かされている筈なのに、彼女は何も言わなかった。態度も変わらず、今まで通りのカヤだった。それが嬉しい。

「今まで離れていた分、色んな話を聞きたいの。見せる分には、私は全然気にしていないから問題ないのよ」

こつちは十分気にしなくてはいけないんだけどな。そう思っても強く反発はしない。

カヤと一緒に部屋で寝たいのはエルケも一緒だ。それにカヤと違う部屋になると、必然的にクルトと同じ部屋になってしまう。それだけは絶対に嫌だったから。

曖昧な表情を返して頷いた。背中にまた視線を感じる。

やっぱり男の『エリク』が、カヤと同じ部屋に寝泊まりというのは支障があるんだろうか？　そう言えば、今までカヤとは同じ場所で寝ても同じ部屋で寝た事が無い。初めてだった。

馬車から荷物を持ち入れるのはクルトに任せて、二人で先に宿屋に入ると扉を開けて直ぐに小さな食堂があった。閑散としている食堂の中で、幼い子供が二人楽しそうに走り回っている。

カヤが相好を崩して、一方の少女に手を伸ばした。

「こんにちは」

「こんにちは！」

返事は同時だ。6歳くらいだろうか、幼さを過ぎて少し伸びて来た手足。

抱き上げるカヤの姿は随分と堂に入っていた。少女を膝に下ろしたカヤは少女の解けかかっていた髪を結び直し、括っていた紐を綺麗に整える。ありがとう、と照れて小さくなった高い声が愛らしい。

「お名前は？」

二人はデリア、とマルガ、と答えた。六歳でこの宿屋の娘らしい双子なのだ。

彼女達は両手に一杯豆を掴んでいる。エルケが何処から持ってきたものだろうかと不思議そうに見ていると、デリアが豆を一つエルケに投げ付けて来た。途端に大声が食堂に響く。

「この馬鹿娘どもが、お客様になんてことするんだい！」

奥から出て来た母親らしき女が二人に大声で注意して首筋を掴むと、奥に引き摺って行った。

大きな体に纏うのはくすんだ橙のスカート、白いエプロンが大きく見える。奥に入る寸前に、二人は笑いながら手をカヤへ振っていた。ほんの一瞬でカヤは彼女達に好かれた様だ。

大袈裟に肩で溜息をつきながら、女将が戻って来る。

食堂のテーブル奥には下拵え前の豆の山。どうやら彼女達は手伝いをしている間に飽きて、遊び始めたらしい。よくあることだ、エルケは思わず口端を上げた。豆の下拵えなんて、六歳には退屈に決まってる。

テーブルの下には沢山、豆が転がっていた。

エルケは話を始めたカヤと女将を置いてテーブルの下にしゃがみ込む。一つ二つ、青青しい豆を拾えばテーブルの下に小さな手が見える。マルガだ。豆と一緒に拾う気らしい。

でも、小さな手は既に持ちきれない程の豆を持っていた。豆を拾う為に来たんじゃないのかな？

マルガは少し考え込んでから、小さな口を開いた。

「あのね、お兄ちゃんは何かを買いに来たの？」

「買い物、商人の事を言っているのかな？」

「ううん、違うよ」

「ふうん、そっか。なあんだ」

「なあんだ？ その返事に首を傾げた。」

マルガは床にうつ伏したまま、直ぐに答えたエルケの顔を不思議そうに見上げてくる。

「マルガとテリアを買いに来たのかと、思ったの」

お兄ちゃんなら良かったな、って思っただけなの。そう言つとマルガはエルケを置いて、両手いっぱい豆を持ったまま奥に消えて行った。

小さな頃、ゼークトでも悪い事したら母親に、人買いに売るよ、と怒られている子供なら見た事があつた。それとは少し様相が違う気がする。

小さな背中が奥に消えて行くのを見送ると、心臓が早鐘を打って

いるのに気付いた。そうか、さつきデリアが豆を投げ付けてきた意味も分かった。何故なのか、エルケを人買いと勘違いしたのだ。

食堂の脇では未だカヤと女将は世間話に興じていて、若い少女達は奥に消えたまま出ては来ない。奥に行つて、少女達に何か問い質すべきだろうか？ でも自分に何かが出来るとも思えない。金だつて持つていないし、権力だつて持つていない。むしろ逃げ回つている罪人なのに。

まだ世間話中のカヤには声を掛けず一人で二階に上がり、エルケは女将に言われた部屋のノブを掴んだ。小さな宿屋は殺風景な程片付けられている。

妙に違和感を感じて、エルケは足を忍ばせながら二階を勝手に見回つた。

汚れて黒っぽくなった壁、装飾品の無い壁。軋んだ古い床と廊下は随分と長い間、宿屋を経営していたんだろう。カーテンの付いている部屋もまばらだ、付いていても半分落ちてしまつている部屋もあった。

客はエルケ達の他にはいない。

だつて使われていない部屋の扉は開き、それぞれの部屋の中は何も家具も無いのだ。寝台も机も椅子も無く、ただ壁と床と天井しかない部屋。それは、まるで人間が消える寸前の家みたいだ。

この村は少しおかしくないか？ 背筋に走る悪寒に突き動かされるまま、宛がわれた部屋の窓から外を見てもやはり子供の姿は一人も見えなかった。歩くのは俯く男達。

噴水のあるかつての栄華を思わせる中央広場。昔は馬車も行き交い、市場も開かれていたのだろう。奥に見える邸の庭は管理されていないのか、草が生い茂っている。

谷沿いに広がる村は細長い。両側に広がる森の向こう側には金鉱山がある。

本来は鉱脈を探し歩き回る筈が、既に掘り尽くした山ではもう鉱脈を探せない。それに代わる商業も生産業もここには用意されてい

ないのだ。だとしたら、村の状況はきつともう

「エリク」

声我突然、間近で聞こえてきてエルケは飛び上がった。

振り向かなくても声の近さで分かる。窓に張り付いて外を向いていた背中側に、いつの間にかクルトが立っているのだ。

どうしてこんなに傍に来るのか。密着しているかのようなクルトの寄り様に、例え自分が男装をしてるとは言っても羞恥心が隠せない。耳が熱かった。

背中へ僅かに触れ合っている感触を感じる。窓に手の平が置かれて、吐息がそのまま屈み込んだ。逃げ出せるかと横を向けば、クルトの腕が横から出ていた。こんな近くに。体が強張る。

考え事をしていた所為でここまで近付いているのに気付かなかつた。もうここまで近ければ振り向くことすら出来ない。

「今考えてる事を、教えて」

まるで自分に何かを隠す事を許さないみたいない口調だった。

この間みたいに押さえ付けられてはいないのに、まるで強制的に聞かれている様な気になる。中身をばらされて、覗かれている様な気分。

俯いて窓の外を見ると、静かすぎる風景がある。寂しい。だから、つい疑問に突き動かされるままに唇を開いた。

「クルト、この村はもう間もなく死ぬの？」

村に死ぬという表現は変なのかもしれない。

でも、この街はもう疲労しきっていた。すべき事を終え、あとは静かに消えて行くのを待つだけの村だ。

「そうだね、もうそろそろだね」

簡単にクルトは同意するのが悲しかった。そうだよ、仕方ないよね。どうにも出来ないんだもんね。

村や部落が消えて行くのにはいくつかの例がある。例えば戦、それに病気、天候から来る飢餓が最たるそれだった。死にかけの村には誰も手出しをしない。誰も助けしてくれない。逆に損害を被るから

だ。

助かるか助からないかはつきりしないものに手を出す事はしない。それは実際にエルケもよく知っていた。ビュローに攻撃された時、ゼークトは何処からの援軍も無く滅ぼされたから。

マルガの一言は子供の戯言だ、と一蹴されるだろうか？ それとも無駄な事を心配しているのだと思われるのだろうか？

ただの綺麗事なのだ、そうヤンは前にエルケに言った。エーゲルで襲って来た人間を逃がした時だ。たった一人を逃がしても、何も変わる訳ではない。デリアとマルガだけを助けても根本的には何も変わらないじゃないか。でも放っておく事だけは出来なかった。

「一階で会ったこの宿屋の女の子が、僕に自分を買いに来たのか？  
って聞いて来たんだ」

訥々と話し始めたエルケに、クルトは満足したようだった。それ以上近付く事もせず、大人しく聞いてくれている。

話しながら、これはあくまでもマルガが少しだけ話した事に対する想像で、事実なのかは決してはつきりしない事を強く主張した。だってライゼガングはワルゼ騎士団の管轄だ。

「だから、マルガとデリアは僕に任せて欲しい」  
「任せる？」

「うん」

クルトが問い詰めれば、きつとあの子達は逃げ場を失うだろう。

先日追い詰められたエルケみたいになるに違いない。エルケが強く頷くと、クルトがエルケの耳元で小さく笑った。

吐息が耳に触れて、顔が一気に熱くなる。お願い、離れて。心の中で懇願してしまう。俯いた。

「俺は子供には優しいよ？」

クルトは本当に嘘つきだ。

今まで十分子供扱いしていたくせに、先日は優しいとは程遠いものだった。押さえ付けられた恐怖を覚えている。ほんの少しも体は動かなかった。

「約束してよ！ 僕だつてそれぐらい出来るよ」

早く腕の中から逃げたくて、強い口調で言った。

エルケが話している間に後ろ髪が引かれ、背中にまで付きそうな程長く伸びた髪に触れられているのが分かる。紐で括った根元からずっと髪を辿り、そのまま先へと指が辿った。呼吸が上手く出来なくて、目を強く瞑る。苦しいよ。

首筋と背中に苦しい程の視線を感じた。クルト、違う。今、僕は女じゃない。その反応は間違ってるんだよ。お願い、離して。

急に開け放たれた扉の向こうから階段を軽快に上がって来るカヤの足音が聞こえて、思わず身じろいだ。だって、こんな所をカヤには見られたくはない。絶対に。

「クルト、カヤが来たよ」

「そうだねえ」

そう言いながら、クルトは背中から離れて行く。名残惜しそうに？ それとも少し呆気なく？

離れる寸前に耳元に残した声に思わず紅潮した頬をエルケは腕で隠して、カヤの手助けをする為に部屋を出て行ったクルトの背中を睨みつけた。膝が笑って、震えが止まらない。

クルトが男なのだと思ひ知らされて、無性にヤンに会いたくなる自分は身勝手なのかな。肩を窓枠に預けて、頬を冷たい窓ガラスに押し付けた。

「いいよ、見ててあげるよ」

残された声にエルケは、見ないで、と言い返した。



食事は余り豪勢とは言えないけれど、十分な量だった。豆　昼の内にデリアとマルガが剥いたものの、のスープと芋にローズマリーのソテー。平たいパンに、レバーのペースト。

少し薄暗い食堂の向こう側から顔を出したマルガを食事に誘ったら、嬉しそうに横に座ってくれた。だから、パンを半分にして二人で分けあつて食べた。美味しいね、と言ったら恥ずかしそうにマルガはうんと頷いた。

そんなエルケを見て「まるで兄妹みたいね」とカヤが嬉しそうに笑う。久し振りに心から美味しい食事だった。

部屋の違うクルトと別れて、カヤとの寝室に入るともう既にカヤは眠る用意を済ませていた。いつもは括っている髪を下ろして肩に下ろし、服は既に寝着に着替えている。エルケは革靴を脱いで、そのままベッドに横になった。

「着替えないの？」

不思議そうにカヤが聞いてくる。ベッドの横には綺麗な寝着も置いてある。でもいつもは馬車の荷台の中でこのままで寝ているし、今日はカヤが眠ってしまったてから少しここを抜けだそうと思つていた。

「うん。今日は着替えるの面倒だし、いいんだ」

シャツの首元を緩めて、腰の紐も少し緩める。今日はお腹一杯食べたから、苦しい程だ。

髪を触ると昼の土埃の所為でざらついている。手足を思い切りベッドの上に伸ばしたら、大きな欠伸が出てきた。なんか、このまま目を瞑つたら眠つてしまいきそうだ。思い切つて腕を枕にするとカヤの方を向いた。

カヤは長い髪を綺麗にブラシで梳かしている。綺麗なカヤ、可愛いカヤ。体はエルケみたくごつごつしていないし、柔らかくていい

匂いがする。きつと男の人ならこんな女の人が好きなんだろうな。

エルケは自分の腕と体を見た。まるで板と棒みたいだ。一気に落ち込んだ。

「何？ エリックだったらそんなに見たら襲うわよ」

そんな事を言っても、絶対に何もしない事を知ってるよ。昔はそのカヤの言動には確かに吃驚したけれど、今はカヤのそれが少し照れ隠しなのを知っている。付き合いが長くなった勘だよ。そう言える事が嬉しい。

エルケは肩を竦めて笑った。膝を丸めて小さくなる。

「カヤは可愛いなあ、って思ってたんだよ」

「なあに？ それ」

「僕は、骨だけだし」

「エリックは男の子なら普通の事よ」

違うんだよ、僕は女の子だよ。

でも、もしかしてカヤにやら本当の事を話してもいいのかもしれないと思った。きつとカヤなら秘密を守ってくれるし、女である事を隠さなくてはいけない理由も分かってくれるような気がした。

烙印の他に背中に残る大きな焼印。例え逃げ回っても、生涯いつまでもビューローの所有物であると刻みつけられた証。これがある限り、絶対にビューローの兵士は追いかけてくるのだ。きつと諦める事なんて出来ないだろう、彼らは意地でも。

カヤが欠伸をしながら、エルケの方を向いて転がった。柔らかい頬と胸がふわりと布団の上に落ちる。同じ格好をして、エルケの方へ手を伸ばした。髪に埃が付いていたらしい。白い肌の腕がエルケの目の前から離れて行く。

「カヤ、具合は大丈夫？」

旅を続ける事で太り少し肉付きも良くなったエルケに比べ、カヤは少し痩せた。

今日の顔色は本当にいい方だ。頬に赤味がある。精神的なものなのか、何が引き金で悪くなるのかエルケには見当もつかないのかも

どかしかった。

でも、クルトにはきつとそれが分かる。少し燻る感情がクルトに向けてのものなのか、カヤに向けてのものなのか分からない。それでも、カヤはいつも笑って欲しいと心から思っている。

「ごめんね、心配かけてるのね」

「大事にしてね。心配してるんだよ、僕も。クルトも」

エルケがわざわざ言わなくとも、クルトが心配しているのはカヤも分かるだろう。でも、カヤは肩を竦めて笑う。瞳に少し暗い影が映った。

「クルトは、どうかしらね」

カヤらしくない、少し含みのある言い方だった。

あんなに心配そうな顔をしてカヤの方を見ているのに、カヤがそんな事を言うのが少し意外で思わずエルケは体を起こしてカヤのベツドに乗り出した。

「心配してるよ、だっていつもカヤの方を見ているし。それに今日だってきつと宿屋が取れて安心してるのはクルトなんだよ」

最近、カヤが寝込む度に溜息をつきながら馬車に乗り込んで行くのはいつもの事だ。いつも通りの文句を言いながら、クルトはいつもカヤの睡眠を気にしている。気付くと何処からか持って来た果物を手渡すのは、エルケだけじゃなくてカヤにも食べさせたいからだと思っていた。

常に傍にいる訳では無いけれど、クルトは凄くカヤを大事に思っている。勿論、エルケもそうだけどエルケなんかよりもずっと違う所で。

必死に何故かクルトの弁明をしていたエルケの形相を見て、カヤが嘔き出した。

「驚いた。随分とクルトに懐いたのね」

猫じゃあるまいし。しかも懐いてなんかいない。最近怖い程に近付いて来て、少し心配な位なんだよ。そう言っただけでやりたかったけれど我慢した。

エルケはすぐごと自分のベッドに戻り、また腕を枕にしてカヤの方を向く。まだカヤは笑っていた、余程おかしいらしい。

不貞腐れて唇を突き出した。腕に顔を埋めるとやっとカヤの笑い声が止まる。

「クルトのは、私を心配してるんじゃないよ」

「贖罪？」

「ええ、しかも自分のではない罪のね」

カヤに深く追求するのは気が咎めた。

顔を見ると少し顔色が悪くなっている。いつもの具合が悪い時の様な感じがして、エルケは思わず違う話題を探した。カヤとの共通な話題で、クルト以外の事。たった一人しか思い浮かばなかった。

「ヤンは元気かなあ」

「何？ 突然」

突然だとは自分でも十分理解している。でもそれ以外ならルツツしか思い浮かばなかったし、よりも寄って主人を差し置いて馬の方を心配するのはヤンに失礼な気がして気が引けた。

この旅にまたヤンが合流したら、元通りに話せるようになるかな。何も気にせずに今まで通りに離し掛けても大丈夫なのかな。何とか合流するまで自分の心の中を整理しなくちゃいけない。

「ヤンが突然、いなくなったから」

「寂しい？」

カヤが微笑みながら聞いて来た。寂しい？ 寂しいというよりも、押し寄せる気持ちの変化に戸惑って一つ一つがおざなりになっている。感じた。ヤンへもクルトへも突然何か切り替わってなにも判断がつかない。

答えはカヤの顔を見ない様に返した。分からないよ。置いて行かれるのは寂しいけど、近くにいとどうしたらいいのかわからなくなるんだ。

「カヤがいるから寂しくは無いよ」

「まあ、嬉しい」

小さな拍手が戻つて来て、エルケには何と無くこれが正解の返事に思えた。カヤは腕の枕を崩し、天井を仰ぐ。寝着の袖から出る天に伸びる白い腕、両手の指が絡んで上に強く持ち上がった。

カヤは小さく溜息を付く。視線はエルケの方を向かなかつた。

「エリク、少し昔話をしましょうか？」

カヤは返事を待たずに訥々と話し出した。

王様と少女がいました。

少女はお城の下働きをしていました。美しい王様やお姫様とは全く違う、汚く暗い場所を掃除する仕事でした。

王様は大きな宮殿に住んでいました。いつも綺麗な石や服に包まれて何不自由ない生活をしていました。

少女は、毎日早くから毎日遅くまでただひたすらに働き続けていました。

お城では舞踏会もありましたが、勿論見る事は許されませんでした。少女と王様の住む場所は違ったのです。

綺麗なドレスを着て綺麗な首飾りを付けて、お姫様は歩いていました。王様はその手を引いて大広間へと消えて行きました。王様にはお姫様がいたのです。

少女は大広間に入る事も許されませんでした。少女と王様は口をきく事も許されていなかつたのです。

でもある日、少女は王様に出会いました。月の輝く夜でした。

王様と少女は許されない恋に落ちました。勿論、誰にも話せない恋でした。勿論、誰にも許されない恋でした。それでも分かっていた恋に落ちました。

何もかも隠していた恋はいつしか明かされる様になりました。怒つたお姫様によって少女は宮殿を追い出され、王様は嘆きました。

王様は少女を深く愛していました。ずっとそばに置きたいと望んでいました。悲しむ少女を捕えると籠に閉じ込めて、いつしか王様は籠に閉じ籠る様になりました。

籠に閉じ籠る王様を見て、少女は出して欲しいと願いました。王様は断わりました。少女が何処かに飛び去ってしまうのだと思ったのです。

籠から出ない王様を見て、少女は共に出て欲しいと願いました。王様は悩みました。外に出すと少女は何処へと飛び去ってしまいます。それでも傍にいる事は出来ないのだと少女は泣きました。その涙は美しい石になりました。

少女は美しい涙を流して幾度も泣きました。少女が近くにいと王様は壊れてしまうのです。

泣く少女を見て、王様は籠と少女を繋げる美しい鎖を作りました。少女の涙から出来た美しい鎖でした。少女を籠から出しても、いつか自分の元へと戻って来るようにそれは重く苦しい手枷と鎖を少女に付けたのです。

少女は王様の元を泣きながら離れました、少女は王様をまだ愛していたのです。

王様も離れて行く少女の背中を見て泣きました。鎖を握ったまま泣きました。

「それで終りなの？」

「終りよ、それでおしまい」

随分と救いの無い昔話だ。それでは少女は生涯王様に繋がれたままで、王様は生涯少女に繋がれた鎖を手放せない。エルケは変わらず微笑んでいるカヤを見詰めた。

カヤは少し眠そうに大きな欠伸をすると、自分の細い手首を掴む。まるで自分の手首に枷と鎖が見えるように。

「王様と女の子はもう会えないの？」

「会わないわね」

寂しい話だ。そしてエルケの良く知るおとぎ話に少し似ていた。きつとその涙は美しく赤い色をしていたのだろうか。

激しい恋の後、永遠に別れた苦しみはエルケには解らない。愛し

てはいけない人をそれでも愛してしまう気持ちも解らなかつた。でも、もしかしたら姉さまなら少女の気持ちが分かるのかも知れない。

どうにもならない恋の激しさはきつと渦の様に心を飲み込んで行くんだらう。抗つてもきつとそれはどうにもならなくて、泣きながらも高ぶる気持ちというものがあるんだらう。

「そんな気持ちはよく解らないよ」

少女の気持ちも人魚の気持ちも同じように悲しくて切ないとは思つた。姉の恋も報われない意味では悲しくて切ないと思う。それでも、それは漠然としたものでまだほんの少ししか解らない。

「エリクはまだ恋をした事が無いのね」

なら、仕方ないのよ。そうカヤが言つた。そして、ベッドの上で丸まつて頭を抱えているエルケの頭をゆつくりと撫でた。カヤはエルケの髪を撫でながら、眠そうな顔をしている。

「カヤ、もう寝た方がいいよ」

怖い夢を見ない様にゆつくり寝た方がいいよ。エルケは心の中でそう言つて、カヤの眠そうな顔を見詰めた。

「エリク、貴方にもきつと解るわ」

そう言つて、カヤは瞼を閉じた。エルケのベッドに伸びた腕がそのまま下にはたりと力無く落ちる。余程疲れていたらしい。

その腕を静かに持つてカヤのベッドに戻した。柔らかい体に薄い布団を掛けて、顔を見下ろす。規則的な寝息、凄く気持ちよさそうに眠っている。良かった、この調子なら怖い夢はきつと見ないだらう。

エルケは足をベッドの下に下ろし、革靴の紐を縛つた。緩んでいた首元を閉めて、足を出来るだけ引き摺らない様にして部屋を出て扉を閉めた。

灯りも何もない廊下は暗く何も見えない。クルトが眠っている筈の扉は固く閉められて、耳を澄ませても物音一つしなかつた。安堵して静かに通り過ぎる。クルトに見つかったら何を言われるか分か

つたものじゃない。

階段さえ下りてしまえば、後は簡単だった。宿屋の玄関には鍵も無くあつさりと開いた。

静かに閉めた扉を背に、エルケが空を見上げると一面の星空と大きな月。月は眩しい程で、まるで陽の光の様に全てに影を作っていた。もし大きな街であれば、今の時間なら酒場位は開いているから人通りはまだある筈だ。

時間も少し遅く田舎の所為でもあるかもしれないけれど、村に人影は全く無く灯りの付いている家すらなかった。

先程の食事の時に、マルガと約束をした。

時間が遅いけれど大丈夫？ と聞いたエルケにマルガは頷いた。

いつもエリアと二人で夜に家を抜け出しているらしい。約束ね、絶対に誰にも言わないでね。そうマルガは念を押した。余程パンと一緒に食べたのが嬉しかったのか、エルケの腕から離れなかった。

大きな月が追って来る。エルケは後ろを見ない様にして、中央広場に駆け出した。



一度、石に躓いた。つんのめった体にマルガが飛び込んでくる。

「もう、危ないよ。お兄ちゃん、しっかりしなよ。大人でしょ」

「ごめんね、頑張るね」

小さな手を取ると囁き声で叱責された。デリアも少し後ろで呆れた表情をしている。足を引き摺って必死に子供達に付いて行っているのに、本当に立つ瀬がない。

エルケは苦笑しながら素直に謝った。流石にマルガとデリア相手に本気で言い訳をしても、大人げないよね。

明るい月夜でも森の中に入ってしまえば、その儂い光が射し込んで来る事は無い。足が細い木々を踏む音に大人とは言えど十分怯えながら、エルケはマルガとデリアに先導されて森の中に足を踏み入れた。

マルガと待ち合わせだった筈なのに、待ち合わせだった中央広場の脇にはデリアも来ていた。二人はお揃いの服を着ている。寝着では無かった。

「マルガとデリアは眠らなくて大丈夫なの？」

一番先に行くマルガの頭で跳ね戻ってきた小枝を腕で受け止めた。デリアは最後尾だ。エルケが念のために最後尾を立候補したのだが、デリアに丁重にお断りされた。どうやら最後尾にエルケだと迷ってしまいそうに見えるらしい。

子供目にも頼りがある感じには見えないんだな。ちょっと落ち込んだ。

「大丈夫、マルガはいつもこの時間はデリアと遊んでるの」

それもそれでどうなのかな？ 母親の姿が見つからない所を見ると、きつと宿屋を抜け出して遊び回っているのだろっ。考え込んだエルケの後ろでデリアが「遅れてるよ」と厳しい声を掛けて来た。

気付いて前を向くと、なる程マルガは結構先を歩いている。漆黒

の闇の中なのに、まるでマルガは足元が見えているかのようだ。滑る様に闇の森を駆ける。

ふらつき伸ばした指が木の幹に触れた。細くも太くも無い丁度エルケの腰ほどの太さの幹は、エルケの体重をしっかり受け止めてくれる。揺れた木から何枚もの葉が落ちて来た。

「そんな木を揺らしたら、虫だらけになるよ」

「夏の木には虫が一杯よお」

「ごめんなさい」

マルガが笑いながらエルケの傍に戻って来る。いくつか肩に落ちた何かを、小さな指で拾って下に投げ捨ててくれた。後ろで溜息、デリアはまるでクルトみたい。

「蛇もたまに落ちてくるから、気を付けてね」

物騒な注意をして、マルガはまた前へ走って行った。

見せたい物があるのよ、と悪戯っぽく笑いながら待ち合わせ場所に來ていたマルガは言った。それをエルケに見せるのに、デリアは納得していない様だったけれどマルガが説得したらしい。

でももう宿屋を抜け出して、結構な時間が経っている様な気がするんだけどな。エルケは早くも切れて来た呼吸に疲れた足を引き摺った。

お兄ちゃん、ちょっと足が悪いからもう少し気遣ってくれると嬉しいんだけど。なんて意地でも言ってるものか。でも少しくらいなら気遣って欲しいんだよな。聞こえない様に溜息をつく。

足が小枝を踏み付ける音と、たまに聞こえる何かの動物の息遣いしか聞こえていなかった耳に違う音が混ざり始めた。耳を澄ませると、水の音に聞こえてくる。せせらぎだ。

「もう少しだから、諦めないでね」

「……はい」

ここぞとばかりに内心を読んだデリアの反応。やっぱりクルトに似ていて、もう小さなクルトと一緒に來ている様な感じになってきた。

木々の折り重なった先に開けた部分が見えて来る。

暗い闇の中で月灯りに照らされたその部分は、まるで夜空にぽっかり浮かんだ月の様だ。聞こえるせせらぎの音、意外にも小川という訳ではなくそれなりの川の様だった。

「ここよ、お兄ちゃん」

「うん。ちよっと、待って、ね」

楽しそうに大きな岩の上で飛び上がるマルガに比べ、エルケは肩で息をして満身創痍だ。デリアが尻を押してくる。

ああ、月夜だ。森の中に浮いて、なんて綺麗なんだ。二人に案内された場所に立って、エルケは見回した。

蛇行した川が丁度この部分で流れ溜まり、大きな水溜まりになっている。すぐ脇には川が流れているのに、対する水溜まりはさざ波だけが表面を揺らしていた。岩に囲まれた水辺はまるで泉だ。清らかな水の向こうで何かが光っている。

見惚れているエルケの横でマルガとデリアが服を投げ捨てた。岩に二人は服を投げ付けると、思いつ切り裸でその泉に飛び込んで行く。飛沫が掛かった。

「え、あ、えええ？」

「こつちよ、お兄ちゃん！」

さざ波は二人が飛び込んだ事で大波になり、美しい鏡だった水面を揺らす。

足も付かない程の深さだというのに、二人は器用に水に浮き両手を上げてエルケを呼んでくる。気持ちよさそうだ、唾を飲み込むと咽喉が鳴った。

薄汚れた服を見下ろす。髪も埃塗れだ。首も汗をかいている。

「服は脱がないとばれちゃうからね」

「そうよあ、濡れても体は直ぐ乾くけど服は無理なんだから！」

二人はそうエルケに忠告すると、泉に潜って行った。とぶん、小さな輪が二つ水面に現れ消える。羨ましい！ その欲求にはどうしても逆らえなかった。

髪は括っていた紐を解くと、背中手前まで伸びた髪が落ちた。腰の紐を解いて髪に絡めると、岩の上に置く。靴を揃えて置いた上に、上着を脱ぎ畳んで置いた。今まで隠してきたものが全て露わになる不思議。

風を浴びても森の中に吹いている夜風は温かかった。全て脱ぎ去ると、背中への焼印が現れる。胸にはささやかな膨らみ、それに細い腰。丸味を帯びつつある体は、まだ幼いとはいえ既に女性の体だ。白い肌におびただしい傷跡、怖がらせてしまわないだろうか？少し心配になる。手の甲の布は解かなかった。幼い子供でも烙印の意味は理解出来ると思ったからだ。

全部脱ぎ去ってしまうと、自分は女なのだと思っても実感した。マルガとテリアは背中を向けて水遊びをしている。エルケは静かに爪先を泉に入れた。冷たい、そしてなんて水が綺麗なんだ。爪先を入れると、水に入りたい衝動が勝ってしまう。

滑り込む様に水に入る。目を瞑り、手を伸ばし一気に頭まで入った。

月灯りに照らされる、薄い藍色の水。月灯りが水の中まで洩れ入っている。下に溜まる細かい砂はその月灯りを浴びて煌めいていた。それはまるで星空の様だった。

煌めきに促されるまま、底まで潜り砂を手にとると、それは金鉱山から流れ着いた砂金だ。この泉の上流に金鉱山があるからだ。水底で天を仰ぐ。

水面に揺らぐ小さな足。大きな月灯り、たゆたう水の流れ。懐かしさに泣きそうになる。ゼークトでも良く海に潜っていた。体をくねらせてより深くへ、より奥へ泳いで行くのだ。人魚の住処を探すかのように、息を止めながらもつと先へもつと中へ。

このまま水底で全てを終わらせてしまいたい。懐かしさにそう思う。でもそれはまだ先の話だ、ここはゼークトの海ではないのだから。

小さな足に向かって、エルケは一気に上昇した。

「うわあ」

マルガが下から突然飛び出してきたエルケを見て、大きな口を開けた。

そしてそのまま顔を見ると首を傾げて、胸を見る。デリアもまた同じ表情をしていた。エルケは二人のその表情を見て思わず笑った。だよ、不思議に思うよね。

「僕は、月夜には女の子になるんだよ」

こんなおとぎ話みたいな事、信じるんだろうか？ それともただの男装なのだと、子供にも鼻で笑われるのかな？ エルケは出来るだけ二人には背中を見せない様にして、月を仰いで見せる。

正面を見る勇氣は無かった。もし鼻で笑われたら？ そう思ったからだ。

「凄い！」

「凄い！」

でも、心配は杞憂だったらしい。落ち着いているデリアもマルガと一緒に水面を叩き、興奮している。良かった、二人はまだそんな話を信じる子供なのだ。

「ね、どうやってたら本当の姿に戻れるようになるの？」

マルガがエルケの指を掴んで聞いてくる。さて、どうしようか。その先は考えていなかったぞ。エルケは内心頭を抱えた。

泉から上がる二人を手助けして、岩に体を持ち上げた。小さな裸が月に照らされて二人並ぶと、天使の様で可愛い。

物語で魔法の解けるきっかけはなんだったっけ？ エルケが姉に聞かされた話で覚えているのは、人魚のおとぎ話だけで他の内容はなかなか記憶の奥底に入って出て来ない。思い出そうと月の映る水面をぐるぐると泳いでみる。

「えっと、王子様かな？」

「うわあ！」

簡単に言った言葉に想像以上の食いつき。

先程、カヤに聞いた話を少し思い出したただけだったんだけど、

二人には正解だったらしい。黄色い叫び声と共に、二人がまた水面に戻って来る。呆気を取られているエルケの回りを何度も回り始めた。

「ね、エリクに魔法を解いてくれる王子様はいるの？」

「一緒にいた人？」

二人が言っているのはクルトの事だ。

一瞬、何度か触れ合った指や体を思い出して、エルケは顔を水に潜らせた。水の中で赤金の髪が揺らぎ、広がる。水面に顔を出すと、広がった髪が体に纏わりついた、それはまるで人魚が顔を出したように。

「キスをする、魔法は解けるんでしょ？」

詳しい名言を避けたエルケに、デリアが突拍子もない事を聞いてきた。どうやってたら女の姿に戻れるのか、そんな事なんかこっちの方が聞きたいよ！

「ね、王子様は他にもいるの？」

首を振ったエルケを、マルガが目を輝かせて覗き込んできた。他の王子様と聞いて、一瞬脳裏にヤンの姿が過る。違うよね、王子様なんて柄じゃないしそもそも向こうは自分の弟で精一杯な筈だ。

確か水に浸かっている筈なのに、耳も頬も熱い。腕で顔を隠して、エルケは首を振った。

「ごめん、限界。もう何も話せないよ」

泣き言を言い出すと、マルガとデリアが馬鹿にしたように笑った。本当に仕方ないなあ、今日はここまでだよ。だなんて、本当にどっちが大人なのか分かったものじゃない。

岩に体を半分乗せて、足を水面でばたつかせながら沢山の話をした。だから、帰る時間は直ぐにやってきた。

乾いた上半身に前を開けたシャツだけを羽織り、足の水滴を振り取る。手慣れている二人は既に着替えを終え、後ろの紐を互いに締め合っていた。

体の埃は随分と取れて、汗と汚れがこびり付いていた髪の毛は柔

らしく背中へ流れていた。お陰で頭が凄く軽い。

「お兄ちゃん？ お姉ちゃん？」

「エリクでいいよ」

腰紐を強めに縛りながら、呼び名に悩むマルガを見てエルケは笑った。

三人は横に揃って座る。随分と半日で懐いたものだ。でも子供って結構そんな感じだよ。子供は動物と同じだ、直感で人を信じる。そしてその直感は意外にも結構当たっているのだ。

「今日、嬉しかった？」

「うん、ありがと。楽しかったよ」

エルケは満面の笑みで返すと、マルガが頬を赤らめて俯いた。

足に革靴を履いて、これからの長丁場の為に少ししっかりと持ち上げる。襟元を閉めた。虫が入ってきたら、折角の気持ち良さが台無しだから。

マルガが何かを言い出しにくそうに顔を近付けた。

「あのね、エリク」

「ん？ 何？」

「マルガとデリアと一緒に、エリクに買って欲しいの」

「え？」

風が強くなってきたみたいだった。

マルガの言った事が良く聞こえなくて、エルケは二人を振り返る。あんなに高い場所から見下ろしていた月は今デリアの頭後ろにある。いつしか月は移動して、数時間ここで過ごして居る事を知らせてくれていたのだ。

「ママがエリク達はお金持ちだって言ってたの」

「マルガとデリアはこれから別々のおうちに売られるって、ママが言っていたのよ？ そのおうちで沢山のお金を貰って、頑張らなくちゃいけないんだって」

マルガとデリアが次々と訴えてくる。

ちよ、ちよっと待ってよ。金持ちなんて、クルトはそうかもしれ

ないけれどそれでもそんな簡単に行くものじゃない。混乱する頭を抱えて、エルケは立ち上がった。戻る準備が出来たのだ。

俯きながら奥歯を噛むと、最近よく見知った気配を感じて顔を上げた。突き刺すような視線、何処か熱を帯びた視線。エルケは森の奥を見詰める。誰もいない。

そうだ。まさか、こんな夜中にこんな場所にいる筈はなかった。自分で収拾がつかなくなると、あの二人に頼ろうとする癖はどうにかしなくてはいけない。半日前に自分に任せてくれと大口を聞いたばかりじゃないか。

言葉を慎重に選びながら、口を開く。強制になつては二人を怖がらせるだけだ。

「おうちに売られるって、誰かが買いに来るの？」

「そうよ、もう皆いないの」

呆気なくテリアは頷いた。後ろ頭を鈍器で叩かれた様な衝撃を感じる。

実際にある事だとは思っていたけれど、まさかこんな場所にあるなんて。でも、衰退する金鉱山の村だからこそそうなのかもしれない。だって、子供と共に死ぬ事も出来ないし職がなければ移住する事も叶わない。

いっそのこと、ワルゼの騎士団に連れて行って欲しいと頼んでみようか？

きつとヤンがいたら綺麗事なのだというに違いない。エルケの様に全てを失った人間じゃないクルトは、貴族の目線で放っておけばと言うのだろうか？ 嫌だな、おかしい事ばかり考える。

「お願い、少し考えさせて」

エルケが泣きだしそうになりながら、やっとの事で絞り出した声は夜風に流れて行った。



部屋に戻ってからは眠れず、ただ考え続けていた。

ゼークトの村が滅ぼされた時、ただ悲しくて皆が殺されて未来も無くなった事が憎くて仕方なかった。姉さまを追いかけて、戦場を走りながらずっと悲しくて置いて行かれたたくなくて泣きながら走った。

今でも思い出す赤赤赤赤赤赤。血の赤、陽の赤、火の赤。手に染み付いた赤。沢山の赤。

エーゲルの兵士に掴まって、そのまま城に引き摺って行かれた。職人は次々と激しい拷問で殺されていったけれど、エルケだけは拷問されても生き残った。いつか逃げ出そうと、牢で這いながらその機会をいつも窺っていた。いつかゼークトに帰ろうと思ったからだ。あの時、別れた姉さまが村で待っている。

横を向くと、抜け出したのを何も知らずに眠るカヤの姿。いつかこの優しい人とも別れなくちゃいけないと思うと切なくて悲しかった。上下する呼吸、たまに唇を動かす姿。

貰うだけじゃなくて、いつか何かお返しをしたい。何かはまだ分からないけど。

「……僕に何ができるんだろう？」

何かができるなんて、あんまり考えた事も無かった。

自分の手は小さくて、体は弱くて、権力も金も何も持っていないから、やっぱり何も出来ないのだとそう思っていた。

ゼークトの時は見るだけで何も出来なかった。エーゲルで偽金貨の話聞いた時も、結局一人で何かをする事なんて出来なくてやっぱりはつきりしないままで見ない振りをした。

あの時の事が起きてもやっぱり今も何も出来るとは思えないけど、今回もまた見ない様にしていんだらうか？ マルガとテリアだけしか助けられないのは自己満足なのかな？ 他の沢山の子供もいるのに、

今だけ部分的に助けたとしても、何の意味にもならないのかな？

寝がえりを打つても、泉で冷えた筈の体はどうしてか火照って眠る事が出来なかった。もう間もなく二時間もしたら空が白んでくるというのに。

体を起こして窓の外を覗いても、人影どころか犬の影すらも見えなかった。月ももう白む寸前の空でその姿を薄めていて、ただ空も静寂だ。

ベッド横の小さなテーブルには、先程まで濡れた髪を括っていた紐が置いてある。エルケはその紐を手に取りろうと指を伸ばして、結局それを持たないままでベッドから起きあがった。

つい先程、マルガ達と出掛けた時の様に足音を忍ばせて扉へ向かうと、一度後ろを振り返る。カヤはベッドで静かに眠っている。ごめんね、また少し抜け出すよ。心の中で声をかけた。

クルトの部屋は横にある。多分、いや絶対に起きていないとは思う、この時間だから。もし一度ノックをして返事が無い様だったら、待たずにそれこそもう外へは出ないで眠ろうと思っていた。

混乱する頭は一人では收拾がつかなくて、どうにもならなかった。

クルトは貴族で、騎士団の総長だ。支配階級の彼なら、何もわからないエルケよりももっと建設的な選択肢が出る気がした。そうだが、結局は人頼みだ。

それでも混乱する自分の頭の中で考えているよりも良いに決まっている。だってクルトだって、見ててくれると言っていたし。

扉の前に立つと、拳を握ってやっぱり少し躊躇した。最近のクルトはやっぱりおかしくて、少し怖い。だからちよっと怖気づいた。もし、あの視線に射抜かれたら？ 考えるだけで何とも言えない気持ちになつて、俯く。

でも、あの無邪気な子供達を少しでも楽に出来ないか。それをする為には、エルケだけの知恵ではどうにもならない。ヤンがいてくれたらな、そう思うと折角近くにいるクルトに手の平を返すようで

申し訳なくなつた。

強く目を閉じて、人差し指の骨で小さく遠慮がちにノックをした。開けて欲しいのか、それとも閉まつたまままでいて欲しいのか。本当はどつちなのか分からない。

だから戻るのは沈黙だつた時に実は何よりも凄く安堵して、エルケはなんて大それた事をしたんだと後悔した。いくら男を見せ掛けていても、こんな深夜に男の人の部屋を訪れるなんて一体何を考えられているんだろう。

安堵と混ざり合う落胆の溜息を付いて、背を向ける。

扉の開いた音。同時に部屋の中に引き戻された。軽く体は腕に絡まれると浮いて、廊下と部屋を遮断した閉じた扉の脇に落ちる。被さる影と闇に息を飲んだ。

起きていたんだ。驚きと同時に、クルトに申し訳ないけれど少し恐怖も感じた。

ああ、やつぱり性急だつた。そして今更、思い出したのだ。先日聞きたい事をエルケから聞き出す為にクルトがした事を、本当に今更だけど。やつぱり明日にしたら良かったんだ。何も今じゃなくても良かったのに。

部屋の中には灯りも無く、カーテンも閉まっている。ただ傍にいる事が呼吸だけで解つて、エルケは扉のノブに指をそろそろと伸ばした。

「ひ」

ノブに乗つた指ごとクルトに握られて、エルケは奇妙な悲鳴を上げた。近寄らないでよ、そう言えばいいのに口が強張つた様に開かない。指はもう固まつた様に動かなかつた。

髪を括らずに来た所為で、俯くと胸の前まで髪の毛が落ちて来る。丁度クルトの口もとが当たるエルケの首筋は、その所為で剥き出しになっていた。息が首筋に当たっている。もうおかしくなりそうだ。

「あの、遅くにごめんね」

やっと開いた唇から蚊の鳴く様な小さな声で言つと、いいよ、と返事が戻ってきた。

声を出す度に息が首に触れる。思わずノブを掴む指に力を入れれば、その上に被さつたクルトの指にも同じ様に力が入った。熱い指、熱い息。

どうしよう、ここで振り払つて逃げるのも変な感じだった。だつてこんな時間にクルトを起こしたのは自分の方だ。話をしなくては、それだけをただ考えた。そうしないと、もう逃げてしまいそうだった。

「マルガとデリアの事を少し、相談したくて」

こんな夜に？ エルケが外に出ていた事はクルトは知らない。どうしてこんな時間にわざわざ、と不審に思わないだろうか？ エルケは開いている手を目の前で振つた、ただの言い訳だ。

「眠れなかつたんだ、ちよつと考え過ぎて」

「そう」

クルトは苦しい言い訳に不信感を抱かなかつたみたいだった。

でもエルケの方は動揺して何を話しているのか、何を話したいのか、頭の中で整理出来なくなっていた。クルトは今、何を考えてる？ ほら、指が震えてくる。後ろから唇が耳に触れて、肩を竦ませた。

もう、駄目だ。

「近いよ」

吐息交じりの悲鳴の様な泣き声の様な声になった。

肩を怒らせてそれだけを言つと、掴まれた指に力を入れる。おかしいよ、クルト。こんなに近付いたら、どうしていいか分からなくなる。

逃げようとしているのが分かつたのか、指が少し離れた。一瞬の隙を付いて、体を翻すと扉に背を向ける。クルトの体が正面にやつてきた。ねえ、クルト、話をしよう。

「相談があるんだ、聞いてくれる？」

聞いてよ、クルト。ここに来たのは触れて欲しい訳じゃない。助  
けたいんだ、僕だけじゃどうにもならないんだよ。クルトなら、も  
しかしてクルトなら何か出来るのかな？ 僕が何をしたらいいのか、  
教えてくれるのかな？

慣れた闇の中でやっとクルトの顔を見る事が出来た。置いてけぼ  
りをされた子供の様な顔をしている。

見上げると、いつもよりは随分と乱れた格好をしていた。何処か  
混み合った所を抜けて来たような、髪も乱れて服も随分と汚れてい  
る。

クルトの指が伸びて頬に触れた。もうその手は食わない、その手  
を上から掴んだ。

「助けたいんだ、僕だけじゃどうにもならないんだ。クルト、手伝  
つてくれる？」

ヤンでもカヤでも駄目なんだよ。ワルゼ騎士団の総長という立場  
と、貴族の肩書きを持っているクルトなら何か分かるでしょ？

引いた線を都合よく利用する。クルトは皆とは違う、何か出来る  
立場なんだよ。返事のないクルトの顔を、下から覗き込んだ。落ち  
る影。

言葉は止まらない。

「今だけの逃げだっっていうのも、分かるよ。一人二人助けたってど  
うにもならないってこと、僕だって解るよ」

寄って来る顔を片手で押えて、だから聞いてって、文句を言った。

手の平向こうの顔がくつくつと笑っている。そのクルトの髪に付  
いた大きな埃を指先で取った。葉、なのかな。大して気にせず床  
に捨てた。

顔を押さえた布の巻いてある手の平向こうで、いつもの表情を浮  
かべたクルトが溜息を付いた。手首を掴まれて顔の前から避けられ  
る。手の甲に唇を付けた、口端が笑う。

「濡れてる」

ああ、そう言えばさつき泉に入ったままだった。慌ててクルトの指から振り払うと、そのまま背中の手を隠した。言い訳、上手い言い訳。エルケは横の部屋を指差した。

「さつき、咽喉が渴いて水を溢したんだ」

「ふうん」

意味ありげにクルトは頷くと、やっと体を離した。

そのまま窓際に行くとかーテンを勢い良く開く。空が白む寸前の月灯りが漏れ入ってきた。クルトの金色の髪を照らす。

彼は腕を組んだ。エルケはその場から動かずに、立ち竦んだままだ。どうしてか、動けなかった。

「聞くよ？」

聞かせてよ、彼は嬉しそうに言った。エルケは、その表情に見惚れている事に気が付いた。思わず目を逸らすと、心臓が早鐘を打っている。やっぱり髪を括ってきたら良かった。今のこの髪では今の自分ではまるで女だ、エルケは眉間に皺を寄せた。

何をしたらいい？ 何をしたら一番いいか、解らないままでエルケは立ち竦んだまま途方に暮れた。

ライゼガングの村長に会いたいのだと面会を申し出ても、今は長期的に留守をしているという返事だった。数日中に戻ってくる予定だから、待つて欲しい。と村役場の疲れた顔の男が紙を手にしながら答える。

「数日中っていつなのよ」

カヤははつきり返事をしない男を見て箸を振り回したい衝動に駆られたらしいけど、何とか腕を掴んで押さえておいた。

だって、流浪癖のある村長なのかもしれないじゃないか。流浪癖のある総長もいる位だから、村長だっていても仕方ないよ。

「俺は流浪じゃないんだけどなあ」

横でクルトが文句を言っている。これだけワルゼ城を留守していたら、十分流浪か放浪だよ。肩を竦めた。

昨日の夜、結局クルトは朝まで話を聞いてくれた。何も茶化す事も無く、ただ静かにただ黙り込んで。

最初は扉の前でしゃがみ込んで話をしても、太腿が疲れてくるとエルケはクルトの勧めるままに椅子へ腰かけた。

椅子で腰掛けて背中が疲れてくると、クルトの勧めるままにベッドへ座った。膝を丸めて、一応クルトに何かされないか警戒しながらだったけれど、クルトは窓際から動かずに、何を今更、と笑った。

少しずつ考えながらだったから余り凄い量の内容を話せたとは思えないけれど、エルケは少しだけ満足していた。クルトと話すだけで、随分と自分の中が整理出来た様な気がした。但し、気持ちの面は別として。

先立つものは金と権力。手っ取り早く人身売買を取り締まる術は無い。それがクルトの見解だ。思った通りに逃げ場も救いも無い答えだった。クルト自身が、少し現実に背を向けている気もした。

ヨーロッパの広めた教会に隣接する修道院と孤児院は、たび重なる戦と新興宗教の発展によって統率力を失っているらしい。結局は小さな修道院と小さな孤児院をあちこちに沢山作ったのが問題だった。そう、クルトは言う。

寄付で存在している修道院と孤児院を維持していくには、それを抱く所領の協力が不可欠だ。でも、自分の所領の維持に精一杯になると、所領はここぞとばかりに慈善事業から手を離す。エーゲルが いい例らしい。

神父である修道士はそのまま教会の維持に当たった。何故なら慈善事業から手を引いても、教会は絶対に無くせないからだ。農民から宗教を奪う訳にはいかない。それに教会を無くしてしまえば、結局は慈善事業まで手を引いてしまった事が白の都市ヨーロッパに発覚してしまう。

可能な限り、少数の人材を残す。それで残されたのが修道士だけだ。

でも、孤児院と修道院から追い出された修道女と子供達は路頭に迷う。そこに出てくるのが、蝶だ。纏めて皆を上手く口で言い包め、移動させる。男の子供は鉱山へ、新興の鉱山は例え小さくとも手がいくらでも欲しいのだ。

女の子供は労働としては使えないから、邸に売られた。そういう趣味の貴族はいくらでもいるし、需要は絶えないらしい。最悪だ。修道女も同じだ。下女や奴隷として売り飛ばされた。そうやって幾つもの修道院と孤児院が闇に消えた。

お前も一応被害者だから言うておくけれど。そう、クルトは前置きした上で口を開いた。

「蝶を取り締まるのは不可能だ。時代の闇がそれを求める限り、全部の羽を千切る事は出来ないよ」

エルケは、自分の村を滅ぼすきっかけになった蝶を殺したい程憎んでいる。あれだけ殺して奪ってもまだ諦めずに追って来ているのであれば、早い内にゼークトの手前でまた鉢合わせをするだろう。



覚悟もしていた。

「ゼークトの仇打ちは諦めた方がいい」

膝に頭を押し付けて、首を振った。

ごめん、その時が来たら絶対に迷惑はかけないから。一人で行くから、その時は見逃して欲しいんだ。もしそれが原因でゼークトの姉さまの元に辿り付けなくなっても文句は言わないよ。

その件に関してだけ、クルトからの返事は無かった。

それからも政治経済に纏わる難しい話は続き、そこでクルトはやっぱり貴族なのだと思います。地図の上で動く、小さな駒。伸びる手はクルト達貴族で、駒はエルケ達だ。

駒が倒れても地図の街が消えても、伸びた手は痛くも無いし苦しくも無い。だから自分の腰掛ける場所だけ大切に、残りを見ない振りをする。

クルト、その駒は僕達だ。見ない振りをしないで守ってよ。クルトはワルゼ騎士団という立派な剣と盾を持っているじゃないか。ゼークトみたいに誰からも見向きされず、消えて行くのを見ているだけなんて悲しい事をしないでよ。そう思っても口には出せずに、膝の間の頭の中で考えていた。

クルトに出来る事がそれなのなら、自分に出来る事は何なのだろう。大きくは出来ないけれど、小さくてもいいから自分の出来る事が欲しい。

そう考えながら、その夜はクルトの部屋で眠っていた。気付くと朝でクルトは部屋にいない、横たえられていたエルケの体には上掛けが掛かっていた。胸が苦しいよ、泣きたくなった。

「エリク、帰ってきた！」

「遊ぼう！」

宿屋の前で、マルガとデリアが土にすっかり腰を落ち付けているのが見えた。戻ってきた姿を見て、二人は飛び上がる。

マルガがエルケの腕に、デリアがカヤの腕に同時にぶら下がった。二人の手には古ぼけた絵本が握られている。余程古いものなのか、

表紙の端が破れ擦り切れている。表紙には魔法使いという文字が見えた。

どうやら先日の月夜の魔法の事を考えて持って来たらしい。泉にまた行きたいなあ、からりと晴れ過ぎている空を見てそう思う。

中央広場も路地もこんな天気だというのにやっぱり閑散としていた。村長の家に歩いて向かって、結局擦れ違った村人は全部で八人市街地に見える看板がある店の殆どが閉まっている。

ライゼガングは繁栄時に人口三百人を越えた小都市だった。今はその人口の半分も残っていない。既に百人を下回っているらしい。役場の男が教えてくれた。百人を下回るって結局は何人なのよ、とカヤが凄んでも実際しつかりとした戸籍が無いから分からないらしい。

そうなれば子供が突然いなくなっても、把握する術を持たない。そういうことだ。

子供二人に纏わりつかれたエルケとカヤを横目にクルトは、寝ると言い残し宿屋に入ってしまった。エルケはその背中を見て小さい声で、ごめん、と声を掛けた。ベッドを結局奪ってしまった。昨夜、クルトは眠れなかったんだらう。返事はない、背中越しにクルトが片手を上げた。

「カヤ、絵本読んで」

「いいわよう」

横に腰掛けているデリアを見習って、膝にマルガを乗せカヤが宿屋の前に腰掛けた。エルケは宿屋の壁に背を預けて、カヤの絵本に見入っているマルガとデリアを見た。

ああ、いいな。こういう風景。小さな頃はずっと姉の膝に乗ってエルケも本を読んで貰ったり、歌を歌ったりした。

何も怖い事も悲しい事も無かった。あの頃のゼークト。皆が笑って過ごしていた。

何も裕福ではなかったけれど食べ物も困らない程度あったし、贅沢では無かったけれど粗末な服もあった。毎日朝早く起きて海に潜

つて、職人と話に工房へ行つて、手伝いをして過ごした。

もし何かをくれるというのならあの時に戻して欲しい。でも戻すのが無理なのなら、せめてあの毎日に似た場所が欲しい。

ついこの前までは全てを終える事を望んでいた筈なのに、今はこの旅みたいなの日々が続いて欲しいと願つてもいた。

何もなく守られた柵の中で沢山の子供達と質素でも幸せな毎日を送るのだ。その場所にはカヤとヤンとクルトがいたらいい。

絶対に無理だと知っているし、その時は来ないのを知っているからそれは夢のただけだ。

「魔法使いは泣きました、魔法使いもまたお姫様を愛していたのです」

「ええー！ そうなんだ、悪い事ばかりするから嫌いなんだと思つていたよう！」

カヤの読み上げた声にマルガの無邪気な声が被さった。

「マルガ、うるさいよ。カヤ、先読んで」

「はいはい、ええとね」

カヤが、乗り上がって来るマルガとテリアの向こう側に隠れた。

カヤは体が小さいから二人が傍にいと、直ぐに見えなくなつてしまふ。でも子供達に囲まれているカヤは具合も良さそうで、安心して見ている事が出来た。

エルケが三人から目を離し笑うと、ふとこちらを向いている視線に気付いた。その姿は宿屋の裏庭にいる。

表情無く、洗濯物の籠を持ったままでこちらを見ている。寂しうではない、悲しそうでもない。ただそこにいるマルガとテリアの姿を見ていた。宿屋の女将だ。

強い風が吹いても、洗濯物はその風に翻つても動かずにただ見ていた。

エルケは三人を置いて、そんな女将の傍に歩み寄る。息をしているのか心配になった。それ程に見開いたまま二人を見ていた、焼き付けるように。

「あの」

声に驚いた様だった。だって完全に傍に行くまで女将は微動だに  
しなかった。食堂で見る時の快活さは何処になりを潜めているのか、  
凄くやつれて見える。

籠が女将の手を離れて土の上に転がった。乾いた土の上でも濡れ  
た洗濯物は直ぐに汚れ塗れになって、何枚か飛んで行く。まるで蝶  
の羽の様に翻った。

「ごめんなさい、僕！」

「いいんです、大丈夫ですから！」

そう言いながら、背中を向けて女将はエルケから離れて行く。そ  
の背中を追う事は出来なかった。本当は何か聞きたいと思ったのに。

あんな空虚な表情をしているのに、それなのに子供を手放さな  
いといけないの？ 愛しているのはきつと真実なのに、それでも生き  
る為には子供さえも売らなくちゃいけないの？

離れて行く背中はどこどんと小さくなって、いくつか並んだ似た  
ような家の壁向こうに消えた。伸ばした手は行く場所を失って腰の  
横に落ちる。残された失望感が辛い。

「どうにか、出来ると思っている？」

開いた窓向こうで、クルトが肘を付いてこつちを覗き込んでいる。

なんだ、二階に行ったのかと思っていたのに食堂のテーブルにい  
たんだね。意味ありげな含み笑いをしながらこつちを向いているク  
ルトの方は向かずに、ただ首を振った。

「出来る、とは思っていないよ」

だって、それじゃ自分の力を過信し過ぎる。ヤンだって言った。  
助けるのは、ただの綺麗事つまりは自己満足なんだ。

何か出来る事が目の前に開いている様な気はする。でも、足元は  
まだ暗闇で自分の事だけで精一杯だった。後ろを振り返ると、まだ  
カヤは絵本を読んでいる。マルガとテリアも暗い顔をしないで笑っ

ていた。

子供の声が響くのはこの一角だけだ。廃墟の様に沈む村が辛かった。

「エリク」

名前を呼ばれても振り向かない。カヤ達の方を向いたまま、返事をした。

「何？」

「こつち向いてよ、呼んでるんだけど」

我儘を装っても無駄だよ、そつちを向きたくないんだ。

上がった腕で顔を隠した。耳までが赤くなってるんだ、熱い。今の内だ、クルトに背中を向けてカヤの方に行ってしまうおつか？

こつちを向いている視線を感じて、耳の中までが一気に熱くなった。心臓が飛び出しそうな程に鳴り響いている。胸の外側から実は見えているんじゃないかって程だ。

昨日、暗闇の中で何も気にせず話していたのが嘘のようだった。今までこんな視線を間近で受け止めて、良く何も気にせずに居られた物だ。

クルトの指も手も声も、まるで女の子に対する扱じゃないか！男のつもりでいる筈なのに、全然気にしている様子も無い。おかしいよ、心の中で叫んだ。

でも貴族って、そういう事もあるのかもしれない。見知らぬ世界だし、世界は広いんだし。でも、それでもよりに寄って。ああ、もう逃げてしまいたい。

エルケは食堂に背を向けて、後退りする。一步、足を引き摺って二歩。本当に今更だけど、自覚すると視線に耐えられなかった。

「僕、ちよっと、カヤに話があるからっ！」

耳を手の平で押えて、直ぐに背を向ける。何か言われたらまた立ち止ってしまいそうで、意味無く歌いながらカヤの所まで逃げた。

呆れてるんだろうな、クルト。そう思うと、より体中が熱くなつた。

「カヤ、僕に剣を教えて欲しいんだ」

「剣を？」

村長が戻ったという連絡は、二日経った今日もまだ来ていなかった。

ここ最近、特に頻発している山賊の所為で足止めを食っているらしい。大体、最近は何処もそんな感じだ。山賊ではないのなら、盗賊もしくは兵士に、商人や貴族の隊列が襲われることも珍しくはない。だからこそ、ワルゼ騎士団の様な警備隊が事実存在しているのだ。

ライゼガングは相変わらず乾いた天候、晴れ渡る空。活気無い村は、洗濯を干す女が、たまに汚れた袋を下げて山へ向かう年寄りくらしいが見当たらない。細々掘り続けている鉱山の作業工は、鉱山の傍にある小さな掘立小屋で寝泊りをし、滅多に村には下りて来ないらしい。そう、今日擦れ違った近所の人を教えてくれた。

予定が後回しになったからと言って、他にすべき事があると思えばそういう訳でもなく、マルガとテリアとただ毎日遊んであげることくらいしかエルケにはやる事が無かった。

今日もまたいつも通りに絵本を読み、二人でやっと一息ついた時だ。エルケは意を決して、カヤに話を持ち出したのだ。宿屋の階段に腰掛け、散々悩んだ結果だった。

「ヤンかクルトにでも、教わればいいじゃないの。私よりもずっと上手に教えてくれるわよ」

汗ばんだ足を川へ洗いに行ってしまったマルガとテリアの小さな背中を見送っていたカヤがエルケの言葉を繰り返し、尤もな事を言った。

エルケは無言で首を振ると、絵本を持つカヤの細い手指を指差す。カヤはエルケ程に小さく、華奢な体。但し胸は別、と小さな手だ。

「ヤンやクルトみたいじゃなくて、カヤみたいな細い手でも無理なく扱える剣を教えて欲しいんだ。護身と、出来れば少ない力でも十分に急所を狙えるみたいなの、女、の人でも大丈夫な剣を僕に教えて欲しいんだ」

ヤン達みたい以太い筋肉質な腕を持たないエルケは、二人にいくら教えて貰っても結局実戦には使えない。筋肉も腕の長さも違い過ぎる。そして二人の持っている剣は重く、長い。持ち上げるだけが精一杯で多分振り回す事も出来ないだろう。もっと手早く身を守るには、本来女であるエルケは女のカヤに教えて貰うのが一番だ。

何でも頼るだけじゃない、自分で出来る事は自分で取得しよう。それが二晩考え込んだエルケの結論だった。

今までは男と偽りながら、結局は女の様にかかして貰う事が当たり前になっていた。保護してくれる姉が居なくなったら、カヤやクルトやヤンに固執して引つ張って貰う気だった。

勿論、今までも何とかしなくちゃいけないという焦りはあった。それでも結局甘えて、何もせずに過ごしてきたのだ。そろそろ自分も考え直さないといけない。

許されるままにずっと甘えている、そんな訳にもいかない。マルガとテリアはエルケよりもっと幼いというのに、自分で母と別れる事を決断して二人が離れないようにその身を売れる人間を自ら探すことまでしていたというのに。

二人よりずっと年上であるエルケが、まさか何もしていないなんて恥ずかし過ぎる。

「私は自己流よ？ 他の二人みたく、何年も誰かに師事した訳では無くて、知り合いに必要な分を叩きこんで貰っただけよ。クルトならきちんとした剣を教えてくれるわ、急がなくていいのならヤンでもいいじゃない」

「カヤの方がいいよ。自己流で、必要な分でもいいんだ」  
むしろその方が助かる。必要最小限、最適な時に最適な攻撃が出

来るのならそれで十分だ。万が一の時に、剣を持つてうろたえる様な恥ずかしい真似だけしない位で良かった。はったりをもし張るにしても、剣を持った事があつた方が真実味が増すだろう。

それに、今、クルトと顔を合わせるのには憚られた。

どうにもあの日から、普通の状態では顔を突き合わせる事が出来ないのだ。それは恐らくエルケの方だけで、意味無く避けられているクルトは日増しに苛立ちが募っている様だった。

クルトには申し訳ないと思いつながら、自分ではどうする事も出来ない。可能な限り、一人での行動を制限してマルガヤデリアと遊んだりするようにしている。何か言いたげな視線には、気付かない振りをしていた。

きつと一時を過ぎ去つてしまえば、然程気にもならなくなるだろうと楽観視もしていた。突然、現れた感情はきつと突然消え去るだろう。多分、恐らく。そう、少し願っていた。

カヤは快く返事をするどころか、らしくなく少し気が引けているようだった。だから、もしかして無理強いさせてしまったかと心配になった。やはり、体が不自由な人間に物を教えるというのは、相手側にもそれなりに責任を感じさせるものなのかもしれない。

エルケは足元の小石をしゃがみ込んだまま、踵で潰しカヤの方を向く。

「ちよつと僕は足が悪いから、教えづらいとは思っただけど……」

それを聞いて、カヤは肩を竦める。そんな事、何の問題も無いと言わんばかりだ。その事は別に大きな問題じゃないらしい。

「歩けない人でも身を守る術はあるわよ、大丈夫。でも、本当に私でいいの？ 基本も何も、本当に無いのよ？」

「うん、カヤしか頼れないんだ。ね、引き受けてくれる？」

大きく溜息、大袈裟な仕草でカヤは、困つた子ねえ、と呟き、エルケの手の平に触れた。

結構な死線を潜り抜けて来た筈なのに、エルケの指や手の平は柔らかく白い。一緒に旅をしたここ数カ月、重いものも持たず激しい



運動一つもしてこなかった。

まるでお姫様　実際には王子様だが、の様に大事にされ、それがこの始末だ。カヤの指は固く、働いている人間の手だった。自分のこの手が凄く恥ずかしい。

カヤの事も守れるとまで行かなくても、せめて横に立っていられる位でいたいよ。その権利くらいは自分の手で勝ち取りたいんだ。

「軽い剣がいるわね、それに手の甲に巻く布もこれじゃなくて、もっと滑らない物にしてくちゃ。この村で揃えられるかしら？　明日から少し忙しくなるわね」

「お金が掛かるよね、ごめん」

「気にしないで、エリクがそう決めたのならしっかり叩きこむわよ。勿論、遊ぶ暇も無い位。結構、優しそうに見えて厳しいのよ、私」

カヤは優しそうにも見えるけど、十分厳しいよ。昔、怒鳴られた事を思い出す。あの時は本当に怖かったんだ。

ありがとう、もう一度言った。優しくしてくれてありがとう。でも剣を教わる理由は、カヤには言わなかったけれどまだあった。

もしビューローの人間かまだ顔も知らぬ蝶に出会った時に、今のエルケのままでは太刀打ちするどころかただ捕まるだけだろう。もし傍に三人がいたとしても、足を引つ張り命に係わる事態になるのかもしれない。それは避けたかった。そして、せめて一矢報いたかった。

出来る事は、まずそれだ。一步一步進むしかない。何もかもに覚悟の上で挑まなくちゃ駄目なんだ。

月が浮かぶ水鏡、体に纏わりつく水の絹。

体をつねらせば水は渦になって、指を潜らせれば流れるように水底へと導かれる。最初は固く閉じる瞼も慣れれば直ぐに水中で開いて、藍色の中に月灯りを反射して輝く金の砂を見る事が出来た。

ここ毎日、剣を振っている所為で腕がだるい。

手で水を掻くのを諦めて、足をばたつかせながら水へ沈みそうになる体を浮き上がらせた。仰け反る様に水面から顔を上げると、マルガがからからと笑っている。

「なかなか上がって来ないから、水の中で寝てると思ったよう」

「水の中で寝れる訳無いじゃない」

デリアが冷静にマルガへ突っ込んでいる。

剣を持ち始めたその日から既に、カヤの指導は最高潮だった。何度、小枝で手首を叩かれたか。正直、カヤの剣を教えた人間を怨みたい程だった。

一日目は、食事もせずただ死んだように眠った。朝、遅くに目覚めるまで全く起きなかった。

二日目は、体中が痛くて立つ事も出来なかった。それでも変わらず、カヤはエルケに剣を持たせた。ありがたいけれど、辛かった。勿論、泉に行く気なんて起きなかった。

三日目、今日も朝からずっと剣を持った。

一日目から何かが変わったのか全く分からない。そう首を傾げるエルケに、そんな早くに結果が出るものでもないのよ、とカヤが笑った。

汗塗れ、埃塗れになったエルケは、疲れて悲鳴を上げる体でも今日こそ諦める事が出来なくて、二人を説得して泉に来ていた。

今日は二人とも服を着たままで、エルケが水浴びしているのを大人しく見ている。一人でこの場所に辿りつく事が出来ないエルケに二人の道案内は必須だったから、申し訳ないけれど同行して貰ったのだ。

一糸纏わぬ姿も最初こそは恥ずかしさもあつたけれど、二度目の今日は気にならなくなっていた。傷だらけの体をマルガとデリアが怯える様子も見せなかったのが、逆に嬉しかったのもあつた。

赤金の髪を肌纏わりつかせて、水から上がると泉の端に腰掛ける。頬に張り付いた髪を指で梳いて、エルケはやっとの事で一息つ

いた。つい先程までベタついていた汗と埃もすっかり水に流れ、乾き始めている肌はさらさらしている。

上を向いて、大きく呼吸。夏の夜は夜風が温かく、水に濡れた肌に丁度いい。

「エリク、綺麗ね」

デリアがそんなエルケを見て言った。眩しそうに目を細めている。

綺麗じゃないよ、こんなに傷だらけだ。もしいつか誰かにこの身体を見せる時が来たら、きつとその人はこんな体を見て愛しいと想うどころか怯えるに違いない。背中の焼印、家畜の印。人としては最悪の証だ。

「ありがとう、デリアも可愛いよ」

それだけを答えたエルケに、デリアも微笑みを返した。

最初、泉に来た時に話した二人を纏めて買う、という話はあれから二人の口から一度も出ていなかった。

それでもエルケの前で二人仲良く話す姿をいつか引き裂いてしまふのは忍びなくて、どうにかならないのか、といつも考えてはいた。

エルケは二人に見えない様に、手の甲に巻いてあった細布を外して素早く新しい細布を巻き直した。

剣の柄を握る為に、ここ数日カヤの用意した細布を巻いている。でもそれを泉に入る時に濡らしてしまう訳にもいかず、最近はずう布に巻き直していた。先日、初めて泉に入った時、布が濡れている事をクルトに指摘されてから少し気にするようになったのだ。

折角の楽しみをそんな事で失ってたまるか、そう思ったから。

髪の毛の水滴を頭を振って飛ばし、上半身だけに前を開けたシャツを羽織る。自分で腕を掴めば、今まで動かしていなかった部分を無理に動かしている所が固くなっていた。少し熱も持っている。指と手の平は皮が破れ血が滲み、水が滲みて微かに痛みも感じた。

「マルガ、デリア。そろそろ、帰ろうか？」

エルケが下のズボンを履いて顔を上げると、マルガは少し離れた所に立っている。手を振っていた。

「ちよつと待つてえ、マルガはお土産にこのお花を持って帰るの！」

川の岸边に咲いているのは小さな黄色い花だ。点々と続く小さな花畑に見え隠れする小さな背中が見えて、エルケの横に立っていたデリアが大きく溜息を付いた。

「もう、本当にマルガは子供なんだから」

君も十分に子供だよ。エルケは横を向いて噴き出しそうになるのを耐える。デリアはそう怒った振りをしていても、やっぱりマルガと一緒に花を摘みたいのだ。ほら、指がうずうずしてるよ。

「いいよ。僕はここで待つてるから、デリアも行つておいでよ」

「行かないの、デリアは大人だから」

小さなレディーが憤慨している。エルケはそんな貴婦人の頭を撫でてあげたい衝動に駆られながら、首を傾げた。

「僕の部屋が殺風景だからお花が欲しいと思つてたんだよ。マルガの持てない量になるだろうから、デリアも手伝つてくれる？ 本当は僕が行けたらいいんだけど、僕はほら」

腕を振り回して見せる。肩と腕に痛みが走つて、顔を顰めた。

「ちよつと辛いし、頼むよ」

「もう、仕方がないわねえ」

その言い方はカヤの真似だね？ そつくりだよ。離れて行く小さな背中を見送つて、エルケは片手を振つた。

濡れた岩場から少し離れて、小高い川の縁に立つ。

泉に映った月灯りはここまで届かずに、そこは少し薄暗く気味が悪く感じた。さっきまで三人で居た時は感じなかった心細さが急に襲つてきて、エルケは思わず後ろを振り返る。いや、誰もいない。気の所為だ。

ここから見ると丁度マルガ達の姿が横から見える。しゃがむ、摘む。あ、また見つけた。ほら、摘んだ。上下しながら離れて行く二

つの小さな頭はまるで野兎の様だ。

立ち上がって、岩場の縁に立った。奥に行ったら危ないのに、もう本当にそろそろ連れ戻しに行こうかな？

振り返って、何かにぶつかった。

顔を上げると、漆黒の闇。腕、足、肩、顔、頭まで全部闇に包まれている。ヤン？ いや違う、ヤンはこんな乱暴に手首を掴んだりしない。クルト？ 違うよ、クルトだっていつも優しくかった。

じゃあ、これは誰？

口元を覆う手の平に思い切り噛み付いた。口の中いっぱい広がる変な味、塩辛い様な変な味。ああ、これは少し舐めた事がある。ゼークトで逃げるエルケが足を滑らせて転んだ時に、膝一杯に付いていたもの。

赤いもの、赤く流れ出るもの。瞬間、肩を掴まれて奥歯を噛んだ。殴られる、そう思った。でも痛みはやって来ない。でも腕を掴まれたままだ、引き摺って行かれる。

「嫌、だよ」

大声で叫んで誰か呼ぼうとして、止めた。もしマルガとデリアが巻き込まれたら？ あんな小さな体、あつという間に殺されてしまう。上手く逃げ出さなきゃ、逃げ場は何処だ？ 一つしかない。

力任せに思い切り腕を振り回した。もう恰好も何もなく、必死だった。

腕を痛い程掴んでいた指が緩んだ時に、背中側へ思い切り踵を蹴った。

宙に浮く体、結構こころって高かったんだな。なんて、腕で顔を庇って後は水飛沫。

衝撃に息を吐いて、思い切り飲み込んだ水に呼吸を失った。だから意識を保っている事なんて、出来なかった。

小さな悲鳴が風に乗って聞こえるまで、その状態に気付かなかつたのは失態だった。

木陰の向こうで背を向けて、水音だけに耳を澄ませていた。話を勝手に聞くのはフェアじゃない。珍しく紳士的な事を考えたから、こんな初歩的なミスを犯すのだと、きつとノルベルト副総長は怒るのだろう。

仕事に感情は禁物だ、情を移すな。客は荷物だ、金の乗った馬車だと思え。情が移れば、守る手が鈍くなる。気の緩みも現れる。剣の冴えが鈍る。何度も言い聞かされてきた事だ、あの鬼教師に。これほど身に染みた夜も無かった。

駆け出した時は既に、エリクの体は小さな崖向こうに消えた後だった。騎士は剣を絶対に手放すな、教えの通りに腰に佩いた剣を抜くと、身を翻す黒い影に切りかかる。

闇を切り取った、そう思ったのは外衣を一部切り取ったからだ。そのまま横に凧いだ剣の刃を、距離を取って避けた男へ返す。足の爪先が土を抉って、小石の碎ける音がした。翻す影、落ちる漆黒の影の一部。これはヤンではない。あいつの剣なら俺が一番よく知っている、間違える筈は無い。

だが、闇に慣れた目でも隠された顔を判別する事は難しかった。

影はクルトと同じく、剣に慣れてるようだ。

即、月灯りを浴びて冴えた剣が抜かれた。先刻まで抜かなかったという事は、エリクの命を目的としている訳ではないらしい。人買いか、それともビューローの追手か。生きたまま連れていこうとするという事は、どちらかだ。体目当てのなら、女なら殺しても十分にその機能は足りる。自分の考えに逆上した。

光る剣先。かん高い金属音と同時に、柄を握る指に衝撃が走った。力任せに押してくる、向こうも然程時間は無いらしい。急いでいる

のか、依頼主が傍にいるのか。それとも、何か他の理由か？

逆上もある一線を越えれば、逆に自分でも怖い程冷静になった。何処を切り落そうか、それとも叩き潰そうか。死なない適度に動きを奪ってからワルゼかヨーブに連れ帰ってやる。そうだ、殺さずとも色々な事を聞き出す時間はある。さあ、今は俺を楽しませる。

互いの外套と外衣が浮き上がる。掛かって来る剣に外套を巻き付けて、思い切り引き寄せれば膝を付いた体が翻った。土埃が舞って体の重心が崩れた所を狙う。飛び散る火花、闇の中では目立った。

突然、下で子供達の叫び声。それに悲鳴が微かに聞こえた。何度も名前を呼んでいる、どうやら『彼女』は意識を失っている。怪我は？ それに呼吸をしているのか？ 何も見えない、何も聞こえない。腹が立つ。

舌打ちをして正面の敵を睨み付け、口端を上げた。俺には時間が無いんだ。そろそろ動けなくなつて貰おうか。切り掛かり、思い切り腹を蹴り飛ばした。

踵に重い衝撃の後、剣に血が滴り落ちる。土に垂れた、土が血を吸って行く。

膝を付いた影に、剣を振り被った。

「エリク、死んじゃ嫌だよ！」

その子供の声に、思わず腕が止まった。

隙を見逃さずに影が身を翻す。手元の土を思い切り顔に叩き付けて来た。

途端に口の中で広がる小石と土の粉塵。腕で殆どは庇つても、流石に全部は庇い切れなかった。舌打ちをする、最後の最後にこれだ。ノルベルト副総長に知られたら、何を言われるか分かったものじゃない。

そして顔を上げた時には既に血溜まりだけ残して、その姿は消えていたのだ。

「逃げたか」

クルトは短く呟くと、剣の血飛沫を払い鞘に戻した。直ぐに崖下

に向かう為、身を翻す。が、返り血を浴びた自分の外套を見て、僅かに逡巡した。

少し子供の前に出るには刺激が強いだろうか？ いや、この暗闇なら気付かないだろう。一瞬の逡巡の後、身を翻し崖を器用に下りて行った。

崖は上から見て思っていたよりも、然程高さは無い様だ。とはいっても、あの状態で十分に覚悟は出来ないだろう。水に叩きつけられる衝撃は結構なものだったに違いない。

下でマルガとデリアが濡れ鼠になったエリクにしがみ付き、マルガはただ泣いていた。水からは二人で協力して、エリクの体を何とか引き上げたらしい。川のほとりに引き上げられ瞼を閉じたエリクは顔色も蒼白で、唇も紫だった。

ここで失うのか？ 拳を強く握り締めた、爪が手の平に突き刺さる。心臓が鳴った。

「クルト！ エリクが死んじゃうよう！」

草を踏む音に気付き、マルガの方が先に顔を上げた。

こちらにも負けじと濡れ鼠だ。但し顔は涙塗れになっていた。鼻も赤い、唇が歪んでいる。なんだ、先日のエリクの泣き顔となら変わりは無いじゃないか。

最も重要な事を、らしくなく震える声で聞く。

「……息は？」

「息はしてるよ、でも少ないの。呼んでも目も覚まさないし、動かないの」

冷静な返答がデリアから戻って来て、少しだけ安堵した。

なんだ、随分と冷静だな。そう思っても、彼女もまたエリクの頬に触れる小さな指は小刻みに震え、十分に泣き喚いた後の様だった。その二人の姿にずっと会っていない自分の弟妹の姿が重なって、二人の頭を撫でる。きつと物凄く怖かったのだ。

崩れる様に、意識を失ったエリクの横に跪く。

頬に指を這わせれば、表面は冷たくても肌の奥はまだじんわり温



かい。唇に顔を近付けければ、微かでも呼吸をしていた。胸を見た、僅かに見える膨らみは十分に上下してその機能を失うことなく動いている。

安堵で体の力が抜けた、無性に華奢な体を抱き寄せてその頭を狂ったように掻き毟りたい気分になる。

「俺が抱くよ、戻ろう」

エリクを包むのは、返り血の浴びた外套でも大丈夫だろうか？

一瞬、悩んだ後に他に体を包めるものが無いのだと思い直した。そのまま連れて帰る訳にはいかない。

クルトはシャツの上に着ていた短めのベストを二人に手渡し、ひとまずの水滴を拭かせた。あとは歩いている内に二人は次第に乾いてくるだろう。

エリクは宿屋に戻り次第、濡れた服を着替えさせなくてはいけない。外套に包み、その身体を持ち上げると意識を失った体は今まで抱き上げたどんな時のエリクよりも重かった。

意識を失っている今ならせめてもと、その閉じた瞼に唇を押し付ける。

エリクは馬鹿だ。今までは安心だとは言え、狙われているのを知っていてどうして子供と出掛けようと思うのか。苛立っているのか、それとも安堵しているのか。それともどうしようもなく愛しく思っているのか、欲情しているのか。もう何も分からない。

「こつちだよ！」

マルガが先導した後をデリアが追っていく。もしかして先程の男がまだ闇に潜んでいるだろうか？ いや、きっともう逃げた後に違いない。

剣が肉を抉った感触は確かにあったのだ。今は十分に止血しなくては後々に響くだろう。そんな命知らずな真似はしない筈だ、あれだけの剣を使えるのであれば。

外套に巻かれた体を強く抱き直し、闇の中に割り入った。

乱暴に階段を駆け上がる音。マルガとデリアの足音だ。それじゃ、カヤも飛び起きるだろう。そう思いながらも、クルトもまた同じ様に軍靴を階段に叩きつけながら駆け上がった。

「カヤ、カヤ！ エリクが！」

二人は部屋にそのままノックもせず、飛び込んだらしい。

外套に包んだエリクを連れて部屋に入ると、二人に飛びつかれてカヤは何が起きたのか理解できない表情をしてベッドで半身を起き上がらせていた。

それでもクルトに抱かれた力の抜けた体を見て、眉を寄せる。息を飲み、名前を小さく呼ぶとベッドから直ぐに飛び降り、駆け寄った。

「怪我は？ 息はしてるのね？」

カヤが腕に飛び付いてくる。

腕の中で規則的に呼吸をしているのを確認すると、エリク並みに蒼白になった顔をカヤは少しほころばせた。

「風邪を引くわよ、直ぐに着替えてらっしゃい」

本来の調子を直ぐに取り戻し、カヤは濡れ鼠になっているマルガとデリアに着替えをするように言い付ける。でも、二人はなかなか頷かず心配そうに振り返った。不安なのだ、『彼女』がまだ目を覚まさないから。

腕の中の体を強く抱き締める。まだ反応はなかった。

「明日、また会いにらっしゃい」

そうカヤに言われて、何とか納得したらしく二人はやっと部屋を出て行った。少し躊躇しながら、それでも遠く離れて階段を駆け下りて行く小さな足音が聞こえ、やがて消える。

シーツの乱れていないベッドに寝かせる様に指示すると、カヤは部屋に小さな灯りを付けた。窓際に置かれたランプに二人の姿が映し出される。出来るだけ暗く、外からは見えない様にカヤはカーテンを閉めた窓際からベッドの足元にランプを移動した。

そして、ランプに照らされた異変をカヤが一番先に気付く。

「クルト。貴方、怪我しているの？」

カヤの視線を辿れば、床に黒々とした点が落ちている。点はそのままクルトの足元に小さく広がっていた。決して多くは無い血痕。外套から数滴、滴り落ちている。そう言えば、確かに体を抱いた腕が温かく僅かに湿っていた。

「いや、俺はしていないよ」

じゃあ、エリクは怪我をしていたか？ 先程、横たわった姿を見た時に見た覚えはない。暗闇で見逃したか、そんな筈も無い。抱き上げる時には血痕などなかった筈だ。

カヤは一瞬で綻びかけた表情を変え、ドアへ身を翻した。

「私はちよつと治療道具と服を借りてくるわ。クルト、貴方はエリクの怪我を見ていて。必要なら応急処置を、出頼むわよ！」

返事も待たずに、カヤは部屋を飛び出して行く。

血痕とエリクの顔を見て、ベッドに下ろした。カヤはエリクが女であることを知らない。だからクルトへ簡単に任せる事も厭わないのだ。

ベッド上で外套を開けば暗闇に近い部屋の中でも微かに分かる程、背中部分が血に塗れていた。しかし見た目ほどは出血は多くは無い。濡れている体の所為で、水滴と混ざり合い垂れて来たのだろう。この量なら恐らく、命に別条はない怪我だ。急ぐほどではないから待った方がいい。体は触れずにいた方がいい。白い肌を見ると自制が利くか自信が無い。

数日前、こそこそと何処かに出掛けるのを見てまたかと呆れた。どうしてこいつはこうやって人に疑われる事を敢えてするのだと、ついて行って文句でも言っつてやろうと思った。

月灯りに照らされる、薄い藍色の水。

泉の傍で少し恥じらいながら白い体を辿って、布が滑り落ちる。誰も見知った人間はいないのだと安堵している様に、一糸纏わぬ姿を何処も隠すことなくエリクは月灯りの下で立っていた。

何処をどう見ても、女だった。やつぱり、という安堵と、何故言わなかったのかという苛立ちが鬨ぎ合う。

初めて見た。腕、足、腹、背中、首、体中の殆どにおびただしい傷の残る体。虐待なのか、それとも拷問なのか、白く痕だけになったものもあれば背中の中火傷の様にまだほんのり赤味を残すものもあった。

別に驚く程女らしい体をしているという訳でもない。それなのに水浴びをするエリクの体を初めて見た時に、見てはいけない体だという事も忘れて思わず息を飲んで目を見開いた。

傷だらけの白い肌。それでも、それすら忘れさせる程透き通る姿。

泉の縁に立つエリクは、赤金の髪が一糸纏わぬ体に張り付いていた。水から上がったばかりの体を月へしならせて仰け反る姿を見て、思わず欲情する自分に気付いた。

まるで女神に懸想する人間の様だ、してはいけない事をしたような気分になった。女神は情欲を知らない、恋も愛も持ちえないからだ。気まぐれに振り向き、気まぐれに姿を消す。

エリクが女神だというのならその神々しさを奪って、人にまで墮としてしまおうか？ 逃げ出さないように、縛り付けてしまおうか。

全てを未だ見せようとしないうその存在に腹が立った。どうにもならない程苛立つのに、手だけは完全に離せない。むしろ引き寄せたくて仕方がない。

その後、泉の熱がまだ醒めやらぬ寝室の扉が叩かれた。

今は戻った方がいい、そう思いながらも扉の向こうにいる体を引き込もうと指が動く。目を閉じれば、泉の縁で立つ姿が浮き上がった。心細げな表情。見た事のない優しげな微笑み、薄い肩。細い腰。

一度、女だと思ってしまうはもう感情に抑えは利かなかった。完全に舵を失った船は迷い、流される。掴めばもう離す事も出来ない。それを知っているから、際どい感情を強く自制する。

無邪気に笑うな、今の俺はそんなに甘くない。エリクが明らかに避けているのは、この汚れた感情を読まれているのかもしれない。それなら避けられるのも仕方ない、そう思いながらも上手いかない自制に苛立ちを募る。

腕の中でエリクが小さく身じろいだ。眉を寄せて、微かに息も荒い。怪我の所為で熱でも出て来たのか？ 触れた額はまだ冷たかった。

僅かな躊躇の後、クルトは溜息をつき思い切って背中部分の服を捲り上げる。その向こうに、細く白い背中。僅かに出血の痕はあれど、背中では無い様だ。中央に見えるのは火傷の痕、それに思わず目を見開いた。

背中への火傷はただの火傷なのだと思っていた。だが実際、近くで見ると違う。これは家畜の印だ。ビューローの所有権を主張する焼印だった。

手の甲の烙印を見た時また、見ないでと小さな声で懇願した。その向こうでこんな物まで隠していた。腹に腕を回し、その焼印に唇を付ける。指でなぞりながら血に塗れた傷を探しても見当たらない。

「……ん」

少し意識が戻ってきたのか、鼻に掛かる声をエリクが上げた。腰にも腹にも傷は無い、まさぐる様に指を這わせても血が滲むだけでやはり何処にも見当たらなかった。だが、腰の紐はまだ固く閉まっていた。その部分を引きぬく訳にはいかなかった。泉で見たとはいえ、状況が違う。

「エリク」

起きろ。

腹の下に腕を入れて、上向きにさせる。まだ信用には値しないのか、全てを教えた様な顔をしてその癖に女であることを隠すのか。

「エリク、俺を信じろ」

俺に全部見せろ、声に出せずに抱き締める。

腕の間から落ちた腕が落ちて、その指の付け根には数日前まではなかった擦り傷や潰れた水泡が見えた。剣を持って、何をする気なのか。迎え討たれるのを覚悟で剣を教わるのか。お前は女なのに、ただ守られてさえいいのには。つい先日まで、子供なのだと小馬鹿にしていたのが嘘の様だ。

ふと、腕の中のエリクを見下ろした。出会った頃とは明らかに違う丸味を帯びた体、細い腰、水に濡れると微かに判る膨らみ。もしかして、何かが引つ掛かる。

もしかして『彼女』はたった今『女』になったのか？ クルトは唐突にエリクを腕から離れた。抱き締めた腕を見詰めて、まだ眠るエリクを見下ろす。後ろの扉が丁度開いた。カヤだった。

小さな盥には湯が張ってある。清潔な布と薬、それに飲み水と着替えを器用に持って来たカヤは、扉の傍で立ち竦むクルトとベッドを交互に見て、訝しそうに眉間へ皺を寄せた。

ベッドに寝かされたエリクには何の治療の跡も無い。それを無言で咎めているのだ。カヤが睨んできた、声には棘がある。怒ると容赦ないのはいつもの事だ。

「貴方、何もしてなかったの？」

「使えないわね、その後の言葉が聞こえてきそうだ。」

「カヤ」

脱力して、背中を壁に預けた。そうか、やはり『彼女』は女なんだ。子供ではない。

「何よ」

「エリクは女だ」

カヤは怒る事も悲しむ事も絶望する事も無くただ盥をサイドテーブルに置き、手早く着替えを自分のベッドに広げるとエリクの横にしゃがみ込んだ。

「そう」

短く答えると、エリクの首筋に手を当てて、はっきりとした脈動と体温がある事を確認し、大きく溜息をつく。水で寝着の袖が濡れ

ない様に腕捲りをして、持って来た布でエリクの顔と手足を拭いた。

出て行く機会を完全に失ったクルトを振り返り、鋭く睨みつけて来る。

「いつまで見ているの？ たかが、子供が大人になっただけでしょう。エリクが女だと分かったのなら、さっさと部屋を出て頭でも冷やしてきなさいな。貴方、酷い顔してるわよ」

この子を押し倒したら容赦しないわよ、そう背を向けたままカヤは言った。

内心の情欲を読まれた様で、言い返す事は出来なかった。

そこまで俺は既にエリクに執着してるのか？ いつか、カヤを籠に閉じ込めた父親の様に俺もエリクを籠に閉じ込めるのか？ 自分とエリクが被るのか、カヤがクルトに吐き捨てる言葉には容赦がなかった。

いつまでも出て行かないクルトに業を煮やし、カヤがグラスを叩き付けて初めてクルトは扉を開けた。一瞬、振り返ってもエリクはまだ瞼を閉じたままだった。

エリクが目を覚ました、とクルトがマルガから聞かされたのは村長宅であった。

話も終盤に差し掛かり、互いの言い分がぶつかり合って白熱していた時の一瞬の清涼剤にはなった。とはいえ、白の都市ヨープの代理としてライゼガングを訪れた訳ではなくあくまでも騎士団総長であるクルトには、正式な嫡子である兄を差し置いてヨープの政治経済を動かす訳にもいかず、話し合いは迷走状態だ。

村長曰く、蝶との取引は村としては明確ではない。個人で係わる場合においては、管轄出来ない。これ以上は、騎士団が首を突っ込むのではなく、ヨープの正式な使者として金鉱山の行く末も含め話し合って欲しい。

ヨープの使者として、立つべきはクルトの兄でありクルトではない。しかし今はヨープも市場の収益とこれまでの経験で何とか今の状態を維持しているとは言え暗雲に包まれており、枯渇した金鉱山まで目を向ける事が出来ないのも実情だった。

何とかしろ、というエリクの声が聞こえる気がする。権力を持っているのなら使えばいい、という声が聞こえる。違う、自分の持っている権力は中途半端なものであってそんな安易に振り回せるものじゃない。

クルトはそんな葛藤を億尾にも見せず、軋んだ椅子に深く腰掛けた。背もたれが折れてしまいそうだ、心と共に。深く溜息をつく。

「これ以上、蝶と係わるつもりならヨープも恐らく放ってはおかない。閉山に追い込まれるんじゃないかな」

何を今更、と村長が笑う。

そうだ。何を今更、とクルトも思った。何を今更、よくこの口が叩くものだ。金鉱山がここまでになるまでに、ヨープは何か対策を



練るべきだった。資源の枯渇は鉱山を保有する所領がどこも抱える不安点だ。鉱脈の麓に工場などの官営事業を用意するのはその不安点を改善するためだった。

でも、現在のヨープにはそれに裂く程の予算は残されていない。新しい鉱脈も無い、それに代わる資源も見つかっていない。今、ヨープの手元に残っているのは元々あつた資産を大きな口で飲み込んで行く宗教という名の大蛇だけだ。

何をしているんだ、父と兄は。自分ならもつと上手く回せる。もつとこんな状態になる前に手を伸ばす事が出来た。そう思いながらも、エリクと出会う前までは自分も逃げ回っていた事を思い出す。

ヨープで父と兄が再三騎士団へ戻る様に通告してきたのを、聞かない振りをしてただ逃げていた。与えられた騎士団という檻を言い訳にして、それでも父と兄の目が届く騎士団からも逃げていた。全てをノルベルト副総長に一任して、社会勉強を理由にして商人を隠れ蓑にして逃げ回っていた。

ここまで、ライゼガングを追い込んだのには自分にも原因があるのではないか？ 騎士団とはただ商人や巡礼者を送り届ける存在だけでは無くて、地方の都市や村や街に目を配るヨープの離れた目でもあつた筈だ。

エリク、俺の手もまた意味無く大きいだけで、何も掴めず使えない。クルトは奥歯を噛み締めた。

今弱音を吐くと、きつとカヤから発破をかけられるに違いない。まるで自分は今父親と同じだと、弱い所は何も変わらないのだと。重圧に押しつぶされて、カヤという女に逃げようとした父親と一緒になのだ。逃げ場を作る為に、簡単に檻に入れようとする。自分が壊れた時に、縋る場所を残しておくために。

エリクを自分と一緒にするな、という意味を込めた自戒の言葉を、カヤが背を向けたまま鋭く言い放った。騎士団からもヨープからも逃げる言い訳を、エリクに求めるのは間違いなのだ。

縋り付いたのは、ヤンではない。何のこと無い、自分だった。

「クルト！ エリクが目を覚ましたよう！」

マルガが一人で役場の職員の手を振り切つて、部屋に飛び込んできた。巻き毛の髪には小さな葉と木屑が付いたままになっている。一体どこを擦り抜けて来たのやら、クルトは表情は変えず心の中で苦笑した。

足元にしがみ付くマルガに、解つた、とだけ返し、クルトは終わりそうもない話を切り上げるべく頭を働かせた。この場所から離れる、と言つても最後まで残る人間は残り続けるのだらう。ここから出て、新天地を探せと言つても共にこの地と滅ぶ決意をしている人間もいるのだらう。

自分に出来る事とは何だ？ 何も無い。今出来る事は何も出来ない事を知ることだ。

「村の方から現状を訴えても動かないのなら、ヨープに行つて直接話してくるよ」

結局、他人任せだ。自分は無駄な権力を背負っているだけで、何も出来ない。騎士団とは何だ？ やっぱり檻でしかないのか。家族から離された自分に代わりに与えられた架空の家族でしかないのか？

クルトのやつと吐き出した声を聞いて、村長がやつと微笑みを見せた。クルトに縋り付く様にお願ひしますとだけ、何度も言つてくる。その声を聞く度に、心の中に戻つてくる絶望感が胸を締め付けた。

城から追い出された自分の言い分など、父や兄が聞いてくれるのだろうか。何も返せなくとも、自分だけは責めないでくれ。そう、また逃げてしまいたいのを何とか耐える。あの小さく華奢な体に押し付けられた烙印と家畜の印を思えば、それはまだ容易いことのように思えた。

「だから、山師にも諦めず鉞脈を探索するように伝えてくれ。採掘の許可は鉞山監督官に一任し、ヨープからの連絡を待たずに始めていい」

新しい鉱脈を探し、そこにまた坑道を作り上げるには人材と金が必要になる。枯渴し既に打ち捨てられるだけのライゼ GANG へ、ヨープはその威信をかけて補助金を出すとも思えない。

そんな脳裏に過る嫌な予感を振り払って、クルトは椅子から立ち上がった。いや、自分が何とかしなくてはいけないのか。クルトの指を小さな手が握って来る。見下ろせば、マルガだった。

「もうお話、終わった？ エリクの所に行こうよう」

舌つ足らずな口調で急かしながら、両足を地団太踏んでクルトの腕を引いた。まるで来た時とは正反対の反応で、恭しく部屋の扉を開けた村長に視線を流す。

「蝶は出入りしているようです、ただ把握は出来ていない。消えた子供達が何処に行っているのかも分からないのです」

等価交換のつもりだったのか。先程まで聞いても答えなかった話が、僅かに口から漏れ出た。少し低い場所を見下ろす、と生気を失い青褪めていた顔には僅かに血色が戻り、声にも張りが出ている。背中に背負った物を他人に一任して、何とか気力が戻ってきたという所か。

「人身売買の事実は、把握しているか？」

「いくら、把握していても止められますか？ 生きるのでさえ必死なこの村で、子供を養う事を強制する事は出来ません。もろとも死を選ぶか、いつか会えるのを希望に売り飛ばすか二択です」

貴族様とは違うんですよ、そう答えた声は何よりも突き刺さった。見ないように逃げ回っていたものにほんの少し向きあうだけで、こんなに絶望感が湧き起こる。

クルトは返事もせず背を向けた。マルガの足音が後ろからついてくるのを耳だけで確認しても、振り返りはしなかった。

「クルト」

ベッドに腰掛けて上半身だけを起こし、エリクが儂げな微笑みを

浮かべた。

いつからだっただろうか？　こんな微笑みを自分に向けるようになったのは。初めは心を失った様に無表情で、たまに見せる表情の変化も怒りか失望、悲しみだけだった。それなのに。

今はここでまるで気高い微笑みを浮かべているのは誰だ？　今日も変わらず眩しい夏の日差しを浴びて輝く赤金の髪を見ながら苦々しく思う。

ベッド端に腰掛けていたデリアの腕をマルガが引いて、微笑むエリクに手を振りながら部屋を出て行った。またね、後でね、とそんな声を残してクルトの背中向こうでドアは閉じた。

カヤはというとエリクの脇に置いた椅子に腰掛けて、ドアの前から動こうとはしないクルトへ無言の威圧を掛けて来る。分かっているんでしよう？　彼女の鋭い視線はそう言いたげだ。ああ、十分に理解しているよ。俺が何も『知らなければ』いいんだろう？　それであれば、何もかも上手くいくんだろう？

「ごめんね。僕、二日間も眠ったままだったんだね」

「まあ、あの状況なら仕方ないだろうね」

容態が急変する訳でもなく、かと言って外傷がない以上苦しんでいるという訳でもなく、エリクはただひたすらに二日間眠り続けた。

止まっていた時を動かす試運転でもしていたのか。突然目覚めたらしいエリクは、体の内部を全て造り変えた様にその曖昧だった性別の壁を取っ払い、今は何をどう見ても少女にしか見えなくなっている。

花が綻ぶようにエリクが笑う。外見は一見何も変化が無いというのに。変わったのはこっちの見方なのか、それすらよく分からなかった。

「そう、だよ。助けてくれたんだってね、ありがとう」

「いや、俺は」

魅せられたようにただ泉へ足を運んでいた。剥き出しの欲情を隠

さずに、それでもせめて背を向けていたのは欠片でも残っていた罪悪感からだ。直視は出来なかった、傷だらけなのに神々しくて。神を犯した様な気になった。

「俺は連れて帰っただけだよ。マルガとデリアの悲鳴が、山道にまで聞こえた。最近あの辺りで不審な物影が見えると役場の職員に聞いていたから、夜に時折見に行っていたんだ」

「……そっか」

ベッドの上で何かに縋る様に、こちらを見ているエリクの視線を背けることなく見返した。

握り締めたエリクの指が、上掛けの上で細かく震えている。お前は、俺に知られたくないんだろう？俺にまだ女である事と、その他にも何か大きなものを隠している。その全てを見せて欲しいと腕を掴めば逃げて行くに違いない、呆気なく背を向けて。

カヤが目をそらさずに、こちらを見ているのに気付いていた。その視線は敢えて受け止めずに、クルトはそのままドアに背を預ける。俺は、上手く笑っているのかな？全く分からないだよ、カヤ。

「手当も全てカヤに任せたま。俺は、エリクを襲った影の正体を調べにまた山に戻らなくてはいけないかったからね。役場に聞けば分かるだろうけど、結局取り逃したんだ」

総長の癖に使えないんだけど、ごめん。それで下手な小芝居は幕を下ろした。

あからさまに肩の荷を下ろしたエリクの顔と、まだ気の抜いていないカヤの顔を苦笑しながら交互に見た。視線が合うと、エリクは今までと変わらず僅かに避ける素振りを見せる。苛ついた。

「騎士気取りなら、何処に行くにも剣を持ち歩いた方がいいんじゃないかな。まあ、遊びで剣を持つ気なら別だけどね」

「遊びじゃないよ！」

知ってるよ。でもお前を今、女だと認めてしまったら俺は全てを容認できなくなる。仇討なんて出来ない様に、檻に閉じ込めてしまいたいそうなる気がする。

「じゃあ、しつかり鍛えるべきだね。今のエリクなら子供でも勝てるよ。男の癖に守るべき子供の前で気を失うなんて、剣を持つ心構えからしつかり勉強した方がいいと俺は思うね」

「……分かってるよ」

余裕がないと弁舌が巧みになる。らしくなく直球の厭味に気付いているんだろうか。カヤが呆れ顔で立ち上がり、射し込む日差し在所為で少しずつ熱気が籠ってきていた部屋の窓を一気に開けた。

本当に、文句が多い。この部屋の中で唯一エリクの性別を知り得るカヤは、きつとエリクと話した事の半分もこちらに流す事はしないだろう。これでいいんだろう、カヤ。俺の傍には寄せない方がいい、そう思ってるんだろう。俺もそう思う、でも今更無理だとも思う。

「村長とも話してきたよ。これからヨープに向かおうと思う」

「ヨープに？」

反応を先に返したのはカヤだった。クルトは咎めるその視線を見ない振りして流し、見詰め返すエリクの視線に敢えて自分の視線を絡めた。突然、気付いた様に逸らす視線。放すべきだ、いや近付けるべきだ。そんな葛藤が起こる。

「蝶の件は出入りしているのは確からしい、けど俺も実際にエリクを襲った人間の顔を見た訳じゃないからね。現実問題として、今のライゼガングを何処まで助けられるかの方が先だと判断した」

「何とか出来るの？」

喜色満面でエリクが会話に入ってきた。それが望みなんだろう？

「出来る事はやろうと、思うよ」

それをする為に、一体何を捨てればいいのか。見当もつかなかった。開け放たれた窓から、土埃を含む生暖かい風が吹き込んで髪を揺らした。外で聞こえるマルガとデリアの笑い声。

「ヨープでヤンと合流する。頼みである事を聞いてから、蝶の件は動こうと思う。ライゼガングの件は直接俺の父親と兄に話すよ。いいね、カヤ」

無理して付いてこなくてもいい。そのつもりで聞いた筈なのに、カヤは強張った表情のまま、行くわ、とだけ答えた。ヨープの諸侯がクルトの父親である事を知らないエリクは話に付いて行けず、不安そうにカヤの顔を見上げた。

「それと、マルガとデリアは俺がヨープに連れて行く。話は付けてあるから、そのつもりで」

振り返ったエリクの顔は、何故か苦しそうだった。違う、苦しんでいるのは俺だ。

「うわあ！」

止まった荷台から顔を出すと、エルケは仰け反って上を見上げた。

大きな川の上に掛かる橋の正面には、白壁の市門がそびえ立っている。二つの塔を配す門には金属の格子柵が付いていた。夜間には往来を取り締まる為に、この重そうな格子柵は下りるらしい。

(……凄い！ 凄い！)

エルケも心の中で感嘆の声しか出せない。

門へと続く橋では、ひっきりなしに馬車が往来していた。

大きな荷物を持った商人が、馬車の行き交う度に舞う土埃に顔を顰めている。

馬車に乗っていた男が申し訳程度に手を上げると、商人は小声で文句を言いながらも「気を付けるよ」と大きな声で叫んだ。

より遠くを見ようと体を乗り出したエルケに、荷台の奥から苦笑交じりの注意が飛んでくる。

声は、カヤだ。

「エリク、余り顔を出したら危ないわよ」

「本当よ。マルガよりも危ないじゃないのう！」

「……ご、ごめん」

カヤの怒鳴り声に肩を竦め、謝ったエルケを指差して、マルガが笑った。

そんなマルガにも、容赦なくカヤの注意の声は飛んでくる。

「マルガ、きちんと馬車を掴んでないとまた転ぶわよ！」

「うわあ！ はい、ごめんなさい！」

笑いながらマルガが、エルケの横に飛びついてくる。

先程急停止した時に、マルガは荷台の中で思い切り引っ繰り返った。その所為でマルガの後ろ髪はすっかり絡まり、荷台の中に溜ま



つっていた埃だらけになっている。

宿屋に着いたらきちんと梳いてあげなくちゃな、横を見ながらエルケは笑った。

結局連れてきた二人は、クルトが知り合いに預けるのだという。ライゼガングの宿で「いいよね」と有無も言わせぬ口調で聞いてきたクルトに、エルケとカヤはあくまで肯定に近い意味の無言を通した。

後ろ盾は十分な程だからマルガとデリアの件は安心して欲しい、とクルトは笑う。

ただ、それはあくまで子供の件であつて、母親の就職先までは責任は持てないという事だ。残酷だけど仕方がないとは思う。

子供の行き手はあつても、何の技術も持つてない女を簡単に受け入れる程甘くは無い。下働きでも一から教えなくてはいけないのだ。

最後の夜を家族水入らずで過ごし、宿屋の女将である母親は二人に会わずに村を出て行った。

いつでも村を去る事が出来るように、準備はかねてからしていたらしい。ただ二人の母親には決断が出来なかつただけだ。子供を売るべきなのか。皆で死ぬ覚悟で村を出るのか。そういう決断が。

一人であれば、と前々から口添えを貰つていた場所へ行つてみるのだと、泣きそうな表情で口を噤んでいたエルケに母親は言った。子供達をお願いします、と頭を下げて双子が眠っている朝早くに消えていく背中をエルケはドアを開けてずっと見ているしかなかった。二人が起きて来て、全てを分かっていた様に「宜しく願いします」と言った震える幼い声にエルケの方が泣き出しそうになる。その時もただ抱き締めることしか出来ない。

マルガとデリア、二人の臉はライゼガングを出て既に二週間を経過していてもまだ腫れぼつたままだ。母親と別れたその日から、二人は一度も泣き顔を見せていなかった。

だから、このマルガの元気ももしかしたら空元気なのかも知れない。それとも、今だけは少し軽く楽しんでいるのかもしれない。

(……そうだったらいいな)

エルケは二人の姿を微かな痛みを覚えながら見守る。

デリアは行き交う人の荷物を興味深げに眺めていた。彼女の方も歳の割に冷静に見えてたまに確認せず手を伸ばすので、こちらも目が離せない。

(子供の好奇心って、本当に怖いくらいだよ)

だから見るもの全てが新鮮で興味深い。特に子供であるマルガとデリアは辺りを見回す目がくるくると動き回っている。

それは勿論エルケも人の事は言えないのだけど、マルガやデリアを含む殆どの人間が生まれ育った場所から出ることもなく一生を終えるのだ。こうやってあちこちを見て回る事が出来る人間は、ほんの一握りしかいないと考えると仕方がない事なのかもしれない。

しかし、商人としてあちこちを回っていたカヤとクルトには然程気を引くものは無いらしい。

ヨープでの二人の反応は至って冷静だった。

二人ともどうやらヨープと縁があるらしいが、エルケにはそこまですぐ二人に聞く勇氣は無かった。自分の事を話す事が出来ない人間に人の事を追求する資格は無い。

カヤの咎める視線にもめげずに、エルケは荷台から顔を出して下を覗き込んでみる。

橋向こうに見える川の水面は凧いでいた。

「ここ何日か雨が降っていない所為で、水位も下ってるんだな。商売もあがったりだよ」

文句を言いながら馬車の横を商人が擦り抜けていく。

「……まあな。けど、洪水よりはいいだろ」

共にヨープに入るらしい男もそれに応えた。

この大きな川は、大雨が降る度に氾濫するらしい。

話を聞いて荷台から下を覗き込むと、橋には何度もの修繕の跡が見える。

(どうやってこんな大きな橋を直すんだろう……？ 橋が無い間は

どうやって向こう岸に渡るのかな？)

見た事の無いもののせいで、エルケの不思議は沢山飛び出してくる。

門の中に入る為に順番待ちをしているエルケ達の横を徒歩の商人が次々と通り過ぎ、中へ入って行った。

次々と追い抜かれていく所為で焦れたマルガが、頬を膨らませる。

「ねえ、エルケ。何でマルガ達はまだ入れないのお？」

「皆、並んでるからね。仕方がないんだよ。馬車は荷物も多いからきつと確認するのに時間が掛かるんだ」

「それが社会の決まりつてもものなのよ。大人は待てるの、こんなちよつとの時間を待てないマルガは子供つてことなのよ」

「違うもん！ マルガは大人だもん！」

「じゃあ、静かに待つてるの！ デリアは出来るわよ」

「……マルガだつて出来るもん」

(二人ともまだ十分に子供なだけけど……無理して早く大人になんかならなくていいのに)

そう思いながらも荷台の中での退屈に待ち切れず、エルケと双子はどんどん前に詰め、ついには馬車の前部分まで来てしまった。

馬車の前部分は幌が無い所為で少し土埃が口の中に入るけれど、前に来なくては門の奥が見えない。

エルケだつてこんな大きな都市も初めてで、中に早く入りたくてさつきから心臓の動悸が止まらないのだ。

馬車の前方に行くのと手の届きそうな距離にクルトの背中がある。

すぐ目の前にある繊細な顔の割に大きく引き締まった筋肉質な背中中は、今は固く強張っているように見えた。

(声を、かけてもいいのかな？)

エルケが思わず躊躇してしまうのには理由がある。

エルケが二日間の眠りから目覚めた日。

起きぬけのエルケにカヤは、クルトがエルケの性別をまだ知らない

いのだ、と言った。

何も言えずにいるエルケの顔を覗き込んで、カヤが聞いてくる。

「どうする？」

「……どうする、って……」

起きぬけの頭は上手く働かず、エルケは逡巡してしまう。

(知られないで済むことなら知らないで欲しい、よね。だって今更女だって知られても結局もう少しで別れてしまうんだし)

ベッドの脇に腰掛け、カヤは無言で悩むエルケを急かすことなく慎重に答えを待ってくれた。

どうして性別を隠したのか、何故言わなかったのか。それを咎めようともせずにくれてくれるのはエルケにはとても嬉しかったけれど、隠していたことでカヤを傷付けたりしていないか。そっちの方がむしろ心配になる。

結局、カヤには「クルトにはそのまま黙っていて欲しい」と頼んだ。

でも別に危害を加えられたりすることに怯えて隠している訳ではない。それだけは分かって貰いたかったけれど、なんて説明したらいいのか分からなかった。

むしろ言い訳をする事で疑っている様に見えるのではと、エルケは口を噤んでしまったのだ。

カヤは俯き黙り込んだエルケの手を握り締め、何も聞こうとはせずに「その方が互いの為にはいいのかもしれないわね」と言った。

エルケにはその言葉の意味は理解出なかったけれど、運ばれてきた時のエルケの顔色やクルトの血相を変えた顔の話のカヤは何事も無かったように始めて、何か聞く機会を失ってしまったのだ。

結局、そのままエルケの性別問題はカヤの胸の内に仕舞ってくれるらしい。

でもエルケは思っていた。不可抗力だけど、カヤだけには女である事がばれて正直良かったのだと。カヤならば、信じる事が出来る気がしていた。女性同士という事もあるのかもしれない。

背中の家畜の証も、手の罪人の証も、カヤは全て見た筈なのに無理に聞こうとはしなかった。

何もなかったように、いつも通りに話してくれる。

それが嬉しくて温かくて、エルケは必要最小限の事だけでもカヤに教えることにしたのだ。

クルトに話した事と大体同じだったけれど、性別を隠していた事だけは正直に話した。

「ごめんなさい」

そう今度は素直にエルケは謝ることができた。

「……何となくそう思っていたから……気にしないでいいのよ？」

カヤは優しく首を振って、そう言った。

必死に隠していた筈なのに女だと気付かれた理由が分からないエルケに、カヤは苦笑して繋いだ手に力を入れた。その指をエルケは少し熱いと思う。

秘密を知られた恐怖に、エルケの体温の方が下っているのかも知れなかったけれど。

「純粹つてのも、結構残酷ね」

カヤは不安そうなエルケを見て、おかしそうに笑った。

それでエルケが隠していた件はお終いだった。

それからカヤは下腹の鈍痛の理由を教えてくれたのだ。

本当にエルケに取って全くの未知の世界だった。想像だにしないことが体の中で起きている。そう思うと、なんて言ったらいいのかわからなくなつてエルケは「僕、これからどうなるの？」と言った。

「大人になったのよ」

カヤは笑う。

「僕は、十分に大人だよ」

でも成長は体の外側だけじゃないらしい、もっと奥底で人は準備をするのだとカヤが丁寧に教えてくれる。

「貴女の体は子供を守り包んで産み出し、育てる準備が整ったのよ。」

当たり前のことよ」

「……やっぱりよくわからないよ」

首を傾げたエルケに、カヤは「その時になつたら嫌でも分かるわよ」と言つて、優しく頭を撫でた。

大人になり色々な準備の整つたらしいエルケの体の変化も、数日の不快さだけだった。

誰からも教えて貰つていなかった体の初めての变化に、エルケは最初は戸惑い不安だったけれど、それでも数日が過ぎてしまつと痛みも無く、前と然程変わる事無く毎日を過ごしていた。

だが、それはたった一つを除いてだ。

あの日。大人になつたその日を境に、エルケは頻繁に長く鮮明な夢を見るようになった。

時折、糸が切れる様に眠りにつく。

それは長い時は一日。短い時でも数時間。

眠っている間は呼吸も少なく、何をしても起きないのだという。

泉で気を失つてから二日間眠り続けた時と同じような感じらしい眠りにつくその状態に二度程、遭遇していたカヤが教えてくれた。

夢の内容は、覚えている時と、覚えていない時が半々だ。見ているエルケにも全く意味の分からない夢もあった。

ただ食事をしていたりとか、誰かと遊んでいたりと、夢の中なのに何故か眠っていたりとか。

夢の中のエルケはいつも見知らぬ場所にいた。

住んでいるのは、ゼークトではない場所だ。

それでも贅沢をしてる訳ではなく、夢の中でも質素な、むしろ結構貧乏な暮らしをしていた。夢ぐらい、贅沢させてくれてもいいのになんて、エルケもその点は少し不満に思う。

その夢の所為なのか。ここ最近のエルケの記憶は凄く混乱している。

今まで当たり前だと思っていた事が、足元から覆されたみたいなのだ。ただの夢と割り切るには、その夢は余りにも現実染みている。

怖いくらいだから。

今までエルケの生きて来た軌跡と、夢の中の人間の軌跡が重なっていく。そんな感じかもしれない、とエルケは思う。

それは、無理やりに誰かの記憶を押し付けられているみたいだ。見せつけられているのはいつもエルケで、その夢からは逃げる事も出来なかった。

でも一番分らない事は、他にある。

その夢の最後に、夢の中のエルケは息絶えているのだ。

それも、息絶えるのはいつも姉が見守る雪の中だった。

逆三角のワルゼの紋章の付いた旗もその場所で見ている。その旗を見た時は、エルケは雪の中で寝転んだまま、空を見上げている。

何度も見る夢の中で、一番最後に見るものはいつもその光景だ。

嘆く姉の腕の中でエルケの意識が潜り込んだ誰かは息絶える。

腕が動かなくなつて、体が冷たくなつていく。夢を見ているエルケは全く苦しくはない。一度呼吸をして次の呼吸までが浅く静かなだけだ。

そして、本当の最後にその誰かの意識が強く思うのは「泣かないで欲しい」と「ありがとう」の二つだ。

夢の中のエルケは口に出せないままでも、いつかこの場所に誰かを連れて来て欲しいと願うのだ。自らの息絶えた場所を、その人に伝えて欲しい。そう、願っている。

夢の後半は、声も音も感覚も全て曖昧でエルケにもよく理解できない事が多い。何かが混ざり合い、何かが失われる。体が熱くなり、水に吞まれていく。

指一本も動かない中で、エルケはいつも落ちて行く感覚に身を任せた。

そして、いつも突然に目覚める。

ある時は、ベッドの上で。ある時は、荷台の上で。ある時はクルトの背中の時もあった。

そんな夢を、大人になったエルケは度々見ていた。理由はエルケ

にも分からなかった。

誰の夢なのかも、勿論分からなかった。

「エリク」

クルトが手綱を握ったままで丁度後ろに座っていたエルケに声を掛けてきて、考え事をしていたエルケは文字通り飛び上がった。

ゆっくりと動き始めた馬車に吹く穏やかな風を受けて、エルケが目を細めた時だった。

マルガとデリアはカヤの元へ荷台を転がる様に走って行ってしまった。

カヤは荷台奥に隠れてしまっている。今日は随分と具合が悪いらしい。顔色も悪いし、動くのも億劫そうだ。

(大丈夫かな、こんな人通りの多い所に来て)

エルケは心配げに後ろを振り返り、声を掛けたクルトの方に向き直る。

「何？ 僕の具合は大丈夫だよ。病人が多くて大変だね、クルトも」

クルトの横に顔を出して慎重にいつも通りを装って笑えば、少しの沈黙の後に呆れた様な視線が戻ってくる。

クルトを見ない様にして、エルケは少し大袈裟におどけて見せた。行ったことのない場所に浮かれる子供のように、まるで先程のマルガとデリアのように見せれば簡単だ。

「こんな大きな街に来たのは初めてだから、凄く楽しみだな」

「少しは剣が上達したからって、エーゲルみたいに喧嘩を売りまわらないか……俺は心配だけどね」

「剣は自分の為じゃなく、人の為に抜くんですよ。分かってるよ」  
「……どうだか」

厭味混じりの小馬鹿にされた口調の後、クルトに笑われた。

カヤとの日々の鍛錬は続いていた。

カヤの具合を見ながらだから、ここ二日間は休んではいてもエル



ケは常に自主的な一人の鍛錬は欠かしていなかった。その所為か、見ても結構恥ずかしくは無いようになってきた気がしている。

誰に言われた訳でも無い。エルケ自身でそう思ったただけだけれど、ライゼガングのことを、敢えて気にしない様にするとエルケが心配したよりもずっとクルトは至って普通だった。

気にしているせいなのか。あの目覚めた時から、特にクルトは無闇やたらとエルケに触れなくなっていた。互いに元鞘に戻った感じだとはいえ、あの日からの変貌に少し不安は残る。

とはいえ、やっぱり視線は感じる時はあった。

そんな時はそちらをエルケは見ないようにしていた。それしか出来なかったのだ。

気になると、やっぱり耳が熱くなって、それからクルトには少しの間全く近寄れなくなってしまう。実証済みだった。

（僕も少し大人になったのかな。もしかしてそういうことが出来るってことが大人になるってことなのかもしれない）

エルケはそう思う。

初めて意識した異性に驚いてしまったに違いない。きっとカヤの言った通りにエルケがもつと大人になったら、嫌でもその訳のわからない動悸や反応の意味が分かるのかもしれない。

エルケは男性にしては線の細い端正なクルトの横顔を見た。

余りに長くまじまじとエルケが顔を見過ぎた所為なのか。クルトが少し眉を寄せて小さく舌打ちをする。

ごめん、とエルケは心の中で謝って慌てて視線を外した。

互いの居心地の悪い短い沈黙の後、馬車の上に影が被さってくる。そして、次に日差しが照った時には視界は開けている。

随分と、色んな色が溢れている。

それが、ブラル大司教領の都市ヨーブに初めて足を踏み入れた第一印象だ。

今時間は上がったままになっている格子柵の下を潜り抜けると、直ぐ先には大きな広場が広がっていた。

重なる屋根向こう、少し小高い向こう側に巨大な石造りの城が見える。

人通りは多い、馬車も今まで見て来た中で一番走っている。見える人混み。もしかしたらこの広場にいる人だけで、ゼークトの村よりも多いかもしれない。

何よりも大きく背の高い建物が多い。それなのにその高い屋根向こうにもっと高い三角屋根が見える。

風がその路地間を縫って、城まで吹き上がって行く。背の高い建物の所為で、切り取られた小さな空には白い雲が見えて、時計塔の奥へと消えて行った。

石造りの屋根、それに赤い屋根、黄色い屋根。色取り取りの花が窓際には並び、石造りの路地も整然と奥へ伸びていた。

エルケは、その場に立ち上がり口を開いた。

立ち上がった足元で、クルトがあまり嬉しくはなさそうに言う。

「……エリク、ここがヨープだ」

一際大きな石の外壁をクルトは指差す。

街の中でも小高い丘向こうの大きな建物。

(城壁に囲まれた……あれは、城だ！)

口を開けたまま、返事もせず宙を見て動かないエルケの髪をひと房掴んでひくと、首がぐんと前のめりになった。

「……痛い！ 酷いよ、クルト。僕、城を見てたのに！」

「あれは、大司教の居城だよ」

「あ、へえ……凄いな。僕、こんな大きな建物を初めて見たよ」

クルトからの返事は無かった。もしかしたら完全に浮かれているのを馬鹿にされているのかもしれない。

(でもいいや。本物の城を見る機会なんて、これからもうないだろうし)

後ろでマルガとデリアの歓声が聞こえる。

飛びまわっているのか、激しい物音も聞こえて来た。勿論、追ってカヤの説教も。

「その手前に見えるのが、ここの中心に位置するブラル大聖堂。左の奥が市庁舎だよ」

市庁舎も他の建物に負けず大きく、立派な屋根だった。

ここからは何せ屋根しか見えないのだ。それ程に、広場の周りに立っている建物は大きい。一階部分でテーブルを出して、お茶をしている人も見える。

屋台も出ていた。花と食べ物物の混在した匂いがしてくる。

馬車は止まることなく奥へと進む。

いくら進んでも、人通りは絶える事が無かった。今時期、物資は本格的な収穫の時を目の前にして行き交いが激しいのだ。

「……凄い！ クルト、詳しいんだね」

思わず感嘆の声を上げたエルケに、クルトは飄々と返してくる。

「まあ、俺は大司教の息子だからね」

「ふうん……」

エルケはいつも通りに軽く返事をする。

(……大司教の、息子?)

そのまま、立ったままだったエルケはしゃがみ込もうとして荷台向こうに転がり落ちる。

腰と、後頭部を思い切り打って、目の前に火花が散った気がした。

「クルト。今、なんて言ったの？」

目を見開いたままのエルケの方を一瞬だけ見て、クルトは唇端を軽く持ち上げる。

「次男だから、所領を継ぐ事は無いけどね」

だから、俺の持つてる権力なんてたかが知れているよ。

そうクルトは言葉を継いだ。曇った表情を隠す様に前を向いたクルトの顔を、どんな顔をして見ていたのか、エルケには全く見当もつかなかった。

市門を抜け、広場を通り過ぎると、馬車は城を背にして道を川沿いに進んだ。

商店や民家が見える街並みを抜けると、厩舎と武器庫が並ぶ通りに入る。

行き交う人々の中にも商人や市民ではなく通り過ぎる人間も兵士や騎士が混ざり始めると、やっと目的の場所へと辿りついたらしい。

馬車は、やっと大きな宮殿の前に停まった。

宮殿門の割に、華やかさを一切排除した無骨で堅牢な門だ。

本来ならば美しい細工でもしていそうな格子にはなんの飾りも無く、ただ剣にも似た形の高い柵が天へとそびえ立つ。

奥に見える美しくも繊細な宮殿とその門とは、余りに分相応で少し違和感を感じた。建物が宮殿のように綺麗なだけあって、エルケには柵がその美しい場所を守る為の巨大な檻にも見えてしまうのだ。

とはいっても、貴族の住んでいるらしい屋敷は壮麗で圧巻だった。それでなくとも、先程の通りから馬車に注ぐあからさま過ぎる嫌悪が混ざり合う兵士の視線をエルケは感じていた。

(まあ……こんな綺麗な宮殿前に付けるには……これはちょっと質素過ぎる馬車だよな)

案の定、門前に停まった馬車を見て数人の兵士は足を止め、何人かの着飾った騎士は遠目でも分かる程に不快感を露わにし陰口を叩いている。

クルトが先程言ったことが本当なら顔でも知られていそうなものだが、クルトは何故かヨープの門をくぐると同時に深く女物のケープを被り、自分の顔を隠してしまったのだ。

集まる兵士たちの視線に羞恥を覚えたエルケは耐えられず、荷台

の上で立っていられずに思わずしゃがみ込んだ。

先程までの市街でもヨープで行き交う馬車は立派な幌馬車が多かった。

エルケ達の乗っている馬車は、ライゼガングで長年使われていたものを譲って貰った。十分すぎるほどに粗末なものだ。

こんな大きな宮殿の前にはやっぱり飾った馬車が似合う。それには馬車を守る馬に乗った騎士も必要だろう。

しかしエルケ達の馬車の幌は長い旅で薄汚れ、車輪もがたついて

いる。それでもクルトはそんな視線に全く動じず、正門の正面に馬車を止めると兵士に小さく何かを告げた。

ケープも上げずに、それでもその兵士には十分だったらしい。

「……はっ！　かしこまりました。ただ今、お呼びいたします」

血相を変えた兵士が門中へ飛び込んで行く。

そして、入れ違いにヤンがやってきた。

久し振りに会ったヤンは相変わらずの無表情で、そして相変わらぬの黒づくめの服装だ。

エルケの胸が跳ね上がる。

歩幅の広い少し踵を叩きつける様な歩き方でヤンはクルトの前に立つと、荷台から顔を出したエルケに一瞥もせずクルトと話し始めてしまった。

久し振りの逢瀬に期待した訳ではないけれど、勿論何の反応も無い。

（まあ、そんなものだとは思ったけど。別れた時も別れた時だったから、もっと何か反応があると思ったよ）

まるで別れたのが昨日の今日みたいな反応なのが、エルケには少し面白くない。

会つのは実は楽しみにしていたのが自分だけだったのかとエルケは気付かれない様に小さく溜息をついた。また前みたいに皆で旅ができるのだと、エルケはちょっと浮かれ過ぎていたのだ。

「クルトお！ マルガ、馬車から降りていい？」

難しい話をしてるのか、小声の会話に能気なマルガの声が被さった。

「ちよ……マルガ！ 今、何か駄目な感じだからね。もうちよっと待ってようよ」

「だってえ。マルガ、あの大きな庭で遊びたいんだもん」

荷台奥で腰掛けるカヤの横を二人は陣取って、大人のあるべき姿に付いて討論を始めてしまった。

「今、降ろすからちよっと待っててよ」

クルトが、会話の隙間を縫って返事をしてくる。

エルケは無言で小さく頷くと、降り口にしている荷台前の縁を両手で掴んだ。

（僕は……一人で降りてもいいよね？）

ここ最近、ヤンがいなかったこともあって馬車から降りる時はいつもクルトが降ろしてくれていた。

どんなにエルケが自分で降りるのだと言い張っても、決してクルトは許してくれないのだ。エルケがもし失敗して怪我をすると誰に一番迷惑を掛けるのか。そう詰め寄られると、エルケとしても強くは出られない。

クルトはそれでなくても、カヤにマルガ、デリアを引き連れているのだ。その上、ヤンがないのにエルケが怪我をしたら旅は立ち行かなくなるだろう。

だからエルケは決めていた。ヤンが荷台に向かって歩いてきても、ヤンの手を借りることなく自分で馬車から降りたらしい。

（なんていったって大人だしね。ヤンにいつまでも迷惑掛ける訳にはいかないよね）

クルトとの話を終えたヤンが馬車へと歩いてくる。

荷台の前で久し振りの顔を合わせると、荷台に伸びたヤンの手が微かな躊躇いを見せて、遠慮がちに引かれた。

馬車から降りるのを手伝うべきか、ヤンがそれを躊躇しているの

だということもエルケにも分かる。

「あ。僕、自分で降りられるよ」

だからエルケも決めていた言葉を口にした。

ヤンの優しい手を拒んでいるように思われたら嫌だ。だからエルケも意図的に明るく厭味に聞こえない様子を心がけた。

エルケの後ろにマルガとデリアも控えている。カヤも恐らく、流石にあの体調では一人で飛び降りるなど出来ないに違いない。

商品に乗せる事も無くなったので、今使っている荷台はルッツが牽いていた荷台よりも一回り程小さな物だった。車輪が一回り小さくなる。荷台と地面の高さも少し近くなる。

これ位ならこの足でも十分に降りる事が出来る。

それでもヤンはその場から退けようとはしなかった。

(……そうだ。久し振りなのに、挨拶を忘れてたんだ！)

「……あの、久し振りだね。ヤン」

体を荷台外に乗り出して、エルケはヤンへ微笑みかけた。上手く笑えたのか実は少し自信が無い。余りに久し振りに会ったから、かなり緊張しているのだ。

戻って来たのは暫しの沈黙、暫しの無反応。

(ここ最近やっと苦勞しなくても笑えるようになって来たけど、上手く笑えてないのかな?)

エルケの唇が緊張で震えてしまう。

確かにヤンの視線はこちらを向いている筈なのに、まるでヤンの周囲だけ時が止まったみたいだった。

てっきりエルケはヤンが馬車から降りしに来てくれたのだと思い込んでいたけれど、実はそうではなかったのだ。

思い込んでしまったことにエルケは心の中で恥じながら、極めて冷静を装う。

「あ、のさ。降りていいかな? ヤン、ちょっと避けて貰っていい?」

荷台の降り口の前に陣取っているヤンの前に足を掛ける部分があ

る。

ヤンはエルケの声が聞こえてくるのかいないのか、未だに反応もないままエルケの顔を凝視している。先に沈黙に耐えられなくなったのは、エルケだった。

反応のないヤンを放っておいてエルケは荷台の端に指を掛けると、上半身を大きく前に乗り出した。長くなった赤金の髪が肩を乗り越えて前に零れ、さらりと垂れてくる。

エルケが荷台の外へ足を出す前に、漆黒の大きな影はやっと静かに溜息をついた。

零れて来るのは低い感情を抑えた声。それは呆れたように響き、少し掠れている。

「……いや、いい。一人で降りるな」

以前していた様に脇を抱えるのではなく、ヤンに腕を突き出された。

どうやらそれに掴まれと言っているのだ。

エルケがその太い腕に片腕を回し荷台に足を掛ければ、片腕と足を使ってエルケでも容易に馬車から降りる事が出来た。

（クルトもライゼガングからはこうしてくれたら、あんな恥ずかしい真似をしなくても良かったのに！ そんな事を言っても、今更だけどさ……）

一歩一歩降りた革靴の裏に直に感じる石畳の感触は、固くてゴツゴツとしている。これなら足を引き摺る癖のあるエルケの革靴は直ぐに痛んでしまうだろう。

エルケは、自分の頭よりもっと高い場所にあるヤンを見上げ微笑みかけた。

「ヤン、ありがとう」

しかしエルケが意を決して笑い掛けても、ヤンは既にこちらを見ていない。

見上げたエルケに背中を向けて、荷台の中を駆けずりまわっているマルガとデリアを降ろすのに苦労しているのだ。



エルケは少しそれを寂しく思う。

(……そっか。ワルゼでは、まるで喧嘩別れした様な感じになつてたんだっけな)

忘れていた事を思い出してしまった。

離れていた時間で、元に戻るなんてエルケは簡単に思っていた。まさかそんな物事上手く行く筈はない。

マルガとテリアが馬車から順番に降ろされて、カヤを降ろしにヤンは荷台へ上がって行った。軋む木の音の後、カヤの、悪いわね、という声が聞こえてくる。

石畳の感触を足裏でもう一度確かめてから、エルケは今来た道を振り返った。

路地の間。上を見上げれば微かに見える色取り取りの屋根の向こうに、教会と市庁舎の三角屋根がほんの少し見えた。

夏の盛りで濃くなつた緑の合間から、城壁も見える。この邸もまた、少し小高い場所に建てられているのだ。

ヨープは川沿いに開けた横に長い都市だ。

川側から唯一入ることの出来る市門を始点にそのまま上へ市庁舎、教会、城と続き、川沿いに進めば広場と街並みを越え、厩舎や武器庫のある宮殿へ辿りつく。

確か結構離れた筈なのに、未だ大きく広く見える城は一体近付くとどれほどの大きさなのか、見当もつかなかった。

クルトが厩舎から馬を牽いて戻ってきた。既にケープははぎ取つたらしい。

「エリク、俺はちょっと城に行つてくるよ」

「あ、うん」

牽いているのは手入れの行き届いた綺麗な馬だ、ルッツでは無かつた。馬車を牽いていた馬は休ませるらしく、全員が降りるのを待つて奥の厩舎側へ兵士が乗って行った。

エルケはクルトの言葉に曖昧な返事をして、馬車を振り返る。

(ああそっか、クルトがいなかったんだ。だから、今回はヤンが荷

台から降りしてくれたんだ)

馬車からは、顔面蒼白なカヤを抱いてヤンが荷台から降りてくる所だった。大きな手の平がカヤの腰の辺り、がちりした腕が背中を回っている。

ヤンがカヤを抱いている所なんて見た事が無くて、なんかいけないものを見たような気がした。エルケは、思わず不自然に視線を逸らしてしまう。

カヤを心配して、マルガとデリアはヤンの足元から離れようとはしない。綺麗な若草色のスカートを小さな手で掴んで、二人はヤンの腕を辿って石畳に下りたカヤの傍に張り付いている。

急に後ろ髪がついと引かれて、エルケは振り返った。

「聞いているの？」

クルトが手綱を引いたまま、ぼんやりとしていたエルケを軽く睨んでいた。少し咎めるような視線に少したじろぐ。

(あれ？ 確か、さっき返事したよね？)

「……あ、うん。きちんと聞いているよ」

エルケは思いながら、もう一度律儀に返事をした。もしかして聞こえて無かったのかもしれないと思ったからだ。

クルトが城に行くってことは、もしかしなくても自分の家に帰るってことなのだろう。あんな大きな城が自分の家なんて、エルケには全く想像することができない。

エルケは今日までクルトと普通に旅をして、彼が貴族様なのだという事は理解していたのだけれど、実際に城を前にして「ちよつと帰る」と言える立場なのだとは本当の意味で理解できていなかったのだ。

故に、何とも反応出来なかった。

(行ってらっしゃい、って言えばいいのかな？ それとも、ゆっくりに来てね、って言えばいいのかな？)

久し振りに家族に会える割に、目の前に立つクルトは随分と浮かない顔だ。どうやら今回の帰郷は気乗りしないものだったらしく、

クルトのいつも通りの微笑みがエルケには随分と強張ったものに感じしてしまう。

（僕は、クルトに無理を言ってしまったのかな……）

エルケはライゼガングで、貴族なんだから何か手伝ってくれ、に近いことをクルトに言ってしまったのだ。その言葉は余り権力がないのだと自らに言ったクルトには重い一言だっただろう。

今更になって反省し始めたエルケは、クルトを気遣う一言を探して口を開閉させた。

無理をしていないか。エルケはそれを聞きたかった。

「エリク。俺と一緒に城へ行こうか」

「はあ？」

エルケの声が出る前にクルトからされたのは提案だった。思ってもみない提案に珍妙な声が漏れ出る。

いつの間にか着替えていた綺麗な外套を身に付けていたクルトが、エルケの返事も待たず華麗に外套を翻して馬に飛び乗った。

背中側を指差してクルトは、後ろに乗れ、とそう指示してくる。

（乗って、言われてもなあ……）

エルケが思わずクルトと見比べた姿は、埃と汗に塗れた酷い姿だ。

旅路に綺麗な泉は勿論無く、カヤに性別が知られた以上もうそんな短慮を犯す訳には行かなかった。

エルケを襲って来た男はまだ見つかっていないのだ。もし水場で一人になった時襲われたり、最近頼に多い眠りについてしまったら、エルケ一人では対処できない。

だから最近体を拭くときは宿屋が見つかり、カヤの体調のいい時にしようとエルケは心に決めていた。

勿論、そんな都合のいい時は最近無く、流石にエルケ自身体臭に自信が無い。勿論、見かけもかなりみすばらしくなっているに違いないのだ。

木々の隙間から見える巨大な城壁。その向こうに見えるのは壮麗

な城。それほどまでに凄い場所にお尋ね者であるエルケが行ける筈も無かった。

大司教の息子で本当の貴族であるクルトとは、エルケは根本的に違うのだ。

「い、行かないよ！ 僕、こんなだし、一緒に行ったらきつとクルトも恥ずかしいよ！」

伸びたクルトの手を拒絶して、エルケは大きく首を振った。

馬上のクルトを見上げながらエルケは、こんな見上げてクルトと話すのは嫌だな、とそう思っていた。

もう見慣れてしまったアクヴァマリーンの瞳が一瞬陰って、エルケに気付かれぬ程の短時間で直ぐに戻る。もう一度見直した時には、明るく飄々としたいつものクルトだった。

雲に遮られ日が陰ったのかと思っただけで、そういう訳でもないのかもしれない。クルトは本当は一人で城には行きたくはないのだろう。エルケにも何と無く分かっていたけれど、それとこれとは話は別だ。どうしても駄目なら、ヤンを薦めるしかないだろう。見上げるクルトは、金色の髪がまるで小麦の畝の様だった。エルケには眩しくて少し気高過ぎる。

同じ金色でも、エルケの赤金の髪とは違うのだ。

まるで、黄金と石ころだ。ベルンシュタインの屑石と宝石みたいだった。

(……クルト、落ち込んでるのかな？ まさか、だよな？)

いつも飄々として人を惑わせ、文句を言っているクルトがそんな殊勝な性格とは思えなかった。

でも見間違いでも、エルケには放っておけないのだ。最近のクルトはいつもそうだった。憂いを帯びて、たまに放っておけなくなってしまう。

「ね？ 宿屋で買い物でもしながら、クルトが帰って来るの待つてるよ」

「エリク……」

少し言い訳染みた言葉だった。

（だって、ずっと城にいる訳じゃないんだよね？ クルトは戻ってくるよね？）

そう言いたかった。

後ろからマルガとデリアの足音が聞こえ、突然エルケの膝裏に強い衝撃がやってきた。双子が飛び付いて来たのだ。

「エリクウ！ マルガ達、退屈だよ！ デリアだって、もう疲れたって言ってるよお」

「マルガだけでしょ。デリアはちよつと……お腹が空いたただけだもん」

クルトはそんな二人を馬から見下ろして、口端を上げた。先程の落ち込んでいる様子は欠片も無い。

いつもの口調で、明るくエルケに向き直る。

「マルガとデリアに、服でも買ってあげるといいんじゃない？」

「……あ、うん。そうだね」

「うわあ！ やったあ！ マルガはエリクと同じ服がいい！」

「マルガの馬鹿……エリクの服は男物でしょ。デリアは靴が欲しいの！」

二人が出した突然の大声にクルトの馬が怯えた様子を見せて、慌ててエルケは二人の口を押さえた。

門の前には見慣れた馬が牽いている馬車が、用意されている。

馬は懐かしいルツツだった。エルケがルツツの方を向くと、鼻面を上げて挨拶を返してくれた。もしかして、ヤンよりもエルケに会えた事を喜んでくれているかもしれないと自虐的なことまで考えてしまう。

馬車から降りたカヤは、近寄ってきたクルトの顔を見上げようともしなかった。

クルトの視線が宮殿奥に向かう。

クルトは敢えて指は差さず、ただ奥を見つめている。俯き、蒼白な顔で唇を噛み締めるカヤは小刻みに震えていた。

(……カヤ?)

余りの様子に、エルケも心配になる。騒ぐマルガの頭を優しく撫でて、大切な話をしている時は少し声を小さくしなくてはいけないと小声で窘めた。

クルトの声は、言葉では反応のないカヤに注がれる。

「カヤ、ここだよ」

蒼白な顔を歪ませてカヤは一度目を閉じた。

「分かってるわ」

そうカヤは吐き捨てた。エルケがカヤの鋭い声を聞いたのはそう何度も無い。

(マルガとテリアがカヤを怖がってしまったら駄目だし、カヤだって悲しむよね)

エルケはその場所を静かに離れ、二人をルッツの傍にいたヤンに預けた。

「荷台に乗せておいてくれる?」

「ああ、分かった」

エルケが言えば、ヤンは視線をまた合わせないままでも律儀に答えしてくれる。

小さな手をヤンに預けてしまうと、エルケはすぐにカヤの横に戻った。それほどまでにカヤの様子が心配だった。

あれほどまでに弱ったカヤを一人にさせるなんて、エルケには出来なかつたのだ。

話はまだ続いていた。

「どうする? 会いたいなら、いつでも会わせることは出来るよ」

目の前をカヤは手の平で覆う。

「……カヤ、大丈夫?」

泣いているのか不安になったエルケが、カヤの傍に足を引き摺り寄って肩を抱いたら、カヤは小さく震えている。泣いているのではない、ただ震えているのだ。

「いらないわ。余計なお世話よ」

カヤは小さな声で言った。

「どの面下げて、今更会いたいなんて言えるの？」

そう俯いて顔を覆ったままで続けて言った。

クルトは直接カヤを傷付けている訳でもない筈なのに、自嘲じみた表情を浮かべている。痛そうな顔をしているのはカヤだけじゃなくクルトも一緒だった。

それが痛く、エルケには苦しい。

クルトはヤンの方へ馬を進ませながら、カヤを抱き締めたエルケに背を向けた。

「……俺は、会いたいなら会うべきだと思うけどね……エリク、行ってくるよ」

「……あ、行つてらっしゃい。待つてるからね」

エルケの声にクルトが微笑みだけを返して、馬首を翻した。

離れて見ると馬に乗ったクルトは王子様然としている。体を流れる血がそうさせているのか。薄汚いものを着ても気品などは隠せはしないのだ。

(貴族つて……難しいんだな)

両親の覚えのないエルケが親との親愛を語れるとは到底思えなかつたけれど、帰郷してあれほど憂鬱になるのが家族とも思えない。

クルトはルツツの横を擦れ違い様にヤンへと声を掛けた。

「ヤン、夜には戻るよ」

「いいのか？」

「ああ、うん。長く話しても檻褸が出るだけだからねえ、切りのいい所で切り上げるよ。裏を読まれると面倒だ」

「分かった」

エルケは路地向こうに消えるクルトを見送ってから、腕の中のカヤをもう一度抱き締めた。

少し離れた場所で聞こえる双子の笑い声を聞きながら、エルケは少しでも心細いカヤの気持ち落ち着く様にとカヤに寄りそう。

頭を下げて、何かにただ耐えているカヤは、エルケよりもずっと

小さく頼りなく見えた。

(あんなに、箒を持ったり盥を持ってると強そうなのに) そう考えると少しおかしくて、今の元気のないカヤが少し寂しかった。

カヤを守ろうと回した腕の中でカヤが小さく蠢く。

「……何？ エリケ」

カヤは不安そうにそう聞いてくる。エルケが微かに笑っているのにとつやら気付かれたようだ。

「ううん、何でもないよ」

それ以上は何も話さなかった。

カヤは顔を上げないままでエルケに手を引かれ、馬車の傍まで歩く。足が少し重い。

クルトはもう既に城へと向かったようだった。ヤンが一人、荷台前で待っていた。

市街地を越えたこの周辺に一般市民は入って来る事が出来ないらしく、馬車の行き交いは勿論の事、商人も市民の姿も見えない。

たまに物々しい武装をした兵士や、華やかな騎士が行き交う程度で門前は静かだった。

柵向こうに大きな庭。

低く刈り取られた薔薇の木や、色取り取りの花が見える。

遠くに見える玄関前を左右対称に整えた庭には、かなりの金が掛かっているのだろう。その美しさは、まるで神のいる庭の様だ。

「なんか僕でもカヤを守る事が出来て嬉しいなあ、って思ってたんだ。いつもカヤには優しくして貰ってるから、こんな時くらい僕だってカヤのお世話が出来るよ。もっと僕を頼ってね」

照れながら言うと、カヤも恥ずかしそうに笑う。

(あ、久し振りに見たな。カヤの笑顔)

嬉しくて、エルケも思わず微笑んでしまう。

「じゃあ、いつも甘やかしている分、沢山エリケには甘えなくちゃ駄目ね」



「うん。カヤだったら僕、目一杯甘やかすよ」  
答えると、カヤはやつと顔を上げた。

その顔は大分先程より血色が戻ってきている。

「さあ、宿屋に行きましょう。まず、その汚い恰好を何とかしなくちゃね」

足の重さは何処へやら、足取りも軽く荷台へ向かうカヤの後ろをエルケはぎこちなく追いかけた。

カヤは話そうとしない限り、エルケから何かを聞き出そうとはしない。

一緒にいてもクルトとの会話が全く理解できなかったけれど、それでもエルケは自分もそうであろうと思っていた。

カヤが話そうとしない限り、無理に聞き出すことはない。

今、自分がカヤに出来る事はきつと優しくしてあげる事だけだ。

エルケには分かっていた。

（人って、守るものが見つかると強くなれるんだ。それもまたちょっと大人になったからなのかな？）

石畳を引き摺る足が少し軽くなったような気もした。

グレーテ広場は、夕暮れ時にも拘らず商人と市民で溢れ返っていた。

広場の名前の所以にもなったグレーテ・エンマ・クラウゼヴィッツは、ヨープに初めて城を建てた女領主だ。

洪水で定期的に畑を流され、なかなか定住する事が出来なかったヨープに堤防を建設し、立派な橋を掛けて、一大商業都市にまで成長させた。

彼女は敬虔な信心者で、各地に修道院や孤児院、それに教会を建設する事を推奨したのも彼女が始まりだった。

商業都市の名と共に、ヨープは宗教都市として知られている。

その所為か、政治にも宗教的なものが深く食い込み、教会関係者が政治に口出す事も少なくは無い。

つまりはヨープの大司教であるクルトの父親ブラルは、教会や修道士会の顔色を窺いながら政治を進めなくてはいけないのだ。

エルケが見渡す限り、通り過ぎる市民の中にも神父や修道女の姿が垣間見えた。

この大都市では隣接する教会も修道院も規模が大きいだけあって、収容している人数も桁違いに多い。双子と体調のまだ優れないカヤを宿屋に送り、エルケとヤンは買い物に出て来ていた。

一人で買い物に出てもいいと思っていたエルケに、同行を願いだしたのはヤンの方だ。道を知らないエルケには助かる申し出だったけれど、ぎこちない空気はなかなか晴れなかった。

共通の会話を探して、やっと探り当てたのが政情の話だ。

横を歩くヤンが、やっと話し始めの固さから少し緊張の解れた口調で説明してくれる。

「クルトがワルゼに名を連ねているのは、周辺の牽制にも近いんだろっな」

「……そつか。騎士団がいるとそこからは簡単に攻め込めないもんね。軍隊だつて各地に兵士を徵募する面倒も無いし、金も稼げるしね」

「ああ、だからこそ騎士団の上には裏切る心配のない人間を配置する必要がある」

「うーん……と、いつ攻め込まれても、いいように？」

「まあな。言い方は悪いけど、そういうことだ」

つまりはワルゼ騎士団含む、各地の騎士団は攻め込まれる前の緩衝材みたいなものだ。

その場所は最終的な領境となり、一番最初に戦争に巻き込まれる。そこで何とか止めて小さな争いで終わるか、火種となって戦争まで拡大するかは分からない。

(でもそれじゃ、ただの人間の城壁じゃないか)

エルケは不機嫌を隠さず、小さく溜息をついた。

「……危ない場所、なんだね」

呟いたエルケの横で、ワルゼの頃から少し伸びつつある頭をヤンは乱暴に掻きむしった。

エルケの呟きを聞いて、なんと説明していいのか言葉を選んでいくらしい。

彼の精一杯の傷付けない配慮だ。基本、ヤンは気が利かないがそういう配慮はしてくれるのだ。エルケが、軍や、戦争に深く傷付けられているのを知っているからかもしれない。

「人の命は城壁とは違うのに……」

エルケはヤンを責めている訳はないのに、ヤンは言い淀みながらも応えてくる。

色々な面で動いて欲しいとクルトに言った以上は、エルケも知らないままである事は出来ない。何も現実を知らずに頼みごとだけをする訳にはいかないのだ。

政情を知る事は決して無駄ではないに違いない。いい教師が何人もいるのだ、今が好機だ。関係ないからと何も知らずに旅を続ける

ことはもう出来なかった。

剣はカヤに教わると決めた。政情については、本当をいうとクルトのつもりだった。

クルトと別れてから宿屋に向かう馬車の中で、さりげなくヤンに聞いたエルケの質問をヤンはエルケにも分かりやすく答えてくれた。どんなにエルケを突き離しても、質問をするとヤンは変わらず律儀に返事をしてくれるのだ。クルトとは違い、エルケにも良く分かる様に噛み砕いて教えてくれる辺り、クルトよりもっと立派な先生だ。

クルトはエルケとは違う部分で動き、考えている節がある。説明されても、全く理解できていないことが分かっている。

素直に疑問点を提示すると、ヤンはもったいぶらず大雑把に色々教えてくれる。知るべき所は詳しく突っ込むまで教えてはくれな  
いが、無知のエルケには広く浅く知ることができるのは嬉しかった。  
「まあ、戦争を回避するためにやるべき事はやらなくてはいけねえ  
だろうな。何せ間違ったら、腹心を戦争に巻き込む訳だし」

「そっか。偉い人もただ指を啜えて見ているだけじゃなくて、頑張  
つてはいるんだね」

「指を啜えてつて……お前も結構言っつな」

大司教は都市ヨーロッパを頭から抑え込み、戦争を回避するだけで精一杯らしい。

ヤンは微かに苦笑し、歩きながら宙に簡単な地図を描いて見せる。地図にすると随分と大雑把なものになるだろう。それは大きな丸のみで説明された。

「ミュンヒの背後にはザクセンが、ライゼガングの背後にはビュー  
ローのマルブルクが控えてる。目を離せば簡単に攻め込んでくる血  
気盛んな奴らだから、人の壁でも置かねえと仕方ねえだろ」

ミュンヒにも騎士団は配置されている。ミュンヒにはアメテュス  
トの鉱脈があるのだ。

対するライゼガングの傍にはワルゼ騎士団。ライゼガングの金鉱

を守る為に配されている。

緑の都市ビュローは、正確にはマルプルク公国の首都だ。

潰れた果実にも似た形で領土を広げるブラル大司教領に比べ、蛇が鎌首をもたげる様に伸びたマルプルク公国の領土は、ライゼガングの山にほんの一部被さっていた。

ライゼガングはビュローからは遠く離れていても、意外な所で本元のマルプルク公国と微かに接点があったのだ。

エルケは実際にヤンに説明されて、自分のいた場所がいかに危険な場所だったか、初めて思い知らされた。

(そう言えば地図を渡されたのに、最近見てなかったな……)  
考えるとあの場所は決して安全ではなかったのだ。やはり泉で裸になったのはエルケの配慮不足だ。

「 エリク。危ない」

「 ……え?」

夕暮れで足元の視界がおぼつかなかった。

石畳の浮いた部分で足を引っ掛け、思わず揺らいでしまった体を支えようと漆黒の腕が伸びて来る。

随分と丸くはなったエルケの体でも、ヤンは苦も無く片腕で軽く持ち上げた。

咄嗟に掴んだ割に、エルケの腕は強く掴まれていない。振り返ったヤンの表情は、暮れて来た夕闇の所為で不思議とよく見えなかった。

ワルゼまでなら、こんな時ヤンはすぐにもエルケを抱き上げていた。暮れかかる薄闇の中、足を引き摺って歩くと凹凸に素早く反応出来ないエルケは躓いて転んでしまうのだ。

結果は目に見えているのに、でも今回は何も言われなかった。

「 ありがとう、ヤン」

見上げて笑うとヤンは直ぐに手を放し、得体のしれないものを見る様な顔をしてエルケを見下ろしてくる。

( ……まただ。どうしてこんな顔をするんだろう?)

別に敢えて女みたいな仕草をしたつもりもなく、エルケは今のよ  
うに必要な最小限の接触で抑えていた。それなのに、今のヤンといっ  
たらどうだ。まるで見知らぬ人間と遭遇した様な怪訝な表情だ。

髪がおかしいのかと、手の平で頭を探っても妙な跳ねがある様子  
は無い。

それなら頬か口に何かついていているのだろうか、エルケは服の袖  
で口を拭う。さっぱり分からなかった。

「ヤン。僕、なんか変かな？」

「……いや、何でもない」

聞いた事に対する返事だけには的確な答えは戻って来なかった。

しかしヤンの様子は明らかに何でもない感じではない。元々、ワ  
ルゼで別れる寸前に互いにぎこちなくなったのがもつと顕著に現れ  
たみたいに感じてしまう。

「そう？ だったら、いいんだけど……さ」

(本当はいいわけじゃないんだけど、何か聞き出しにくいよね)

エルケの語尾はつい小さくなってしまふ。

背を向けたヤンの片腕の中には、今さっき買い物してきた双子の  
服や靴がいくつも入っている袋がある。

預かった以上は、下働きみたいな仕事に就かせる気はないのだと、  
そう言ったクルトの言葉を信じて、エリクが二人に用意した と  
は言っても支払いはクルト持ちだ。

マルガとデリアの服や靴は恥ずかしくない程にしっかりとした素  
材の華やかな装飾がされた物を選んだのだ。

愛らしい二人の顔に合わせて、レースとリボンも付いたものも発  
注した。エルケが着る訳でもないのに、選ぶのにはかなり時間が掛  
かってしまい、洋品店でかなり時間も掛かった。その間、ヤンは店  
の外で待っていてくれた。

中に入って待つてくてもいいのだとエルケは提案したが、ヤン  
は丁重に辞退してきた。確かにフリルのレースの溢れる店内に漆黒  
の傭兵がいるのはかなり違和感を感じるかもしれない。

ヤンの言いたい事も分かったから、エルケも無理強いはしなかった。

宿屋で待つてくれているカヤと双子の元へ、早く帰らなくてはいけない。日も暮れる寸前で、高い三角塔に橙色の夕陽が被さっていた。

エルケは、唯一の担当荷物であるオレンジが五つ入った袋を強く抱き締めた。

それからは一言も口をきかずに、数歩先を行くヤンの背中を追いつける。話しかけようにも、背中では拒絶されているそんな感じがして、エルケは話し掛けるきっかけを掴む事が出来なかった。

(……さっきまではいつも通りだったのにな。やっと普通に話してくれるようになったのに……)

流暢だった政治講義の時を思い出すと、少し落ち込んでしまう。

教えてくれてありがとう。また一緒に旅を続けるから、これからもよろしくね。そう、実は言いたかった。

背中を向けないで、いつも通りにして欲しい。何をそんなに考え込んでいるんだろう。そうとも、エルケは言いたかった。

そう思っている筈なのに、ヤンの背中を見るとエルケは何を言ったらいいのか全く分からなくなってしまう。

ただ置いて行かれたくなくて、エルケは必死に追いかけた。足を引き摺りながら、ただ必死に。

「カヤは？」

「眠っちゃったのよう、マルガとデリアは寂しかったの」

エルケとヤンが宿屋に戻ると、膨れっ面の双子は宿屋の一階でゲームをしていた。

ゲームは石をぶつけ合う簡単なものだ。

本人達考案のルールが行き交う、行き当たりばつたりのゲームに付き合わされていた宿屋の従業員が、扉を開けたエルケとヤンに疲れた顔を向けてくる。

小さな暖炉には、晩夏だけあつてまだ火は入っていないかった。前に置かれた小さなテーブルには色とりどりの石が並んでいる。床に落ちている量を見ると結構な時間、従業員は付き合わされていたようだ。

「遅くなつてごめんね。荷物を置いたら、すぐに僕も遊べるよ」  
真つ直ぐ部屋に向かつてしまったヤンの背中を、エルケはオレンジの袋を持ったまま急いで追い掛ける。

カヤと双子が一緒の部屋になつた所為で、エルケは今回ヤンと同じ部屋になつていた。

宿屋に入つてすぐにカヤの何か言いたげな表情を、振り返つてもの言わずに何とか制した。別に裸で寝る訳じゃないのだ。クルトならいざ知らず、不埒な行いをしないヤンならきつと何とかごまかせるだろう。そう軽く考えていた。

そう考えないと、一緒の部屋で眠ることができるとはとても思えなかつたのだ。

ヤンは勿論、エルケが女である事を知らない。ここで、カヤと同じ部屋にしてと我を張るのも貰うのもおかしな話だ。

大体、男であるエリクがカヤと同じ部屋になると、女の子である双子とヤンが同じ部屋になつてしまう。余り自分から話をしないヤンは、出会つた当初エルケがヤンに感じたのと同じ印象をマルガとデリアに与えたらしい。

（だつてマルガとデリアのヤンに向ける態度は、まるで野生の熊を見ているみたいなんだもの！）

ヤンが近寄つて来ると、双子は常に物影に隠れてしまう。その姿は傍目から見ると、少し懐かしく思える。そう言えば数ヶ月前、最初はエルケも似た様な感じだつたのだ。

先程もエルケと話していたのは宿屋の従業員の背中向こうであつて、ヤンが先に二階に上がったのは多分二人に気を使ったのだらうと思う。

表情には出ていないけど、ヤンの方もかなり困惑しているのだ。



そんなヤンを双子と一緒に部屋で寝かせるのも、互いに酷だろう。クルトは宿屋に宿泊しない、そうヤンが教えてくれた。戻ってくるのに一緒にはいないのか、とそうエルケが舌打ちしたのは内緒だ。

（だから、ヤンと僕が同じ部屋っていう変な部屋割になるんだよ……）  
階段を上りながら、何度目かの八つ当たりみたいな事も考えた。手すりに慎重に指を這わせ、二階に上がると木枠の白壁が広がっている。

窓の無い廊下は白壁でも流石に薄暗い。

先上がった筈のヤンの姿はもうなかった。エルケとは違い、足を踏み外す心配も無いヤンは恐らくあつという間に部屋に入ってしまったのだろう。

今のヤンにエルケに分かる様、部屋の扉を開けておいてくれるという気遣いを期待しても、到底無理な話だ。

（確か、僕の部屋は奥から二番目の部屋だったよね？）

マルガとデリアのいる一階に戻る前に、エルケは手にしたオレンジをカヤに届けるつもりだった。

部屋に閉じ籠ったエルケを心配して、カヤが冷やしたオレンジを切ってくれたのは確かエーゲルの時だ。

その時、エルケには食べる事は出来なかったけれどカヤの気遣いが凄く嬉しかった。そのお返しをしようと、今回美味しそうなオレンジを見繕って買ってきたのだ。

瑞々しいオレンジは腕の中で甘酸っぱい香りをさせている。

冷えてないけれど、十分に美味しそうだった。

足を潜め静かに隙間を開けた扉向こうを覗き込むと、カヤはまだ眠っていた。悪夢を見ている様子も無く、横を向きカヤは安定した呼吸をしている。

「……良かった。具合は悪くないみたいだね」

穏やかな寝顔を見ると安心する。

(カヤは元気じゃないと、何かおかしいよ)

エルケが寝込んだ時、カヤがしてくれた嬉しかったことは何だろうかと考える。心細い時はただ傍にいてくれるだけで嬉しかった。具合が悪いと嫌な汗をかく。いつもカヤは枕元に水の張った盥盆を用意して、首元を拭いてくれていた。

(起きたらすぐ水でも飲めるように用意しておこうかな？ それと

……清潔な布だね)

エルケは手に持っていたオレンジの入った袋を枕元のテーブルに置くと、静かに扉を閉めた。

カヤの部屋の三つ横の扉が、エルケの部屋だ。

別にこの階が混み合っている訳でもないのに、敢えて部屋が隣り合わせになっていないのは宿屋の配慮かもしれない。

ノックもせず勢いよくエルケが扉を開けると、買い物袋をベッドに降ろし着替え途中だったらしいヤンが振り返った。

窓の前に広がる剥き出しの背中。腰から上がった両腕に向かう弓なりの線に息を飲んだ。

驚くほどに肩幅が広く、二の腕が太い。腰は太く安定感がある筈なのに、肩幅に比べると細く締まって見えた。

開けたのがエルケだったせいかわ、別に慌てることなく彼はゆつくりと上着を脱ぎ捨てる。上着が椅子に投げ付けられた乾いた音で、エルケはやっと我に返った。

「……ご、ごめん！ 僕、あの」

意図せず、上擦った声が出た。

「いや」

「僕、あのノックもしなかったから、その……」

「別に構わない」

筋肉質な半裸を真っ向から見て、耳奥を越えて咽喉の奥まで熱くなる。

無駄な部分が何もない様な体はまるで広場に飾ってある騎士の彫刻みたいで、辛うじて口だけは動いたもののエルケは目を背けるの

も忘れて立ち竦んだまま動けないでいた。

ただ顔だけが火のついた様に熱くなる。

見られているのを全く頓着していないヤンは、シャツに着替えて前を大雑把に止める。

腕を捲り上げると、まだいつも通りに見られる感じにはなった。

そこでやっとエルケも止めていた呼吸を何とか始めることができた。  
(……でも今日からヨープにいる間、僕は本当にヤンと同室でいられるのかな？ もう自信が無くなってきたよ……)

ヤンは何も気にしていないようだった。それはエルケが女性であると、ヤンが知らないからだ。

頻繁にこんなことが起こるのだと思うと、正直エルケの心臓が持つか不安になってくる。ヤンと同室ということに甘く見ていたのだ。クルトとは別の意味で危険極まりない。

ぎくしゃくとヤンの横を抜け、そのままベッドに腰掛けたヤンにエルケは背中を向けると、自分の麻袋をベッド下から引き摺り出した。

中を探ると、頭にヤンの視線を感じる。

(……もう、こっちを見ないでよ、思い出すから)

勿論、当の本人にそんな事、エルケが言える筈も無い。

ヤンは当たり前だが今の事態を大きく捉えてなんていないようだった。エルケが背中を向けた意味にも気付かず、マイペースに話し掛けて来る。

「どうした。何を探している」

「……うん、えっと。カヤの汗を拭いてあげようと思って、布を探してるんだ」

「ああ」

ヤンと話すと気付くことだけれど、ヤンは気を許すと少しくだけた口調になる。少し気を張っていると無愛想なぶつきらばうな話ぐちになるのだ。

先程の政治談議とは違い、今のヤンは言葉を選んで話している。

言葉少ななのはそういうことだった。

（ヤンも大概おかしいよ。拒絶したり、普通に話しかけてきたり、僕だってどうしたらいいか分からないじゃないか……）

そうとは考えながらも、先程の帰り道みたく無言にならない事に安堵もしていた。

ヤンに背を向けられるとどうしたらいいのか、分からなくなる。それはやっぱりワルゼの時と変わらない。

初めに会った時にヤンの威圧感に怯えたのが嘘のように、エルケはもうヤンに気を許してしまっていた。それは傍にいる時につい安堵してしまう程だ。

こういう時に限って探している布切れは奥に入り込んだままらしく、なかなか出て来なかった。

麻袋の中身を全て床にひっくり返す訳にもいかず、エルケは手当たり次第に手に当たるものを引き摺り出した。

（……もう早く出て来なよ。この沈黙が辛いんだってば）  
麻袋と布切れに心の中で文句を言う。

「お前、体は？」

「……は？」

背後からから突然声を掛けられて、エルケは顔を上げた。

ヤンの意図を知ろうと振り返る後頭部にヤンの拳が軽くぶつかった。小突かれているのだ。

「突然、倒れたりするんだろ。一人にならない様に気を付ける」

「ああ、うん。そうなんだ、ごめんね。心配掛けて」

「別にそれは構わないが」

痛くは無かったけれど、エルケは何と無く後頭部を手の平で撫でながら頷いた。

（そっか、そうだよな。そろそろ『あれ』出て来てもおかしくない時期なんだな……）

エルケが前回、眠りに付いたのが五日くらい前だった。そろそろ来てもおかしくは無い時期なのだ。ヨープに入る楽しみで頭からす

っかり抜けきっていたけれど、先程ヤンが買い物に付いて来てくれたのも、クルトにエルケの発作の件を聞いたからかもしれない。

日付を指折り数えて、エルケはヤンへ振り返った。

余計な心配掛けさせないように、敢えて笑って見せた。今はカヤも大変な時だ。無駄な心労は掛けさせたくはない。無理せず、時期を見計らって誰かと動きながら休息を取っていればいいだけの話だ。(クルトが忙しくしている今、カヤを抱き上げたり世話が出来るのはヤンだけでもね)

心配を払いのけるように、片手を振る。

「でも、ほら、ただ眠っているだけだから僕は放っておいていいよ。別に死ぬわけでもないし、痛い訳でも苦しい訳でもないから。長くても一日、短い時は普通に眠っている位で起きるからさ」

一気に言い放つと、エルケはヤンの目を見ない様にして作業を再開する。手元の麻袋に手をつ込むと、やっと目的の物を引き摺り出した。

(だってヤンと目を合わせたら、不安に思ってるのを気付かれそうだ……)

本当を言つと、エルケもその夢の正体が分からず怖かった。

何度も自らが死逝く夢は、見ていて余り気分のいいものではない。夢は目を追うごとに鮮明になって、目覚める度に自分が何処にいるのか、誰なのか。エルケにも分からなくなった。

夢を見ているのはエルケ自身な筈なのに、いつも見た事のない場所にて、違う名前と呼ばれている。

ここにいるエルケという存在は、もしかしたら誰かの見ている夢なのかもしれない。

そう思うと、段々眠るのが怖くなった。

前は怖い夢を見ても、姉に会えると思うと嫌ではなかった。

ゆっくりとおとぎ話をしてくれる姉だったり、名前を呼んでくれる姉だったり、頭を撫でてくれる姉だったり、懐かしい空気は切なく愛おしかった。

失ったものをまた取り戻す事が出来る夢は、怖いけれど嫌いじゃない。例えばその後には戦の夢が続こうとも、寸前の姉のことを考えると我慢ができた。

でも、今の夢は違う。

エルケの足元を叩き壊して行く夢だ。

夢に姉は出てくるのに、エルケの名前を呼んではいなかった。違う誰かの名前を呼んで、嘆いている。エルケはまるで存在してないかの様に、エルケの代わりにその人間がいるかの様に感じてしまう。今まで見ていたものを全て塗り変えていく。今はもう、全く違う夢しか見ないのだ。

行かないで、死なないで。ごめんなさい、許して。

夢の中では、嘆く姉の声が反響する。

今まで大事にしていた思い出は誰の物だったのだろう。エルケがそう考え始めると、大切だった姉も何処かに消えてしまいそうだった。

そもそもゼークトなんて村も、本当にあったのか。

滅んだのは夢で、相変わらずあの場所にエルケ以外の皆は生きているんじゃないか。何事なく生活し、エルケのいない平凡で優しい毎日がまだ続いているのではないだろうか。

(僕は……誰で、一体何なのだろう?)

考えると、やっぱりそこに全ては行きついてしまうのだ。

やっと見つけた布切れをしっかり握り締めて、エルケは自分のベツドに片手をつき、ゆらりと立ちあがった。

振り返ってヤンを見ると、途端に目の前がぼやけてくる。

「……お前、大丈夫か?」

(大丈夫だよ。ヤンは心配性だな、何言ってるのさ)

心で思っても口は重く、開かなかった。

揺らぐ体を支えようとして、体が重いのにエルケはやっと気付く。

「……おい!」

ふらついたエルケの小さな体が、そのまま腕を広げたヤンの胸の

中に収まった。

窓の外はもう日も暮れて、眠りにつくには最適な暗さになっている。勿論このたるさが夜の睡眠の所為である筈もなく、いつもの発作の時期が来たのだ。

（もう……マルガとデリアと遊んであげたかったのに……ごめん）  
背中に回ったヤンの大きな手に力が入る。

抱き上げられるのは久しぶりだった。

（……何だ、必要な時にはきちんと触れてくれるんだ……）

今回は、短いだろうか。それとも、これから何日眠ってしまうのだろうか。もしかしてこのままずっと目覚めないのかもしれない。エルケ自身にも分からなかったから、ただ怖かった。

「……大丈夫、だよ……いつも……だから」  
覗き込んでくるヤンの心配そうな表情。

揺れる感情の波が申し訳なくて、エルケは口端だけを辛うじて上げると笑って見せる。

（そろそろかな、なんて思った瞬間にこれだよ。本当に嫌になるんだから）

オレンジの袋を指差して「カヤに」とだけやつのことと言つとヤンは戸惑いながらも頷いてくれる。

次第に力を奪われていく体とは反して、今回の思考能力は驚くほど冴えていた。

（そもそもヤンは果物なんて切った事あるのかな？ 剣で真ん中からぶつ切りして手渡しそうだよ。六つ切りしてあげて、とか言っておいた方がいいかな……いや、止めとこ。六つ切りでもぶつ切りでもいいよね？ マルガとデリアに新しい服を着せる……のは起きてからにしよう、喜ぶ姿が見たいし。きつと起きた頃には、発注した新しい服も出来上がっているに違いない。カヤとお揃いの若草色の服。レースとリボンは小花の様に明るい黄色。絶対に二人に似合うと思うんだ）

「……ヤ、ン？」

「カヤを起してくるか？」  
違う、そうじゃない。

エルケの口から何も言葉は出て来なかった。掠れた吐息だけが、眠りにつく前のエルケの唇から出て来る。

クルトとこれからずっと一緒にいる為に、エルケにクルトが何を求めているのか。ライゼガングの村でエルケは気付いてしまったのだ。

（クルトが僕に求めているのは、愛情だ。それも親愛ではなく、男女の一途な愛情なんだ）

クルトの激しい感情は波みたいにエルケを飲み込み、何も知らなかった感情をエルケに植え付けていく。強引なエルケの事情に全く配慮してない様に見えるクルトの愛情の前には、エルケの性別も抱えている罪の証も全く関係が無く、ありのままのエルケをただ受け止めようとしている。

クルトが向ける一途な感情をそのまま鏡のように返して欲しいと、エルケを揺さぶってくるのだ。

天秤に乗る激しい愛情に対するエルケからの不変の愛情。

与えられるか自信が無い。エルケは向けられるクルトの愛情の重さに少し怯えてしまう。

（僕は愛されるに値する存在なのかな……？）

エルケは自分がどの誰なのか分からないあやふやな人間だった。実際、罪を犯していなくても刻まれた焼印は呪縛となって苛んで行く。

（カヤは守るべき存在を求めているんだ。自分が全てを投げ出してでも守りたいと、そう思わせてくれる存在を探しているんだ。カヤが見返りを求めず僕を大切にしてくれるのは、僕が今たった一人だからだ。きつと一人で心配せずに立てるようになったら、静かにカヤは離れて行くんだよ）

もしかして、カヤは過去に大切な誰かを手放しているのかもしれない。



そう思い付くと、カヤが先日昔話として話してくれた何かを手放した少女の話も自らのつらい過去を話してくれたのかもしいれない。そうエルケが思い付くのに然程時間はかからなかった。

カヤは失った何かが大き過ぎた所為で、弱い誰かを守る事に自分の存在意義を見出しているのだ。

「まず寝ろ。話は起きてからだ」

ベッドに優しく横たわらせてくれる感触が、よりエルケの眠りを誘ってしまう。

重くなつていく瞼が、視界を全て闇に覆うと残されていた思考能力も次第に緩慢になつてきた。

（でも、僕はまだ確か話したい事があつた筈だ。それを思い出さな  
くちゃいけないのに……あのね、ヤン。僕は　　）

「……ヤン、僕……」

「分かつたから！」

乱暴な口調と反して、優しい指がエルケの目元を覆った。優しい温度と、ぶつきらばうな物言いに心が温かくなる。

その指にエルケが指を重ねたくても、もう動くことは出来なかった。あの厭な夢にただ引き摺りこまれていく。

（僕は、ヤンと一緒にいたいんだよ。僕のままヤンが受け入れてくれるなら本当は一番いいけど、でもそれじゃ駄目なのなら……）

「……僕、弟の代わりでも……いいよ」

瞼の上の手の平が、大きくびくついた。

出ないと思つた声が微かに出た衝撃はエルケも少なからず驚いたけれど、もうあまり長くは話せないとも分かつていた。

（ヤンが望むなら僕も「兄さん」って呼ぶよ？ 夢の中で、僕はずつと誰かをそう呼んでいるんだ……だからもう慣れっこだよ。だから、お願い。僕を拒絶しないで　　）

「……兄……さん」

そのままエルケの意識は闇に呑まれた。

今回は随分と深く潜って行く。そう暗闇の中でも何と無く感じて

いた。

背中が痛い程、抱き締められたのは、きっと夢の話だ。

父親に謁見を申し出る、それも変な話だとクルトは美しいアーチを描く長椅子に腰掛けながら、天井を仰いだ。

綺麗な宗教画が天井一杯に広がっている。

美しい天使と女、果物に緑。水と空。金に物を言わせた証だ。クルトにはその美しさに何の感動も見いだせない。

再三着替えるように通告を受けていても、外套を宮殿前で付け替えたのみでクルトは旅の埃臭い服のままである。

何も恥ずかしい物を着ている訳でもないのに、せめてワルゼ騎士団の団服を着ていればよかったのに、と言わんばかりの反応なのがまた面白くない。

大広間での謁見を進める家臣の訴えを退けて、身内としてクルトを私室に呼びよせたのは父親であるブラル大司教の方だった。

大体、何を聞きたいのか予想も付いていても、クルトの求める情報と交換してからではないと流石に口にする事は憚られる。この対話は取引だ。家族の会話だと思っではいけない。

どんなえげつない聞き方をクルトにしてくるつもりなのか、ブラル大司教夫人が同席する様子は無かった。クルトには一際弱い母親の前では流石に強く出ることには出来ないらしい。

相変わらず天下の大司教は母親の尻に引かれているのだとクルトは苦笑する。

唯一の兄は領境に視察中だったのが幸いだ。

騎士団を放っておいて漫遊 ではないが。と知ったら兄は卒倒してしまっただろう。

ただひたすらにブラル大司教領の為、ヨープで真面目に生きて来た長男だ。クルトが商人の振りをして、情報を仕入れながら飛びまわってるなんて、説明したらどんな反応が返ってくるか想像に難くない。

しかも、最近は男装をしている身元不明の少女に最近執心だ。そんなことを言おうものならきつと直ぐに縁談を用意するに違いないのだ。

クルトは背凭れに頭を預け、一人でくつくつと笑った。

(俺も、随分とエリクに絆されたよね)

テーブルに置かれた紅茶は、運んで来た時には既に冷めきっていた。

手を付ける気も起きずに、クルトはただそれを眺める。この城では何も口にする気が起きない。それもいつも通りだった。

出来るなら早く話を終わらせて、宿屋に戻りたいとクルトは思う。待っていると『彼女』は言っていた。待っているという事は戻っていいという事だろう。それならば、出来るだけ早く戻りたいのだ。それに、マルガとデリアの行く先の事をカヤに確認しておきたかった。あの場所がきつと最適で、一番カヤ自身も安心できるだろう。そうクルトは確信していた。

しかしクルトの頭を一掃悩ませている事があった。

城内部で聞いて来た現在の情勢は、決して安易に考えられるものではなかった。要は、簡単にヨープがライゼ GANG へ資金提供を出る様な状況では無かったのだ。

ビューローの軍がエーゲル手前で小競り合いを起こした事は、クルトもヤンから聞かされて知っていた。

それでもその小競り合いは、思ったよりもあっさり終わったらしい。どうやら、数ヶ月前エリクが遭遇した、余りにも精巧過ぎる偽金貨の威力はあった様だった。

ひとまずの決着を経て、ビューローの軍は戻ったかに見えた。

都市ビューローを抱くマルブルク公国は、緑の多い豊かな土地だ。だが気候的に十数年に一度、雨が壊滅的に降らない年がやって来る。それが寄りにも寄って今年だった。

夏も終わりがけの今時期に雨という雨は殆ど降らずに、土はかなり枯れているらしい。土が枯れると、作物を作る事が出来なくなる。

飢餓が所領を襲うと、所領の根底が崩れるのだ。

それでも鉾脈などの資源を持つている所領は余力があり、苦しい一年を耐え忍べばまた次の年がやって来る。

税を減らし、領民を守れば一年は何とか持つだろう。しかし、その余力がビューローには無い。

マルブルク公国の支援領はきつとビューローを切り捨てるだろう。何故なら、資金を援助しても見返りが無いのだ。仕方ない。

マルブルク公国は自領自身を立て直す事に必死になる。都市ビューローは、恐らく早い内に何処かへ戦争を仕掛けるに違いない。

「どうしたものかねえ……」

クルトは天井を仰いだまま、目を閉じる。

手伝つてくれる？ そんなエリクの声が微かに聞こえたような気がして、無性にその細い腰を抱きたくなった。

そう言えば、ライゼガングで女であることを敢えて知らない振りをしてから余り触れてはいなかった事に気付く。自分の中でも無意識に枷を掛けていたのか、手首にすら触れていない。

日増しに花開いて行くエリクは、今まで辛うじて少年に見えていた部分を全て投げ捨てて行っている様だった。

久し振りにエリクを見たヤンが見た事も無い程驚愕の表情をしているのを見て、クルトは思わず噴き出しそうになった。敢えて口にするのは野暮というもので、勿論指摘はしていないが。

見たものが信じられない。ヤンはそんな表情をしていた。

殆ど見かけは変わっていない筈なのに、毎日見ているクルトでも分からない程に確かに何かが今までとは違うのだ。

仕草、声、視線、微笑み。何が壊れて、何が変化したのか。見当もつかない。

花が綻ぶように、日々纏う空気が変わっていく。それを間近で見ているのは、神の奇跡を目の当たりにしている様だった。

ただ言える事は、あの日を境にクルトの中で何かが変わり、あの日を境にエリクもまた変わっていつているという事だろう。

(冗談じゃなく、本気で城に連れて来る気だったんだけどね。俺は) 　いつ眠りにつくか分からない体でカヤの面倒と双子の面倒を見る為に張り切っているエリクは、長い夢から覚める度に考え込む時間が増えていく。何かをしようと、自分に言い聞かせているようだった。まるで先を急いでいるかのようだった。

首に突き付けた剣を持って、少しずつ壁に近付いている様なものだ。

いつか動けない程までに自分の決めた目標の壁に突き当たり、手に持った剣は首を傷付けるだろう。蝶と出会えば、エリクは本気で向かう気なのだ。クルトは知っている。例え勝算御のない戦いでも、その危ない剣の腕でも。

(何をしでかすか分からないから、出来るだけ傍に置いておきたいんだけどなあ……)

これに限りは本人が望もうと、望まないとも構わなかった。

出来るなら城に困って　と、まで考えてクルトは頭を抱えた。これではやはり父親と一緒にだ。

城と離れた場所にある無骨な全門を抱く宮殿は、昔カヤが父親に閉じ込められていた檻だった。

そして現在、あの中には七歳になるカヤの息子が幽閉されている。幽閉という言い方が悪いかもしれない。

彼は縛り付けられる事も、鎖で繋がれる事も無く、至って塀の中では自由に動けるのだから。ただ彼は宮殿を出る事を未だに許されていない。彼はブラル大司教にとって、カヤを連れ戻す餌なのだ。

当時、カヤは下働きよりももっと下の位だった。

汚い使用人と所領の領主であるブラル大司教が、一体どんな出会いをしたのかまではクルトも流石に聞いてはいない。

それでも間違いは起こり、二人の間にいつしか子供まで出来ていた。

案の定というべきか、身分分相応な働き女の仕業に母親は激怒し、

カヤは城を追い出された。しかし、既に執着していたブラル大司教はカヤを探し出し、結局宮殿に幽閉したのだ。どうにもならない父親だとクルトも思う。

カヤが宮殿から出る事が許されたのはそれから一年後。生まれた子供を奪われ、ワルゼ騎士団のノルベルト副総長の元へカヤが預けられたのが、今から六年前だ。

ワルゼ騎士団に来たばかりのカヤは、初めて会ったエリクそのものだった。

表情を失い、体も疲労と、精神を病んで痩せ衰えて笑うどころか泣く事もしない。

辛うじて握ったのが、ノルベルト副総長の妻が渡した剣だったのだというから、やはりカヤとエリクは似ているのだろう。

鬼教官と名高いノルベルト副総長と、それを越える鬼の妻に剣を指導されてカヤは少しずつ表情を取り戻して行った。

それをクルトは間近で見っていたのだ、何もかも失った人間がまた立ち上がる様をずっと近くで。

クルトがカヤから離れないのを、カヤは贖罪なのだという。

確かに、自らの父親が傷付けた女を切り捨てる事が出来なかったクルトは、そのつもりは無くとも心の奥底では罪滅ぼしのつもりで一緒に旅をしているのかもしれないと気付いていた。

互いに欠けた所を補い見ない様にして、三人で旅を続けた。

ヤンはヨープの騎士だ。

そして騎士になる為に過去、弟を孤児院に預けた。まさか、会えなくなるなんて考えもなかったのだと、ヤンは消えた弟へ言い訳をしたいに違いない。

それでも、ヤンは言い訳もせずただ何年もずっと探し続けている。

足取りの途絶えたエーゲルの孤児院から、一度も諦めることなく探し回っているのだ。それもまた贖罪なのだろう。決して報われることはない。探し続けることで自分を満足させる為に、ヤンは見

つからなくてもずっと探し続けるのだろう。

そんな何処か捻じれ、壊れた旅の仲間にとった一人、加わっただけだった。

それなのに大なり小なり、全員がエリクに影響を受けていく。

ヤンは自らに、エリクに弟を重ねていると思いついてしまっているのだ。どんな状態であれ、子供　しかも男、にこれだけ感情を揺らされる自分が信じられないのだろう。

正面向いて、エリクの視線を受け止めないのはその所為だ。真つ直ぐ見上げてくるあの視線には、何もかもを見透かされそうになる。

(……もし、泉でエリクの裸を見つけたのがヤンだったならどうするのかな?)

そう馬鹿げたことを思い付いてクルトは苦笑した。

それでも、きっと同じ様に口を噤むに違いないのだ。

エリクが望むのは男女の関係では無く、家族的なものだ。別れた姉の様に、絶対的なものを求めている。その純粋さが気高く、時に鬱陶しくなる。

(……カヤはどうかな?)

子供と引き離され、飛び出したワルゼ城からクルトが付いて行った。

決して雄弁ではないヤンが旅に加わると少しは元気になった様だった。

ふざけて笑う事や箸を振り回す事、元々あつたらしい感情の激しい起伏を垣間見せるようになった。ヤンもクルトも笑顔で受け入れられるかと聞かれると、それとこれとは話は別だが。

カヤの変化が顕著に表れるようになったのが、エリクが旅に加わってからだった。

彼女は、エリクの最も求めるものを敏感に察知して一番傍にいる事が出来る場所に収まった。溢れ出そうな程の母性は行く先を決めて、慈愛を向ける相手に執着する。どう考えても厄介な人間だ。

嫌われないよう、もういなくなってしまうわぬよう。カヤはエリク



を見ながらいつも怯えている。

そしてエルケが一人で立てるようになったら、自分はまた用無しになるのだと怯えている。エリクが言えば、カヤは今度こそ息子と会つのを決断するかもしれない。

「……俺は、何をしたらいいんだろうね？」

今回父親であるブラル大司教と向かい合えば、もう自らの立場から逃げる事は叶わなくなるだろう。

政治に係わる全ての事から逃げて来たクルトが、今情報を流し父親と話せばそれはもう駒として動くという事だ。

ただの人間ではなく、責任と責務を背負ったワルゼ騎士団の総長になるのだ。

（俺はそれをずっと嫌い、それからずっと逃げて来た。でも、もう逃げる事は叶わないんだ……それでも仕方ないのか？）

重厚な扉が開き、予想していたよりももっと年老いたブラル大司教が胡散臭い微笑みを浮かべながら入ってきた。クルトは久し振りに会う父親だ。

顔を顰めて、クルトは長椅子から立ち上がり礼に則って挨拶をした。吐き気がする、何もかもを叩き付けて逃げてやりたくなった。

しかし、それもかなわない。

（エリク……恨むよ）

彼女は悲しげな顔をして待つのだろう。そう考えれば、まだ少しましな気がしてクルトは偽物の微笑みを顔に張り付けた。

「ゼークトという村はご存知でしょうか」

クルトの前で鷹揚に腰掛けているブラル大司教が微笑んだ。

彼は非常に機嫌がいい。地方を放浪していた次男が二年ぶりに城へと顔を出し、政治談議を出来るのがそんなに嬉しいのか。

クルトは聞いた事への返答を急いで、眉を僅かに寄せながらその内心を計り知れない顔を見遣った。

ついて来た使用人の内、何人かは人払いをさせている。

一人残った使用人は古参の家令だ。彼までをこの部屋から追い出す事はまず無理に近い。そもそも大司教自身が、家令の存在を気にしていない以上クルトが口を挟む訳にはいかなかった。

テーブルに置きかえられた紅茶のカップは湯気が立っている。

焼き菓子も香ばしい匂いをさせていた。

「ああ、聞いた事があるな。人魚の村だね」

(……人魚の村？ 随分と夢見がちな名称だな)

クルトは首を傾げた。

「その通称は存じ上げませんでした。マルブルクのビューローに一年以上前に攻め込まれたそうです」

「鉱脈の在処を明らかにしなかったそうだね。ゼークト側の強欲で滅んだ事になっていけるけれど、さてどうだろうか」

「どうだろうか、とは」

(これだからノルベルト副総長と、こいつとは話すのは嫌なんだよ)

クルトは自分の話の難解さを棚に上げて毒舌を吐いた。

謎解きをしているかのような。それか、見た事のない文字で書かれた古文書を読んでいる気分だ。

解読できるのはたった一部だ。そこから紐解くしかない。

「あの村には、古来から夢物語みたいな言い伝えがあつてね。吟遊詩人が囀る類の物だが、軍人には理解できない繊細な物語だから理解できなかったのかもしれないね」

苛立ち紛れに紅茶のカップを持ち上げれば、美しい鉛色の水面が揺れた。

言い伝えから紐解くべきか、それとも違う場所から進むべきか。

クルトは切り出すのを躊躇する。

(軍人からにしようかな。まあ、おとぎ話はあくまで夢物語でしかないし)

慎重に言葉を選んだ。間違った言葉を話せば、一気にこちらの内情がばれてしまう。気は抜けないのだ。

「ビューローに子飼いの蝶がいる事は、ご存知でしたか」

「知らないな、初耳だ」

本当に知らなかったらしい。

大司教はくつくつと笑い、凄いな、と言った。

(くそつたれが……！)

貴族らしからぬ毒舌を心の中で吐き捨てる。

ブラル大司教の台詞はまるで初めての手伝いを終えた幼い子供にかける労いのようだ。

奥歯を噛み締める、早くも腹が痛くなりそうだった。

「ここ数年で激増した我ブラル大司教領の人身売買も、恐らくその蝶の暗躍の所為だと思われます。エーゲルの修道院と孤児院の閉鎖も、恐らく蝶の係わりがあると」

「じゃあ、数年前からマルブルク公国はブラル大司教領に戦争を仕掛けようとしているということかな？」

(そうなのか？ いや…… そうなんだろうな、多分)

それでも、何度考えてもクルトにさえ何を目的にしているのか、よりによって何故ビューローが、ヨープの城を混迷させる事をしていいるのかが分からないのだ。

まるで何かから目を逸らそうとしているようだ。

白の混じる薄い金髪の髪が帽子から漏れている。

リンネルのシャツ衿を指で辿りながら、大司教は口に紅茶を運んだ。どうやら、クルトの見解を待っているらしい。

(正解か、不正解か。 そうなのではなく、ただ子供の成長を見たいという所か…… ふざけるな)

部分的にしか見ていない様な顔をして、実は手広く視界を広げている。

殆どの情報が大司教にも入っているに違いない。ビューローにも蝶がいるのと同じように、ブラルにもまた蝶に似た存在はいるのだ。

何処からでも、何でも仕入れる事の出来る商人が存在している。

「ライゼガングの金鉱の話は聞いているよ」

返答をする前に、話が違う方へ展開した。

その曲がる方向も難解だ。何処から攻めるべきか分からなくなつて自分の立場が分からなくなつてしまふ。

下から政情を見るべきか、上に立って政情を見るべきか。クルトは混乱するのだ。

「枯渴した金鉱の村はかなり困窮しています、早い時期に何らかの支援をした方がいいと思われます」

「その報告は聞いていますよ。で、何らかとは？」

(……試しているのか?)

宿屋で恐らく暢気に双子と遊んでいるに違いないエリクの頭を、苛立ち紛れに小突いてやらないと気が済まない。

何らかとは、と聞かれても満点を貰える答えが見つからなかった。それが今回の目的だったからだ。

「軍も金も動かすには、見返りが必要になる。ワルゼ騎士団総長は、ブラル大司教に見返りの無い出費と戦争を仄めかして来たのかな」

自分がその矢面に立つというならば、それもありかもしれないけれど。そう大司教は継いだ。

「お前はもう少し、背中後ろに沢山の人間がいる事に気付いた方がいい。安易に戦争を仕掛けるのは、ザクセンとマルブルクに任せなさい。その戦の意義が見つかったら、その時に考えよう」

つまりは飢餓が起こり、逃げ場を失ったビュローが攻め込むまでヨープはだんまりを通すという事だ。

蝶を放し人身売買を黙認するという事だった。

「ライゼガングは、切り捨てるおつもりですか」

責める様に言ったクルトを、ブラル大司教は話も終わったとばかりに立ち上がり見下ろした。

「ライゼガングを救う意義が見つからないと、無理だろう。金を出すのに教会も修道士会も納得しまい。今は教会を取り纏めるので精一杯だよ。ライゼガングに新たな鉱脈が見つければ別だが」

(……それは難しい、だろうな)

鉱山は領境に背を向けた形で広がっている。

もし新しい鉱脈を探すのだとしたら、マルブルク公国との領境に隣接した山まで赴かなくてはいけない。それも、武器も無く危険も承知でだ。

クルトは何か言い掛けて、口を噤んだ。

気付くと、上からの立場ではなく村人など領民の立場になって大司教に話し掛けているのだ。切り捨て、割り切る事が難しくなっていた。

「話は、終わりかな？」

その言葉を聞いて、家令が大司教に正装用の長いガウンを手渡した。

クルトは奥歯を噛み締めて、はい、とだけ答える。

完敗だった。ここに長男がいれば、政治談議はこんな謎解きでは終わらなく、もっと長い時間かけてクルトの考えが如何に稚拙で安易な考えなのか、上に立つ者の立場から延々と講釈されるに違いない。子供臭いけれど、長男が欠席で助かったとクルトは溜息をついた。

戦争を仕掛ける、それも騎士団が矢面に立つ。

ビューローと事を構えるとはそういうことだ。

蝶は黙認すべきなのか、明らかにして火炙りにするべきなのか。

ワルゼがその蝶に係わってる事までは流石に口には出せなかった。

「そうだ、ゼークトでは人魚が石を取ってくれるそうだよ」

「は？」

急に言った一言は余りに子供騙し過ぎて、変な声が出てしまった。鉱脈の無い宝石、エリクは確か石は海からやって来るのだと言っていた。

「あれは人魚の命だから、人魚にしか見つけることが出来ないと聞いた。海に潜り、どこぞの場所から石を見つけてくるらしい。まあ、これも言い伝えだから真偽の程は問われるけれど」

「……それは」

震える声が自分の物だと気付くのに、時間が掛かった。

「ベルンシュタインは元々貴族にしか流通していない石だったからね。過去ゼークトの職人と接触する機会があっただけだよ。確か、その職人はその昔エーゲルに嫁いだと聞いた。彼女が言うには、人魚は滅多に姿を見せないらしい。雪の吹きすさぶ嵐の夜や、波の高い荒れた夜に姿を見せて石を浜辺に置くのだと言っていた」

まあ、普通の人間がそんな夢みたいないなことを信じる事は無いだろうね。大司教は小馬鹿にした口調で笑い、家令の開けた扉向こうに足を一歩出した。

一瞬、立ち止り背中を向けたまま「子供にいつでも会いに来なさいと、彼女に伝えてくれるかな」と言った。そしてそのまま扉は静かに閉じる。

クルトはテーブルを軍靴で蹴り上げた。食器がかん高い悲鳴を上げた。

大きな手の平が頭に乗る。

肩を竦めてそれを受け止めると、髪が滅茶苦茶になるのも構わず頭が揺らされながら撫でられた。

逆光で顔は見えない。ただ傍にいる事に自分は安心していて、これからこの人と離れなくちゃいけないなんて思ってもみないでいた。

小さな手の平の自分の手を見ると落ち込んでしまう。頭を撫でる手の平ほどの大きさになったら迎えに来る、そう言われて、沢山パ  
ンも野菜も食べるよ、と元気に答えた。

嫌いな野菜だからって、テーブルの下に落としたりしないよ。鼻を掴んで食べるよ。そうしたら、直ぐに大きくなれるよね？ そう聞くと笑ってくれる。そうだ、頑張ろう。

初めて見た格好は少しきこちない。

首が苦しいのだと文句を言っていた。似合うよ、と笑ったら少し照れ笑いを浮かべる。そうか？ お前に言われると安心したよ、そう彼はまた笑った。

眩しい日射し。風が吹いて辺りの木々を揺らす。大きな青の湖、まるでアクヴァマリンの様に輝いていた。花弁が風に煽られて、飛んで行く。湖の上を辿りそのまま丘へと昇って行く。

二対の天使の天井、慈悲深い天使は神と共にいつでも優しく見守ってくれる。だから置いて行かれて一人になっても、寂しくはないよ。

頭を撫でる手、優しい手。

体が少しずつ動かなくなると暗転する。

吹雪いている灰色の空が視界一面に広がった。降り注ぐ大きな雪の粒は頬も、指も全てを浄化し包んで行く。

嘆く声を聞いて、悲しいと思う。

大切にしてくれた人を泣かせてしまった自分の脆さを怨む。細い指が頬を辿ると、あの時の優しさと似ている何かが滲み込んできた。

孤児院で別れる時に、大丈夫か？ と聞かれた。頭を撫でながら心配そうに、自分来る事は出来ないけれど必ず迎えに来る、と言った声に力強く頷いた。

その時に撫でた手の感触が例え違う人の物だとしても、今の手と凄く似ている。心配しているのだ。そして自分を凄く責めている。

ここは自分の墓標だ、永遠に眠る場所だ。

歩んできた道がここで途切れてしまうのは凄く悲しかった。

また笑って、彼女が修道服を揺らしながら言っている。もう一度笑って、お願い。そんな無理な事を。出来るならとつくにしているよ。動かないんだ、動けない。

悲しいな、寂しいな、苦しいな、切ないな。流れて行く今までの思い出が幻の様に現れて消える。せめてもう少し、せめてもうちょっと、あの人にまた会えるまでこの地に立っていたかった。

冷たい雪が降り積もる頬に、一筋の温かいものが流れた。

自分の体にこんな温かいものがまだ残っていたという事自体が驚きだった。涙は雪を溶かして、顎を伝い下に落ちると積もった雪と同化してしまう。

でも突然滑り込んだ何かが、冷え切った体を温めてくれた。

包み込む様に腕が伸びると、海の匂いがした。赤金の波が何度も打ち寄せて、引いてはまた混ざり込む。涙が雪と同化するように、ゆっくりとそれは同化していく。

小さな女の子が波と融け合っている腕の中で眠っている。瞼を閉じて、固く指を握り、その小さな指の中には何を握っているのか。広げようともしなかった。

混ざり合う、融け合う体。目の前を赤い涙が、押し寄せては逃げて行く。鮮烈に彩られた赤い海。こんなに恐ろしい海の色なのに、どうしてかもの哀しく見えた。



ゆっくりと目を開ける。少女の目が開いたのか、それとも違うのか。もう何も分からなかった。しっかりと握り締めた指を開き、宙へ伸ばす。誰かへ向けて。

暗闇の中で微かに見える頬を指で辿ると、傍にいた顔は驚いたようだった。

無骨な顎の線を、エルケは初めて見た何かを見るような気持ちになりながら指でなぞる。不思議で仕方がなかった。

強くたまに軽く、時に辿った道を戻りながらゆっくりなぞって行く。盲目の人が指で顔の輪郭を辿る様に丹念に、そうやって彫刻に移しこもつとでもするように。

誰だろう？ この形は。触れられている相手の気持ちを慮ることなど出来ずに、ぼんやりしたままで思う。

「……エルケ」

その人は名前を呼んだ。呆れた口調はため息交じりだ。

誰だっただろうか？ 物凄く会いたい人だった筈なのに、今のエルケには思い出せなかった。でも、誰よりも待っていた人の筈だった。いつも優しく傍にいてくれた。

首を傾げ、その太い首を辿り頑丈そうな肩へ触れると戸惑い気味に見開き見下ろしていた眼が俄かに熱を帯びてくる。

彼はエルケに顔を寄せて、乱暴に言葉を吐き捨てて来た。

「お前、また寝惚けてるのか」

馬鹿か。そう言いながらも、彼の言葉には決して悪い意味は含まれていない。まるで子供を窘めている口調だ。馬鹿か、だから放っておけない、そう聞こえる。

足元が温かい。先程の夢ではあんなに冷えていた筈なのに。氷の様だった指も彼をなぞるとすぐに温まった。

苦しげな低く甘い声を聞いて、エルケの胸の奥が締め付けられる。低い声、たまに混ざる甘い毒薬。吐息交じりのその声は、少しずつ

耳を犯して呼吸を阻害する。息が苦しい。

大事な人、傍にいたい人。ずっと傍にいたことができると思っていた人。色々な感情が絡まって、分からなくなる。

そうだ。耳にはまだ触れていなかった。エルケの小さな声を受け止めて、彼の内部に届けてくれる。

耳の縁を辿り、指の腹で撫でた。執拗に触れて、貪欲にまさぐる。煽っているなんて、そんなつもりはない。もっと確認させて欲しかった、ここにいるという証を見せて欲しい。

離れるどころか、少しずつ近づいている体は触れるのに丁度良く。ゆつくりと丹念にその骨格の存在を確かめた。

何もかもが違うその体、背骨と背中の筋肉。引きしまった腰のくびれ。全体的に固く、ごつごつしている。傍にいる。次こそはずっと。互いに存在して傍にいる。

そしてまた微笑んで上に被さる顔を見上げた。手を伸ばして、眉、鼻、唇。親指の腹で柔らかい唇を撫でる。指に吐息が当たった。なんて熱いのだろう。

この人の顔を見た事がある。まだおぼつかないこの眼でも、確かに見た事のある顔だった。

苦しそうに眉を寄せて、耳の横で拳が握られた。それなのに、その拳は決して体には触れて来ない。その癖、貪欲にもう片方の手は髪をひと房、撫でている。まるで、その部分しか触れる事が許されていない様に。

指から髪が逃げて行くと落ちて行く髪を少し乱暴に握った、逃げるのも許さず。

少し深く覆い被さりながら何かを咎めようと彼は口を開き掛けて、でも何も言わずその唇は閉じた。大きく呼吸する姿を見上げた。荒い息に微笑んで、親指を使ってその唇に封をする。

驚愕の色混じる瞳を見ない様にして、次は手の平をヤンの頬に当てた、って　え、ヤン？

覚醒してからのエルケの行動は迅速で、それでいて衝動的だった。

「ちょよ！ ちょよ、ちょつとごめん！」

目の前に近付いていた人間の胸を思い切り強く押し退ける。が、ヤンを押し退けるつもりだった筈なのにその筋肉質な体はびくともせずに、逆にエルケの体の方が衝撃で吹っ飛んだ。

ベッドから転がり落ちる、そう思った瞬間。未だヤンに掴まれていたエルケの髪が一房、思い切り引つ張られる。ぐんと首が鳴り、物凄い音を立てて体が前につんのめる。

そのまま、ベッドの頭部分でしこたま背中を強打して、エルケは大きな口を開けると声の無い悲鳴を上げた。

背中が軋んで物凄い痛みが背骨辺りに走る。呼吸が一瞬止まり掛け激しく咳き込んだ。

それでも行き場のない恥ずかしさは治まらず、エルケは焦ったまま勢いでベッドの上に立ち上がる。窓枠の外が見えてやっと動きが止まった。ああ、暗い。それが我に戻った最初の感想だ。

「……まだ、夜だったんだね」

カーテンの引かれていない窓向こうはまだ暗闇だった。

眠った今日の夜なのか、数日後の夜なのかは分からない。もしかしたら、夜明け前なのかもしれない。

発作が起きる度に、いつか眠ったまま起きなくなるのではないか。そう恐怖を感じることもある。

でもやっぱり直ぐに目覚めて、誰かの姿を確認出来ると人は安心するものなのだ。例え、こんな状況とはいえ。

都会のヨープだけあって、外は真っ暗なのに周りの家中にはまだ灯りがちらほら見えた。空は漆黑だし、部屋の中も闇に覆われている。外から漏れ入って来る僅かな灯りで、やっと微かにヤンの背中が見えた。

付いててくれたんだ。そう思うと胸の奥に灯が付いたみたいに温かくなった。それなのに、もう本当に無意識とはいえなんて事をしたんだろう。ちょっと寝惚けていたにしては酷過ぎる。

結局、今回は何時間眠ったんだろうか。もしかしたら、一日眠る

ことなく目覚める事が出来たのかもしれない。今回は結構速かった。時間を無駄にする事は何とか避けられたのが良かった。

大きな溜息が、向けられた背中から聞こえてきた。

ヤンは呆れているらしい。流石に当たり前だ、弁解しようも無い。彼は被害者だ、まずは謝罪あるのみだろう。

エルケは思う限りの謝罪の言葉を模索する。

「えっと。本当にごめんね、吃驚したよね」

白壁とベッドの木枠寸前まで寄ってヤンから距離を取っているのも失礼な気がして、エルケは少し背中に近寄ると声を掛けた。申し訳なさに声が小さく、しどろもどろになってしまふ。

色々と触った気がした。でもあれは決して誘っていたとかでは無くて、むしろ存在の確認だ。まるで姿が見えていないかの様に、指で形を確かめていた。何故それをしようとしたのかは、寝惚けていたエルケには覚えがない。

「いや、いい」

ベッドの端に屈んでいたヤンが、深く頭を下げて地の底を這う様な低音の声で返事をくれる。

いい、と言った割に彼は背中を向けたままだ。少し思う所があるのか、その大きな手で頭をかいている。

らしくないヤンの反応に、どうにも心配になった。嫌われたくない、その思いだけで言い訳が零れ出る。

「なんか寝惚けてたみたいなんだ。今回は特に夢見がその、悪くて」

少し脚色した夢の内容をうる覚えで説明する。ああ、せめてどんな夢だったのかは突っ込まれませんように。もう本当に恥ずかしくて、耳から何かが出てきそうだ。

あの行動の意味を説明できる何かがあればいいのに、でもそんなもの存在しなかった。ただ傍にヤンがいたから確認したのであって、それ以上でもそれ以下でも無かった。

そろそろ手を伸ばす。肩に触れると、何かの間違った様な衝

撃があつた。ヤンに指先を掴まれているのだ。

その痛みに少し顔を顰めて、言った。

「ごめんね。最近の僕、やっぱりおかしいんだ」

肩越しに覗き込むと闇の中にぼんやり見えるヤンの表情は、やっぱり少し困惑していた。

一度、口を開き掛けてエルケは何も言えずにまた閉じた。変なこ  
としないから嫌わないで、そう心の中で言いながら覗き込んだエル  
ケの頭上に大きな手の平が乗る。

撫でられるのなんて、久し振りの事だった。

頭が揺れる。

その度に、何かの思い出とその手の平が重なって行った。それは  
ヤンと出会った時の思い出なんかじゃなく、もともとも昔の思い  
出だ。先程まで見ていた夢がまだ鮮烈に残っていて、被さって来  
る。記憶が混乱している、心臓が激しく鳴り響いた。

撫でる手の平の重さに、エルケは夢の誰かの様に肩を竦める。片  
目閉じた瞼の裏に見えるのは、今みたいに少し感情を抑えた顔なん  
かじゃなくてもっと若い頃のヤンの幼い笑顔。

何枚もの絵を床に順番に投げ付けた様に、今、昔、今、昔、と思  
い出が重なって行くのが分かる。

夢をまだ見ているのだろうか。違う、今は現実だ。夢じゃない。  
ここにいるのはエルケかエリクであって『君』じゃない。でももう  
目覚めている筈なのに、どちらが現でどちらが夢なのか分からなく  
なってくる。

これが夢なのならば、またこの夢の終りに『僕』は死んで墓標が  
立つのを黙って見守るのだ。灰色の浄化の雪が降る夢を繰り返し、  
見なくてはいけない。

この背中是谁だろう、名前はなんだったつけ？

笑って、孤児院に置いて行ったのは、迎えに来ると言って自分を  
置いて行ったのは誰だっただろうか？

「……兄、さん？」

眼の前のヤンから、ぎり、と苛立ちの音が聞こえてくるようだった。

ヤンがこつちを振り返って反応出来ないエルケの体ごと腕で巻き取る。

余りに乱暴で、体が少し宙に浮きあがった気がする位だった。

エルケは、自分の浮いた両腕がヤンの背中から生えているのを不思議な感覚で見上げた。今、何が起こってるのか。全く分からずに眼を見開いたままだから腕が良く見える。薄闇の中で。

エルケの首筋と鎖骨の間にヤンの顔がある。エルケの背中と腰にヤンの腕が回っている。

背骨が軋む程、強く抱き締められて痛み思わず小さな悲鳴を上げた。骨が軋む音がする。

「……い、痛いよ。ヤン」

吐息交じりの悲鳴で、唇の前にある少し癖かかったヤンの髪がふわふわと揺れる。

固い背中を小突いても腕はびくともしないで、むしろ背骨を折るうとでもしているかのように抱き締める強さは増した。

「何のつもりだ」

苛立ちを抑える声は、鎖骨に直接吐息となって触れてくる。痛い、そしてとてつもなく苦しかった。

「何のって何がさ。だから、痛いって！」

「お前は、俺の弟にでもなるつもりなのか？」

ヤンは背骨を押し折るつもりなのかもしれない。

腕の中でもがいても、ほんの少しでも体が動く事は無かった。

最初は小突くだけだった手を拳にしてエルケがヤンの広い背中に叩き付けても、重い音が聞こえるだけで彼は全く動じてもない。

苛立ちが募るのはこつちの方だ。心の中で、乱暴に文句を吐き捨てた。

避けておいて、よく言うよ。出て来ない声は、エルケの頭の中で反響する。響いてどんどん大きくなっていった。

だって、そうでもしないとヤンは傍にいてくれない。好きだとか嫌いだとか、そんな陳腐な感情ではヤンはエルケを選んで傍にはいてくれないだろう。

エルケが『女』だから駄目なのだ。男で無くては、駄目だ。失われたヤンの弟にすら、女のエルケではなることが出来ない。

大きな入れ物から洩れ出た声は唇から飛び出した。思い出すのはワルゼ城での、胸を突き刺すような痛み、あの時の絶望感。

「自分で言ったんじゃないか！ 僕が男で良かったって。それなら僕をいなくなった弟の代わりにちよつと傍に置いてくれるくらい、別にいいじゃないか」

背中痛みで、最後は涙が出た。

「どうせ、皆自分の行くべき所に戻って行くんでしょ？ 僕はこれから旅が終わったら、また一人に戻るんだから別に今だけ甘えてもいいじゃない。カヤだって、クルトだって、ヤンだって戻る所がある癖にずるいよ。僕は戻る所も無くて、どうせ迎えてくれる人もいなくて、今なんか自分自身でさえ見失ってるのに！」

なんて自分勝手な事を考えていると暴露してしまったのだろう。思わず勢いでエルケはずっと隠してきた事を全部叫んでしまった。戻る場所があるのも、ないのも、それは仕方のない事でゼークトが無くなったのもどうにもならない事だ。それを責めるのはお門違いなのは、エルケにも十分分かってるというのに。

背中の腕が解かれて体が離れた際に、浮いていた両腕を使って泣き顔を隠した。腕に涙の感触がある。

「いいじゃないか、別に少しの間くらいヤンを兄さんだと思っただって！ ヤンの本当の弟が見つかったら、直ぐにそんなお芝居みたいな事止めるからさ。別にそんな怒ることでもないじゃないか！」

見つからないといいな、なんて弟として傍に置いてくれないかな。見つからないといいな、なんて弟として傍に置いてくれないかな。見

本当はずっと傍にいてくれたらいい、なんて思っている事も全部内緒だ。

「違う」

顔を隠したエルケの両手首を、掠れた声を出したヤンは掴み力を入れた。

泣き顔を見られるのが嫌で、首を振って抗う。唇が震えて、歯が鳴った。ヤンの戸惑った顔が寄って来る。

見られたくない。

「……エリク、違うんだ」

自分の名前がこんな切なく響いた事があつただろうか？ ただ名前を呼ばれただけなのにエルケはまた泣き出しそうになってしまう。

「何で避けるの？ ヤンは僕と一緒にいない方がいい？」

「いや、そうじゃない。俺は」

頬にヤンの息が当たる。

顔を隠していた両腕が、腰の横へと下ろされた。

傍に寄ってくるヤンから逃げようとしたエルケの体を閉じ込めるように、ヤンの長い腕が尻の横の寝台に付く。宙に浮いているヤンのもう片方の腕も、エルケの肩に回って来た。

流れる涙が嫌で見られない様に俯くと、下から出て来たヤンの大きな手の平が乱暴に頬の涙を拭った。

「俺が悪かった」

ヤンの大きな手の平だとエルケの頬だけではなく顎と耳まで全部包み込んでしまう。ゆっくりとその手の平に力が籠るのが分かった。

「お前の言いたい事は、よく分かった。だから泣くな。」

囁く様な声の後、少し動きが止まる。正面のヤンが深呼吸した。躊躇するように、指が頬から離れてそして戻る。

「……ヤン？」

「戻ったよ」

何かを蹴り飛ばした激しい音と、不機嫌な声が重なった。



開いている扉の向こうでクルトが外套を翻して立っている。

片足を持ち上げているという事は、どうやら蹴り開けたらしい。暗闇の中でも、眼が闇に慣れていている所為か土で汚れた軍靴の底が見えた。

ブラル大司教と会うと別れたのが昼だから、もし今が当日の夜なのであれば結構話し合いには時間が掛かったらしい。クルトは随分と疲れた顔をしていた。それとかなり機嫌が悪い。声も、そして表情にもそれはありありと見えていた。

突き殺しそうな視線をヤンへ向けて、クルトが促した。と、言うよりも彼は命令に近い口調で言った。

「ヤン、頭を冷やしてきた方がいいんじゃないか？」

「……ああ、分かった」

鈍い返事をして、ヤンがベッドから立ち上がる。手の平を付いた木枠の軋んだ音がした。

「ヤン？」

離れるのが少し寂しくて名前を呼んだ。

これから少しの間は同じ部屋だから、傍にいる事が出来るのに、本当にヤンが分かってくれたのか。それを聞いて無かったから不安になった。

「僕、ここにいてもいいんだよね？ ヤンは嫌じゃないんだよね？」

背中を向けたまま、ヤンは「ああ」と答えた。

マルブルク公国を覆う暗雲は、次第に周辺を覆い尽くす嵐雲となった。

ザクセン宮中伯領、ブラル大司教領の合間を縫って、アロイス地方へマルブルク公国がその領土を蚕食しようとする目論んでいることなど知る由も無く、その進軍方向にライゼガングの山が一部入っている事も勿論未だ誰も知り得ぬ事だ。

ただ虫の知らせとでも言うべきか、同時期に勃発したミュンヒ付近の小競り合い　またそれも干ばつによる被害で気がたった農民の起こした小さなものであったが、の為にミュンヒ近くに駐留している総団員二百余りのミュンヒ騎士団はライゼガングとヨープ、それにワルゼ騎士団との距離を僅かに縮め、その眼の届く範囲を狭めていた。

一方、ワルゼ騎士団と言えば総長不在の中、ビューロー子飼いの蝶が出入りし、情報がビューローに漏れていた事もあり間者の絞り出しが急務となった。

現在ヨープに滞在する総長へ仔細な連絡を入れる度に、ライゼガングで探索の続けられている鉱脈の報告が頻繁にクルトへと届けられる。

本来、互いに干渉するのを由とせず、長期に渡ってその距離を保ち続けていたミュンヒ騎士団とワルゼ騎士団はこうやって都市ヨープのブラル大司教の目の届く範囲に拠点を移す事となり、他にも騎士団を抱く海沿いのパウルゼンがブラル大司教の指示で僅かな動きを見せた。

パウルゼン騎士団は少数精鋭を前衛隊としてまずブラル大司教領内の海側へ秘密裏に進軍させ、マルブルク公国都市ビューローによって滅ぼされた村ゼークトのほぼ真横に位置する形でその足を止め

た。

エルケが目指している三人と離別する予定だった目的地が藍の街と呼ばれるパウルゼンだ。そこであればブラル大司教領内を通過し、比較的安全にゼークトの近くへ辿りつく事が可能だ。ただ、パウルゼンに辿りつく為にはいくつかの山や峠を越えなくてはならず、現在の進行状況では目的地に入るのには冬が近くなるのが避けられなかった。

次第に水面下で動き始める蠕動の中、雲が間近へ辿りつかず嵐を未だ知らないエルケは、現状を打開する為の小さな扉を開けるその小さな鍵を自らの体内に宿している事も知らず、未だ自分の変化に戸惑っている。

そして、全ての舞台は整ったかに見えた。

正面から夜風を受けて、エルケは眼を細めた。

珍しい時間に眠っていた所為か。汗をかいた体に夜風は少し寒く、大きくくしゃみをするとかルトが外套を投げて超越す。

カヤは双子とあの狭いベッドの中で重なる様に眠っていた。いつもならば、目覚めた時には比較的カヤが起きている事が多い。ヤンは離れていたのもあるけれど、彼はエルケの発作にも近いあの症状を今まで見た事が無かったのだ。

眠っているエルケを置いて、先に眠るとは彼女らしくなかった。無理して何でもないように振舞っていても、やはり体調が芳しくないんだろうと思う。

それとも、この地がそうさせているのか。それは、まだエルケにも分からなかった。

ヤンとは言え、何処で頭を冷やしているのか。ぱつと見、何処かにいる気配はない。今夜はもしかして部屋に戻って来ないつもりだろうか？ それはそれで少し寂しいけれど。

クルトに誘われるまま、泣いて腫れぼったい瞼を隠しながら、エ

ルケは宿屋の屋根裏部屋に来ていた。

勧められた屋根裏部屋への階段を見上げ、一度躊躇する。

細く脆そうに見える手摺を掴んだまま、後ろで上がるのを待っているクルトを振り返った。後ろで待っている、という事は一応彼もエルケが転がり落ちない様に気を使っているのだ。

ありがたいけれど、でもやっぱり。悪気を感じて、エルケは囁いた。

「やっぱり、勝手に上がったら怒られるよ」

他の客も宿泊している事もあり、聞こえない程の小さな声で言ったエルケの背中をクルトは指で小突く。いいからさっさと行け、そう促しているのだ。

夜が暮れる前に仕方がない事とは言え、しっかり眠ったエルケには当たり前だが眠りの波はやって来なかった。

クルトが城で話してきた事を聞きたい気もするのだが、移動するってことはあの部屋で話が出来ないらしい。

「知らないからね。僕、クルトに無理やり登らされたって言うんだから」

戻ってくるのは苦笑と、背中を押す手の平だ。

厭々ながら登った先には、想像以上に広い空間があった。

奥に小さな木箱がいくつか重なっているのが、闇の中でも微かに辛うじて見える。それ以外は均等に四つ並んだ窓から入って来る月灯りしかない。

それでも、先程までいた部屋よりも随分と明るい。

恐らく屋根裏のお陰で、月灯りが周りの建物に障害されないのだ。足を踏み出そうとして足首が沈み込む嫌な感触にエルケは、うわあ、と呟いた。

雨水が床を腐食し歪み、部分的に底が抜けかけている。

「気を付けなよ、ただでさえ足がおぼつかない癖に。警戒って言葉を知らないんだからなあ」

含みのある言葉は厭味だ。多分、今現在の事だけでは無い様な気

がする。

膨れっ面を床へ近付けて床の歪みを探しているエルケの横を、まるでこの暗闇が全て見えているんじゃないかと思わせる程迷いの無い足取りで、クルトが窓際へと歩いて行った。

「それなら、手ぐらい貸してくれてもいいじゃない」

文句を言うと、月灯りを浴びて振り返る。月灯りがクルトの金髪を美しく彩り、彼は微笑む。

「貸さないよ。エリクは男なんだろう？」

そうだよ。男だけど、こんな暗闇なんか全然見えないよ。男だつて、女だつてそれは同じじゃないか。

長く返したいのを堪えて、一言だけ「意地悪」と言った。

思ったよりも念の籠った恨み言を声に出すと、クルトは体を少し折って笑う。

クルトが辿った真ん中を通るのを諦めて、背中に壁を張りつかせながら窓際へ回った。途中、再び足首まで埋まった時であっても、慎重に歩けば落ちる寸前で何とか引き抜けた。

眼の前で端正な顔が笑っている。お疲れ、と軽く言うと腕を伸ばしてくれた。だったら最初からそうして欲しいのに、そう思いながらもエルケはその手に掴まれるのを拒めない。

掴まれた腕をそのままにして両足を安全な所に立たせると、クルトはその表情を曇らせた。

窓枠の前に立ちその晴れない表情のクルトを見上げると、困った様な表情をして彼は見下ろしてきた。

ああ、さっきのヤンの顔に凄く似ている。何と無くそう思った。

「いい報告と、悪い報告。どっちを聞きたい？」

まるでその表情ならどっちも悪い報告みたいだ。思わず口に出しそうになって、唇を嚙んだ。掴まれた腕は全然痛くないのに、クルトの表情を見ていると何故か胸が痛くなってくる。

「どっちにしても、俺は何の役にも立たないんだけどね」

クルトが俯くと、金色の前髪が直ぐ眼の前まで流れ落ちて来た。

エルケの腕を掴んだままで深く俯くと、大きな体だった筈だといふのに、小さく丸まって見えた。

今のクルトはまるで幼い子供だ。慰める適切な言葉も持たない自分のもどかしさに泣きそうになった。

こんな弱そうなクルトを初めて見たのだ。いつも彼は何事も飄々とし、そつなくこなして、少し難解な言い回りが面倒で、自信過剰な位に見えていたのに。

大体、そんなのクルトラしくない。弱そうなのはいつも自分の専売特許だった筈だ。どうしても慰めて甘やかせてしまいたくなくなってしまう。そんなのつてずるい。

エルケは無意識に腕を伸ばしていた。

クルトの頭を胸に抱き寄せ軽く抱き締めると、腕の中で笑っている震動を感じる。どうしてそんなことするの？ くぐもった声はそう言っていた。

そんなのは一番自分の心に聞きたい。さっきは泣いてヤンに抱き締められたのは自分だった筈だ。それなのに次は泣きそうなクルトを抱き締めているなんて本当にどうかしてる。

もしかして、先程の自分はそんな状態だったんだろうか？ エルケは抱きしめながら、つい先程のことを思い出す。少し体が熱くなつた。

「知らないよ、クルトが泣き落とすから悪いんだよ」  
文句を言いながらも心の中で謝った。

ごめん、クルト。僕が何も出来ないからって、全部その責任をクルトに押し付けてごめん。そう言いたいけれど、きつとその言葉はクルトを傷付けてしまうだろう。だから言えないままだった。

胸を押し退けないままで、膝を付いたクルトが笑う。

「俺を、エリクと一緒にしないでよ。ヤンにもこうやって慰めて貰った訳？」

「……違うよ」

ヤンの優しさを知りながら、弟でもいいから傍にいたい、と我儘

を言った。

絶対に血の繋がった弟にはなれないと知っているのに、それでもそうじゃないと傍にいてくれないと思っただからただ必死だった。

「僕の我儘に付き合ってくれないから、少し文句を言ったんだ。ヤンは泣き顔に弱いかなって思って、泣き落としたんだよ。今のクルトみたいに」

顎を上げて少し偉そうに言い訳をすると、クルトが、俺が？と笑う。俺が泣いてる？ エリク、眠ってるんじゃないの？ そう笑うと、彼はそのまま沈黙する。

クルトを抱き締めたままで窓の外を見ると、空には星が散らばっていた。

明日は晴れた。きつと暑さもまだ残ってるから、少しカヤを外に出して日射しを浴びさせた方がいいかもしれない。剣の鍛錬を理由に連れ出してみようか？ 少しずつ離れて行くような現実が寂しくて、全く関係の無いことを思った。

エリク、そう胸の中が呼んでくる。心細げな声。きつと抱き締めないといけない様な顔をして笑っていたに違いない。少し可愛くない事でも言いながら。

「何？」

その金色の柔らかい髪に指を絡ませて聞いた。

大きな背中、幅広い肩。それなのにクルトは子供の様にエルケに抱かれたままでいてくれる。

だからエルケはただ黙って報告を待っている。きつと一人では言えないんだろう。少し頭を抱く腕に力を込めた。

いいよ、言っていないよ。そういう意味も込めて。

「ライゼガングは、俺には救えない」

吐き捨てる声にエルケはゆっくりと瞼を閉じた。

うん、そうだよ。そんな簡単には行かないよね。クルト一人で何とか出来るのなら、もう大司教も何とかしてるよね。

そう言っただけじゃなくてはいけない筈なのに。悲しくて、声が出な

かった。

「俺は、意義を探さなくちゃいけないんだ。騎士団を動かす意義を」

熱い息は胸から滲み込んでくる。泣いてない、涙じゃない。ただ息が熱い。

どうにもしてあげられなくて、ただ頭を抱き締める。泣けないクルトの代わりに、泣いてあげたくてもそんな簡単には涙なんて出て来なかった。

騎士団を動かすことは、先日ヤンが教えてくれた通りだ。

騎士団は戦争に駆り出される。領境を守る盾として、クルトは前線に立ってブラル大司教領を守る、そう言う事だ。

帰るべき場所がそのまま棺となる、それはエルケとは似て非なるものだった。自ら駆り出されるのと、攻め込まれるのは違う。自主的に騎士団が動く以上、撤退も敗退もあり得ない。

ただ、前に進むだけだ。勝つまで、守りきるまで。

「クルトは、戦争をするの？」

「俺が？」

聞いた言葉に笑い声が戻って来る。俺が、どうして？俺が一番聞きたいよ。そうやって胸の中で自嘲気味に笑った。

「……エリク。ヤンも、騎士団に連れて行っていいかな」

クルトの声に思わずエルケの顔が歪んだ。

連れて行っちゃうの？うん、なんて応えることが出来なくて思わず胸に抱いたクルトの髪に顔を埋めた。

目的地に着くまでは一緒だと思っていたのに、こんな形で壊れてしまうの？もしかしたら、クルトをヨープに向かわせた事自体が間違いだったのかもしれない。

エルケの指が震える。そうだ。こんな事、いつヤンが戻って来るかもしれないあの部屋では話せないだろう。クルトが部屋からエルケを連れ出した意味が今エルケにもやっと理解できた。

下から覗き込んだクルトが、胸から顔を上げる。



クルトの髪に顔を埋めて隠していたエルケの視線が顔を上げたア  
クヴァマリーンの瞳と絡んで、エルケは隠すように思わず奥歯を噛  
んで涙を堪えた。

見上げてくる顔が苦笑する。

「だから、そんな顔をするから、ヤンも我慢が利かなくなるんだよ」  
優しい声。

唇に何かが覆い被さった。熱い息だと思っ間に、それが唇から中  
へと注がれる。

見開いたエルケの視界一杯に、金色の敵が広がっていた。下から  
上へずり上がる様に被さって来る勢いに負けて、少し顔を引くとそ  
の分押し付けてくる。

髪の毛の後ろに指が入って、ゆっくりと上向きにされた。初めは強く、  
次は弱く、食欲に絡む舌はまるで海の様だ。エルケの耳元に聞こえ  
ない筈の波音が聞こえる。

指が耳の裏を撫でる。唇の間から苦しい息を吐いて、エルケが初  
めての感覚から逃げるとクルトに下唇を甘く噛まれた。そこからま  
た新しく疼いて行く。

呼吸も絡め取られて膝から力が抜ける。床へと真っ直ぐに落ちか  
けた体がしつかりと腕で受け止められた。その腕はまるで鎖だ。薄  
く開いたエルケの視界にはまた金色の敵が見える。

背中に回った大きな手の平が背中から腰を辿る線をなぞって、エ  
ルケは体を大きく震わせた。声が出そうになって、奥歯を強く噛む  
と覆い被さっていた唇が離れる。

その隙に、エルケはクルトの肩を押し顔を背けた。

眼の前のクルトが、笑っているのか苦しんでいるのかよくわから  
ない顔をしていて胸が痛い。まるで見たことの無い人ようだった。

甘い視線がエルケを覗き込む。

何よりも甘く、誰よりも優しくしている視線で恥ずかしさに消え  
てしまいたいと思っているエルケを真っ向から見据えている。

「お前が俺に動く意義をくれる？」

「どういう意味？ 聞く前にもう一度、頬に添えられたままの平に力が入った。クルトの腕が離れ、楔を失い床に崩れ落ちたままのエルケの瞼に、クルトは軽く唇を落す。

そしてそのまま、まるで暗闇が見えているかのように触れていた全ての体を離した。

「考えておいてよ、時間はまだ残ってる」

「エリク、何か考え事？」

ずっと考え込んでいた事に気付かれた。

たまに黙り込んでしまうのはいつもの事だったのに、やっぱりカヤは凄く心の機微に敏感だ。マルガに新しい服を着せながら、カヤが聞いてくる。

服の中で蠢いていたマルガは、自分の装飾がたつぷりされた洋服を見下ろし、顔を輝かせていた。

良かった、気に入ったみたいだった。少し可愛らしいものを選び過ぎただろうか、心配していたエルケは胸を撫で下ろす。

「何でもないよ、カヤは大丈夫？」

デリアに服を被せながら、カヤの晴れない顔を覗き込んだ。

カヤは今さつき、起きたばかりの様な顔をしている。余り大丈夫そうではない顔で微笑んでいるカヤを見て、物凄く心配になった。あんなに眠った筈なのに、まだ顔色が悪い。

やっぱり、この場所がカヤには壊滅的に合わないらしい。

マルガと同じ様に、ギャザーを取る為に少し多めに使われた布の波からデリアが顔を出した。照れ臭そうに自分の腰周りのスカートを指で抓んでいる。マルガとは正反対の反応だった。微笑ましい。

「気に入らなかつた？」

その小さな肩越しに顔を出して聞けば、頬を赤らめてデリアは首を振った。

指で黄色いリボンを突いて、また花が綻ぶ様に笑う。何だ、少し恥ずかしいだけらしい。今回の買い物は大成功だった。胸のリボンを丁寧に結び直して、エルケは優しくデリアの頭を撫でた。

マルガはその一張羅のまま、ベッドの上で飛び回っている。服が柔らかく浮かんでは、また落ちるのが楽しくて仕方がないみたいだ。

「凄いのよ、ふわふわよう！」

カヤが今まで着ていた服を畳みながら、苦笑する。

「マルガ、破らないようにね」

「はあい！」

その日はマルガとデリアを預ける邸に、挨拶に行く予定だった。

時間になったら迎えに来るから用意して待っている様に、と屋根裏部屋で去り際にクルトは言伝を残した。クルトだけで双子を連れて行くのは酷だろう、邸の門前まではエルケも同行する事に何と無くなってしまうた。

だから、急いで用意をしなくてはいけない筈だ。それなのに、直ぐに手は止まってしまふ。

指をゆっくりと自分の唇に触れると、そこは随分と乾燥している。こんなガサガサの部分にクルトの唇が重なったなんて。そんな事を考えると耳の奥が熱を持って、延焼するように眼の周辺までが熱くなった。

慌ててデリアの服をかき集めると、その日向の匂いのする服を抱き締め、布に顔を押し付けた。

胸の奥で心臓が飛び出しそうな程、高鳴っている。ここ数日、考えないようにずっとしているのにそんなの無理だ。初めてのその行為は、どうしても体と心に焼き付いて離れない。

一度、記憶の紐を持つと、その前にヤンに抱き締められた事までが紐に繋がり引き摺り出されて、ヤンの行為までも邪推してしまっそうだった。

ヤンだって、そんな事をしようとした訳じゃないのに。全部、クルトの所為だ。本当に最悪だ。

「僕、用意してくるよ」

カヤの何か言いたげな視線を振り切つてドアを開けた。

ヨープに入ってから早数日、ヤンはエルケが部屋で寝入ってからもっと遅くに部屋に戻って来ているようだった。エルケが目覚めた時には既に横のベッドには人影も温度も無くて、少し眠りに付いた

ような上掛けの乱れだけがいつも残されている。

何か、声を掛けてくれないのに、と少し不服に思いながらも、あれだけの事があっても毎日しっかり眠る事が出来る自分の豪胆さに呆れた。長い馬車生活で、精神面は凶太く成長し切ったらしい。

眠れる時は寝る。あれだけ発作みたいに眠っているのに、まだ眠る事が出来るとは思ってもいない。

あの日の朝、目覚めた時には秋の陽はすっかり昇っていて、だらしなく閉じたカーテンの隙間から残暑の日射しが線となって見えた。何もかもが夢なのだ、そう思うには余りに鮮烈過ぎて朝からベッドで悶絶した。それからここ数日ずっとその感触と感覚は自分の中から消えて無くならない。

深く考えずに自室のドアを開けると、そこにいるべきではない姿があつて時が止まった。小さく間抜けな声が唇から洩れて、その声に彼は振り返る。数日ぶりに見たその姿は、子供の絵本に出てくる王子様みたいだった。

今日のクルトはいつもより随分と眩しく見える、そう不思議に思いつながらクルトを眺めた。

彼の服装はいつもの外套姿じゃない。今日は、白い軍衣を羽織っているのだ。中に見えるリンネルのシャツも白。腰に佩いた剣とベルトだけがその中で異彩を放っていた。

随分と実用性の無い軍衣だな、とぼんやり見ながら思った。だって、血飛沫を浴びたらすぐに真っ赤じゃないか。行軍用ではないのかもかもしれない、そう思うと安心する。これはきつとヨープでのクルトの正装だ、だって紋章がワルゼ騎士団の物ではなくヨープの紋章だから。

「えっと、ここにいたんだね」

久し振りだね、なんて厭味な事は言わずにぎこちなく笑って、ぎくしゃくと自分のベッドに近付いた。

無言のまま窓際で立っているクルトの視線が苦しくて、呼吸が止まってしまいそうだ。見ないで、と叫んで逃げてしまいそうになっ

た。それなのに、同時に無性に柔らかいクルトの髪を撫でたくもなかった。

そんな置いて行かれた犬とか猫とかみたいな顔しないでよ、あんなことする癖に。心で責めながら、背中を向けて準備を始める。

クルトと違って、エルケには全身の着替えは必要なかった。とはいっても、流石にこのままの薄汚れた外套を付けて付いて行く訳にもいかずカヤに言って外衣を上から羽織る事にした。少し大きいのはベルトで調節したら、何とか見られるようにはなる。貴族には見えないけれど、傍仕えの使用人くらいには見えるかもしれない。

しゃがみ込んで磨かれた軍靴を横目にいつもの革靴の紐を結び、耳が熱くなってきた。視線が頭に落ちていいるのか、頭から火が出そうだ。

「前みたいに、今回は俺から逃げないんだ？」

自嘲気味な声の後、エルケの視界から軍靴が消えた。少し離れたみたいだった。

片足の紐を少し強めに締めて、もう片方を緩める。靴紐を結び終えたら、次は一体何をして時間稼ぎをしたらいいのか。何も思いつかなかった。

逃げたのは、離れたら何とかなると思ってたからだよ。でももう無理だつて知ってる。クルトもヤンも絶対にもう離せない。

頭の中でどうやって二人共を傍に置いたままでいられるか、そんな姑息な事までずっと考えていた。

「……逃げたからつて、どうにもならないのが分かったからね」

少し投遣りに答えると、横で彼は笑った。ヤンのベッドに腰掛けられているらしい。俯いた視界の向こうで揺れる金色の畝が見える。

「俺を、受け止めるの？」

今にも前の夜みたいにまた唇を重ねそうだ。何も感触がある訳じゃないのに、口元が熱くなった。

また重ねて欲しい？ そう思った自分が本当に信じられない。熱くなった部分をわざと歯で思い切り噛むと、変な味がした。血の味

だ。

頭の中で言葉を選ぶ。そんな言葉がクルトに枷を付けるなんて思ってもいけないけれど。わざとらしく、大きめな溜息をついた。

「クルト、僕は男だよ」

ベッドの上で、クルトの腰に履いた剣が軍靴に当たって軽い音を立てた。

随分と離れた部屋なのに、静かにしていると外の喧騒に混ざってマルガとデリアの笑い声が聞こえてくる。

そうこうしている内に、もう片方の靴も出発準備が出来てしまった。顔を上げるべきか、でも上げる事なんて出来ない。

そんな葛藤が見えているのが、クルトはベッドから立ち上がった。木枠の軋む音、同時に心も軋むのが分かる。

「知ってるよ」

そう呟くと、下で待つてる、と言い残してクルトは部屋を出て行った。エルケは頭を抱えて、床にしゃがみ込む。

悪い報告といい報告。ライゼガングを救う事が出来ないのは、多分悪い報告だろう。だとしたらいい報告とは一体何なのか、見当もつかなかった。どちらにしてもクルトには酷な状況になるのは仕方が無いらしい。

ヤンはここ数日、ヨーブの軍用武器庫に朝から夜遅くまで詰めているのだと、クルトが言った。軍用武器庫、と聞いて体が竦む。戦争の準備を始めているのかもしれないと、体中が強張った。

双子は荷台の後ろで大人しくしている。かなり緊張しているようだ。エルケは後ろを覗き込むと笑って見せた。強張っていた二人の顔が少し綻ぶ。

抱き締めてあげたいけれど、今は止めた方がいいとクルトにきつく言われていたから、傍に寄る事も出来なかった。

エルケが彼女たちの傍にいて、これから保護者になる訳ではない。

今、新天地に向かうマルガとデリアをここで甘やかせば彼女達が歩きだす事が出来ない。と言うのがクルトの考えだ。半分理解できて、半分納得は出来なかった。だって、彼女達はまだ子供じゃないか。

でも、大人になる事を二人は願ったんだよ、と冷静に返された。それを聞くと、何も言い返せずにエルケは黙り込むしかない。クルトに言い返す上手い言葉も無かった。仕事を持つ、とはそういうことだ。子供であつても、仕事を持つ事によって責任を負う。彼女達はもう立派な大人だ。

厩舎と軍用武器庫が立ち並ぶ場所に馬車は止まる。ヤンと合流の上で、邸に向かうらしい。

どうしてヤンと？ と、聞いたエルケにクルトは前を向いたまま、

「ヤンが騎士だからだよ。城の外で主に謁見する時は、傍にいないてはいけないだろう？」

と答えた。

そうか、ヤンは騎士なんだ。主を誰にしているのか、まだ分からなかったけれどエルケには何と無く予想は付いていた。ヤンは盾だ。これから謁見する人間 予想が当たっているのであれば大司教、の騎士なんだ。

見慣れたルツツの傍に立つ漆黒の影を見て、エルケは眉を寄せる。クルトが白い軍衣を纏っているのと同じように、彼もまた黒い軍衣を纏っている。

ヤンの漆黒の軍衣は血飛沫を浴びても大丈夫そうだ。血飛沫と断末魔の叫びを共にその軍衣に吸い込み、きつと闇に葬ってしまうだろう。そんな姿は見たくないけれど。

ヤンとクルトが横に並べば、まるで光と闇の様だった。共に戦いの場に駆り出されるのは間近かもしれない。

置いて行かれないようにするのは一体何をしたらいいのか。考え



始めると、頭の中が色々な事を処理できずに指が震えてきた。

ゼークトで姉さま、人魚の涙を狙う蝶、止まらない夢の続き、クルトへの感情、ヤンへの感情。カヤの優しさ。それに戦が加わるともう頭の中が飽和状態だ。

マルガとデリアに荷台で待つように言うと、エルケは荷台から降りる。今回は、クルトが腕を貸してくれた。触らないで、なんてもう今更我儘なんて言わなかった。

正式に邸に入る日は今日決まるらしい。迎える側にも準備が必要で、今回は面接みたいなものだ。邸の中に向かうマルガとデリアとは、ここで別れなくてはいけない。

何か言わなくちゃ、そう思いながら荷台を覗いても上滑りの応援くらいしか出て来なかった。僕は宿屋で待つてるからね、きちんといい子にしてるんだよ。

それだけを言った。

後ろでヤンの声が聞こえて、エルケは後ろ髪を引かれながらも荷台に背を向ける。

「クルト、こちらは問題ない」

そう言いながらも、ヤンは近付いて行ったエルケの頭に大きな手の平を置いた。視線はクルトに向けたままだ。

双子を手放す事に不安そうな顔をしていたのがヤンには気付かれたのか、どちらにしても大きくて温かな手の平から洩れ出てくる優しさに泣きそうになった。

彼はエルケの言いたかった事を、可能な限りで実践してくれようとしている。その不器用さが苦しくて、愛おしかった。

「ライゼガングとワルゼからの報告は？」

「ない。あつたとしてもここでは報告しないぞ、俺は」

「確かに。そんな騎士なら放免するよ、俺も」

話している二人に、先日夜の姿は重ならない。

ヤンを睨んだ時の今にも剣を抜きそうなクルトの激情も、それを受け止めながら何かを仕舞い込んだヤンの葛藤も何も、嘘のように

主従という幕で覆い隠されてこっちの方が戸惑う位だった。

入っていけない、少し疎外感を感じる。

「僕、ここで帰るよ」

思わず口にした。

マルガとデリアが働く場所となる邸は、ヨープに入った当日に見た宮殿だった。華やかで繊細な宮殿には似つかわしくない無骨な宮殿門はすぐそこだ。牢にも似た重い金属門が、今にも開くのを待っている。

しかも前回来た時に比べて今回は随分と物々しい警備体制だった。クルトもヤンも正装だ、それに比べてエルケの服装なんてまるで普段着みたいなものじゃないか。

兵士と騎士が半々に門周りを固め、少し離れた門前にいる馬車を監視しているのが分かった。

正装しているクルトとヤンがいるから何も咎められる事は無いけれど、きつとエルケだけなのなら即追い返されるに違いない。それでも、兵士にとってエルケはきつと迷い込んだ子供位の扱いだとは思うけれど。

「いいよ、戻らなくても。カヤには詳しい事を言っている。ちょっと、エリクに会わせたい人もいるからね」

クルトが軍衣を翻して、兵士が連れていきた馬に跨った。

ルツツの手綱を持ったヤンが、エルケの腰を抱いてエリクを鞍に乗せると、ルツツは応じるように頭を軽く振る。その艶やかな首筋に指を這わせた。

行くべきか、背を向けるべきか。でも、今は背を向けても何も変わらない。

「分かった、行くよ」

小さな声で同意するとその声を待っていたかのように、一足先に門内へ入って行くクルトの後をルツツは追って歩き出した。

固く組合わさった石畳をルツツの足は軽快に踏んで行く。何もエルケが指示しなくて、ルツツは自らの判断で進んでくれるのだ。こ

めんね、少し乗せてね。手綱を持つ手に力を入れた。

近づくクルトを迎い入れるかのように、門が軋んだ金属音を立てて開いて行く。兵士も騎士も勿論疑いの目などを向ける事は無い。

大きな檻にも似たその堅牢な門は、馬車と馬を飲み込んで再び静かに閉じた。きつと歩いていたのなら、その威圧感でエルケは立ち止っていただろう。

ルッツに乗せて貰っていて良かった。そう思った。

都市と呼ばれる中でも、人口三万人を越える都市はザクセン宮中伯領の主都のみだ。

次いで、ブラル大司教領の都市ヨープ。

約二万人を下る人口を市壁へ常に収容し、過去に市壁を二度建て替えた。人口の増加に対するその拡張工事は、十数年経った今でもヨープの経済を著しく圧迫している。

対するのは、商業自由都市レノーレ。

一万五千の人口はその半数が商人で、商館の運営や税金で全ての都市機能は賄われている。ここ数年で台頭する発展の目覚ましさが目を引くが、新興都市である故か軍事に不安が残り、常にザクセン宮中伯領の脅威に脅かされていた。

人口一万人前後の都市は僅か七箇所。その内四箇所が自由都市と呼ばれる領邦と同地位の都市であり、残りの三箇所の内、マルブルク公国の都市ビューローが人口一万人以上の都市だ。

現在ブラル大司教領の都市ヨープには、三千人の修道士と修道女が暮らしていると言われている。大なり小なりを含めて二百の教会、その中央に位置するのがブラル大聖堂なのだ。

エルケはその大司教領の頂点に立つ男の顔を、小さな体をより小さくして上目遣いで見上げた。

宮殿の二階奥に位置する大広間前の通路に通されると、扉中へ入る前に腰に佩いていたエルケの細い剣は取り上げられた。クルトも慣れた素振りですべて剣を手渡す。

ヤンは大広間の中でも帯剣を許されているらしい、漆黒の軍衣の腰に剣を佩いたまま、彼は大広間へ足を踏み入れた。

広く高い天井だ。宮殿と呼ばれているだけあって、城と言われても違和感のない内装だった。

柱の一つ一つに彫刻がなされ、蔦が絡まりながら天へと昇って行く。天井には美しい女性と天使が描かれ、女性は遙か遠くを見ている。

伸ばした手は、大広間前方へ向けられているのか、それとも壁を越えて、もつと遠くを望んでいるのか。

大広間上方に大きな窓が並ぶ。大広間正面に美しい椅子があった。椅子の後方には真紅の織物で造られている緞帳が垂れている。

椅子は無人では無かった。その主を迎えて悠々と存在していた。

思わず、大広間の真ん中で立ち竦む。膝の裏にマルガとデリアがぶつかった衝動があった。

膝を付く様にクルトに言われて、慌ててしゃがみ込むと膝には固い床が当たり冷たさが直に伝わって来る。後ろ手でマルガとデリアの小さな手を握り締めると、小刻みに震えていた。それはエルケも全く同じだ。

闇を人が怖がるのは、何かが周りにあるのだと妄想するからだ。暗闇の中に自分の知らない空間があつて、見知らぬ何かがあるのではと妄想してしまう。でもそれは何も暗闇だからだけじゃない。全く言つた事のない場所、見知らぬ人間の傍にいる時も、暗闇の中にいる時と同じ様に不安定になつてしまふのだ。

今こそ、まるで暗闇に立っているようだった。まるで闇の中に光が一つしかない様に周りの目が全て自分の方を向き、咎めている様な気がしてしまう。ここにいる事を許されていない様な気すらしてしまうのだ。

実際、一人この場にそぐわない恰好をしているエルケを少し訝しげな顔をして、数人の使用人が見ているじゃないか。それは妄想ではなく、多分事実だ。

クルトが何か話しているのを、夢見心地で聞いていた。少し堅苦しい自己紹介だ。クルトに促されるままに、エルケは顔を上げる。

「エリクです」

とだけ名乗ると、満足そうに頷くブラル大司教の姿が見えた。何

に満足したのかは分からない。

ブラル大司教は白地に地模様の入っている長いガウンを羽織り、白い帽子を被っている。帽子の隙間から見える髪は白髪が混じっているのか、それともごく薄い色の金髪なのかはこの距離では判別できなかった。

眼は微笑んでいる様に見える。でも、常に感じる威圧感からそういう訳でもないようだった。足先から頭の先まで品定めされている様に感じる。自分の知らない奥底までを覗かれている気分だ。それもまた、見知らぬ場所に立つ恐怖から来ているのかもしれないけれど。

そうか、大司教が宮殿に来ている所為で今日の宮殿門は物々しい警備だったのだ。そして、門前で別れる筈だったエルケがいつもの恰好から外衣だけでもと着替えさせられた意味がやっとなんか解った。元々、エルケは宿屋を出る前からこの場所に通される事が決まっていたに違いない。

大司教の膝には、七歳になったばかりという少年がしがみ付いていた。少年の名は、クラウス。好奇心旺盛に輝く大きな瞳を持つ活発な少年だ。

異母兄弟なのだ、クルトに教えて貰った。にしては、ぱつと見、余り似ていない。

クルトがどちらかというと芸術品並みの端正な顔立ちなのに比べ、クラウスの方は利発そうな空気を漂わせながらも愛嬌があるし、悪く言えば俗な顔立ちだ。髪の色もクルトは透き通る黄金の金髪なのに対し、クラウスは赤味があった金髪だった。

ブラル大司教はその息子　クルトに言わせると三男、を非常に可愛がっている様に見えた。一時たりとも眼を放す時は無く、微笑みながら一挙一動を見守っている。

その姿をクルトがどう思っているのか、見える背中だけでは計り知れなかった。

横に並ぶ使用人の人数は、唯一行った事のある貴族の居邸である

フロリアンの邸と桁が違う。

あちらは所詮は地方役人であって、大司教の居城とは全く存在の意味が異なる。何人いるのか数えようとして、流石に諦めた。散らばり隠れている使用人や兵士を探すのは、まるで間違いない探しの様で時間の無駄だ。

まるで像の様に、ヤンは大司教の隣に位置している。

息子である筈のクルトが頭を下げているのに、ヤンはいつでも剣を抜ける体制でその視線をエルケ達に向けていた。それをするのが義務の様に。

その様子は、いつものヤンとは少し違う。公式の謁見ではないにせよ、カーテン横には兵士の姿も見えだし、警備は万全だ。それなのに、ヤンはその威圧感ある態度を崩そうとはしなかった。

エルケ達は勿論、使用人や兵士の誰しもが大司教の第一声を待っているかに見える。彼は皆が息を潜める中、少し呆れたように口を開いた。

「クルト、もういい。今日はそういう話をしに来たのではないよ」  
初老の男の声が響く。それでも十分に張りがあって、声は響き、朗々としていた。

「はい、申し訳ございません」  
クルトが短く返事をして、顔を上げる。

「息子の可愛い遊び友達が来たのだと聞いていたのに、こんな堅苦しい大人ばかりではクラウスも疲れてしまっただろう。ほら、可愛い遊び友達を紹介して貰うといい。これからこの宮殿に住む事になるのだから」

「はい、父上」

そうか、マルガとデリアはクラウスの遊び相手としてこの宮殿に迎え入れられるのだ。恐らく、身の回りの世話兼、遊び相手になるのだろう。それはそれで随分と大司教も豪胆な決断だ。クルトの口利きがなければ実現しなかったことに違いない。

飄々とした大司教の口調は、クルトの父親なのだと明言している

様なものだ。正式な礼に則っているこちらを敢えて責める口調は、つまりはいつも通りに顔を上げると言っている。そんな、回りくどい話し方も本当に似ている。

前で頭を上げているクルトの後頭部を見詰めた。きつと、確実に年を取ったらクルトもあんな感じになるに決まってる。少し面倒な大人に。

「マルガ、デリア」

マルガとデリアが前へ呼ばれた。震える足で立った二人は、クルトの横までふらつきながら進む。

カヤに教えられた通りに双子が並んで深々と宮廷式のお辞儀をして見せると、ブラル大司教の顔にも笑みが浮かんだ。

見繕って来た若草色のドレスは、きつと彼女達の愛らしさを最大限にひきたてていた。服飾担当として、大満足の出来だと自負している。

「マルガです。クラウド様、どうぞお見知りおき下さい」

「デリアです。クラウド様、どうぞお見知りおき下さい」

同じ声で同じ顔。

瞳に宿る光が、明るさなのか知的なのかだけ違いの双子を見て、クラウドはブラル大司教の膝を離れ駆け寄ってきた。

「うわあ、こんにちは！ 僕と仲良くしてくれませんか？」

まだ幼い少年の声。彼はクルトの横にしゃがみ込むと、若草色のドレスを着た双子を嬉しそうに眺める。

二人はまだ躊躇の色を色濃くしながら、小さく頷いた。

「クラウド、双子に庭を案内してあげるといいよ」

そのクルトの一声で、クラウドはより眼を輝かせる。

「うん、そうするよ！ マルガ、デリア、おいでよ。僕の大好きな噴水と内緒の場所を見せてあげるよ」

こちらを一瞬見たクラウドの瞳と、エルケの視線がぶつかった。

クラウドの瞳は初夏の空の色、見覚えのあるその爽やかな色合いに浮かぶ誰かの顔を直ぐに思い出せなくて、エルケは少し眉を寄せ



る。

でも視線を背けることなくエルケにも笑い掛けてくるクラウドを見ると、頭で思い浮かんだ何かは霧散してしまった。その愛嬌のある笑い顔に思わず、エルケの頬も緩んでしまうのだ。

「父上、行つてきます」

マルガとデリアの手を引いて大広間を出て行くクラウドの背中を見送つて、クルトが顔を上げた。

「ヤン」

ヤンが剣を揺らし、大司教の傍から離れる。

「分かつている」

黒い軍衣を身に付けたヤンが横を擦り抜けて、大広間を出て行った。屈んだままのエルケには眼もくれず、高らかな軍靴の踵を床に叩きつけた音は離れて行く。

大司教の騎士なのだと思つていたけれど、もしかしたら違つかもしれない。

本当は、こんなヤンは嫌いだ。いつもの旅をしている少しぶつきらぼうなヤンの方が何倍もいい。そう思いながらも、彼もまた総長であり大司教の次男という立場を捨てることの出来ないクルトと同じ様に、騎士という立場は捨てる事が出来ないのだらうとも思い知らされる。

「さて」

椅子に深く腰掛けたブラル大司教が両手を組み合わせると、横に並んでいた使用人たちが静かに頭を下げながら大広間を出て行った。

一人、二人と背中が大きな扉向こうに消えて行くと静かな大広間に大司教とクルト、それにエルケだけが残される。

人払いをしたのだ。体が、緊張で一気に強張るのが分かった。

咳払いの後、ブラル大司教の視線が、真つすぐエルケに注がれた。

「報告は聞いているよ、ゼークトのエリク。ゼークトの村は確か、

百人のビューロー軍に攻め込まれてなすすべも無く滅んだのだと聞いているけれど、それは事実かな？」

強欲で滅ぼされた村ゼークト、それが村周辺の村や街に広がる伝え話だ。

イーゲルの商人も言っていた通りに、蝶に滅ぼされた村の二の舞を踏まない為の自戒として広げた伝え話の意味もある。

蝶に全てを見せてしまうのは命取りなのだ。彼らに全てを見せてしまうと、蝶は貪欲に蜜を吸い尽くし花は枯れてしまう。それを愚かにも実践したゼークトの最後を彼等は伝え話にして流し、嘲っているのだ。

燃える赤、流れる赤、広がる赤を沢山見て来た。夢であればどんなによかったか。夢であればいいとも、何度も願った。でも、あれが全て夢の筈はない。全部、見て来た筈だ。そして、何よりもこの身に刻まれている。

手の甲と背中に、屈辱の証が。

甲に巻かれた布を久し振りに握り締めた。随分と久し振りの様な気がしていた。余りに旅が楽しくて、嬉しい事も苦しい事も切ない事も色々な事があり過ぎて、この手に縋るのを忘れていた。乾いた唇を開く。

「はい、大司教様。僕は確かにゼークトの出で、僕の村のゼークトは滅ぼされました」

でも今は正直自分が全てを証言できるかと言ったら、それは定かではないんです。

ゼークトのエルケという存在は本当にいたのかすら分からない。だから、ゼークトに探しに行くんです。

姉さまの抱いている人魚の涙なら全てを知っている。あれが存在の証だから、確かにゼークトに存在していた証だから。

そんなこと勿論、言わなかった。他人からしてみると、夢の話はあくまで夢であって現ではない。正直に言ったとしても、エルケの正気を疑われるだけだろう。それは容易に予想できた。

「ビューローの軍隊によって、マルブルク公国の都市ビューローに捕虜として連行されたのだったね」

「はい、そうです」

「ワルゼ城からのヤンの報告で、ゼークトの生き残りがビューローの捕虜だった『らしい』という証言があった話は聞いているよ。ビューローの郊外でヤンが君を助けた時には、城から逃げ出して力尽きた時だった」

「……はい、そうです」

ああ、そこまで報告されていたのだ。彼等は決して好意と同情だけで助けたのではなかった。あくまで最初は互いに疑いながらの旅だった。だから、何と無く今は報告された意味も分かる。でも、今はそれも少しずつ変化したのだと思いたい。

エルケはブラル大司教に応えながら、向けられた背中を見詰める。クルトはこちらを向かない。自分が少し悲しい気持ちでいる事を、気付いているのかもしれないと思った。

応じる言葉を濁せば、もしかしたら直ぐに何か邪推されてしまうかもしれない。そう思うと、短い返事しか出来ない。

ブラル大司教はエルケに事実を確認したいだけであって、ヨープの実情を一介の平民に漏らし、情報の取引をしたい訳ではないのだ。

「ライゼガングからのクルトの報告には、君がビューローの捕虜であるのを『明言』されていた。その言葉の変化は何故か」

傍目にも見える動揺を、クルトは見せた。金色の髪を揺らし、彼は何かを咎める様にブラウ大司教へとその顔を向ける。

そんなクルトの様子を見て、少し苦しくなった。でも仕方ないじゃないか、彼はあくまでワルゼ城を預かっている大司教の次男でその職務は決して手放せない。

個人でエリクを信じてくれていたのだと過信していても、もしもその事を考えて報告は欠かさない筈だ。ねえ、クルト。そうでしょ？  
背中に無言で問い掛ける。

クルトの変化を冷やかな瞳で見下ろし、ブラル大司教は続けた。  
「ビューローから逃げ通す事が出来た意味を、深く考えた事はあるかな？」

エルケが大司教の言葉を噛み砕き理解する前に、彼は既に違う話を始めてしまう。理解できない人間には、会話に付いてくる価値は無いのだとも思われている様だった。

今の話の前に強調した部分の意味を考える余裕も無く、彼はエルケにそのアクヴァマリーンの瞳を向ける。クルトとよく似ている眼だと思った。

「いえ、偶然が重なったのだと……それしか考えませんでした」

「こうとも考えられないかな？ 偶然も重なると必然となる。君は、わざと逃がされたのではないかな？」

床に付いたままの拳を固く握りしめた。

「そんな筈は」

「無い、と言い切れるかな？ で、その根拠は」

いや、その根拠こそなかった。

ビューローの城の牢に閉じ込められて、職人とは別の拷問を受けた。他の職人たちは拷問と尋問の上に皆殺されてしまったのに、エルケは数カ月死にかけられる程に衰弱をしても殺される程までに拷問を受ける事も無かった。

牢の中に投げ付けられた安い傷薬、死ぬ程でも無い程の少量の食事。忘れていた記憶が、戻って来る。

確かにあの日、いくら花祭りに浮かれ酒に酔っていたからと言って、あんな失敗を幾つも犯すだろうか？ あの時は神の思し召しなのだと思った。

指が震えて、前に見える白い軍衣を思わず掴んだ。クルトが振り返る。

責めるアクヴァマリーンの瞳と、気遣うアクヴァマリーンの瞳。救いを求めようとしたのは誰か？ 混乱した。

「根拠はない、です」

口の中が乾き、水を飲みたいと思った。この場所を逃げ出してしまいたくなる。

「君を逃がせば、手っ取り早く石の元に向かうのだと思ったのだから」

「向かおうと思っていました、逃げた時は。でも、出来なかった」「出来無かった理由は？」

エルケの年齢が単身で旅を出来る程、この地は安心できない。辻馬車に乗るのにも金が掛かるし、傭兵を雇うにも金が掛かる。足は動かないし、体は衰弱していた。あのまま、ヤンに助けて貰っていなかったらエルケはあの檻裡小屋で確実に死んでいただろう。

「……体が、動かなかったから」

大司教の問い掛けに応えながら、どうしてこんなに口が円滑に動くのか不思議に思っていた。決して無理強いされている訳ではないのに、気付くと色々と話している。

今まで感じなかったのに、突然恐怖を感じた。一体何処まで知っていて、一体何処からが虚妄なんだろう？

指が震えて、顔を手の平で覆った。何かを大きな声で叫びたくなかった。

「誰かが、助けに来る予定ではなかったのかな？」

違う、誰もいなかった。助けになんて来てくれなかった。ずっと、牢の中で傷だらけの体を抱いて狂った様な叫び声と泣き声と怒鳴り声を聞いていた。

誰か助けに来てくれたのなら、もっと早く逃げ出していた。誰でもいい、職人を逃がしたかった。あんなに優しくしてくれたのに、皆あんなに温かかったのに。それなのに、誰も救えなかった。自分一人だけが生き残った。

姉さま、嘘じゃないよね。そう問いかける。ここに存在していて、あの時も確かに存在していた。

「守りながら、君を確実にゼークトへ連れて行ける存在がいたのではないかな？」

「そんな！」

背中後ろで扉が乱暴に開いた。高らかな軍靴の音、それに続く少し小さな音。

俯いたエルケにはその姿は見えなくて、極端に少ない呼吸を何とか続けるので精一杯だった。肩を柔らかい何かが抱いて、強く抱き締めてくれるのが分かる。

耳元に声が聞こえた。

「もう、大丈夫よ。私がしっかりと守ってあげる」

眼の前に漆黒の軍靴と軍衣が見える。剣を佩いたままのヤンは、エルケの肩を抱くカヤを守る様に大司教との間に立っていた。

「大広間は、人払いをしたはずだけれどね」

まるでクルトの様だ。そんな飄々とした口調でブラル大司教は言う。カヤを見下ろして少し眉を寄せると彼は、随分と懐かしい顔が来たものだ、と継いだ。

「全く会う気は無かったけれど、お招き頂いて感謝しております」

「相変わらず、手厳しいね」

カヤはその慈愛の微笑みを最大限に発揮して、首を傾げる。言っている意味が心底分からない、といった様子だ。その笑顔もまた可憐だった。

ブラル大司教の鋭い視線がヤンに向く。ヤンもまた然程その視線には動じていない。

「ヤンには確か、クラウスの護衛を頼んだ筈だったけれど」

「クラウス様の護衛にはカヤ様の護衛を兼ねていると、六年前に拝命しております」

ヤンの大きな漆黒の背中を見上げた。彼はこちらを向く気配はない、それでも背中中はカヤとエルケを守ってくれている。剣を向けている訳ではないのに、それよりも剣呑に感じた。ヤンはカヤの騎士だ。そして、クラウスの騎士だった。

何かもが繋がる。クルトの異母兄弟、体調を崩したカヤにあの時の昔話。クラウスはカヤとブラル大司教の子供なんだ。カヤは子供

を奪われている。クルトがカヤと共に旅をしているのは贖罪なのだとカヤは言った。自分の罪ではないのに、クルトは贖罪を続けているのだと。

美しい天使と女性の天井画の下で彼は苦笑しながら、そうだったね、と背凭れに体を預けた。

「来た早々申し訳ないのでですけど、帰らせて頂きます」

立ち上がったカヤの腕の中でエルケは、少し離れた場所で見守るクルトと視線を預けた。暗く、悲しげな表情をしている。守ることのできなかつた自分を責めているのかもしれない。

「クラウスに会っては行かないのかな？」

「ここから出して頂けた時に、ゆっくり会わせて頂きます」

「じゃあ、まだ掛かるかもしれないね」

「あらまあ、そろそろ子供離れした方が宜しいんじゃないかしら」  
ヤン、とカヤが大司教から眼を離さないままで呼んだ。ヤンは返事もせず、しゃがんでカヤの腕にしがみ付いたままのエルケを抱き上げ、動かないクルトに背を向ける。

腰に回った手に力が入って、思わずヤンの首に両腕を回した。

カヤがクルトを振り返る。

「クルト、戻るわよ。座り込んでないで、さつさと案内なさいな」

彼女は革靴の底を大広間の床に叩き付けて、クルトの前に立った。

ブラル大司教と、その息子にこんな大きい態度が出来るのはきつとカヤぐらいなのだと思う。しかも大司教はそんなカヤを不快に思っている様子も見せず、あくまで楽しそうに眺めているのだ。

「奥方に宜しくお伝え下さいませ」

「勿論、伝えておくよ」

互いに化かし合いだ。勢いよくクルトの腕を掴み上げると、カヤは引き摺りながら大広間の扉に向かっていった。ヤンがその後ろへ続く。

大広間の扉向こうには、余りのカヤの迫力に入室する事を咎める

事が出来なかったのか。使用人と兵士が山となしていた。もしかしたら事前に大司教にはカヤの事を言われていたのかもしれない。

「いつでも私が必要になれば言ってくれ、ゼークトの人魚ひ」

扉は、ブラル大司教の最後の言葉を聞き終える前に完全に閉じた。



「カヤ！ 僕は知りたんだ。どうしても」

冷やかな視線と共にエルケの提案を却下したカヤが、無理よ、とだけ応えた。

「一人で行ってどうなるの？ 何かあってからじゃ遅いのよ」

部屋の扉に背を預けたまま、ヤンは腕を組んで俯いている。

話を聞いていない訳では無く、彼の中では今どちらに賛同するべきか思い悩んでいるに違いない。そんなどちらともつかずのヤンを睨み、カヤは彼への当てつけの様に大きな溜息をして見せた。

宮殿から宿屋へ戻ると、夕方間近になっていた。

食事時を迎えつつある食堂は喧騒に包まれ、そのざわめきは上階の宿場まで聞こえてくる。

揚げ物や煮込み料理の匂い。先日までの様に、何を食べようか、などという悠長な事を考えている余裕は今のエルケには勿論無かった。マルガとデリアが戻ってくる前には、話を終えなければならぬのだ。

あくまで強硬な態度を崩さないカヤの腕を、必死に掴んだ。

「でも、何か知っているとと思うんだよ！」

「じゃあ、クルトにでも行って貰いなさい」

「駄目だよ！ それじゃあ、教えて貰えないじゃないか」

カヤが眉を跳ね上げた。何故助け出した場所にまた舞い戻るのか。エルケの気が知れない、と言った所か。

踵を鳴らして、カヤが窓際に視線を向ける。

「……クルト。黙っていないで、貴方も何か言ったらどうなの！」

窓枠に腰を預けたクルトは未だ思い悩んでいるようだった。勿論、カヤに返事もしない。

やっぱり何も言わずに抜け出す方が得策だったかな？ エルケは心の中で、選んだ策の失敗を予感する。

何も告げずに心配させる愚行は先日エーゲルで思い知ったからこそ、今回は正直に自分の案を告げたのに。自分一人だけで直接ブラル大司教と話をさせて欲しい、と率直に話した。

しかし、それは結局カヤの怒りを買った。先程の状況を思えば当たり前前のことだ。

もし大司教が言った事が真実のなら、エルケはビューローからずっとつけられている事になる。恐らく、後ろを付いて来ているのはビューローの間者だ。

捕虜とした職人をエルケの傍で殺し、タイミングを見てわざと逃がした。村の石の元へ戻るのだろうと目論んで、彼等は逃げ出したエルケを死ぬ寸前で助ける手筈を整えていたに違いない。

しかし、それは阻まれた。偶然やってきたヤンによってエルケは連れて行かれてしまったのだ、ビューローが用意した舞台の登場人物が現れる前に。

ヤンが信用に足る人間でブラル大司教の言った事と照らし合わせると、きつとそういう事なのだろう。

ヤンが来なければ違う人間が来ていた。エルケを騙し、ゼークトへ連れて行く最適な人間が送り込まれていた。

彼、もしくは彼女は彼女は恐らくエルケに親身になって長い旅路中に信頼を勝ち取るだろう。ゼークトへ無事送り届けて貰ったエルケは何かの行動に出るだろう。それを見てさえいれればいいのだ。

職人を痛めつけても出て来なかった真実は、そんな簡単な事で暴かれる。恐らく、もうそれしか手段は無かったに違いない。

たかが一つの石の鉞脈を知る為にこんなことまでするのか。エルケは俯き、自分の頬を爪で強く掴んだ。赤く傷が残るだろう、でもそんな事は気にしていなかった。

追い込まれた所領の手段のえげつなさに腹が立つ。滅びる運命なのなら滅びる時は勝手に滅びればいいのだ。そう思ってから、残酷な考えに衝撃を受けた。

誰もがそんな運命を簡単に許容できないのだ。エルケがゼークト

の村が滅んだ事を受け入れる事が出来ない様に、また攻め込む所領もそんな簡単にはいかないのだろう。苦しんでいる所領にも領民はいる。どちらかを立てれば、どちらかが立たない。もどかしさに泣きそうになった。

もしかして間違ったらこの役目は姉になっていた。

あの日、あの場所でビューローの軍隊と鉢合わせしたのが姉だったのなら、彼女はきっとその場で自害していただろうか？ いや、彼女もまた捕虜となってエルケを探しにビューローの城から抜け出し、死ぬ思いでゼークトへ向かうのだろう。それもまた、運命なのだ。

ゼークトに攻め込まなければ、遅かれ早かれマルブルク公国は違う場所へ攻め込んでいただろう。

でもそれはよくあることだ。強者が弱者を飲み込んで行く。何年もの間、そうやって幾つもの所領や村が姿を消した。そうやって飲み込みながら体を大きくしなくては、肥大した所領は生き残る事が出来ない。体が熱くなってくる。

誰からも聞く事が出来ないのなら、それがもし半分が妄言であったとしてもゼークトの事を知りたかった。

「逃げたくないんだ」

カヤの腕を掴んでいた指に少し力を入れた。彼女の服が引つ張られて、指の間に入ってくる。

「村に戻りたいから、姉さまに会いたいからずっと皆と旅をしていたよ。でも、もし今パウルゼンに行つて皆と別れたら、きつと後悔する。ゼークトだって、今はもう無関係じゃないと思う。一人、生き残った責任が僕にはあると思うんだ。自分だけが何も知らずにゼークトへ戻つて、皆が戦争に行っているなんて耐えられないよ！」

その言葉を聞いて、ヤンが顔を上げた。窓際のクルトを見て、眉を寄せる。

「言ったのか」

クルトはあっさりとそれに応えた。

「言ったよ、エリクだって無関係じゃないからね。戦争の準備をしている事なんて遅かれ早かれ戦が始まれば分かるだろ、隠す理由も無いね。ゼークトで金を手に入れる事が出来なかったビュローは、エルケに眼を光らせながらも違う場所へと攻め込む気だ。エーゲルの近郊で小競り合いが起きているのも、その前哨戦だろ？」

エルケは口元を手の平で覆った。頭の中にリリーの笑顔が浮かび、そして消えて行く。あの美しい湖の街が戦火に脅かされようとしていたなんて。

ほんの少しの平和でも手に入れる事が出来ていたのだと、ずっと思っていた。いや、思い込んでいた。

「でも、クルトはあの偽金貨で何とか出来るって言った！」

「何事にも、変則な出来事は起こるものだよ。俺だって出来ると思っていた。実際、それ程酷い事にはなっていないのを見ると、功を奏したのかもしれないけれど」

「エーゲルがそんな事になっているなんて、聞いて無かったよ！」

クルトとヤンを交互に見て、教えてくれなかった事を責めながら、違うのだと思う。

クルトとヤンは、自分の心中を慮ってくれたのだ。心を病む事に気付いて、知らせなくてもいい事は口を噤んでいただけだ。そんな事を言いたいではなかった。彼等を責めているのはただの八つ当たりだ。この二人にはいつもこんな事ばかりしている。もしかしたら、そうさせるように仕向けられているのかもしれない。

言いたかったのは、それすら教えてくれない程に自分が子供扱いされていた事だ。

ヤンは責める視線を真っ向から受けて、クルトは窓枠に腰を預けたまま頭を深く下げた。

「言ったからって、エーゲルまで戻る訳にもいかないだろ？ エリクの目的地はゼークトで、俺等の目的地は結局ヨープになった。だから最初に言ったじゃないか。割に合わない判断したら置いて行

くけど、って。どうする？　今ここで置いて行くかい？」

「クルト！」

カヤの金切り声が部屋に響いた。ヤンは何か言いたげな表情をしていても、ただ静観している。クルトの意のままに任せているのだ。彼らの間には信頼関係がある。どんな事を言っても、結局クルトが間違わないのだとヤンは信じているのかもしれない。

ここで置いて行かれる？　考えただけで指が震えて来た。でもそれは一人になる恐怖からでは無かった。簡単に切り捨てられるクルトの感情が悲しかった。

クルトの俯く姿は悲しんでいる様なのに苛立っている様にも見える。それなのに、妙に冷静な口調で敢えて冷淡な素振りを見せている。

嘘だよな？　心の中で問い掛けた。

「ゼークトの石を背負ったエリクは、確実にビューローとの戦争の引き金になる。諦めていないのはライゼガングの泉で思い知っただろう？　俺等の行動は全てマルプルク公国に筒抜けだ、勿論俺の立場も」

「クルト、貴方言い過ぎだわ。さっき自分の父親の前ではあんなに大人しくしてたのに、今更口を開いてどうなるの！」

「俺はカヤみたいに自由にはなれないんだよ、鎖を完全に預ける訳にはいかない」

その言葉にカヤは傷ついた表情を見せた。クルトの言う鎖はカヤの息子の事だ。カヤの鎖は息子だった。クルトの鎖は血であり、立場だ。互いに切り離せず、互いに逃れる事が出来ない。

でも、カヤだって好きで預けている筈はない。あんなにかつて話してくれた物語は、悲しくて苦しかったじゃないか。

「私だって、自分で育てる事が出来るものならそうしたいわ」

腕にしがみ付いていたエルケの頭上で、カヤが苦笑した。

「でも、あの子を手放して自由になったなんて思った事も無い。貴方はどうなの、クルト。騎士団に戻らずに、父親にも背けないでい

る。本当に父親に何も言われたくないのなら、やるべき事を全てこなししてから文句を言えばいいのよ。ワルゼ騎士団はもう幼い貴方の逃げ場じゃない。ヤンは貴方の兄でもないし、私は貴方の姉でも無いわ」

カヤの言葉にクルトは顔を上げた。

「俺はヨープに戻ると決めた時から、もうその覚悟は出来てるよ。今後、俺はブラル大司教の命令するままに騎士団を動かす事になる。もう逃げるなんて真似はしない、だからこそ今は父親に背く訳にはいかないんだ。俺が今彼に背けば、願いが叶わないからね。だから、その言葉はそのまま二人に返すよ」

「願い？ それについては何も言明される事も無く、苛立ちをそのまま隠さずにクルトは吐き捨てた。

「エリクはカヤの息子じゃないし、ヤンの弟でも無い。エリクはゼークトの生き残り、ただそれだけだ。無くしたものに重ねて、エリクを傍に置く言い訳にするのも大概にした方がいいんじゃないかな」

ヤンが顔を上げた。

クルトがそんなヤンの顔を見て、笑う。

「エリクが『知りたい』のなら、知るべきだ。納得した上で、ゼークトの生き残りとしてどうするか決めるべきだ。一人で行きたいというのなら、俺はそれに准ずるべきだと思う」

「貴方、エリクにたった一人で行けっというの？」

「俺が付いて行く。城門までだ、それであればいいだろう」

震えるカヤの声にヤンの声が被さった。カヤが自分の援軍とはならなかったヤンを責めるように睨み付け、向き直る。

背を預けていたヤンは漆黒の軍衣を脱ぐと壁に掛けた剣を再び腰に戻した。着慣れた外套を身につけると、こちらに向き直る。公式の訪問ではないと城の面々に周知させる為に軍衣を着替えたのだから。

ビューローの間者が何処に潜んでいるか分からない今、人がまば

らになる城門までヤンが付いていてくれるのは心強かった。

カヤがエルケの腕を痛い程に掴んでいる。この手を放せば、まるでエルケが消えてしまつかのよう爪の色が白くなる程に強く腕と袖を掴んでいた。その優しい指に、自分の指を重ねる。

出来るだけ優しくを心がけた。この悲しくて優しい人を傷付けないように。

「カヤ、僕は一人で行くよ。いつも守ってくれてありがとう。守られているだけなんてもう嫌だから、だから僕も頑張るよ。ブラル大司教と話してくる。ヤン、城門まで宜しくね」

クルトも、わざと悪者になってまで後押ししてくれてありがとう。背を向けたまま、心の中で言った。きつとクルトは気付いて貰いたい訳じゃない。直接、感謝の言葉を自分から聞きたい訳ではないのだ。

カヤが袖口にだけ指を這わせて、俯いた。

「だって、エリク。あなた　なのに、どうしてそこまで」

女なのに、その声はほとんど聞こえなかったけれど多分そうなのだと思う。だから聞こえない振りをして背を向けた。

「直ぐ帰ってくるよ、行つてきます」

エルケがその部屋へ足を踏み入れた時、その部屋には大司教の他に二人の男が椅子へ腰かけていた。

テールブルの真ん中に腰掛けているのはブラル大司教、向かって左側はブラル修道院長、向かって右側はフリーデグント伯だと彼等は次々に名乗る。扉の傍には年老いた家令らしき人間も立っていた。

「初めまして、ゼークトのエリク」

恭しく礼をして見せたフリーデグント伯は、パウルゼン騎士団の総長なのだ。

髭を蓄えた温厚そうな表情には、騎士団を率いる険しさは感じられない。金よりも白が目立つその髪も髭も、漆黒の軍衣にはよく映

えた。紋章は橙ではない、深みのある青、夜の更けて行く空。藍色だ。

ブラル修道院長は、エルケをまるで汚らしいものでも見る様な眼で見下ろした。それでいて舐め回す様に見てくる視線で、背筋に寒気が走る。勧められるがままに近くで引かれた椅子に腰かけると、満足そうにブラル大司教が頷いた。

唾を飲み込んだ。こんなに高そうな椅子に腰かけたのは初めてだ。でもそれすら堪能する程、心に余裕がないが無いのが残念だった。背凭れに押し付けられている様な圧迫感を感じながら、エルケは顎を上げた。ここで逃げる訳にはいかない。折角、強がりを押し通してまで彼等から離れて来たのだ。

「聞きたい事が、あります」

ブラル大司教は、頷くと「何なりと」と答える。エルケは意を決して唇を開いた。



「確かに」

ゼークトが侵略された顛末を聞かされると、パウルゼン騎士団の総長であるフリーデグント伯は、敢えてそこで言葉を途切らせた。

「確かに、君の村は不幸であったと言える。ゼークトに攻め込んだビューローは私利私欲の為に侵略したのであって、攻め込む道理を持っていない」

最もらしい言い方をされたが、つまりは道理という『攻め込まれる理由』がある場所には戦争を仕掛けてもいいのだと彼は暗に言っている。

道理の無い場所へ攻め込むのが『侵略』で、理由さえあれば『必要な戦争』だ。

彼の言っているのは、そういう事だった。

それはまるで歩いてきた足元に転がっていた虫を、誤って踏み付けた時の言い訳にも似ている。

踏むつもりは無かった、そこに存在していたのが悪かった。しかし行く路を塞いでいたのであれば、虫けらを殺す道理に叶っているのだ。

(僕らは……殺されるべくして虫けらのように殺されたのか……)  
彼の口調には憐憫も、同情も見えてはこない。

エルケは膝部分の外套を握り、怒りに震え奥歯を噛み締めた。

「……つまりはゼークトが攻め込まれるべくして、攻め込まれた。貴方は、そう言いたいのですか？」

体中が炎になって飛び出して来そうになると同時に、得も言われぬ哀しみも感じる。

大きく頷きながらフリーデグント伯の向かい側に腰掛けていた男が口を開く。色も白く、瞬きが異常に多い。

額の汗を拭いながら唾を飛ばし、彼はテーブルに片手の平を置い

た。

「いやしかし、エリクの言う通り、確かに彼らの仕打ちは十分に責められるものですぞ。命を悪戯に扱うなどとはとても赦される事ではない」

芝居染みた口調で言ったのは、ブラル修道院長だ。

ふざけた口調だったが、フリーデグント伯の上手い言い訳よりもまだ彼の言葉の方が同意できた。

しかし、椅子に深く腰掛けたエルケを指し、彼が次の台詞さえ吐かなければだったのだが。

「十分に、民人の涙を誘うでしょうな。故郷を穢された悲劇の主人公として」

ブラル修道院長は胸に手を押し当て、祈る仕草をして見せた。

(……っ！ この手に剣を持っていれば、すぐにでも切り捨ててやるのに！)

指先まで一気に冷たくなった。

エルケは衝動的に叫ぶ。

「……僕はっ！僕は別に同情を訴えたくて、ここに来た訳ではありません！知るべく事を知って……僕は今をどうにかしたかったです」

エルケがこの場に自ら赴いたのは、貶されたり品定めされる訳ではないのだ。

(……こいつら、話にならないよ)

そんな同情に訴える様なブラル大司教の馬鹿げた姿を見て、エルケは椅子を蹴倒し今にもこの部屋を飛び出したくなった。

今日は知るべき事を知りに来たのだ。こんな田舎芝居を少しでも見ている時間はなかった。

「まあ、その話は順を追う事でしょう」

エルケが立ち上がるうとする寸前、やんわりと止まらない二人の声へ制止が入った。

ゼークトの顛末を黙ったまま聞いていた、ブラル大司教だ。

苦笑しながらもブラル大司教は両手を上げると、絶え間ない屈辱の会話は終焉の時を迎えた。

(……………これからが話の本番だ……………！)

会話の流れに付いて行かなくてはいけない。エルケが必要な情報も仕入れる事も出来ずにいると、折角の機会は水の泡となってしまふのだ。

彼が肘を付いてこちらを見ると、エルケは思わず姿勢を正した。

「君はゼークトの伝え話を知っているかな？ ああ、あの強欲でな」といふ俗に塗れた話ではなく、石の発端となった話の方だよ」

「……………はい。姉に昔聞きました。人魚の命が石になるのだという……………」

エルケは素直に応じる。

「そうだ。その話だよ」

彼はその返事を聞いて、満足そうに頷いた。

不思議だ、ブラル大司教と話していると、彼の求める階段を一つ上る度に認められた様な気がしてしまう。まるで子供が初めて服を自分一人で着られた時の様に、彼に頷かれるたびにエルケは僅かな高揚を感じた。

しかし、それこそがきつと彼の意のままなのだ。

「私も、人伝に聞いた話なのだけどね」

ここで一度、話は途切れた。

エルケがその件について何も追求しないでいると、ブラル大司教は話を続ける。

「これはゼークトの職人だった女性の話だ。彼女は美しいベルンシユタインの指輪を付けていた。人魚が裏に彫られた少し女性の指には無骨な指輪だった。しかし話を聞いたのもかなり前の話になるし、彼女は既にエーゲルに居を移したと私は聞いている。その伝え話ではゼークトの人魚は血族を殺し、それを石に変えたのだったね」

「はい。王子に渡す為に……………残酷なお伽話ですが……………」

「それに関しては、我々人間も十分に思い知っている事だよ。欲と

「いう感情の前には命は何の枷にもならない。君も身を持って知っているのだろうか？」

「……はい」

顔を醜く歪め、エルケは頷いた。

（僕の村は、その欲でもって滅ぼされた……）

欲にも色々なものがある。

彼はまた満足そうに頷いた。

「人魚、敢えて理解し易いように彼女と呼ぶことにしよう。彼女は恋情を抱いた王子へ捧げる為に、血族を殺し魂を石へと変えた。そして、彼女自らも命を絶つて人魚の涙と呼ばれる宝石になった。それが、君の村で大切にされていたベルンシュタインの逸話だ」

「……はい」

「しかし他の鉱脈と違って、真紅の人魚の涙と呼ばれる石の流通数は非常に少ない。知っていたかな？」

確かに鉱脈や鉱山を持つ宝石に比べ、人魚の涙は非常に流通数が少ない。

緑や黄色、橙の石は多く市場に回り比較的安価で取引されているのに、赤く光る人魚の涙と呼称されるベルンシュタインは滅多に流通しないのだ。

その希少価値ゆえ、石は王族や貴族に闇ルートで流通し、結果『蝶』の様な商人を引き寄せる。

「確かに、あまり市場で見える事は無いのかもしれませんが。とはいえ、僕も実際に色んな市場を回った訳ではないのではつきりした事は言えないのですが……ごめんなさい」

エーゲルの市場で見たベルンシュタインは全て屑石か色違いだった。

この旅で見た美しいベルンシュタインはたった二つ、一つはワルゼ城の石。もう一つはリリーの祖母の物だ。

「人魚の涙が市場に回る事は、ほぼ皆無に近いのだよ。その私の知っている職人がゼークトにいた時は、実際人魚の涙が『海辺に打ち

上げられる事は無かった』のだと言っていた」

（…………え？ そうだったかな…………？ 僕が村にいる時は比較的いつも石は打ち上げられていたけれど…………）

エルケが村にいた時は比較的皆、真紅のベルンシュタインを大なり小なり細工し、手にしていた。工房も忙しく、エルケは嵐や海の荒れた夜の後に海へと潜り、砂浜まで辿り付けなかった石を集めたりもしたのだ。

あの時、ゼークトは活気に満ち溢れていた。石の様に空が赤く染まるあの日までは。

「…………話を变えようか？ 君は、自分の親の名前が言えるかな？」

宣言通り、話が全く違う所へと飛んだ。

凄惨な戦の思い出に浸っていたエルケは、一瞬自分の居場所を見失ってしまふ。

（は？ 親の名前…………？）

慌てて顔を上げブラル大司教を見ると、彼は慈愛に満ちた微笑みを浮かべているかに見えた。

両脇でフリーデグント伯は腕を組んだまま瞼を閉じ、ブラル修道院長は早く返事をしろと視線でエルケを促してくる。

躊躇しながら、口を開いた。

だが今、エルケにはその話をされると一番自信がない。

「…………いえ。幼い頃に姉と外部からゼークトへやってきたのだと、僕は聞いていました」

「聞いていた、とは？ 覚えていないのかな？」

「はい。幼い頃だったので記憶が、あの、あまり無くて…………」

最後は聞こえない程の小声になってしまった。

エルケは手の甲の布切れを掴み俯くと、瞼を強く閉じる。

望まれたことを流暢に説明できない羞恥に耳が熱くなり、細かく指が震えて来た。

「姉の名前は？ 覚えているかな？」

「…………ユッタです。ユッタ・ライシガー。姉とはゼークトの戦火の

中ではぐれました。僕はそのまま、捕虜としてビューローの軍隊に捕われたので……姉のその後は……分からないです」

「そうか、それは残念だ。是非、話を聞いてみたかったのだけれどね。彼女……ユツタから、君の子供の頃の話聞いた事はあったかな？」

大きな部屋は、今やブラル大司教の独壇場だった。

扉の脇に控える家令らしき人間はまるで人形のように微動だもせず、テーブルに付いている先程まであんなに口うるさくしていた二人も黙って、事の顛末を見守っている。

全てを聞きただそうとするブラル大司教の前から逃げ出したくとも、聞きたい事を聞く為には、この話の流れを途切らせる訳には行かないのもエルケには良く分かっていった。

(ブラル大司教との会話は……まるで暴れ馬に乗っているみたいだ)  
エルケは会話の流れに振り落とされないうつ、ただ必死だ。

「子供の頃の話は……あまり。姉もあまり話そうとはしませんでした」

「そうか、幼い頃は君もきつと愛らしい子供だったに違いない。今も、それほどまでに少女然とした容姿だしね」

(褒められている気がしない……)

暗に女なのではないかと言われている様なそんな気もして、エルケはより強く手の甲を握り締めた。

「時に、その髪は地色かな？」

「……はい、子供の頃から赤金の髪です。染めた事は無いです」

(髪の色が、今の話の流れに何の関係があるんだ……?)

エルケは不思議に思いながらも、正直に頷いた。この髪は姉と唯一似ている部分なのだ。

そう思い、エルケは心の中に感じた違和感に首を傾げる。

夢の中で涙を流す姉は、確か褐色の髪だった筈だ。しかし、その髪はいつも修道服で隠していた筈だ。

(あれ……? 僕はいつ、姉さまの髪を見たんだっけ……?)

何度、エルケが思い返しても明確な記憶は見つからなかった。宙を見つめるエルケの目の前で、満足そうに頷いたブラル大司教が見える。

彼の横でフリーデグント伯が組んでいた腕を解き「ほぼ決定ですね」と言った。

次いだブラル修道院長の前で、フリーデグント伯が大きな口を開けて笑う。

エルケは嫌な予感がして、体を大きく身じろがせた。

「フェーデは、もっともらしい同情を引くものがいいいでしょうな。」

蹴り返した時に、十分自分を貶めるものとなる」

「自らの首を自らの行動が締める訳ですか。何ともブラル修道院長も人が悪い」

話が全く分からないまま、進んで行く。

恐怖に怯え、エルケは唇が震えるままに口を挟んだ。

「……あの！ 言ってる意味が、よく……分からないのですが！」  
立ち上がった拍子に美しい彫刻のなされた椅子が、後方に引つ繰り返った。

床に叩き付けられた椅子はその見た目に反して重い音を立て、エルケはその音に体を竦ませる。

エルケはすぐにテーブルに手を叩き付け、意味ありげに微笑むフリーデグント伯とブラル修道院長の顔を交互に見る。

彼らは、まるで珍しい宝石でも見るかのようにエルケを見ていた。その視線を受け止めると、エルケのの背中に恐怖が込み上げてきた。

（こいつらは、僕を利用する気なんだ……！！）

でも今現在ではそれだけしか分からなかった。

（僕は軽率だった……そんな簡単に教えて欲しいことだけを教えて貰える筈なんてないのに……！！）

ブラル大司教が、立ち上がったままのエルケに腰掛けるよう促した。

蹴倒した椅子は、扉の前からいつの間にか移動してきていた家令の手に寄って元通りになっていた。

「あの……僕」

「どつぞ」

椅子の背もたれに手を掛けて、家令の男もエルケの着席を促してくる。

（駄目だ……今は逃げられない）

脱力して、腰掛けた。

テーブルの上に拳を握り締めて、三人を睨み付けた。

（……このまま、流されるだけになってさせてなるものか！）

ブラル大司教が腰掛けたエルケに満足し、口を開く。

「ゼークトのベルンシュタイン『人魚の涙』は人魚の導きで現れる。君は自分が気付いていないだけで、その体には十分な価値があるのだよ。私の知っている職人がゼークトにいた頃、君はまだその村に存在していなかった。人魚のいない村に『涙の導き手』はいない。ここ数年前までずっと、人魚の涙が海辺に現れる事は無かった。それがここ数年で『人魚の涙』と呼ばれる真紅のベルンシュタインが市場に流通していない大きな理由だ」

全く意味が分からない。

「あの、大変申し訳ないんですが、僕には難しくてすぐに理解できないんですが……」

理解不能になったエルケの不安げな声に、フリーデグント伯が一番先に身を乗り出した。

彼は非常に嬉しそうだ。まるで市場で掘り出し物を見つけた様に頬を紅潮させ、生き生きとしている。

吐き気がする。

だが、彼の口にしたその内容はエルケの想像を絶するものだった。

「君は、人を模した人魚なのだよ！」

一瞬、呆気に取られた。

でも、直ぐに我へと返る。



余りに馬鹿げた話に笑い声が漏れ出た。

「……なんだよ。そんな夢物語みたいな話、信じる訳ないじゃないか！ 僕は本当のことが知りたいんだ」

エルケはテーブルに額を叩き付けると、苛立ち紛れに大声で叫んだ。

冷静な声が少し遠くから降ってくる。

「では、逆に聞こう。エリク、君はどうしてビューローの軍隊に鉢合わせした時に命を落とさなかったのかな？」

「……それは、職人の人達が僕を殺さないで欲しいって懇願したからで」

「あれだけの村人が惨殺され、連行されている。女は犯されてから殺され、男は家ともに焼かれた。職人は連行され、子供は海に投げ込まれた。君がこの場に立っている事が出来る理由を、上手く説明できるのかな？」

「……だから……それは……っ！」

混濁したエルケの記憶に何かが少しずつ戻ってきていた。

額にテーブルの冷たい感触を感じながら、エルケは瞼の奥に仕舞い込んだままの涙を落とさない様に、唇を噛む。

（僕は……赤い泥の中を転がった。空は赤く燃えて、家も炎に呑まれてた……）

空の赤を映し出した水溜まりだと思っ、突っ込んだエルケの手はどろりとした何かに汚れたのだ。

姉の背中を追う為だけに、その時エルケはただ必死だった。

（……あの時……連れて行かれる職人のおじさん達の前に転がり出た時……僕は兵士の剣でもう殺されるのだと覚悟していたんだ）

強く眼を瞑り、エルケは体を縮こまし強張らせる。

（確か……あの時はおじさん達が必死に何か叫んでた……そうだよ、何を言っただっけ？ あの時、僕を殺さないでくれと、皆叫んでた。頼む、って何度も兵士にしがみ付いて……）

『この子を殺したら、二度と石は手に入らないぞ……！ この子の

存在が宝石なんだ!」

エルケは渴いた唇を開いた。

(……ち、違う! 僕は)

エルケは逆上して、無言でエルケを見詰めるブラル大司教に噛みついた。

「僕は……僕はただの村人だ! ゼークトを滅ぼされたのを、ただ見ていることしか出来なかった普通の人間なんだ!」

「地位があるからと言って、滅びて逝く物を留めゆく事は難しいのだよ」

エルケは大きく首を振る。

(なんだよ! それじゃあ、僕の所為で村は滅んだってことじゃないか……!)

ブラル大司教が、興奮しているエルケを宥めるようとしているのか、それとももつと追い詰めようとしているのか、ただ淡々と言葉を吐く。

「それは普通の人間なら勿論の事、たった数年前に生み出されたばかりの人魚なら当たり前のことだ」

「……違う! 僕は人間だ。人魚なんかじゃない……!」

後ろ髪を束ねていた紐が解け、床にはらりと落ちた。

赤金の長い髪が肩を伝って、顎の横まで落ちてくる。

堪えていた涙が床に一滴落ちた。

エルケは気付いてしまった、姉の言葉の意味に。

(姉さんはいつも僕を見て泣いてた……)

いつも、苦しい恋に胸を焦がしながら『どうして、私は人魚じゃないの?』とエルケの前で泣いていたのだ。

(……姉さんは知っていたんだ。僕が人間じゃないって……僕が人魚なんだって……)

だからあの夜、姉はエルケを連れて行こうとはしなかった。小屋の奥に置いて、隠れるようにきつく言い聞かせてから彼女は小屋を出て行ったのだ。

(……僕は何にでも無かった……姉さんの大事な妹でも、大切にされていた村の小さな子供でも……それに人ですら無かったんだ)

「君が、君の生い立ちを受け止めるか受け止めないかはまず置いておくとして、我々はゼークトのエリクに話があるのだよ」

「……ゼークトの……僕？」

ブラル大司教の口調が変わり、エルケはゆっくり涙と鼻水塗れの顔を上げた。

「そうだ。君と取引をしようと、我々は言っているのだ」

その声を最後に、口を噤んだ彼の横でフリーデグント伯が姿勢を正し、テーブル上に大きな地図を広げる。

その地図には各所に赤い印がつけられていた。

黒い線は曲線となり、各所へと広がっている。

「我ブラル大司教領は今現在財政難に加え、干ばつによる飢饉の恐れと戦争という未曾有の危機に直面している。まず、マルブルク公国が二か月前に我領土のイーゲル近郊に侵攻した。戦火は広がらずビューロー軍は撤退したが、今も軍隊の活発な動きは報告されている」

イーゲルの件に関しては、クルトが教えてくれた事とほぼ同じだ。

エルケは袖で顔を拭くと、唇を噛んで声無くしゃくりあげた。

(今は何も考えたくないのに……)

鼻が小さく、すんと鳴り、慌てて咳払いをして誤魔化す。このまま何も聞かずに何処かに消えてしまいたいとエルケは思っている、話はまだ終わらないようだった。

エルケの取り乱した姿は何も気にもしていないらしく、ブラル修道院長が地図の一部を指差す。

「北部は比較的、天候的にも安定しているようですな。ザクセンの北部にアロイス地方辺りは気候にも変化が無いと聞いている」

「どちらにせよ、マルブルク公国が何処かに攻め込む前には一度我領とも刃を合わせる事になるでしょうな」

フリーデグント伯が頷いた。

領民がこれから干ばつで苦しむのが分かっているのに、戦で金を出すと知ったら恐らく暴動が起きるだろう。

短い干ばつは所領が潤ってさえいれば、何とか蓄えて乗り切る事が出来る。それなのに軍を出し、蓄えを糧秣に回すと分かれば流石に黙っている訳にもいかない。戦争は金が掛かるのだ。

先に手を出した方が、この場合悪者になる。

時と場合をわきまえず、喧嘩を吹っ掛けたという認識をされるのだ。

この場合、エーゲル近郊で起きた小競り合いは大きな戦争の引き金にはならない。もつと立派な大義名分が必要になるのだ。

宗教から発足した慈愛と清廉のブラル大司教領が、戦争を決意するにふさわしい前振りだ。

(……そうか。読めたぞ……)

エルケは奥歯を噛み締めた。

「……僕を、大義名分にするおつもりですね……？」

正解なのだとブラル大司教は微笑んだ。

(畜生……！ くそつたれ！)

正解を当てても何も嬉しくはなく、気持ちも高揚しなかった。思い付くありとあらゆる罵詈雑言を心の奥で浴びせる。

エルケはテーブルに手の平を叩き付けて、三人を順に睨み付けた。

「別に僕は、誰かに復讐して貰おうなんて思っていない！ 僕がもし

『ゼークトの人魚』でそれが戦争の引き金になるのなら、ビューローにもなんでも僕を引き渡せばいいじゃないか！ その為に、また戦争が起きるなんて……絶対に嫌だ！」

「それだと、我々が困るのだよ」

フリーデグント伯が、叫ぶエルケの声に畳み掛けた。

「プラウゼンに『貴重な資源』を連れて行かれる訳にはいかないのだ。そして偶像のいる戦争がどれだけ軍へ覇気を与えるか、君は考えた事があるかね？ その扇動する悲劇の声の主が美しければ美しい程に、戦争も正当化され勝機も高まるのだ」

(こいつら……狂ってる！)

エルケはブラル大司教の方を向く。

彼の視線を真っ向に受け止めた。

(いいの？ それは自分の子供を戦の前線に突き出すってことなの……！)

悲しい様な苦しい様な複雑な瞳。

それは自らの鎖を完全に投げだす事が出来ないのだと吐き捨てたクルトの瞳と全く同じだった。澄み渡るアクヴァマリーンの瞳。

クルトのことを思うと、その瞳が殺してやりたいほど憎くなる。

「だからって、皆を戦争に駆り出すと言うの！」

興奮の余りに叫んでから、エルケは大きく咳き込んでしまう。

「小さな火で済んでいる間に火を消し止めねば、大木は倒れてしまうのだよ」

「クルトや騎士団は、貴方がたの城壁じゃない！」

頭を両手で抱えた。どうしたらこの事態を回避できるのか、エルケにも分からなくなったのだ。

(……短い間だったけれど、ワルゼ騎士団は優しくしてくれたんだ。それを……僕の復讐の為に駆り出すなんて……！)

何度も首を振る。

髪が乱れるなんて、この際全く考えなかった。

「君へは戦が終わった後に、エーゲルの地を贈ろう。我々はこれから先のエーゲルの平和を約束するよ」

「……そんなの……！」

その後続く言葉は、エルケの口から出ては来なかった。

(だって、そこには誰もいないのに……！)

平和なエーゲルが戻ってきてても、決して皆が元通りになる事はない。誰もいない廃墟の村に、ただ一人、エルケが取り残されるだけだ。

戦が終わるとエルケはヨープの為に石を導く人魚となって飼われるのだ。

(……おかしくなりそうだ)

クルトやヤンを戦争に駆り出して、ヨープの城壁にさせる。ほんの少しの犠牲で中央の大人数を守る事が出来ればいいのだと、彼等は冷淡に言いのけた。

「もし、断わったのなら？」

エルケは震える声の向こう側に逃げ場を求めた。

しかしそれは裏切られるのだ、ブラル大司教の一声に寄って。

「何も変わらないよ。君が先頭にいない戦争が始まるだけだ」

エルケは瞼を強く閉じた。

「報告致します」

「構わん、続けてくれ」

ノルベルト副総長は、机の上に山となった決済待ちの書類に視線を落とした。

比較的健康体の彼の顔にも流石に疲労の色は色濃く現れ、髪はらしくなく乱れている。

団服の襟元から見えるシャツは大きく着崩されており、彼の奥方が恐らくその姿を見れば確実に頭へ洗濯物を叩き付けてくるに違いない。

家庭持ちの彼も、ここ数日は城の麓にある自宅には戻っていないかった。よって、彼の奥方にこの惨状をばれてはいないのが幸いともいえるかもしれない。

この激務も総長であるクルトが全責任をノルベルト副総長に押し付けているからだが、彼は然程その件に対して不満は持っていないかった。むしろ若い内に苦労はするものだ、総長に関してはそう静観している。

だがヨープとライゼガングから日を置かず届けられる報告は、日増しにその数を増していた。

嘆願、依頼、要請など多種だが、主に彼をここ最近悩ませているのがワルゼ城の間者の存在だった。

ノルベルト副総長は飴色の自机に肘を付け、考える素振りを見せる。

「絞り込めたか？」

「いえ、まだです」

昨日夜遅くにエーゲルから帰還したばかりのワルゼ騎士団八隊、フォルカー・クレマースが言った。

報告するべき事が無いという事に、彼が申し訳なさを感じている

様子は見えない。

事実、これまで「絞り込めた」という報告を上げた騎士団員はいないのだ。

フォルカーは中肉中背で、褐色の髪に青い瞳という外見は至って普通の外見を青年だ。しかし彼には責任感があり、仕事に関しては普通に突出して有能だった。

反面、異常に時間に細かく、ノルベルト副総長が書類を一枚書き上げる時間を計測し、終わると予測された時間を見計らってやって来る。

彼は騎士団の中で『時計のフォルカー』と恐れられている。主に、書類の決裁の遅いノルベルト副総長にだが。

「そろそろ、書類の決済が終わる頃だと思っていましたか？」

「……お前な…年寄りを大切にしないと駄目だと教わらなかったか」

「いえ。仕事の有能な上司は最大限利用せよ、と厳しく躡けられました」

「……とんでもない親だ」

「自慢の親です」

ノルベルト副総長はフォルカーとその件に関して談義するのを諦め、手元に置かれたフォルカーの持ち込んだ数枚の羊皮紙に視線を落とす。

読み易い流麗な文字は、今ライゼガングで駐留している六隊の書記によるものだ。

羊皮紙には今現在変化がないことと、隊長であるザシャへの文句が延々と綴られている。

ワルゼ騎士団は、総勢百人程。

任務に付いている団員を抜かせば七十名程が城には常駐している。騎士団は七隊に分けられ、隊にはそれぞれ十人程が所属。残りの団員は兵器、風紀、炊事、蹄鉄の係に分けられている。隊の上には隊長の名が与えられていた。



今現在ライゼガングの任務に当たっている六隊は、現在城で待機中の四・五隊と合わせ軽騎兵で構成されているのだが、六隊隊長が軽騎兵隊長であるザシャ・バーデだ。

騎士団内では『樽持ちのザシャ』と呼ばれている。名の如し、かなりの酒豪だ。

その『樽持ち』軽騎兵隊長は役場に『常駐』し、『ワルゼ騎士団及びブルル大司教への心像を急激に改善する為』尽力しているらしい。時折、その任務が行き過ぎてベッドに『常駐』する事も書かれている。

これだけを見れば、まるで日記の様な稚拙さだ。ノルベルト副総長は、俯き込み上げてくる笑いを堪えるのが精一杯だった。

勿論、報告はこれだけでは無い。

「鉱脈の裏に動きあり、か」

ライゼガング金山は閉山の危機に直面している。

限りある資源が枯渇するのは許容するべき事だとは言え、金鉱の裏手の山にはマルブルク公国の領境が広がっており、金鉱が見つかった二十余年程前に所有権を主張して小競り合いというには少し語弊がある程の中規模な戦が勃発した。

その数度の戦でワルゼ騎士団は二十数名の死傷者を出し、ライゼガングの鉱夫と貴重な山師　　鉱脈を探索する、にも死傷者を出したのだ。

ライゼガングの裏には手を付けないという暗黙の了解で戦火は下火となり、張り詰めた糸の如く微妙な均衡は保たれてはいたのだが、枯渇が深刻化したライゼガングの山師は結論として、今回その裏手にまで探索の手を伸ばしたらしい。

そしてワルゼ騎士団六隊の警備の元、向かった先にはマルブルク公国の兵士の姿が散見した。

「……そろそろ、総長にはお戻り頂いた方が良さそうだ」

「馬を走らせましょうか？」

「いや、もう少し待とうか。ヨーブからの報告も間もなく来るだろ

う。それに持たせればいい」

「はい」

一年ぶりに会ったクルトは随分とその様相を変えていた。相変わらずの甘え下手で、父親に似た可愛げのない口調だが、幼い頃からクルトを見て来たノルベルト副総長には微笑ましくて仕方がない。

ワルゼ騎士団総長として、クルトがこの地へ任務に付いたのはマルプルク公国との戦を終えた二十余年前。

マルプルク公国との戦で先代の総長を失い、失意に陥った時だった。

クルトはその時まだ歳が十歳にも満たず、僅か五歳。前代未聞の幼い総長であった。

首都を追い出された幼い第二王子は自分に起きた事を許容し得ず、一方失意のワルゼ城は幼い総長を許容し得なかった。

総長室に幼子を置く訳にもいかず、ノルベルト副総長は当時二人目の子供が出来たばかりの我が家へクルトを預けたのだ。

第二王子を預けられた彼の奥方であるフィネは名前の儂さに反して、豪胆な性格であった。

自らよりもずっと身分の高いクルトを朝から幕で文字通り叩き起こし、洗濯や炊事までを叩き込んだ。

少しでも泣こうとする素振りを見せれば、眼の前にしゃがみ込み、より長くより激しく泣く様にせつついた。

勿論、それで泣く意欲を駆りたてられる人間はいない。

城を出たばかりは小さなことでも泣いていたクルトは程なくして泣くのを止めた。

剣を持たされたクルトは、同時期にノルベルト副総長の家に預けられていた少年達と剣を交え遊ぶようになる。

マルプルク公国の戦で命を失った二隊隊長のイエフ・ルートガー・リュッタースの息子、ヤンとエーリヒだ。

一回り体格の違うヤンとクルトだったが、時を待つことなく互角

に戦えるようになった。

エーリヒはまだ幼く、その小さな手を叩き見守るだけだったが兄と兄の友人　という認識だった。二人の剣技に日々喝采を贈っていた。

穏やかな日々が続くかと思われた十数年後、剣の才覚を見せるヤンの腕がヨープからの使者の眼に止まり、首都ヨープにヤンは呼び寄せられる。

当時ノルベルト副総長宅では奥方のフィネが第三子を妊娠中で、ヤンはヨープに発つ時エーリヒを伴って行った。

フィネのエーリヒを置いて行けという制止をがんとして受け入れず、ヨープに向かう前にヤンはエーゲルの孤児院にエーリヒを預けたのだという。

当時ヤンは十七。

ブラル大聖堂で行われた騎士叙任式で、ブラル大司教の手に寄って騎士に叙された。

(……そういや、ヤンもまた可愛げのない子供時代だったな……)  
ノルベルト副総長は懐古する。

(例えば、あいつは幼い頃から笑わない子供だった)  
幼いエーリヒを置いて母親は流行病で命を落とし、程なくして父親も亡くした。

妻帯を許されていない団員の中でも例外はあり、イエフ・ディーデリヒ・リュッタースの様に巡礼者を警備する任務の無い通信係や炊事係にはそれが許されている。

後は総長と副総長は例外として認められているのだ。これは恐らく、前線に出て命を落とす可能性を慮つての事だろう。

幼い肩へ一気に責任を背負ったヤンは、その幼さを思わせない程の礼儀正しさだった。

エーリヒの世話は勿論の事、炊事洗濯を黙々とこなし、奥方であるフィネは逆にその払拭された子供臭さを取り戻す為に尽力する羽目となった。

そこで会ったのが、クルトだ。

子供同士の関係は程なくして主従となり、そのまま継続していく。

成長しても、ヤンもまた何も変わらない。表情の乏しい姿は幼い頃を思わせ、隠し持った激情は感情の裏にその息を潜めてしまっている。

幼い頃に感じた悲しみに耐える為には、感情を仕舞い込むしか術が無かったのだ。

「……あのままにしておきたい気も、するんだがな……」

ノルベルト副総長は、報告書を指で抓んで独り言ちた。

「は、何か言いましたか？」

「いや、何でもない。各隊長に出兵の準備を整える様に言ってくれ。総長が戻り次第、出兵するぞ！」

「……了解しました」

何か言いたげな素振り、フォルカーは部屋を出て行った。

扉を閉める前に「くれぐれも決済をお待ちしております」と言い残す事も忘れない所が『時計のフォルカー』 足る所以だ。

恐らく彼は遅くは無い時期に再び扉を開けるだろう。

ノルベルト副総長は机に上がった一枚の書類を手にした。

ワルゼ城に保管されていた宝石、ベルンシュタインについての報告書だ。担当者にはエリクのサインがある。

十年振りに現れたヤンは、儂げな風貌の少年を連れていた。

エーリヒと同じ程の歳嵩だ。

その少年がエリクだった。

十五なのだという割に体には筋肉どころかむしろ付くべき肉も無く、剣を持てば折れてしまう様な細い腕だった。

赤金の髪は、鑑定したベルンシュタインそのものに見える。

ただ奥に闇を隠し持った瞳は意志の強さを感じさせた。逆を返せば頑固とも言える。

きつと鍛えれば、いい兵士になるに違いない。ああいった手前は

負けず嫌いで、打たれ強いのだ。

しかし見かけは、一見まるで少女の様だった。

小さく細い指をヤンの腕に絡ませて、不安げな顔をしている。

それを見下ろすヤンの顔にノルベルト副総長は苦笑したのだ。隠し持っていた筈の感情が、上手く隠しきれずに漏れ出てしまっているのが妙におかしかった。

数日後、嵐の夜ヤンに伴われてやってきたクルトにも同じような印象を持った。

大の大人が二人して、少女然とした少年に骨抜きになっているのは正直道化そのもので、それでも気に入った玩具を取り合う子供臭さを見せた二人に、少し安堵もしていた。

せめて、エリクが『女』だったならば。

どちらかが娶り、戻るべき場所を見つければ何かが変わるのかもしれないとノルベルト副総長は埒も明かない想像をしてみよう。

今や、ワルゼ城の騎士団総長と都市ヨーロッパの騎士とまで成長した愛すべき血の繋がらない息子達の、何かしらの変化が欲しいと、彼はつい願ってしまうのだ。

クルトは現在の位置を容認できるきっかけを、ヤンは自らが導いた弟への悲劇を受け入れるきっかけを、未だ見つける事が出来ず暗闇の中を迷走している。

行く先はまた険しく許容でき得ないとしても、背を向けているままでは何も変わらないのは明白だろう。

「……本当に……面倒な馬鹿息子共だ」

息子より面倒な仮の父親は、悩ましげに頭を掻き回した。

## 間章

これ程までに、水に沈んだこの下半身を疎ましいと思った事があつただろうか。

どんなにこの水から出てしまいたくても、この体は海から離れると生きてはいけないのだ。

見える景色も、移り変わる季節も全て海から見る事は出来るのに、この水を愛した体は、彼と共に駆ける事も、横に立ち並ぶ事も出来ない。

水に浮かぶ赤い髪が日射しをはね返すと、それはまるで宝石のようだと彼は愛おしげに笑った。

濡れた石に体を預け手を伸ばし、その頬に触れる。

滑らかな肌。

美しい造形。

彼の顎と頬。

なんて愛おしいのだろう、故郷の海すら霞む程までに。

そんな彼の髪は、まるで金の畝。

決して見る事も叶わぬ小麦の畑。

美しい絵画を見て思いを馳せ、その金の畝に指を這わせる。

もっと近くに、もっと傍に行きたい。この胸を過り、焦がす想いを、伝える為には何をしたらいいのか。

愛の言葉を囁く彼の声は、まるで天の唄。

胸を締め付ける残酷な神の声。

水を愛すこの身を陸に打ち上げ、終りへ導いていく。

声を聞かせて欲しい、もっと長くずっとそばで。叶わぬ事を知っていても、諦めは付かなかった。

これが愛おしいと思う事なのだ。

胸の中に吹き荒ぶ吹雪か、荒れてうねる嵐かと思う程の感情に翻弄され、全てを求めて引き裂かれる心にもまた翻弄された。

慈愛の微笑みと、猛毒の声。

自分を掻き抱く彼の腕と、濡れた唇にも熱く狂おしい唇。

共に逝く事の出来ない悲しみと、刹那の時だけを共に生きる事の出来る喜びに心満たされる。

彼はいつか去って行く。

この水の滴る岩場から体を起こし、緑眩しいあの場所や、自分が見る事も叶わぬあの大きな宮殿や、血が溢れ出る凄惨な戦場へと。

もしこの尾ひれが二本の足ならば、共に戦場を駆けて彼の代わりに全てを手に入れる為の炎となろう。

もしこの腕が水に濡れず彼の元に辿りつけるのならば、悲しむ彼を抱き締めて癒す為の水となろう。

それでも自分の足は水から離れる事も赦されず、この腕は水に濡れぬまま彼を抱く事も、水から上がり傍に行く事も赦されないのだ。

美しい石は姉の命。

愛おしさに狂い、剣を握るこの手は血に塗れ、穢れている。

泣き叫び、怨嗟の聲に塗れる声を殺し、命を糧に神へと乞うた。

もし共に歩けるのならばこの細い腕を切り、魚の様な足を切り、記憶を失っても構わない。

傍に行きたい。

触れあいたい。

その切実な思いは神の元へ。

神の悪戯で私はまた生まれた。

人魚は恋をしました 初めての恋でした  
月の映る水面を抜けて 逢いに行きました  
星の流れる水面を滑り 逢いに行きました  
貴方に会えるのならば この足など捨てましょう  
貴方に会えるのならば この腕など切りましょう  
貴方のその髪は金の畝 貴方のその声は天の唄  
聴く度に私の胸は震え その全ては呪縛となる  
見る度に私の眼は潤み その全ては鎖となる  
貴方を想う度に この心は炎となり全てを焼き捨てて  
貴方を想う度に この心は水となり貴方を癒していく  
止まらない涙は石となり 水面を辿り貴方の元へ  
止まらない涙は水に消え 水面を辿り貴方の元へ  
人魚は恋をしました 最後の恋でした

赤い波間に目覚めると、泡が沢山見えた。  
渦が激しく、体が持つて行かれる。

もつと下はずつと穏やかなのに、沈まずに浮かばなくてはいいけな  
い様な気がしていた。

足を伸ばし、手をかいてうねる波間へ向かう。

(こんなに私は泳ぐのが下手だったろうか……?)

手はこんなにも脆く、足もこんなにおぼつかない。

いつまでたつても先は見えずに、そろそろ疲れて来た頃にやっと  
灰色の波飛沫の中から、空が見えた。

(ああ、空もまたいつもと同じ色をしているのだ)

見上げた空から、白く小さなものが数多く降ってきた。

荒れ狂う水の上で仰け反り口を開けると、唇に雪が落ちた。  
咽喉が渴いた、そう突然思った。



波に押し流された体は、水に促されるままに砂浜へ辿りつく。  
手指の間に入る細かい砂。

おぼつかない足裏で冷たい砂の上に立つとふらつき、背中からまた海に逆戻りしてしまった。

指で辿った腰から下が、滑らかな曲線を描き、その先が二つに分かれています。

(……………これが、足……………)

初めての足を見た時は、嬉しい様な悲しい様な不思議な気持ちになつた。

どうしてそう思ったのかは分からない。

(……………上手く歩けない……………)

ふらつきながらも立ち上がった。

生まれたばかりの体はまだ幼くて、物の道理というものをよく理解していないのだ。

水から出たばかりのこの体では、まだ声を発する事も出来なかつた。

灰色の空の下は、一面銀色だ。足裏が濡れて、指の間に冷たさで僅かな痛みが走るのを不思議そうに見下ろした。

激しい感情を求めて、彷徨い歩く。

海辺の近くの感情は穏やか過ぎて、そして皆家の中に閉じ籠ってしまっている。

もっと激しく、もっと切なく、生まれたばかりの体を『この姿』に呪縛するものが欲しかった。それは、決してもう二度と海へと戻らないように呪縛する鎖となる。

激しいものは自分を引きつける。

激しさを愛していた。

いつも嵐の海でこの体は生まれるのだ。

それでも、またこの人魚の姿に生まれてしまったのだと、人にはなれないのだと、何度生まれても海の中で嘆くのだ。

眼の前で何が起きても、魚の足では救う術を持たなかつた。

戦も生死も、また恋も自分達が海から出た世界をどれだけ神に乞うても、その二つの世界は交り合う事なく、互いを真っ直ぐ進んで行くだけだ。

そしてまた石に戻る、次に出会う為に。

自分の手の平を自らの血で染めて、また石へと戻って行く。

でも今は念願の足があった。長い間、眠っていた所為でこの体はまだおぼつかないけれど、それでも足は土を踏み陸を進む事が出来る。

それは、夢だった。

長い間、切実に願って来た『私達』の夢だった。

赤い血に塗れ、怨嗟に埋もれようと、願って来た夢だった。

共に生きたい。

共に駆けたい。

共に戦いたい。

貴方と愛しあいたい。

この姿は『私達』の夢だった。

激しい嘆きの声と叫び声の後に一際激しく引き寄せる声を見つけ、引き寄せられる。

その穏やかでも狂おしい悲しみに心が掻き立てられた。

死にたくない、ごめんなさい。でももう言えない、もう会えない。

(……ああ、なんて懐かしい哀しみなの?)

もう遙か昔に置いて来てしまった、生まれる為の糧となったその激しい記憶がほんの僅かでも呼び起こされる。

雪に埋もれて行く姿を見つけ、草むらの中で立ち止った。

生まれたばかりのこの姿はまだ誰にも見えていないのか。その場にいる人間が、近づく姿に気付いた様子はなかった。

泣いている。雪に半分消えかけた少年の横で、細い体を大きな布で覆った女が泣き叫んだ。

「お願い、置いて行かないで」  
声はまだ出て来ない。

だから心の中で彼女に応えた。

(……その少年はもう無理なの。彼は既に動けない)

命の灯は既に消えかけ、どんなにその温かい涙を流したとしても彼の魂がまたその器へと戻る事は無いのだ。

(そんなに泣かないで……)

傍に屈み、女の頬を撫でた。

この指はまだこの姿に馴染まずに、彼女の頬を拭う事も出来なかった。

たまに激しく吹き付ける風が触れたとでも思ったのかも知れない。顔も上げずに、女は泣き叫んでいる。

「もう一度笑って、お願いよ……！」

転がった彼の器の横で、少年が自分の体と女を見下ろしている。

哀しそうに微笑む少年の顔。魂が体から既に出てしまったことに気付き、呆然としている。

微笑むなんて、無理な話だ。彼はもう指一本すら動かす力を持たない。

悲しい、寂しい、苦しい、切ない。せめてもう少し、せめてもう少しと、また会えるまでこの地に立っていたかった。

魂だけの彼の声は、まるで静かな慟哭だった。

息絶える前のささやかな悔恨。決して報われることのない最後の囁き。

そして、その想いに『私達』の想いを重ねてしまう。

どんなに願っても、既に潰えた命の灯が消えて行く事を止める事は出来ないのだ。

冷え切った雪塗れの少年の頬に一筋の涙が零れて、雪に消える瞬間に思わずその涙を指で受け取った。

人の涙は熱い想い。

雪のように冷たく滑り落ちてくる事も無い。

その熱さを愛し『私達』は永遠にそれを求めてしまう。

涙から沢山の想いが導き出されてくる。温かい思い出、愛おしい思い出。それは全て笑い、守られて、安堵しているものだった。

(……なんて温かい思い出なんだろう)

それに魅せられて 身の内に彼の魂の欠片を導く。

「時が来るまで私の中で眠り、その時を待てばいい」

彼の魂と短い旅路を共に歩く事を誓った。

「私は貴方の悲しみを少しでも癒すように努力しましょう」

ほんの少しの時間、それは自分の体が成熟するまでの約束。

「貴方が言い残したその大切な言葉を私は抱いて、導いてあげましよう」

それまでその小さな体の雛型を借り受けることを誓う。

成熟し、本当の体を取り戻すまで幼いその体は陸地に心を留める枷となる。

「貴方の苦しみは、私の苦しみ。いつかそれが浄化するまで、この私達の記憶は遙か先まで封印し眠りに付かせましよう。再び、目覚めるときが来るまでこの身の内で眠るといい。そして目覚めた時は本当のお別れの時、天へ召されるその姿を私は共に見送りましよう。眠りなさい、エーリヒ」

彼の冷たい体を抱き締めた。

このおぼつかない体でも、魂だけなら十分温める事が出来た。

包み込みながら魂を抱き締めると、海の匂いがした。

赤金の波が何度も打ち寄せて、引いてはまた混ざり込む。涙が雪と同化するように、ゆっくりとそれは同化していく。

強く握るのは赤の結晶。命を閉じ込めた人魚の涙。

混ざり合う、融け合う体。

目の前を赤い涙が、押し寄せては逃げて行く。

鮮烈に彩られた赤い海。

(こんなに恐ろしい海の色なのに……それでも愛おしくて切ない) 馴染んだ体に、ゆっくりと目を開けた。

エーリヒの目が開いたのか、それとも違うのか。もう何も分からなかった。しっかりと握り締めた指を開き、宙へ伸ばす。誰かへ向けて。

「……やっと共に行ける……！」

次こそは貴方と共に駆けて、貴方の悲しみを癒したい。

私はその為だけに、人となった。

「馬鹿か。お前は」

前線に立つのだというエルケの台詞を聞いた二人の反応は、全く正反対だった。

移動の為に自分の荷物を袋に押し込みながら、ヤンは聞えよがしに大きな溜息を付く。それは背中ごと大きく動いて、深呼吸にも似ていた。

「そんな弱々しい体で、前線に立ってどうする？ 自分の剣の腕を理解してから言え」

そこまで言われて引き下がる訳にはいかない、これはもう決定事項なのだ。

エルケも自分の袋へ部屋に広げた物をつっ込みながら、背中を向けたヤンに反論した。

「……自分の剣の腕は、誰よりも知ってるよ！ でもこの戦がゼークトの為に始まる以上、僕は誰かの背中に隠れる卑怯な真似は出来ないよ！」

「そうして、真っ先に殺されるってか」

振り返ったヤンの鋭い視線に射抜かれる。

苛立ちも最高潮に達している様だった。

(……怖い……！)

聞き分けのない子供を諭すようないつもの口調は見えず、エルケが少し弱気を見せたら箱にでも押し込まれてしまいそうだ。

腰に佩いたヤンの剣が床の上で鎮座している。

ヤンはこれで人を殺すのだ。

そう思えば、ヤンの言葉の重みは戦に出た事のある恐怖から出てくるものだから仕方がないのかもしれない。

エルケだって、深く考えると尻ごみしてしまいそうだった。

(でも、僕だって……今ここで逃げる訳にはいかないんだ！)

「僕だつて殺されない様に、出来るだけの努力はするよ」  
ヤンの視線を真つ向に受けると、彼は呆れた表情をして立ち上がる。

それからヤンは手に持った外套を投げ付けて来た。

汗と埃臭い、男の人の臭いだ。決していい匂いだとは言えないけれど、何処か安心する臭いだと思ってしまふエルケもかなり旅に染まってきた。

見上げたのは剣呑な視線。

(そんな視線で、決意を揺らがせようとしたって……無駄だよ)

エルケも今回は絶対に引く訳にはいかないのだ。意を決して睨みかえした。

その視線は何倍にもなつてエルケに突き刺さってくる。

「……甘えんな、戦争だぞ。子供の遊びじゃねえんだ」

「綺麗ごとだつてのは分かっているよ！ でも、ゼークトの名前で始まる戦に騎士団が駆り出されて、その後ろでぬくぬくとしているのは嫌だ！ それに、これはもう決定事項なんだよ」

エルケとブラル大司教との話し合いの後、早急にマルブルク公国ビューローへ送り付けられたヨープからの書簡は、封蝋に沈み彫りが捺された公式文書だった。

ビューローに送り付けられたフェーデと呼ばれる宣戦布告にも近い和解交渉の一部はこうだ。

『私、ブラル大司教は知らしめる。』

私は良き平和の為に、双方を仲裁し、以下のように両者の和解を取り決めた。

マルブルク公国ビューロー城主は、百人の騎士と兵士を伴ってゼークト村へ赴き、赦しを請い、自身の償いを受け入れるよう、謙譲に希う』

それは、一見ゼークトとビューローの『穏便な和解』を推奨する

ものだった。

しかしその文言のあとに、到底用意する事が出来ない程の贖罪金の支払いと、和解以降はゼークトへの手出しは一切無用であるという文言が付け加えられている。

和解申し立て者のサインはエルケだった。

ゼークトの生存者であるエルケが救援を乞い、ブラル大司教領はビューローとの仲裁を依頼された事になっている。

文書の中には、エルケや村人が受けた屈辱的な仕打ちや数々の拷問の内容が箇条書きされ、勿論エルケの生い立ちなどは伏せられていた。

今回のフェーデは、ブラル大司教領が大なり小なり軍事行動に出る前の最後の砦の様なものだ。和解の条件を全て飲まなければ最後の手段となる戦もやむを得ず、と宣言しているに他ならない。

勿論それは、ビューローが早々飲める条件ではないのを見越して出され、早々に何処かへ進撃を加えるのも想定上だ。

そして、戦いの扇動者であるエルケを最前線に送り込むというのは、現在パウルゼン騎士団を一部ゼークト付近へと送っているフリーデгент伯の案だった。

エルケが戦を先導するというのは、戦いの正当性を明らかにする為にも有効らしい。

勿論、兵士の士気を上げる目的もある。その為、当初エルケの身柄はひとまずの戦場になるだろうと予測されるパウルゼン騎士団に移される事となっていた。

しかし予定よりも早くライゼガング金鉱の裏山で起きた小規模な戦闘 被害者は奇跡的にいなかった。その報告がワルゼ騎士団から届き、ブラル大司教領はその戦いの場をゼークト付近から大幅に変更する羽目となったのだ。

目下の戦場は、ライゼガングの山を越えたアロイス地方。

丁度、領境に属する平原だった。

ビューローの小隊がライゼガングに張られたワルゼ騎士団の戦線



を突破する前に、エルケはミュンヒ騎士団と平原で合流しなくては  
いけない。

エルケはなかなか折れようとはしないヤンに業を煮やし、乱暴に  
吐き捨てた。

「ヤンが駄目だつて言うなら、騎士団に頼むよ！」

「俺はいいよ」

そんな投遣りなエルケの声に、部屋唯一の出口である扉に背中を  
預けクルトが了承の片手を上げた。

「……おい」

そんなクルトの反応を見て、眼の前でヤンが齒ぎしりをする。

エルケに向けられていた剣呑な視線をクルトに向けて、地を這う  
様な低音の脅しをかけた。

「……無理に決まってるだろうが。こいつを殺してえのか」

中身のぎつちり詰まった袋をヤンはベッドへと投げ付ける。

手早く外套を身に付け、ヤンはエルケを振り返った。

ヤンの視線は苛立ちと微かな悲しみが混ざり合っている。言う事  
を聞いてくれ、頼む。そんな声が今にも聞こえて来そうだった。

（ごめん、ヤン。でもそんな事、勿論聞き入れられる筈も無いんだ  
よ）

ここで引いたらブラル大司教と話した意味が無くなってしまふの  
だ。

エルケが先導しなくても、どうせ皆が戦いに巻き込まれるのなら、  
せめて前線で共に駆けたい。

ヤンの言い合いの相手はエルケからクルトに移った様だった。ヤ  
ンの視線だけはエルケに留めたまま、ヤンはクルトと話し始める。

「ただの兵士じゃねえんだ。こいつは旗持ちだぞ？」

軍旗は、戦場で全軍で一番位の高い人間に預けられる。

この戦ではエルケが旗騎士だった。

軍旗が見える以上エルケは危機に陥る事も無く無事であり、指揮  
系統が無事であると確認できる。どんなに敗戦濃厚であろうとも、

軍旗が地に付いていない以上は遁走も降伏もあり得ないのだ。

逆を言つと旗が地に付けば、士気と指揮に係わる。

「でも放つておけば、俺達じゃない誰かの後ろで死ぬだけだろ？

戦は始まるんだ。エリクはゼークトの生き残りとしてその先陣に立つ。それは決まってる事だよ。それとも」

ヤンが乱暴に髪を掻き、ベッドの足を蹴り付けた。そんなヤンを見て、クルトが苦笑する。

「そんなに嫌なら、ヤンがエリクを連れて逃げるかい？ 俺はそれでも構わないよ。どうせ、戦を始めたがっているのは俺の父親だからね、幕引きは俺や兄の役目でしょ」

悪い冗談にもならないそんなクルトの台詞を聞いて、史上最悪の溜息をヤンはついた。

胸の中の空気が全部出て行ってしまうのではないかと、エルケが心配してしまう程に長く重い溜息だった。

クルトはそんなヤンを責めもしないでただ見守っている。まるで本当にヤンがエルケを連れて逃げてくれるのを望んでいる様だ。

（僕の考えを無視して、そんな勝手な提案はしないでよ……！ 僕は逃げたいんじゃない、一緒に戦いたいのに！）

エルケは自分の肩に外套を付け、立ちあがる。

唇を噛んで、銘々思惑の錯綜する二人の姿を見渡した。

「……僕は絶対に行くよ。ヤンが付いて来なくても、絶対に引くつもりはない！ 蝶の出方も知りたいし、ゼークトに辿り着く目的の前にビューローが立ち塞がるなら、僕の方だつて戦を逆に利用させて貰う。クルトの事だつて……勿論、利用するよ」

偉そうなエルケの口調を聞いて、クルトが嘔き出した。アクヴァマリーンの瞳が嬉しそうに揺れている。

「……いいよ。喜んで、利用されてあげるよ。お前が俺を戦に駆り出すのなら、本望だ」

ふざけた声色でも、クルトの台詞は本気だ。

見詰め返す視線が熱く、見られた部分が燃えそうだった。

先日彼が言っていたクルトの『動く意義』を、今エルケは意図せず与えたのだ。

クルトはゼークトを取り戻す為に動く。ここに誰もいないのなら、クルトはきつとエルケを滅茶苦茶になる程強く抱き締めて、エルケの小さな抵抗をもともせずあちこちに唇を落とすに違いない。それ程までに、クルトの視線は激しい感情の籠った視線だった。

でも、今はこの部屋にヤンがいるのだ。ヤンの存在に少し救われた。クルトのその感情には、今流される訳にはいかない。

（そもそも人間でも無い人魚である僕が、そんな感情を受ける資格があるの？）

エルケの心の奥で微かに何かが揺れる。

姉に言われ、エルケは幼い頃からずっと少年の姿をして過ごしてきた。

姉と別れてからは体を守る為に、城を逃げ出してからは旅を安全に続ける為に、ビューローの追手にはゼークトの生き残りだと気付かれない様に、女である事を捨て男であろうとしてきた。

そして、エルケは今、戦を扇動し前線に立とうとする為に男であろうとしている。

いつかその激しい感情にエルケが押し流されるのであれば、きつと全て終わった後だろう。

男の姿を捨て女に戻り、人魚であるエルケがささやかな幸せを求め。そんな事が本当に出来るのだろうか、答えは無かった。

でもゼークトを取り戻すどころか、戦もまだ始まっていない今では、そんな事を考えても栓無き事だ。

愛用の細い剣を腰に佩き、エルケはクルトが背を預けた扉へと一歩足を踏み出した。

ベッドの脇で窓枠に腰を預けたヤンを、エルケは振り返る。

（本当は、あなたと離れたくないんだ。ヤン）

心の中の訴えを無視することも出来ず、そのまま部屋から出てしまえばいいのに思い切ることが出来なかった。

エルケは重い口を開く。

「……ヤン」

この部屋にもし誰もいなかったのならエルケはヤンに駆け寄って、その不器用な優しさを愛おしく思いながら謝罪するのだろう。

そして我儘だと言われても涙を流して、共に駆けさせて欲しいとエルケは懇願してしまうに違いない。

ヤンはきつとそんな軽慮なエルケに心底苛立ちながら、それでも完全に手を放す事が出来ないのだ。それはエルケにもよく分かっていた。

(……そんな子供みたいなこと、もう出来ないんだよね……)  
戦を扇動するのであれば、そんな弱々しいままのエルケではヤンどころか誰しもが付いてくるのを不安に思うだろう。

エルケはもう一度、動こうとはしないヤンを言葉で促す。指に扉の取っ手が触れた。

「……ヤン、行くよ」

ヤンは俯いたまま険しい表情を浮かべている。

所属団のない彼はミュンヒでもワルゼンでもパウルゼンでも戦線を選ぶ事が出来るのだ。勿論、このヨーロッパに残る選択肢もある。

クルトがヤンを連れて行く、と言ってくれていたから勝手に安心していた。

でも、ヤンがそれを選ぶとは限らなかった。クルトは動かないヤンを見ても無言のまま、こういう時にこそ行使して欲しい権限を使う気は全く無い様だ。

無理やり連れて行くことの出来ない事に落胆し、同時にヤンの自由がまだ残されているようで安堵する。

エルケの唇が少し震えてくる。ヤンが全く動いてくれない事に動揺して、意図せず声が掠れてしまった。

「ヤン、行くからね」

(お願い、ヤン。一緒に行こうよ)

一度涙を流せば、情けなくもそんな泣き言を溢してしまうように

なっていた。

出会ったばかりの頃、こんな思いをした事があるのだとエルケが記憶を辿れば、それはエーゲルのあの小屋の前なのだ。

あの時、エルケは置いて行かれるのかと泣きそうになっていた。それでも結局、彼らに付いて行けたのはクルトが抱き上げてくれたからだった。

その時も、エルケ自ら動く事が出来なかった。

エルケは唇を噛んだ。

ヤン一人がどんなに頑なにエルケが戦に出る事を拒んでも、結局それは無理なのだ。もう動き出してしまった。

(……ごめんね、許して)

エルケは心の中でヤンに謝罪した。

流石に取り乱して説得することは出来ないけれど、どんな手段を使ってもヤンを離したくは無かった。

このまま扉を開けて、ヤンに選択を任せてもきつと付いて来てくれる可能性は低いだろう。

扉の取っ手を放し、エルケはヤンの方へ身を翻した。

意を決してエルケよりもずっと大きなヤンの手を躊躇なく掴むと、ヤンがゆっくり顔を上げる。

暗く沈んだ瞳。

元々感情豊かな方ではないヤンだったが、それでも見てとれる程に彼はエルケを心配している。ヤンは不安なのだ。

戦いに慣れた彼がそう思うという事は、きつとこれからエルケは苦しみ嘆く事があるに違いない。村を失い生死を間近で見、苦しんでいたエルケを彼は気遣ってくれていた。

(……ごめん、ヤン。本当に、心配掛けてごめんね。でも、やっぱり引く訳にはいかないんだ)

何度もしている謝罪は、結局声には出せなかった。

「ヤン、僕と一緒にいこう。僕はヤンの力が欲しいんだ」

(……本当、なんて自分勝手な口説き文句なんだろう……?)

そう、思いながらもエルケの口は止まらない。

「僕の近くでヤンには剣を持って欲しい。そして、凄く頼りないけれど僕もヤンとクルトの剣になりたいんだ」

口説いているエルケの背後でクルトが笑った。

やっぱり少し的外れな口説き文句だったのかもしれない。それでも精一杯の言葉だった。

エルケはヤンの手を放さないままで、後ろを振り返る。

肩をまだ揺らしているクルトを睨み付けると、後頭部から来た大きな手の平が乗った。

その重さに耐えきれず、首が軋む。その手の平に阻害されて、ヤンの方を振り返る事は出来なかった。

「……仕方ねえな」

大きな溜息が聞こえる。

ヤンは頭に手の平を乗せたまま、体を窓枠から離れた様だった。

ヤンの片手を握った手を放そうとしてエルケが手を浮かせると、それを拒む様に握り締められた。

低い声が頭上で聞こえてくる。

「分かった……俺は、盾になるう」

そう言い残し、ヤンは全ての手をエルケから離れた。

何かを言おうとエルケが言葉を見つける前に、ヤンはベッドに放り投げていた袋を掴みエルケの横を擦り抜ける。

ヤンはただ無言で、扉の取っ手を掴んだ。

扉を開け、部屋を出る前にクルトが意味ありげに微笑むのが見えた。

それこそ、意地の悪そうな笑みを浮かべている。

「……大幅な戦力増だね。ワルゼ騎士団の総長として、エリクに感謝しなくちゃ」

「……勝手にしろ」

大きな風を伴って、扉は乱暴に閉められた。

向こう側から聞こえた壮絶な音に肩を竦ませれば、クルトが「あ

れは流石に修理代を請求されるだろうね」と苦笑する。

宿屋の廊下には、軍靴で開けられた大きな穴が鎮座ましているに違いない。

ヤンを手に入れた。

エルケはその圧倒的な安堵に胸を撫で下ろす。

マルガとデリアを当分安全な首都ヨープへ残し、エルケは目下の戦場となるアロイス地方付近に布陣しつつあるミュンヒ騎士団ではなく、ワルゼ騎士団との合流を決断した。

エルケを安全にミュンヒ騎士団の元へ移動させる為向かっていたミュンヒの小隊がヨープに到着する前に、ライゼガングの報告を携えたワルゼ騎士団の使者が到着していたからだ。

市壁の外、小作人が美しく整えた敵の見える畑の向こう側に、彼らは立っていた。

しかし彼らの風貌は「報告の使者」と呼ぶには随分な語弊がある。

クルトが急遽ワルゼに戻る事になるのを、もしかしてノルベルト副総長は既に読んでいたのではないのだろうか。

「使者」とは言っても、結局はエルケ達の警備に当たる事になったのは、豪胆な性格で寸前までライゼガングの警備に当たっていた軽騎兵隊長ザシャ・バーデ率いるワルゼ騎士団六隊だった。

勿論、使者として遣われる様な隊ではない。

「エリクです。宜しく願います」

ライゼガング近郊の小規模な戦は、今の所なりを潜めているらしい。

早急で安全な総長の帰団を望む、とノルベルト副総長からの伝言を携えたザシャは、頭を下げたエルケの顔を見るなり後頭部を掻いた。

「こりやまた、えらい小さく可愛らしい騎士だな。馬に乗ったら見

えなくなりそうだ。鞍に乗せるより、袋かなんかに詰めて、馬の首にでも括りつけておくのはどうだ？」

「そうになると、軍旗も馬の首に固定しておくんですか？ 貴方は何をまた馬鹿な事を考えてるんですか」

二人は立ち止まるエルケの前で、軽口を叩き合っている。

濃い褐色の短い髪に無精ひげの男の方が先に、エルケの顔を覗き込んだ。

ヤンにも見劣りしない体の大きさと、少し多過ぎる程の男臭さにエルケも思わず一步後ろに下ってしまう。

「俺はザシャだ。ワルゼまでは少し急がにやならんぞ。覚悟しろよ、小僧」

エルケの前で屈んだザシャの後頭部を冷やかに見下し、もう一人の男が口を開く。

「僕はアヒムと申します。総長他をワルゼまで警備させていただく任務を副総長から仰せつかりました」

アヒムはザシャとは全く正反対の容姿をした青年だ。薄い金色の髪に鋭く細い目をしている。

ザシャが斧なら、アヒムは鋭く尖った剣先だ。

(……馬に乗ったら見えなくなりそう、とか、袋に詰める、とかには誰も突っ込んでくれないんだ……僕って結構な言われようだよな) 見え透いた世辞を言おうとはしない彼らの口調に、エルケは思わず苦笑してしまう。

しかし、そんな軽口をエルケに叩いた彼らもクルトの姿を確認すると急に姿勢を正した。

ザシャは、アヒムと共にヤンが話していた。

畑の横で一人取り残されたエルケの後ろから、カヤが話し掛けて来る。

「一気に、見た目からして臭くなったわね」

「あはは、まあね」

騎士団六隊は七人構成だ。



ザシャとアヒムの他に、隊員は五名。勿論、皆男。

カヤはこの旅団の中で紅一点。実際は二点なのだが。カヤとエルクは幌馬車に乗る手筈になっていた。

ザシャとアヒム以外の団員は用意された二台の幌馬車の準備を忙しなく始めている。前に二騎、二台の幌馬車の間に二騎。後続した幌馬車の後ろに二騎の警備が付くことになっていた。

当初、後ろの幌馬車にはクルトが乗る事になっていたらしい。

しかし、本人の強い希望で警備に回る事となった。寄って、後ろの幌馬車は無入だ。

そのことをヤンが指摘すると「賊に襲われた時に置いて逃げればいいんだ」と、ザシャが豪快に笑った。

彼はする事も考える事も豪快な人間だ。

「……ちよつと、早まったかしら」

男だらけの旅団を睨みながら、カヤが可憐に溜息をついた。

ヨープへ残る為の手筈をブラル大司教に先立って整えられていたカヤはそれを拒否し、結局ワルゼ城のノルベルト副総長の家へとひとまず向かう事になったのだ。

ノルベルト副総長の奥方とカヤは知己の仲らしい。

「カヤ、いいの？ ヨープを出ても」

クラウスはまだ、ブラル大司教の籠から出る事を許されなかった。カヤが彼と会う為には、カヤもまた籠に入らなくてはいけないのだ。

今回用意された美しく堅固に守る籠の中へ入る事は、カヤ自身が拒絶した。

しかも悪口雑言の並びたてた手紙も付けて、ブラル大司教からの使者をカヤは乱暴に追い返したのだ。

「いいのよ、あの発情期が治まるまで少し距離を置かないと駄目ね。人の顔を見ると直ぐに閉じ込めようとするんだから」

ブラル大司教はきつとあんな悪口雑言の書かれたカヤの手紙を見ても、まるで子供の悪戯を見ている様な顔をして甘受してしまうの

だろう。

(……あれだけ冷酷で冷徹な人間をそこまでにしてしまうカヤの存在も、実は凄いやね)

「もしかしてカヤがお願いしたら、ブラル大司教も戦争を止めるんじゃない？」

エルケが眉を寄せながら呟くと、カヤが眼を見開いた。

次いで首を振る。

黒い団服の固まりを呆れた表情で眺めながら、口を開いた。

「無理ね。あいつらは馬鹿だから、血気盛んな感情を発散する場所が無いとおかしくなってしまうのよ。剣でも斧でも振ってないと、監禁とか狂乱とかろくな事にならないんだわ。巻き込まれるこっちの迷惑返り見ず、人の言う事の半分だつて耳には入っていないのよ」

それでも完全に見限る事が出来ないの、とカヤは自嘲気味に言った。

少し遠くで話を終えたクルトが呼んでいる。

その姿を見るカヤの眼には、きつとクルトの向こう側にブラル大司教が見えているのだとエルケは知っていた。

(ここまでされてもカヤはやはりまだ、ブラル大司教を愛しているんだろうなあ……)

カヤの繊細な心は離れてしまった事で苦しんでいるままなのだろう。悪ぶった口調一つ一つに切なさが滲みて来るような気がする。

「……本当に愚かな男」

それでも、吐き捨てた声には本当に容赦がなかった。

(まあ、それがカヤのいいところなんだけど)

背を向けて幌馬車へ向かうカヤは、そんな愚かな男の手駒となつて動く選択しかないエルケ達を心底から不安に思い、苦しんでいる。だから彼女は、より一層クラウスの傍に一人のうのと残る選択肢を蹴つたに違いない。

「私も、男なら良かったのに。置いて行かれるなんて、屈辱だわ」

カヤは悔しそうに言った。

( …… そうだね。 たかが女だってだけで置いて行かれるなんて本当に嫌だと思うよ )

エルケも心の中で呟いた。

作戦会議は、ワルゼ城に到着するなり早速開かれた。

戦場は、マルガとデリアから教わった泉の脇を流れる支流の先だ。因縁のライゼ GANG 金鉱裏手に広がる未開発地に、鉱脈探しの山師が入ったからだった。

見つかった新しい鉱脈はマルブルク公国とブラル大司教領との領境付近。

発見抗から僅かに掘り進めれば、確実に領境を犯す事となるだろう。

しかも付近には川がある為に、真つすぐ坑道を掘る事は不可能だった。

いくら発掘数が未知数な坑道が地下にあっても、地下水の湧出などの危険を冒してまで掘り始める訳にはいかない。

「発見抗から100ラハター掘り進めれば、マルブルク公国の領境付近まで辿りつく、というのが発見した山師の報告です」

総長が合流するなり始まった作戦会議で、フォルカーはそう前置きした。

(……ら、らはた？ 全く聞いたことが無い単位だよ)

エルケは首を傾げた。

どんなに頑張って話を聞いていても、エルケには付いて行くことはできなかった。

それでもその意味を聞き返す程、会議が悠長に行われている訳ではないことだけは分かったからエルケはただ口を噤む。

決定したことだけ分かればいいのだ。そう、エルケは逸る自分に言い聞かせた。

しかし、その時にはワルゼ城の作戦室にいるほぼ全員が戦場となる場所の報告を受け終えていた。フォルカーは何も知らないエルケの為にわざわざ、地図を出してまで説明してくれていたのだ。

エルケにはその意味を深読みする余裕はなかった。付いて行くだけで正直精一杯だ。

クルトの右側にノルベルト副総長。

その横には、ノルベルト副総長曰く『彼専用雑務係』である八隊のフォルカーが腰掛けていた。

ノルベルト副総長の向かい側。クルトの左側に、エルケの席が用意されている。

その横には六隊軽騎兵隊長であるザシャ。その横にアヒムと席は続いていた。

見た事のない姿もあつた。用意された椅子は他に四つ。

歩兵の八隊隊長はゲアハルト。六隊と同じく軽騎兵である四隊と五隊の隊長はザシャが兼務し、それぞれ副隊長が出席していた。

七隊は主に伝令を担当する。前線と後方を結ぶ線を繋ぐのだ。

席の用意されていないヤンは、エルケの背後にいた。

ヤンは何処の騎士団に所属している訳ではない、あくまでエルケの為の騎士なのだ。

その任務につく事を、彼は既にブラル大司教へ報告を終えたらしい。もしかして事後承諾なのかもしれない。

その件については、エルケ自身で言い出したことはいえ少し申し訳ないと思っていた。

フォルカーが口を開く。

ここからが本来の作戦会議なのだ。

「恐らくマルプルクは、新しい鉱脈に気付いて戦を仕掛けて来た訳ではないだろうと思われます。とはいえ、これはあくまでも『ノルベルト副総長の見解』ですから裏付けは取れていません。出した偵察も戻ってきていませんので」

新しい鉱脈は、元々掘り進んでいた場所とは間逆の方向へ向かっていた。

泉のある川に沿って進むその鉱脈は、蜘蛛の巣状にその範囲を広げている。

「まあ、このまま探掘許可が出れば察知されるのも時間の問題だろうね。二十余年前の戦の様に、被害を広げる訳にはいかないよ」

一瞬、瞳を陰らせてクルトが言った。

エルケの後ろでヤンが小さく軍靴を鳴らす。二十余年前の戦に彼らは深い思い入れがあるらしい。

二十余年前の話を一時中断させる短く小さな衝突音の後、新しい地図が広がった。

川付近の地図だ。

細かい書き込みは二か月前にライゼガングに来た時に、クルトが役場の男達と調査した結果らしい。エルケが正体不明の男に襲われた時に、きつとこの調査を彼はしていたのだ。

フォルカーが険しい表情を浮かべて、森を指差した。

「偵察が戻らない限りは、相手の正確な数字は読めませんね」

「大体、あいつは信じる事が出来るのか？ 密通者だぞ。新しい偵察を送り込むべきじゃないのか」

ザシャが強く拳をテーブルに叩きつける。

(……密通者？)

訝しげに眉を顰めたエルケの顔を見て、ノルベルト副総長は苦笑して見せた。

「ああ、その件に関しては既に配備してある。寝返るようなら始末するだろう。総長指示だ」

ノルベルト副総長の声に呼応して、クルトはエルケの方を見ないまま頷く。

(何か……クルトは僕に隠している気がする……)

エルケは視線の合わせようとはしないクルトを見ながら、その不自然さに気付いた。

(僕が傷ついたり、悲しんだりすることなんだ……)

クルトはまた、耳を塞ぐことでエルケを守ろうとしてくれているのだ。

「つまりは」

アヒムが言葉を選びながら、口を開いた。しかし選んだ割には、彼の言葉は全く歯に衣を着せていない。

「戻って来ないという事は、もろとも死んでるか。それとも報告するべき事が見つかった、という事ですね」

アヒムの呟きを聞いて、銘々の表情が鋭く変わる。

その後の話は戦略的な話になり、初めから首を傾げていたエルケには勿論全く理解するのは不可能だった。

それでも聞かないでいる訳にはいかないのだ。理解できないものと知りつつも、必死にがたいのいい男達の隙間から地図を覗き込み、エルケは頭に叩き込んだ。

ただ、自分はお飾りなのだ。と、いう事だけがエルケに理解出来たことだった。

そして事態が動いたのは早くも、その日のすぐ夜の事だった。

ワルゼ城でつい数か月前まで使っていた部屋な筈なのに眠りに付かず、エルケがベッドに腰かけていると扉が激しく叩かれた。

「起きて下さい！」

扉が割れそうな騒音の後、アヒムの怒鳴り声が聞こえる。

「エリク！ 起きていますか！」

なかなか反応しないエルケに苛立ち、扉を叩く音はより激しくなってきた。

（そう言えば、前にワルゼ城へ来た時はいつもト二とマルセルが一緒だったっけ……）

今回は客人として訪れたこともあり丁寧に扱われていたけれど、今回は流石にそんな待遇を望む訳にはいかなかった。

今にも歪んでしまいそうな扉をエルケは寝惚けた眼で見詰める。

（そう言えば、ワルゼ城に入ってからト二達の姿を見てない……忙しいのかな……？）

懐かしい彼らの思い出に浸りつい物思いに耽っているエルケの耳に、鋭い起床の呼び掛けと次いで結構大きめな声で文句が聞こえて

きた。

「……エリク、寝てるんですか！」

こういう仕事はヤンがやるべきだ、などと彼は聞えよがしに叫んでいる。

(……い、いけない！ 返事するのを忘れてたよ！)

エルケは慌てて寝着の上に軍衣を乱暴に羽織ると、裸足の足を軍靴に突っ込んだ。

全てを着替える余裕などなく、震える指で褐色のベルトを閉める。前を閉めてしまえばまさか中が寝着だとは気付かれないだろう。そう願った。

「は……はい！ 起きてます！ 遅くなりました！」

髪の毛を後ろに括りもせずエルケが鍵を開けて扉を引くと、陰しい顔をしたアヒムはもう反身翻しかけていた。

彼は昼見たそのままの姿だ。一部分も崩れることなく彼がこの場に来たという事は、アヒムはずっと作戦室にいたのだろう。

息を切ったエルケを鋭く睨み、アヒムは舌打ちをして見せる。

エルケは肩を竦め、素直に頭を下げた。

「……ごめんなさい……何かあったんですか？」

「何かあったにきまつているでしょう」

暢気に聞いたエルケを冷やかに見下ろし、神経質そうな眉を歪めるとアヒムは答えた。

詳しい説明は避けて、彼はすぐに足を動かしてしまふ。

(何も聞かずにまずは付いて来い、ってことなのかな……)

軍靴の足音が廊下に響くと、否が応でも緊張は高まる。

それ以上不機嫌なアヒムに聞くことも出来ず、エルケは足早なアヒムを必死で追いかけた。

案内された作戦室には既に昼間の全員が腰を下ろし ヤンまでもだ。テーブルに広がった地図の脇には懐かしいト二の姿があった。昼間の作戦室に比べ、夜間の作戦室には不穏な空気が漂っている。懐かしいト二の姿に頬を緩めたエルケだったが、数ヶ月前のエル



ケが覚えているト二と現在の彼は随分と趣を変えているのに不安が過った。

久し振りなのだ、軽率に口にするのも憚られる空気だ。

ト二は不安げに見詰めたエルケと視線を合わせないまま、口を開いた。

「ビューロー小隊の向かう領境はアロイス地方。ここに至るまでにはザクセン宮中伯領か、ブラル大司教領ライゼガング付近を通るか方法はあります。恐らく、川を辿り一気に攻め込む気なのではないかと思えます」

彼の声は掠れ、疲れを感じさせる。ト二の髪には葉や枝が乗り、頬は薄汚れ、眼が窪み、少し頬がこけていた。

微かに震えながら指差す地図の先は、ザクセン宮中伯領とブラル大司教領との合間。

ライゼガングの裏手。そこは、随分と金鉱の近くだ。

エルケが視線を外さないままでいても、やはりト二とは視線が合わなかった。

そんなト二の説明を聞きながら、クルトが肘を付き口元に添えた手の向こう側で微笑んでいる。その笑みは嬉しそうなものでは無く、自嘲にも見えた。

不安に視線を彷徨わせたエルケの視線を、気遣うヤンの視線が受け止める。大丈夫だ、黙っている。そう言われている様な気がしたので、エルケもヤンに小さく頷き口を噤む。

居心地の悪い空気にヤンの傍へ駆け寄りたいのを我慢し、エルケは奥歯を噛み締めた。

楽しそうな口調で、クルトが遅れたエルケに説明を始める。

それは、エルケにとって余り吉報とは言えなかった。

「偵察がやっと戻って来たんだよ。一か八かの賭けだったけれどね、まだ俺の威信は残っていたらしい」

（あ、そっか。ト二は偵察だったんだね。だから探しても見つからない訳だよ）

意味が良く分からないクルトの言葉の真髄はあまり考えない様子だ。エルケもこの部屋に入ってから嫌な予感はしていたのだ、ずっと。

クルトの言葉にザシャが頭を掻き、ノルベルト副総長が苦笑した。「寝返るかと思ってました」

アヒムが言った。

「予定時間より随分と遅れてのご到着です」

次いでフォルカーがそう言った。

それぞれの反応を聞いて、他の副隊長も苦笑を返している。

トニは大きな体を床に擦り付けそうな程に潰して頂垂れた。そんなトニの頭を、クルトの鋭い視線が睨みつけている。

（な……何でみんなそんな反応なの？ 話の内容が読めないのは僕だけなのかな……）

クルトは今、総長だ。エルケが気軽に何か聞ける立場ではない。

状況を上手く読む事が出来ず、宙で浮いたままだったエルケの視線がトニのそれと合った。

久し振りの逢瀬に喜んで貰えるのかと思ったエルケの期待は脆くも崩れ去る。歪む視線と顔。トニは俯いたまま、エルケから視線を僅かに逸らした。

「エリク……俺……ごめん……」

彼はそれだけを言った。

それでエルケの脳裏はより混乱を極める。

（ごめん、って……何のことだよ）

らしい事に心当たりは全くと言いつていい程なかった。エルケは震える唇を隠そうと、手の平を宙に彷徨わせる。

トニは未だ分からない様子のエルケに、畳み掛けるように声を掛けた。

「エルケの肩にあった焼印の事が、こんな大きな話になると思っ  
てなかつたんだ」

「……や、焼印って……」

それが必死に隠しているエルケの肩の牛の焼印であるならば、何故それをトニが知っているのか。エルケは絶句したまま、トニとの時間を細かく思い出す。

(でも、そんな姿を見せた事なんて……無かった筈だ……よね)

トニの言葉を聞いて、クルトが僅かに眉を上げたのが見えた。

苛立ちを隠せないのか、クルトの指はトニを急かすように忙しくテーブルを叩く。

トニはそれ以上何も話さなかった。下から見上げるトニの申し訳なさそうな顔を見て、エルケは乾き切った唇を噛む。口内に複雑な味が滲み渡った。唇を噛み切ったのだ。

(どこで？ 一体何処でトニは僕の背中を見たの？ 人の前で服を脱ぐなんてそんな馬鹿なことなんかしてない。じゃあ、トニは何処で見たんだ？)

ワルゼ滞在時、エルケが与えられた部屋以外で服を着替えたのは一度だけだった。

その時は、手伝いで汚れた所為でエルケはトニに団服を借りたのだ。

(あの時は……凄く大きな団服を借りたから、どうしても上手く着る事が出来なかったんだよね)

自分であることを諦めたエルケは、襟元から後ろに掛けて大きく歪んだ部分をトニの手を借りて直して貰ったのだ。

でも背中側であれば、少し引つ張れば簡単に覗く事が出来るだろう。

(……それでも僕のある場所に焼印があるのだと知らなければ、そんな場所を覗かないじゃないか)

嫌な予感が脳裏を過り、エルケの指が恐怖で震えだす。

エルケの焼印の存在をあの時に知っているのはビューローの人間か。他には一人しかいない。

「……トニ……は蝶……と会った……の？」

エルケの声に、トニが顔を跳ね上げた。

その自らの行いを悔やんだ表情に、エルケは顔を歪める。

(……ああ、そうか。そうなんだ)

ぽかんと開いた空洞に何か落ちてきた。

「俺はただマルセルに聞かれたんだ！ エリクの傷の話を」

話の途中が入ってきた懐かしい名前に、エルケは息を飲んだ。

「体中が拷問で酷い事になっているのを知っていたかつて、マルセルに聞かれたんだ。ノルベルト副総長がエリクに無体を働いた人から守る為に無理にでも入団させたがっているんだって聞いて、俺はだ……あいつが蝶だなんて、知らなかったんだよ！」

「まあ、私がエリク君を入団させたがっているという事実は、間違っていないがね」

暢気なノルベルト副総長の声が暗い作戦室に響いた。

気丈に立っていられるのがエルケ自身も不思議なほどだった。

近くにいる筈のヤンの存在も、机向こうでこちらを見てる筈のクルトの存在も何もかもエルケの頭からは消え失せていた。

ただ、エルケは信じなくなっただけだ。

「……嘘……マルセルが蝶なんて嘘だよ……」

エルケは顔を上げ、小さく首を振る。

「俺が総長に付いてから十年以上も、ビューローの子飼いの蝶を懐に入れていた事になるね」

場を切り裂く飄々としたクルトの声は、その軽い口調の割に低く重く響いた。

クルトの自嘲は、預かっている騎士団に蝶を招き入れた責任感ゆえだ。懐に入れて、むざむざ見逃していた事実にくルトは責任を感じている。彼は深く傷ついているのだ。

マルセルが『ビューローの蝶』だった。

(……こんな近くにいたのに、僕は気付くことすらできなかったんだ……！)

エルケは眉を寄せ、顔を歪める。意図せず泣きそうな顔になった。エルケがもし知っていたのなら、あんなに温和に話さなかっただ

ろう。

もしかしてそれを知っているからこそ、エルケがゼークトの生き残りである事を知ってからマルセルはエルケの前に姿を現さなかったのだ。

蝶にエルケが深い殺意を抱いていることを気付いていたのか。

確かにあの時の蝶ならば、そう思うのかもしれない。

クルトは少し深い呼吸を肩でついた。

「道理で剣を合わせた時、覚えがあっただけあるよ」

そう、笑う。クルトはライゼ GANG でエルケを助ける時に蝶と剣を合わせているのだ。

ノルベルト副総長が、その言葉に深く頷いた。

「二十余年前のライゼ GANG の小競り合い辺りから、いつでもこちらの様子を探れる様に入れていたんでしょ。いや、マルブルク公国も気が長い事だ」

確か前にエルケがワルゼ城に来た時、ヤンとマルセルは十年前には騎士見習いだった話をしていた。

(だとすると……蝶は十年以上もワルゼ騎士団に潜伏していたの…

…?)

エルケは思わずヤンを振り返った。

彼はこちらを向いていなかった。話を続けているノルベルト副総長の顔を見ている。

彼もまた傷つき、責任を感じているのだ。表面には見せずと心の奥底できつと自分を責めているのだろう。そう思うとエルケも胸が痛む。

「まあ、動き易いでしょうね。任務で城を離れる事も多い。城へ出入りしてもまず団服を着ている以上は疑われないでしょうし、連絡を取るのであれば巡礼者を偽れば簡単ですしね」

アヒムがトニを見下しながら、彼を責めるように軍靴の踵を鳴らした。

「たかが一時期の安寧の為に身を崩すとは、貴方も騎士団の風上に

も置けませんね」

唾を吐きかけそうな忌々しげな表情をしたアヒムの顔を見ている事が出来なかったのか、トニが耳まで赤くして俯いた。

握り締めたトニの指が震えている。

一度、躊躇してトニはおずおずと口を開いた。

「だって俺はいつ戦に出て死ぬか分からないじゃないか……！ 残された家族の為に少しでも金を作りたかったんだ！ ベルンシュタインを売れば、いい金になるからってマルセルが言ったんだよ。その代りにほんの少しだけ手伝って欲しいって！ まさかあいつが蝶だなんて……考えもしなかった……！」

「……トニ……」

弟がいるのだとトニは前にエルケに話してくれた。金が必要なのだとも、トニはらしくない暗い瞳で言っていたのだ。

(そのトニの弱みにマルセルはつけ込んだんだ……！)

泣きそうな顔をして言ったトニを見て、ザシャが笑う。

「お前、それで貰った石を落としちゃ駄目だろ。全く、どうにも要領の悪い奴だな」

「……貴方はどちらの援護をしているんですか、ザシャ隊長」

トニを擁護するザシャの物言いを聞いて、アヒムが声を荒げた。

彼らの相性はまるで水と油だ。

とはいえ、ザシャではないけれどエルケは話を聞いている内にトニを咎める気は失ってしまった。むしろ彼は被害者にも近いのだ。

「いや、な。最初は俺もこいつは裏切り者だと思っていたが、こう話を聞くとどうにも心底、団を裏切る気はなかった様だしな」

ザシャの言葉にトニが顔を上げる。

密通者にはそれなりの処罰が与えられる。恐らくトニはそれを覚悟していながらも、報告の為にワルゼ城へと戻ってきたのだ。

トニは騎士団を退団させられるだけではなく、もっと過酷なものだと覚悟していたに違いない。例えば痛みや、死を伴う処罰までも考えていたのだろう。

(僕は、そこまでト二を憎んでいないのに……)

上面だけの同情でエルケが処罰のことまで口を出すことは出来なかった。ただ無言を通して、エルケは事の顛末を見守る。

アヒムは深い溜息をついて、ト二を睨み付けた。

「とはいっても、こちらの戦力を全部情報として渡されているんですよ！」

「正確に言いますと、少し前の戦力になりますが」

アヒムの言葉に、フォルカーが次いだ。

「我々の現存兵力は、最高で四十騎。歩兵で二十。対するマルブルク公国のビューロー小隊は、ト二の報告によると二百程だと思われます。この小隊は八割が歩兵、残り二割が軽騎兵。現在はこちらの出方を窺って、攻め手に決めかねている様です。ただ、マルセルがこの騎士団を去ってから既に二か月は経過していますので、互いに正確な数字を読み切れていないでしょう。エリクがワルゼにいる事も、ヤンと総長が既に戻ってきている事も正確な所、掴めていないのではないかと思われます。彼の件は敵へのいい攪乱になったとも言えるのではないでしょうか」

「ああ……いや、流石『時計のフォルカー』だ」

フォルカーの怒涛の説明に、ノルベルト副総長が耳を塞いだ。

そんなノルベルト副総長の行動も気にせず、フォルカーはまだ何か言い足りないのか。視線はクルトをへ固定したままだ。

総長の制止は入らなかった。話を続けてもいいという了承とフォルカーは取る。

「ビューロー小隊がアロイス地方へ進軍する前に、エリクを前面に押し出してアロイスをゼークトの二の舞にししないのだと印象付けるのか？」

ザシャの言葉に、フォルカーは頷いた。

「はい。ビューロー小隊はミュンヒの方を本陣だと思っていますから、恐らくここでは余り大きくは無戦闘にしかならないと高を括っているのではないかと思います。ここで可能な限り、先陣を崩す

事が出来れば後のアロイスは楽なのではないかと」

ビューローは、あくまでライゼガングがアロイス地方までの通路の扱いなのだ。ブラル大司教領は受け身だと思われる。

ワルゼ騎士団は、時間稼ぎに過ぎない。ワルゼが足掻いている間、ミュンヒの準備は整っていないのだと思うのを逆手に取るのか。

「ただ、この戦には問題点も多々あります」

フォルカーがクルトを見たまま語尾を濁した。

「立地条件の整っていない場所で、旗持ちのエリクを守りきれぬのか。という所が、一番の問題です」

「まあ、確かにエリク君が先陣にいないと、今回の戦をわざわざ仕掛ける意味が半減するな」

ノルベルト副総長も地図へ体を乗り出してくる。

「それで、これはあくまで私の案なのですが……」

フォルカーが力無く俯くト二へ視線を流し、言った。



### 3 (前書き)

申し訳ありません。

この話以降が更新話になりますので、ここまでが改稿部分になります。

改稿で文字数が増えすぎまして、話を分けました。

手綱に繋がれたエルケの馬は月毛だ。

薄い黄色の月毛は、水面に照らされた金色にも見える。

名はアンゲリカ、牝馬だった。

ワルゼ城に入って直ぐにエルケは、これからの相棒となる彼女の手綱を手渡されたのだ。エルケは彼女の美しさに一気に魅せられてしまった。

美しいアンゲリカの首に、エルケは躊躇することなく指を伸ばす。優しい眼をした彼女は、不安が入り雑じりながら伸ばすエルケの指に、優しく鼻面を擦り寄せてくれた。

彼女には美しい鞍が乗せられている。

エルケの身に付けた軍衣と同じ真紅の鞍だ。

手に力を入れて鞍に尻を上げれば、高い場所から山の周辺を一気に見下ろす事が出来る。

崖下から吹き上げてくる風が赤金の髪を揺らし、エルケは眼を細め、その微かに物騒な臭いの含む風を受け止めた。

体を動かす度に鎖帷子が鳴る。

ぎこちないエルケの体を柔らかく包み、見た目の割には意外にも軽く作られていた。

それでも、エルケの為に極力重さを抑えてつくられたそれは、僅かに胸回りがきついのだ。その部分が成長に伴って重力を増している事なんて、誰も知らない。

それでも体を守る分には遜色ないだろう。

(……………まあ。布で胸を押さえることを考えたら気にしなくていい分、気も楽だよね……………)

この軽さは、職人の努力の結晶だとザシヤが笑った。

「流石に、旗騎士を一番最初に取られてしまう訳にはいかないからな。重さは抑えても、耐久性には自信ありだとさ」

「とは言っても、何度も耐えうる訳ではないですからね。戦闘が始まったら、速やかに後方へ下って下さいよ」

アヒムがアンゲリカの手綱を持ち、馬上のエルケを睨みつける。

「……え？ 後方にいてもいいの？」

エルケは素っ頓狂な声を上げた。

(先陣切って、戦の前線にいるもんだと思ってた！)

今更の質問をしてきたエルケに、アヒムは顔を引き攣らせる。

「……貴方は……！」

小刻みに震えるアヒムの唇が見えた。

「ご、ごめんなさい！ 僕、ちょっと理解できていなかった……みたいで……前に出て一緒に戦うもんだとてつきり……」

エルケは衝動的にまず謝ってしまう。

腰に佩いた剣の柄に、エルケは手を伸ばした。

混戦になると上手に剣を抜けるのか、実はずっと心配だったのだ。剣で人を殺し、自分の命を守る。そんな難しいことを同時に出来る自信など、エルケには皆無だった。

なにせ、エルケの剣の腕は他の団の人間に比べ付け焼刃でしかないのだ。

「貴方は、昨日の作戦会議を聞いてました？」

目を見開いたエルケに、アヒムがあらゆる溜息をついて見せた。肩を呆れたように上下させるおまけも付いている。

「今回の戦闘は、平原の会戦とは少し具合が違うんです。アロイス地方で軍を張っているミュンヒに向かう前に、何とか相手の戦力を削ぐのが今回の戦闘なんですよ……！ 本来は貴方がいるべき戦闘ではない。ただ『黙って』旗でも持っていればいいんです！」

(黙って、を強調された……しかも軍旗を、旗でも、って言った……)

エルケは俯き、小さく「はい」と答えた。

この件に関しては、アヒムに逆らわない方がよさそうだ。エルケが言い返せることなど勿論何もない。

言い返せば何倍にもなつて戻ってくるだろう。

「貴方が今ここにいるのは偶然が引き起こした産物に過ぎません。さつさとミュンヒと合流して頂かないと、戦の矢面に立つのはいつまでもこのワルゼなんですからね。戦に参加するのは、今回で最後、なんてふざけた事になるのだけは避けて下さいよ」

「……分かったよ。僕は自分の出来ることだけをしたらいいいんだね」  
「ええ、余計なことは考えずそれだけに集中して下さい」

了承の意を込めてエルケは大きく頷き、周囲を見た。

傍に控えるザシャとアヒムは、漆黒の団服の上に漆黒の軍衣を着ている。

アンゲリカに跨るエルケの横で馬上の人となっているヤンもまた、漆黒に橙の紋章の団服と軍衣。彼が腰に佩いた剣は二本だ。

ヤンは先程からエルケと付かず離れずの距離を保っているが、例えエルケが振り返つても頑なにこちらを見ようとはしない。

(……ヤンは戦の前には、こういう緊張感のない会話は好まないのかもかもしれない……)

エルケは今の会話の流れが、戦を軽く考えているように取られてしまわないか考えて、突然恥ずかしくなった。

作戦会議を聞いていなかった訳では無かったのに、話の内容が難しく噛み砕き理解をすることが出来なかった。作戦の流れを追うのに必死で、自分の役割を確認することを怠っていたのだ。

本来、エルケはミュンヒ騎士団と行動を共にする筈であり、この作戦にエルケが加わる予定はなかった。

しかしミュンヒから使者は即ヨープを引き返したにも拘わらず、現在もまだワルゼ城に到着したエルケ達とかなりの差を付けて遅れ、未だ到着の話はない。

干ばつの所為で頻発している夜盗に野宿中、襲われたのだとヤンが教えてくれた。装備は奪われ、命だけは助かったものの逃げるのがやっとだったらしい。

その報告を聞いたクルトは「寝食惜しんで駆け付けければ良かった

のに、急ぎの任務で休憩などを取るからだよ。自業自得じゃない？」と、冷酷に吐き捨てた。確かにそうだ。エルケもその件に関しては同意する。

本陣からの使者も、唯一の通路となるライゼガング近辺にビューローの小队が潜伏しているとすればそう簡単にエルケを連れ出す訳にもいかなかった。

エルケの初陣は、実のところ、フェーデを付きつけてから初めての戦闘である『アロイス』の予定だった。顔も知らない騎士団の中にエルケは一人入り、戦に出る予定だった。

しかしこの場合は、ノルベルト副総長の策が功を奏したのか。帰城を急いだけあって、エルケは戦闘前にワルゼ騎士団と合流し、ミュンヒ騎士団の本陣へと向かう前に小規模の戦闘が起きたのだ。

(初めての戦闘がクルト達と一緒に良かった……)

エルケは胸を撫で下ろしていた。

もし、当初の予定通りに戦闘が起きたら。そんなことを考えると凄く恐ろしくなる。

きっと知らない人間の中でどうにもならなくなり、エルケは無様な姿を見せつけていただろう。

不安げな視線を辺りに漂わせるたエルケを、アヒムが三白眼気味に睨みつけて来た。

「今回の戦の煽動者がそんなことでは困りますね。士気が下がります」

「は、はい！」

エルケは唾を飲み込むと、手にした軍旗を抱き締めた。

ヤンを背に乗せたルッツが冷酷な口調を改めないアヒムを責めるように、鼻息荒く前足をかく。落ち込んでいるエルケを気にしているのだろうか。

(……仕方ないよ、本当のことだもの)

エルケは視線でルッツに言い聞かせた。

本当に優しい馬なのだ。初めて会った時にあれだけ馬鹿にされたのもいい思い出だった。

ルッツに促されたか、ヤンが重い口をやつと開く。

「戦闘が始まったら、お前はそのままそこを動くな。後は、俺達が前へ出る」

「……うん」

エルケは少し返事を濁す。

(……それはヤンとか他の人たちを僕の盾にするってことにはならないんだろうか？ 騎士団を戦の壁にさせたブラル大司教とは違うのかな……?)

旗騎士を討たれると士気に係わるから守らなくてはならない、ということはよくエルケも理解していた。

本来、旗を持つのは主君ある貴族でありエルケの様な一介の人間しかも実は人間ですらない様な存在が持つべきものではないのだ。

アヒムが冷やかに返す。

「止めても出て行くでしょうね、主にうちの隊長ですが」

「まあ、エリクは死なない程度に頑張ってくれりゃいいってことだ」

「……はい」

散々な言われよしのザシャは全く気にしてない風に笑った。

(それが一番問題なんだけどな……)

既に初めての戦だと思つと体中が震え、呼吸が荒くなってくる。

これが戦の興奮が原因なのなら十分だが、きつと怖がっているのだろう。エルケには分かっていた。

人の命を簡単に左右する戦が近付いてくるといふことが、ただ怖くて仕方ないのだ。

エルケはアンゲリカのたてがみに指を這わせた。

(僕は……覚悟が足りない)

彼女はエルケの指を拒絶することなく、大人しくされるがままだった。

それでもアンゲリカはその美しく可憐な見た目に反し、戦時は獐

猛に首を振りながら駆け抜けるらしい。その話を聞いた時、エルケは力やみたいだ、と思った。

可憐で獰猛な人間の力やは、現在後方の支援に当たっている。

ノルベルト副総長の妻であるフィネも一緒だ。

力やが馬に乗る事は許されなかった。女である事が口惜しい、と力やは吐き捨てた。

共に駆け共に戦う事が出来るのなら、と舌を鳴らす力やを見ると本来は女の身でありながらもそれを隠せば、鎧を纏うことのできるこの運命も少しは誇らしく思えてくる。

(僕は何も出来ないんだ……ただ馬鹿な失敗で命を失う事だけはない様にしよう)

共に行けるのならば、無駄な過大評価は止めた方がいいのだ。

「僕、頑張ります」

一言一言、噛み締めるように言った。

大人で戦に慣れている目の前の男達が、緊張に震えるエルケを見て笑う。

「まあ、そう気張るな。ヤンが守ってくれるだろうさ。俺等は総長とエリクを兼務だからな」

ザシヤがエルケの強張った肩を叩いた。

凄いい衝撃に馬から落ちそうになったのは、ご愛嬌だ。

「前方は専任に任せた。その代りと言っちゃあ何だが、後方は他の団員に任せろ」

「ああ、分かった」

ザシヤの言葉に、ヤンはこちらを見ないまま頷く。

エルケは少しだけ前に進んだヤンの背中を見詰めた。

(この人から、絶対に離れない様にしなくちゃ……)

守られるべきして横に立つ人間にならなくていけない。全てはそれから始まるのだ。

エルケは一瞬軍靴を見下ろし、顔を上げた。

小さく深呼吸し、眼を瞑る。

アンゲリカから落馬してしまつたら、エルケの力では槍や剣の猛攻から逃げ切る事は出来ないだろう。

勿論、この不自由な足では走つて逃げる事も叶わない。

手綱と足だけは絶対に手放せないのだ。アンゲリカを信じて、エルケはただしがみ付く。それが唯一の生きる道だった。

汗ばんだ手の平を軍服で擦る。

漆黒の団服の中に、異質な真紅の軍服。

月毛のアンゲリカと、赤金の髪をしたエルケは遠目から見ても目立つ。戦が始まれば、これに首元を守る鎖帷子と兜を被る。

兜には真紅の飾り、髪の毛は兜と鎖帷子で隠れてもエルケが分かるようにだ。

エルケは周りに集つた勇壮な騎士たちを見渡した。

赤金の髪を括る紐は、今日外している。

兜を取つた時に風に靡く髪は印象深い、括るのを止める様にクルトから指示されたのだ。

女にしか見えない薄い手の甲には鋼鉄製の鉄甲が付いている。

腰に佩いた剣は手入れも欠かさず、切れ味も良好だ。これからこれを使つて誰かを殺すかもしれない、なんて数ヶ月前には考えもしなかつた。

ビュローの城から必死に逃げ出して生きるのを諦めかけた時、ヤンとクルトとカヤに出会つて旅を始めた。

ずっと何の疑いを持つていなかった出生が実は人間じゃないのかも知らされて、エルケを支えてくれた何もかもがあつという間に揺らいだ。

姉もゼークトも全て、発作の様に見る夢かも知れない、と疑つた時もあったのだ。

(……そう言えば、ブラル大司教に僕の正体を教えられてから発作も起きなくなつたし、あの酷い夢も見なくなつた……)

今、たまに見る夢は昔よく見ていたゼークトで姉と過ごす夢だけだ。夢の中で繰り返し聞かされるのは、物悲しく激しい人魚の物語。



今となつては人魚の苦しみも悲しみも理解出来る。勿論、姉の苦しみもエルケには分かつていた。

エルケは少し前方で待機するヤンの大きな背中を見詰めた。

（もし僕が物語の人魚なら……足を切つても腕を切つても、共に歩く事を望むんだろくな）

共に駆ける為に、エルケは例え怖くても女である事を偽つて剣を振るう事を選んだのだ。

蠢く黒の一带の中で一際、鮮烈に輝く金色の畝はクルトの髪だ。

漆黒の団服に彼の髪は良く映える。

誰より強そうに見えて、脆いその心を守ろうとエルケは心に誓つていた。

クルトが幼さの残る不安げな表情を浮かべて振り向いた時に、エルケはその悲しみを癒したいと強く思うのだ。

エルケの横に栗毛の馬が近付いてきた。

その馬に跨っているのは、トニだ。彼は少し躊躇してから、トニが近付いてきたのに気付कि振り返つたエルケに決意も新たに話しかけて来る。

「……エリク、俺も責任持つて守るから」

エルケは微笑んだ。

「うん。ありがとう、トニ。宜しくね」

どうしてもおろそかになるエルケの横を、今回の不始末の処罰として命を賭けて守る事になったのはトニだった。

身を呈しても守れ、というのがクルトの命令だが、実際騎士団がトニを処罰するつもりではなかった事をエルケは分かつていた。

実際一番命の危険があるこの場所を、処罰としてトニに務めて貰う。

そう言い出したフォルカーの案を聞いて、皆一様に安堵した表情になったのはエルケにも意外だった。

それはきつと入団してからずっとその日まで地道に積み上げて来たトニの人となりがなせた技だろう。長年、共に戦つてきた人間を

痛めつけるなんてこと、本当は誰もしたくは無かったのだ。

甘いと言われても、誰もが同じ気持ちかもしれない。

マルセルは現在もまだ行方不明だった。ワルゼ騎士団から数名の追手が探しているそうだが、見つかっていない。

いつ何処に現れてもおかしくはない今の状況では、エルケから眼を離す事は出来なかった。戦の混乱に紛れて、何をされてもおかしくはないのだ。それにクルトは仇討ちをしようとしているエルケの覚悟を知っている。

兵士の中にマルセルを見つけたとしたら……？

(僕は……冷静さを保てるだろうか……？)

クルトとヤンとでエルケを守るのが最善なのだが、この小人数では精鋭部隊は出来るだけ前線に回したい。

クルトには背負うものがたくさんある。それにエルケという重い荷物も上乘せしたくはなかった。

クルト自身も守られなくてはならない大切な存在なのだ。

手に持った軍旗が、強くなりつつある風に煽られた。

じわりじわりと闇が近付いてくる。

とつとつ戦いが始まるのだ。エルケは前を睨みつけた。

暮れていく空に向けて放たれた戦いの口火は、足場の悪い川沿いを進むビューローの隊を横から叩く形で切られた。

ビューローの隊は、横に長く伸びる蛇の様な隊列で二百。

地に利があるとはいえ、数の利はなかなか覆せるものではない。

それぞれが精鋭とはいえ、ワルゼ側の兵力は半分以下。取れる手前は、最初に分断した隊列をもつと細かく分断させて包囲する個別撃破だけだ。

しかしその無駄に多く、そして長いビューローの隊列がこの場合は不利となった。

中央の歩兵と後方の歩兵を攻撃し、先頭に行く軽騎兵含む小隊が本隊へ合流する前に潰す。それが今回の作戦だ。

森の中で弓兵が使えないのも、騎士団側へ優位に働いた。

長い隊列を真ん中から引き裂く先陣を、総長であるクルトとノルベルト副総長率いる一隊。

その一隊の援護を、歩兵隊である八隊隊長のゲアハルトが隊を率いて当たる。

先陣でまず二つに切り裂かれた長い蛇の胴体側を、尾の方から次陣が攻めるのだ。

後方の歩兵を攻撃する任務は、フォルカーの隊と四隊と五隊のそれぞれの副総長を率いる形でアヒムが当たった。

あとは、八隊のフォルカーが作戦会議で説明した通りだ。

ワルゼ騎士団を圧倒するその兵力は、最初の攻撃で薄闇と視界の悪い森の中、細かく区切られてしまう。ワルゼ城の騎士団は少数とはいえ、二十年前からのライゼガングの戦いで地理を細かく把握しているのだ。

あくまで通過点として通ったビューローの兵隊とは、行動を起さず速度が格段に違う。

エルケは先程、鬨の声を揚げ臆することなく森へと突っ込んで行った騎士団の姿を思い返した。

寸前まで慣れた様子で過ごしていた彼らは、個々で見ても決して弱い訳ではない。

（それでも……白兵戦に入れば、勝率は五分）

その余りにも現実感溢れた勝率に震えがくる。

戦が始まるという恐怖に怯えた時間の割に、あっさりとその戦いは始まった。

オレンジ色に染まりゆく空の向こう側が、次第に深く暗い色に塗り潰されていく。

その様子はまるでゼークトが攻め込まれなす術も無く殺され消えていった時のことをエルケに思い出させて胸を締め付けた。

耳を塞いでも微かに聞こえる森のざわめきとは違う喧噪に、エルケは咽喉に溜まった唾を飲み込む。

一度も振り返ること無く消えていったクルトの背中を思うと、この場に留まっている自分を責め急かす声が聞こえて来るような気がしていた。

怯え、震えている情けないエルケの手首を、掴み持ちあげようとする強い意志の力が湧き起こる。

アンゲリカがそんなエルケの内心を読んでか、足を進めようと片足を上げた。

「……駄目だよ。まだ、駄目なんだ」

聞きわけのないアンゲリカに語りかけるように、エルケは自分に言い聞かす。

それでも心の奥は、共に駆けると言うのだ。

一人で行かせてはいけないと誰かが何度も訴えてくる。

（……分かってるんだ）

エルケは奥歯を噛み締め、もう姿どころか土埃も見えない向こう側を睨みつけた。

戦になると、消えていった人間が必ず戻るとは限らない。だから

こそ、追いかけたくなる。

でも、この場でエルケがクルトの後を追いかけて、それが彼の助けになるとは思えなかった。むしろ、それはクルトと騎士団の足を引っ張る事になるのだろう。

震える体と噛み合わない歯がそれを物語っている。こんな怯えて立っているのもやつとの人間が助けに行きたいとは、なんて偉そうなのだろう。

前を向いたまま微動だにしないヤンの背中を見て、エルケはやつと正気を保っている状態なのに。

（僕は、報告を待たなくてはいけない。動く時を、間違っちゃいけないんだ……）

今、エルケは行動することで戦局を優位にもその真逆にも導いてしまう。

この戦いが長く続こうと、あっさりどちらかの勝利で幕を閉じようとエルケは終演までは見届けなくてはいけないのだ。

何度もエルケは自分に言い聞かせた。

クルト達の先陣がビューローの隊列を真ん中から切り裂いて始まった戦いは、互いに軽騎兵が役に立ったとはいえ結局森の中で馬を乗りこなし進めることができず、結局は馬から降り薄闇に紛れ戦う白兵戦となった。

騎士然とした戦闘であったのも最初だけだ。

剣が斬るといふ仕事を終えたのも早かった。乱立する木や血に汚れ歯こぼれた剣は、棍棒の様に馬の脚や兵士の首を折るのに使われる。

戦略や謀略でいかにして損失を出さずに勝ち得るかではなく、血生臭い消耗戦となったのは明らかだった。長いビューローの隊列は前に進む事も、かと言って後退する事も出来ないのだ。

可能な限り、兵力をここで削り取る。

その宣言通り、ライゼガングの山は膨大な血を吸っていく。

闇に紛れた黒い軍服のワルゼ騎士団の姿は、未だ戦い及ばない高

みにいるエルケの目には目視出来ない。

それでもときたま聞こえる叫び声や怒声に、エルケは震えて来る体から意識を逸らそうと必至だった。

少しずつ大きくなる声に怯え、エルケはアンゲリカの手綱を強く握り締める。

(……いつの間にか、こんな大きく声が聞こえる)

つい先程まで、ヤンとトニの他にここには六隊隊長であるザシャと六隊の軽騎隊が控えていた。

しかし、今はもう彼の姿はない。ザシャは先程、戦いの波に突っ込んで行ってしまったのだ。

アンゲリカの上で少しずつ背を丸めていくエルケの姿が見えていないのか、トニが明るく声を掛けた。

彼はエルケの真横に立っている。

馬は穏やかそうな目をした栗毛だ。アンゲリカよりも僅かに体が大きい。

「……エリク、大丈夫だよ。俺が絶対に守るからさ」

「ごめん……トニ。少し緊張してるみたいなんだ。震えが止まらない」

「まあ、初陣で緊張しない奴なんていないって」

「……そう……かな？」

エルケは唇の端を無理に持ち上げて笑って見せる。

気を抜くと、その場で吐いてしまいそうだった。

傍にヤンとトニ。それに六隊が控えているとはいえ、それでもこの恐怖の中でザシャの存在は重かった。何と無く、隙間の開いた小屋に押し込まれた様な心細い感覚が先程からずっとエルケを襲っている。

だが、あくまで戦争はまだ序盤だ。間もなくこの場所も戦場となる。

「目を閉じないで、とにかく手綱を掴んでろ。あとは俺が守る」

ヤンが背を向けたまま、そう言った。

「……ありがとう」

「だから俺もいますってば……」

ト二が兜の頭を掻きながら小声で呟く。

エルケはそんな戦場らしからぬ会話に安堵して微かに笑ってみせると、震えながら深呼吸をした。

瞼を閉じ、頭の中でカヤの言葉を繰り返す。

（体を擦じらずに、アンゲリカに任せる。剣を抜くのは本当に危ない時……）

腰に佩いた剣とは別に持たされた短剣を、エルケは柄の上から指で触れた。

身に付けた短剣は敵は勿論、味方の命を奪うことにも使用される。重傷を負った味方に最後の一撃を加えるのがこの剣だった。

それでもエルケは、短剣すら抜きたくないと思ってしまう。

とにかく戦うのではなく、身を守ることに徹するとカヤには口酸っぱく言われていた。それが結局は周囲を守る事にも繋がるのだ。

エルケは守って貰う事に慣れなくてはいけないのだった。しかし決して守って貰う事に安心はせず、守ってくれる人間を信頼しなくてはいけない。

槍に付いた軍旗を見上げ、エルケは奥歯を噛み締める、

最初の突撃から時間はかなり過ぎていた。

先程までオレンジ色をしていた空は既に暮れ、その殆んどを闇に塗り潰されようとしている。

剣戟に驚いたのか、鳥が飛び立って行った。

作戦では中央部分を撃破次第、クルトの隊に付いているノルベルト副団長と共にクルトの隊は引く手筈になっている。

しかし 未だ見えないその姿が、エルケの心をざわめかせた。

「……遅いな」

エルケの横に立つヤンが、小さく呟く。

その声を聞いて、心臓が飛び跳ねた。

確かに本来はもうクルトの隊が戻ってきていい頃だった。通信兵

から最初の作戦が成功したと報告も受けているのだ。

しかし先陣を切ったクルトの隊は誰ひとり戻ってくる様子が無い。報告する通信兵も先程の成功だという報告を最後に連絡を断っていた。

(……何も無いよね……？ 大丈夫だよな？ クルト)

エルケは心の中で、背を向けた金の敵を思い出す。

少しずつ近づいてくる戦の陰に、エルケは持った槍を細かく震える指で握り締めた。

薄闇の中でも見える土埃。

耳をつんざく、剣と剣のぶつかるかん高い衝突音。

一瞬、ヤンが振り返った気がした。

息を飲む。

「エリク、来るぞ……！」

心臓を飛び上がらせる鋭い声の後、目の前に飛び出してきた黒い塊に驚いてエルケは思わず手綱を握っていた手を振り回した。

アンゲリカが首を上げると、剣を向いたその眩しさに呼吸を忘れる。

見上げたまばらに星の見える空には、いつの間にか月が出ていた。「動くな！」

場を切り裂く低いヤンの声。

首を竦めたエルケが返事をする前に、一閃。

熱い何かが右横から飛んでくる。

馬の激しい嘶きにエルケはぎこちなく首を右横に向けると、いつの間にか剣を抜いていたトニが笑ったようだった。

ごとり、重い音が耳に障る。

右半身を汚し零れ落ちるどろりとした液体に、エルケは上手く反応出来ずに滑る槍を持ち直した。

助けて貰った筈なのに、謝辞が言えない。足元に転がる捻じれた上半身がエルケを訴えている様な気がして、唇を震わせた。

兜被っている筈なのに頬に熱い何かが流れてきて、叫ぶのを必死



で堪える。

涙、だった。

足元に転がるもう息をしていない人間は、暗闇のお陰でよくは見えなかった。それを良かった、と思ってしまう自分があまりにも馬鹿みたいで情けなくなつた。

聞こえて来る肉を押し潰すような嫌な音と、くぐもつた叫び声が全てゼークトを思い出させる。

(ヤンが心配してくれた通りだ。僕は分かつて無かつたんだ)

赤、赤、赤、赤、赤。

血の赤。空の赤。燃える赤。噴き出す赤。

「お前が動けないのは想定済みだ」

近づく兵士をまた一人、軍靴で蹴り倒して躊躇する事なく息の根を止めたヤンが吐き捨てた。

また物体が転がり落ちる重い音。それなのに、また誰かが近付いてくる。

剣が舞う度に、周囲の温度が高くなる気がしていた。

何故か、下から温かい風が吹いた。甘くどろりとした臭いと共に立ち昇る。

槍を脇に挟み片手で持つと、エルケは短剣を抜いた。滑る金属音の後にまだ綺麗なままの剣が剥き出しになった。

最初の攻撃を境に、一気に場は戦場となった。

アンゲリカが首を振り回す。

さつさと戦おうと、エルケを促しているようだ。ヤンが、トニが、残された六隊の軽騎隊がこの場で戦っている。

聞こえる激しい戦闘音に少しずつエルケとアンゲリカは後ろに押し出され、たった一人守られていた。

「……アンゲリカ……落ち着いて……」

エルケは震えているアンゲリカの首を、短剣を握る指先だけで撫でた。

彼女は勿論、怯えている訳ではない。怯え怖がっているだけのエ

ルケとは違う、戦い慣れているのだ。

齒が鳴った。

「……ア、アンゲリカ……」

エルケは呪文のように名前を呼び続ける。

見える景色は、赤。

姉が燃える家々の間をぬって走り去る姿を思い出した。

頂垂れたままで繋がれ兵士に連れて行かれるのは職人の姿。助けようと駆け出した足を取るのは赤黒く汚れた泥と血溜まり。

抵抗できずに殺されていく村人の姿を見ていることしか出来なかった。

エルケは人魚なのだとも誰も知って、大切にしてくれていたのだ。何も知らないエルケにそれを告げる事も無く、ただ普通の子供としてエルケをずっと見守ってくれた。

少しずつ後ろに追いやられるエルケの前方を血飛沫舞う中でヤンが、横をトニが応戦している。

一瞬、光が見えた。

張られた沢山の線を擦り抜けて、一気に目の前に迫った敵兵の姿にエルケは目を見開いた。

ビューローの軍衣が緑なのだ分かる頃には、既にもう剣が間近に迫っている。

(……短剣を……！)

震える指が手綱を取り落とした。

目を瞑る寸前に黒い軍衣が翻って、その敵を横から殴り付ける。

誰かが助けに来てくれたのだ。エルケはその目の前に現れた姿を見上げた。

大きな馬に乗った背中だった。

黒地に橙、重なる剣と楯の紋章。大きな逆三角形の団旗。黒い軍衣。

目の前にいるのは誰かは知らないけれど、味方だ。安心していい筈なのに、エルケの心はそれを拒んだ。

手綱を離してしまったのも忘れ、短剣を強く握り締める。

恐怖と怒りで、唇が震えた。

「久し振りですね、エリケ」

表面向きは優しく気遣いも忘れない聞いたことのある声が、エリケの名前を呼ぶ。

「ちよつと聞き忘れたことがあつて、聞きに来たんです」

強く噛み締めた歯が、頬の裏側を噛み破った。口内に広がる鉄の味に顔を顰め、エリケはそのまま剣を振り被る。

「……マルセル……！」

周りから見れば、味方に剣を向け狂ったのかと思われたらう。

エリケは少し離れた場所で、エリケの名前を呼ぶトニの声を聞いた気がした。

手綱を手離していた所為で、簡単に体がアンゲリカから転がり落ちた。

槍を持ったまま、肩を強打してエリケは草むらを転がる。膝を突いたまま、短剣を持ち馬に乗ったマルセルを見上げると何処か懐かしい景色がその姿に重なった。

その景色は森の中の戦場ではない。

(……これは、いつの記憶なんだ……?)

白く、覆うのは雪。

降り続く大粒の雪の中、軍衣を着たマルセルが団旗を持ってエリケを見下ろしていた。

立ち竦むエリケの横に、蹲る姉の姿。

転がる小さな体を見詰め、抱き締めたまま泣いている。

ゆっくりと広げるエリケの指はまだ小さい。姉が抱き締めた小さな少年の体と同じ位の歳だ。剥き出しの肩にどんどん落ちて来る雪が冷たくて、エリケは小さくくしゃみをした。

その時だ。

馬上のマルセルと、蹲った姉がエリケに気付いたのは。

「……いつから……ここにいたの……？」

姉は、まるで今までエルケがここにいたのを全く気付いて無かったように聞いてきた。

頬を伝うその涙が凍っていくのが可哀想で、エルケは裸の膝を雪積もる中に付け抱き締める。

寒い。そう思える事もまた人間なのだ、と何処か安心しながら。

「泣かないで。とてもいいものをあげるから」

微笑んでからエルケが海を見ると、まるで戻って来いと鳴いている様に波が高くなった。

雪の吹きすさぶ嵐の夜や、波の高い荒れた夜は『涙』を呼び寄せる。

人魚は『涙』を呼び寄せる。

その時、エルケは確かに赤い涙を呼び寄せたのだ。何よりも大きな石だった。それは『人魚の涙』と呼ばれる素晴らしい奇跡。

その『涙』の気高さと神秘さに魅せられた『蝶』がいた。

それが始まり。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9922t/>

---

涙と蝶

2011年12月22日23時47分発行